愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第152集

夏敷古窯跡
蛇廻間古窯跡

2007

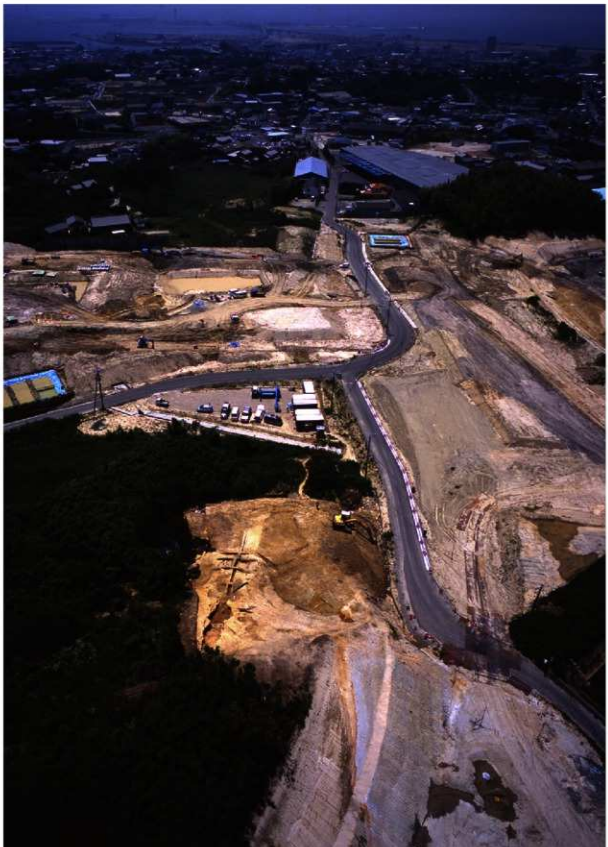
財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第152集

夏敷古窯跡
蛇廻間古窯跡

2007

財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター



巻頭写真１　夏敷古窯跡遠景

夏敷古窯跡は12世紀後半、常滑窯編年３型式の無釉大型貯蔵容器を中心に焼成した窯跡。窯跡は常滑市街地、さらには伊勢湾を臨む標高約33mの丘陵斜面に立地する。

巻頭写真２　夏敷古窯跡全景

夏敷古窯跡においては、保存状態が良好な窯体１基（SY01）とそれに付随する前庭部と灰原が検出された。SY01は焚口から煙道部まで良好に残存していた。現存長約11.5m、最大幅約3.0m。SY01左には排水溝SD01が接続し、前庭部左土坑SK01底面には片口鉢３個体が伏せ置かれていた。

巻頭写真3　夏敷古窯跡 SY01 近景

上：焚口から燃焼室、焼成室、煙道部を眺める。床面傾斜は焼成室手前が約14°、その上位が約27°である。
下：煙道部から焼成室、燃焼室、焚口を眺める。わずかに段状となる部分がダンパーが構築されたと推定される部分。

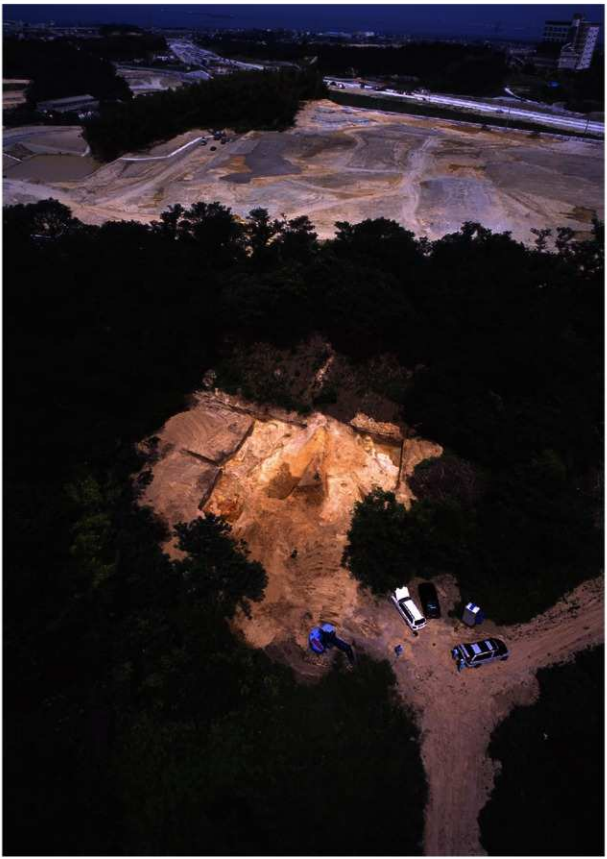
巻頭写真４　夏敷古窯跡出土遺物１

上：夏敷古窯跡から出土した各器種。甕・広口壺、三筋壺、片口鉢、山茶碗、長頸瓶、羽釜、陶丸など。常滑窯編年３型式の標準的な器種の構成内容を示す。

下：長頸壺（水瓶）と三筋壺の集合写真。三筋壺を焼成した窯跡は、夏敷古窯跡の周辺地区に多く分布する。夏敷古窯跡において焼成された三筋壺は、いずれも単線の三筋文を施す。

巻頭写真5　夏敷古窯跡出土遺物2

上：甕・広口壺の集合写真。大型貯蔵容器としての甕・広口壺は、夏敷古窯跡において焼成された主題的な器種。
下：片口鉢の集合写真。調理具としての片口鉢は、3法量が確認できる。夏敷古窯跡における甕・広口壺に次ぐ主力製品。



巻頭写真６　蛇廻間古窯跡遠景

蛇廻間古窯跡は12世紀後半、常滑窯編年２型式の無釉大型貯蔵容器を中心に焼成した窯跡。里山の景観を残す丘陵地の谷間に遺物の散布が確認されるが、窯体などはすでに滅失しているものと推定された。

序

伊勢湾に面した知多半島では、古来より窯業が盛んでした。半島全域には2,000基とも3,000基ともいわれる窯が築かれたとされ、今日でも500を超える窯跡が遺跡として残されています。常滑はその中心とも言うべき地域で、平安時代末以来、日本六古窯の一つとして称されてきました。また、現在でも常滑市は朱泥急須、土管やタイル、植木鉢の産地として有名です。

昨年、平成17年には常滑市沖に中部国際空港が開港し、市はエアシティへと新たに生まれ変わることになりました。それを見据えて市には、常滑地区ニュータウン建設が計画され、平成16年、愛知県埋蔵文化財センターは地区内にある夏敷古窯跡、蛇廻間古窯跡の発掘調査を実施しました。今回の発掘調査の結果、夏敷古窯跡では中世常滑窯の窯体を良好な状態で確認し、両古窯跡からは多数の古常滑焼の陶器が出土しました。本書はこの成果をまとめたもので、中世の窯業史や地域の開発史などの研究に寄与し、埋蔵文化財に対する理解を深めることに役立つものと確信しています。

なお、調査の実施にあたりまして、都市基盤整備公団（当時、現独立行政法人都市再生機構）、愛知県教育委員会、常滑市教育委員会をはじめとする関係諸機関、ならびに地元の方々より多大なご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第です。

最後となりましたが、昭和60年に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、財団法人教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターを経て、平成17年10月より、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　林　良三

例言

1．本書は、愛知県常滑市に所在する夏敷古窯跡（県遺跡番号 42194：愛知県教育委員会 1995『愛知県遺跡地図（Ⅱ）知多・西三河地区』）、蛇廻間古窯跡（県遺跡番号 02108）の発掘調査報告書である。

2．夏敷古窯跡と蛇廻間古窯跡の発掘調査は、それぞれ常滑西特定土地区画整理事業、常滑東特定土地区画整理事業にかかる事前調査として、都市基盤整備公団（当時、現独立行政法人都市再生機構）より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。

3．調査期間と調査面積は、夏敷古窯跡が平成 16 年 4 ～ 7 月で 915 ㎡、蛇廻間古窯跡が同年 7 月で 700 ㎡である。

4．調査担当者は、宮腰健司（主査）、早野浩二（調査研究員）である。

5．発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター
都市基盤整備公団（当時、現独立行政法人都市再生機構）　常滑市教育委員会

6．夏敷古窯跡の発掘調査において、株式会社人間文化都市研究所より調査業務全般の支援を受けた。支援体制は以下の通りである。
阿知和清孝（現場代理人）　村田昌也（調査補助員）　大西正春（土木測量技師）
また、蛇廻間古窯跡における遺跡測量業務は株式会社二友組に委託した。

7．**発掘調査においては、次の方々の助力を得た。**
各務鈴夫（発掘作業員、以下同）斎藤勝亮　中野真知子　平野武光　平野光男　藤井恭彦　前田良夫
三浦　博　牟田神東勝夫　山下国利

8．**報告書作成にかかる整理作業には、次の方々の助力を得た。**
安達崇子（調査研究補助員）
伊藤弘江（整理補助員、以下同）小川あかね　黒川陽子　時田典子　堀田晴美　水野留香
なお、遺物実測図のトレースは、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部、出土遺物の写真撮影は、金子和久氏（有限会社写真工房・遊）にそれぞれ委託した。

9．発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏をはじめ、多くの方々からご指導、ご協力を得た。
赤羽一郎　奥川弘成　門井　達　蟹江吉弘　川崎徹夫　高橋信明　中野晴久　楠崎彰一　松原隆治

10．本書の執筆は、Ⅱ—第３章（１）をパレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ、Ⅱ—第３章（２）を植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）、Ⅲ—第２章を宮腰健司、それ以外を早野浩二が担当した。

11．遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＹ；窯体　ＳＸ；その他不明遺構

12．発掘調査および本書で使用した座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。

13．本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。

14．発掘調査の記録（実測図、写真等）は、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

15．出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24

16．本書の編集は早野浩二が担当した。

目　次

巻頭写真／序／例言

Ⅰ　調査の概要 1
第１章　調査の経緯 2
第２章　調査の概要 4
第３章　周辺の環境 8

Ⅱ　夏敷古窯跡 15
第１章　遺構 16
（１）検出遺構 ...16　（２）窯体 ...19　（３）前庭部 ...32　（４）灰原 ...36　（５）近世の遺構 ...40
第２章　遺物 42
（１）中世の遺物 ...42　（２）近世の遺物 ...120
第３章　自然科学分析 140
（１）放射性炭素年代測定 ...140　（２）炭化材の樹種同定 ...142
第４章　考察とまとめ 145
（１）編年的考察 ...145　（２）生産の動向 ...156　（３）夏敷古窯の特質 ...160　（４）まとめ ...168

Ⅲ　蛇廻間古窯跡 171
第１章　遺構 172
（１）検出遺構 ...172　（２）遺構の概要 ...173　（３）遺物の分布状況 ...173
第２章　遺物 184
（１）中世の遺物 ...184　（２）近世の遺物 ...198
第３章　まとめ 203
（１）編年的位置 ...203　（２）生産の特質 ...205

付編 207
常滑古窯跡群既調査窯一覧 208
発掘調査報告書目録 210
遺物一覧表 212

報告書抄録

巻頭写真目次

巻頭写真１　夏敷古窯跡遠景
巻頭写真２　夏敷古窯跡全景
巻頭写真３　夏敷古窯跡SY01近景
巻頭写真４　夏敷古窯跡出土遺物１
巻頭写真５　夏敷古窯跡出土遺物２
巻頭写真６　蛇廻間古窯跡遠景

挿図目次

―Ⅰ　調査の概要―
第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　夏敷古窯跡調査区配置図（1:2,500） …… 3
第３図　蛇廻間古窯跡調査区配置図（1:2,500） …… 3
第４図　夏敷古窯跡調査前地形測量図（1:400） …… 4
第５図　近世瀬木村の風景 …… 8
第６図　知多半島の地質（1:200,000） …… 9
第７図　知多郡荘園・国衙領分布略図 …… 10
第８図　周辺遺跡分布図（1:25,000） …… 11
第９図　瀬木山御番所 …… 12
第10図　文政２年　北条・瀬木両村入会絵図 …… 13
―Ⅱ　夏敷古窯跡―
第11図　主要遺構配置図（1:400） …… 16
第12図　基本遺構図（1:200） …… 17
第13図　グリッド設定図（1:200） …… 18
第14図　窯体部位名称とSY01計測値一覧 …… 20
第15図　SY01床面詳細図（1:20） …… 21
第16図　SY01遺構図（1:100） …… 22
第17図　SY01断面詳細図（1:20） …… 23
第18図　SY01・前庭部土層断面図（1:50） …… 24
第19図　SY01前庭部周辺遺構図（1:50） …… 32
第20図　SD01、SK01・02土層断面図（1:20） …… 33
第21図　SK01遺物出土状態図（1:20） …… 33
第22図　灰原土層断面図（1:50） …… 38
第23図　SK07・SD03遺構図（1:100） …… 40
第24図　中世の遺物の構成 …… 42
第25図　夏敷古窯跡出土陶器器種分類 …… 43
第26図　甕（広口壷他）の口径・底径度数分布 …… 44
第27図　甕（広口壷他）の計測部位 …… 44
第28図　甕（広口壷）の分類 …… 45
第29図　甕型式と頸部の接合方法、各属性との対応関係 …… 46
第30図　押印文分類模式図 …… 49
第31図　類似する意匠の例 …… 49
第32図　中世遺物実測図（１）―甕１（1:5） …… 52
第33図　中世遺物実測図（２）―甕２（1:5） …… 53
第34図　中世遺物実測図（３）―甕３（1:5） …… 54
第35図　中世遺物実測図（４）―甕４（1:5） …… 55
第36図　中世遺物実測図（５）―甕５（1:5） …… 56
第37図　中世遺物実測図（６）―甕６（1:5） …… 57
第38図　中世遺物実測図（７）―甕７（1:5） …… 58
第39図　中世遺物実測図（８）―甕８（1:5） …… 59
第40図　中世遺物実測図（９）―甕９（1:5） …… 60
第41図　中世遺物実測図（10）―甕10（1:5） …… 61
第42図　中世遺物実測図（11）―甕11（1:5） …… 62
第43図　中世遺物実測図（12）―甕12（1:5） …… 63
第44図　中世遺物実測図（13）―甕13（1:5） …… 64
第45図　中世遺物実測図（14）―甕14（1:5） …… 65
第46図　中世遺物実測図（15）―甕15（1:5） …… 66
第47図　中世遺物実測図（16）―甕16（1:5） …… 67
第48図　中世遺物実測図（17）―甕17（1:5） …… 68
第49図　中世遺物実測図（18）―甕18（1:5） …… 69
第50図　中世遺物実測図（19）―甕19（1:5） …… 70
第51図　甕押印文拓影（１）（1:3） …… 71
第52図　甕押印文拓影（２）（1:3） …… 72
第53図　中世遺物実測図（20）―甕記号文（1:4） …… 73
第54図　中世遺物実測図（21）―甕押印文１（1:4） …… 74
第55図　中世遺物実測図（22）―甕押印文２（1:4） …… 75
第56図　中世遺物実測図（23）―甕押印文３（1:4） …… 76
第57図　中世遺物実測図（24）―広口壷１（1:4） …… 78
第58図　中世遺物実測図（25）―広口壷２（1:4） …… 79
第59図　中世遺物実測図（26）―広口壷３（1:4） …… 80
第60図　中世遺物実測図（27）―広口壷４（1:4） …… 81
第61図　中世遺物実測図（28）―広口壷５（1:4） …… 82
第62図　中世遺物実測図（29）―広口壷６（1:4） …… 83
第63図　小型壷の類例 …… 84
第64図　中世遺物実測図（30）―小型壷（1:4） …… 85
第65図　三筋壷の口径・底径度数分布 …… 86
第66図　三筋壷の計測部位 …… 86
第67図　三筋壷の分類 …… 87
第68図　下駄痕拓影（1:2） …… 87
第69図　中世遺物実測図（31）―三筋壷１（1:4） …… 88
第70図　中世遺物実測図（32）―三筋壷２（1:4） …… 89
第71図　中世遺物実測図（33）―三筋壷３（1:4） …… 90
第72図　片口鉢の口径度数分布 …… 91
第73図　片口鉢の計測部位 …… 91
第74図　片口鉢の分類 …… 92
第75図　片口鉢（１類）の分類と径高指数の相関 …… 92
第76図　小型片口鉢の類例 …… 93
第77図　中世遺物実測図（34）―片口鉢１（1:4） …… 94
第78図　中世遺物実測図（35）―片口鉢２（1:4） …… 95
第79図　中世遺物実測図（36）―片口鉢３（1:4） …… 96
第80図　中世遺物実測図（37）―片口鉢４（1:4） …… 97
第81図　中世遺物実測図（38）―片口鉢５（1:4） …… 98
第82図　中世遺物実測図（39）―片口鉢６（1:4） …… 99
第83図　中世遺物実測図（40）―片口鉢７（1:4） …… 100
第84図　中世遺物実測図（41）―片口鉢８（1:4） …… 101
第85図　片口鉢製作痕跡拓影（1:2） …… 103
第86図　見込みナデの有無と高台付着痕の比率 …… 104
第87図　使用痕跡と器形の相関 …… 104
第88図　山茶碗の計測方法と法量分布 …… 105
第89図　中世遺物実測図（42）―山茶碗１（1:4） …… 106
第90図　中世遺物実測図（43）―山茶碗２（1:4） …… 107
第91図　中世遺物実測図（44）―その他の器種（1:4） …… 109
第92図　片口鉢Ⅱ類の系譜 …… 110
第93図　焼台大きさの度数分布 …… 111
第94図　焼台A・Bと大きさ（長軸）・重量の相関 …… 111
第95図　使用された器種の比率 …… 112
第96図　焼台の色調の比率 …… 112
第97図　片口鉢の窯詰め方法の復原 …… 113
第98図　中世遺物実測図（45）―焼台１（1:4） …… 114

第99図　中世遺物実測図（46）—焼台２（1:4）……115
第100図　中世遺物実測図（47）—焼台３（1:4）……116
第101図　中世遺物実測図（48）—焼台４（1:4）……117
第102図　中世遺物実測図（49）—転用具？（1:4）……118
第103図　中世遺物実測図（50）—高台接地痕跡（1:2）……119
第104図　近世遺物実測図（１）—土管１（1:4）……122
第105図　近世遺物実測図（２）—土管２（1:4）……123
第106図　近世遺物実測図（３）—炭櫛（1:4）……124
第107図　近世遺物実測図（４）—その他の陶器（1:4）……125
第108図　近世遺物実測図（５）—転用砥具（1:4）……126
第109図　常滑古窯跡群の古窯分布と地域区分……145
第110図　窯体構造の変遷……146
第111図　焼成室長・最大幅の変化……147
第112図　焼成室長・床面傾斜の変化……147
第113図　三筋文の施文位置の比較……150
第114図　三筋壺の比較……151
第115図　長頸壺（水瓶）の比較……152
第116図　斜方向の櫛目を基調とする意匠の系譜……156
第117図　三筋壺出土窯の分布……157
第118図　三郎谷１号窯の片口鉢……158
第119図　各型式における窯の分布……159
第120図　知多半島とその周辺における燃料材の樹種……162
第121図　夏敷古窯を構成する特質……167

—Ⅲ　蛇廻間古窯跡—
第122図　遺構配置図（1:200）……172
第123図　出土遺物重量分布……173
第124図　基本遺構図（1:100）……174
第125図　SX01・02土層断面図（1:50）……176
第126図　SX04・03土層断面図（1:50）……178
第127図　中世遺物実測図（１）—甕１（1:4）……185
第128図　中世遺物実測図（２）—甕２（1:4）……186
第129図　中世遺物実測図（３）—甕３（1:4）……187
第130図　中世遺物実測図（４）—広口壺（1:4）……188
第131図　中世遺物実測図（５）—三筋壺（1:4）……189
第132図　中世遺物実測図（６）—片口鉢１（1:4）……190
第133図　中世遺物実測図（７）—片口鉢２（1:4）……191
第134図　中世遺物実測図（８）—片口鉢３（1:4）……192
第135図　中世遺物実測図（９）—片口鉢４（1:4）……193
第136図　中世遺物実測図（10）—片口鉢５（1:4）……194
第137図　中世遺物実測図（11）—片口鉢６（1:4）……195
第138図　中世遺物実測図（12）—山茶碗（1:4）……195
第139図　中世遺物実測図（13）—羽釜（1:4）……196
第140図　中世遺物実測図（14）—焼台（1:4）……197
第141図　近世遺物実測図—加工土器片・その他（1:4）……199
第142図　龍押印文拓影（1:2）……203
第143図　蛇廻間古窯の生産器種……204

挿表目次

—Ⅰ　調査の概要—
第１表　調査工程表……7
—Ⅱ　夏敷古窯跡—
第２表　検出遺構一覧表……19
第３表　口縁端部（縁帯）幅・頸部厚さとの相関……46
第４表　押印文の施文比率と各型式との相関……47
第５表　押印文分類一覧表……48
第６表　中世遺物集計表……119
第７表　測定試料及び処理……140
第８表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……141
第９表　炭化材の樹種同定結果一覧……143
第10表　窯体計測値一覧……148
第11表　山茶碗計測値（平均値）比較表……153
第12表　編年対比表……155
第13表　三筋壺出土窯一覧……157
第14表　知多半島とその周辺における燃料材の樹種一覧……163

写真目次

—Ⅰ　調査の概要—
写真１　夏敷古窯跡・蛇廻間古窯跡と周辺の環境……5
写真２　夏敷古窯跡調査風景……7
写真３　蛇廻間古窯跡調査風景……7
—Ⅱ　夏敷古窯跡—
写真４　SY01（１）……26
写真５　SY01（２）……27
写真６　SY01（３）……28
写真７　SY01（４）……29
写真８　SY01（５）……30
写真９　SY01（６）……31
写真10　前庭部……34
写真11　SK01……35
写真12　灰原……37
写真13　近世の遺構……41
写真14　頸部～体部内面の接合部分の造作（106）……46
写真15　押印文（１）……50
写真16　押印文（２）……51
写真17　西洞馬古窯群の片口鉢用の焼台……113
写真18　遺物写真（１）—甕１……127
写真19　遺物写真（２）—甕２……128
写真20　遺物写真（３）—甕３……129
写真21　遺物写真（４）—甕４……130
写真22　遺物写真（５）—広口壺……131
写真23　遺物写真（６）—三筋壺……132
写真24　遺物写真（７）—片口鉢１……133
写真25　遺物写真（８）—片口鉢２……134
写真26　遺物写真（９）—片口鉢３……135
写真27　遺物写真（10）—山茶碗……136
写真28　遺物写真（11）—その他の器種……137
写真29　遺物写真（12）—焼台・充填材……138
写真30　遺物写真（13）—土管……139
写真31　炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真……144
—Ⅲ　蛇廻間古窯跡—
写真32　調査区全景／遠景……180
写真33　調査区全景……181
写真34　SX01・02・03土層断面……182
写真35　SX04……183
写真36　遺物写真（１）—蛇廻間古窯跡の出土遺物……200
写真37　遺物写真（２）—三筋壺……200
写真38　遺物写真（３）—甕・広口壺……201
写真39　遺物写真（４）—片口鉢・山茶碗・羽釜……202

I　調査の概要

第1章　調査の経緯

常滑市のあらまし

常滑市は愛知県知多半島の西海岸ほぼ中央に位置する南北に細長い市で、西は伊勢湾に面し、東は丘陵地が続く（第1図）。気候は年間を通じて温暖で、適度な雨量もあり、豊かな自然の恵みは、古くから窯業、漁業、

常滑市と窯業生産

農業などの産業を育んだ。とりわけ窯業は、現在も主産業として機能し、「焼き物の街」

中部国際空港

としての独特な都市景観をも創造した。平成17年、常滑市沖には国際ハブ空港となる中部国際空港が開港し、市は臨空都市として、もう一つの顔を併せもつことになった。

第1図　遺跡の位置

土地区画整理事業

空港開港により、市には住宅地、公共公益施設用地の整備が求められ、常滑地区には空港関連事業の一環として常滑西・東特定土地区画整理事業（常滑地区ニュータウン建設）が計画された。平成13年に事業主体である都市基盤整備公団（当時、現独立行政法人都市再生機構）が、事業地内における埋蔵文化財の所在について照会したところ、愛知県教育委員会は、踏査の結果、既知の二ノ田C古窯群に加えて夏敷地内と蛇廻間地内に古窯

遺跡の登録

跡が存在することを確認し、公団に対してその旨を回答した（13教生30-45）。このとき確認された古窯跡は、それぞれ夏敷古窯跡（県遺跡番号：42194）、蛇廻間古窯跡（県遺跡番号：42195）として新規に登録された。

試掘調査

平成15年10月8・9日、24日には、愛知県教育委員会が事業地域内の夏敷古窯跡、蛇廻間古窯跡の試掘調査を実施した結果（担当：蟹江吉弘・高橋信明、15教生74-14）、前者において窯体と灰原が残存する可能性が高いことを確認し、後者においても一定量の遺物が採取されたことから、両古窯跡を発掘調査によって取り扱うことを決定した。

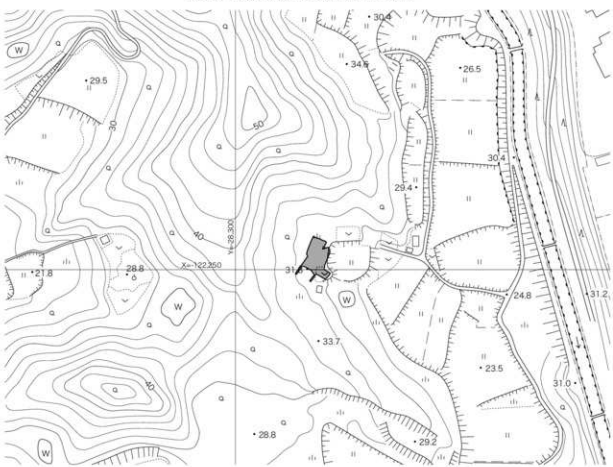
発掘調査

これを受け、両古窯跡の発掘調査は、都市基盤整備公団（調査期間中に独立行政法人都市再生機構に法人化）より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。調査期間は夏敷古窯跡が平成16年4～7月、蛇廻間古窯跡が同7月で、調査面積はそれぞれ、915㎡、700㎡である。

文献

愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2003『愛知県埋蔵文化財情報』18　平成13年度
愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2005『愛知県埋蔵文化財情報』20　平成15年度
早野浩二2006「夏敷古窯跡」『愛知県埋蔵文化財情報』21　平成16年度　愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二2006「蛇廻間古窯跡」『愛知県埋蔵文化財情報』21　平成16年度　愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

第２図　夏敷古窯跡調査区配置図（1:2,500）



第３図　蛇廻間古窯跡調査区配置図（1:2,500）

第２章　調査の概要

夏敷古窯跡

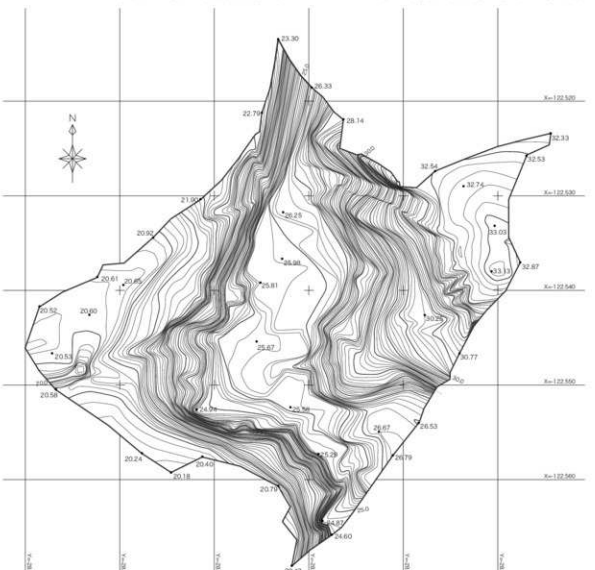
調査地の現況

調査地周辺は、かつての里山に孟宗竹が群生した雑木林で、試掘調査に先立って樹木を伐採した。伐採後の地表には遺物の散布が認められたものの、すでに農地の造成などによる地形の改変で、地形などから窯跡の位置や範囲、残存状況を把握することは困難であった。そこで、試掘調査を平成 15 年 10 月８日に実施し、任意に設定した試掘坑を適宜、重機によって掘削した。その結果、本窯跡に灰原と窯体が残存するらしいことと、それらのおよその位置を把握した。

試掘調査

発掘調査

発掘調査は、調査前地形の測量後、平成 16 年４月 22 日に着手した。調査着手時には、窯体や灰原の正確な配置を特定するまでには及ばなかったので、窯体、灰原の検出面までは、表土を含めて、国土座標に準じたグリッドに従って掘削し、遺物を採取した。窯体と



第４図　夏敷古窯跡調査前地形測量図（1:400）

夏敷古窯跡と蛇廻間古窯跡の遠景
夏敷古窯跡と蛇廻間古窯跡が分布する一帯の丘陵を南西上空から臨む。写真奥に通じる道路は知多半島横断道路。
周辺には四池A・B古窯、二ノ田A・B・C古窯群が分布する。

調査前の夏敷古窯跡（南西から）
伐採後の状況。手前は丘陵の南西端で、斜面は沖積地に連続する。右手のやや膨らんでいる部分が灰原の位置。

調査前の蛇廻間古窯跡（東から）
夏敷古窯跡と同一丘陵の東斜面に蛇廻間古窯跡は立地する。周辺は造成されて果樹園として利用されている。

写真1　夏敷古窯跡・蛇廻間古窯跡と周辺の環境

灰原の検出後は、改めて灰原も含めて窯体の主軸方向に平行、直交する方向にグリッドを設定し（第９図）、それに従って、掘削、遺物を採取した。なお重機による掘削は、すでに土砂が採取されていた丘陵斜面の表土、灰原上位の堆積層が厚い部分のみを対象とした。結果、窯体１基とそれに付随する遺構群、灰原などを検出した。窯体、灰原の検出後は、窯体内埋土の除去、前庭部周辺の精査、灰原の掘削などを土層断面の観察、記録作業と併行して進行させ、６月16日にラジコンヘリによる空中写真、高所作業車による全景写真を撮影した。撮影後は、窯体の断ち割り調査を実施し、７月８日に現地における調査、７月17日に埋め戻しと資材撤去までの作業を終了した。なお、調査期間中の７月４日には近隣に在住する市民を対象として現地説明会を実施し、約60名の参加者を得た。

現地説明会

蛇廻間古窯跡

調査地は、里山の景観を残す丘陵地の谷間で、周辺は果樹園として利用されている。踏査時からすでに、丘陵から馬の背状に派生する尾根状の高まり付近に遺物が散乱した状況が観察され、付近における窯跡の存在が想定された。試掘調査は尾根状の高まり付近の樹木を伐採後、平成15年10月９・24日に実施した。結果、尾根状の高まり付近に窯跡が存在した形跡は認められず、高まりそのものは、農地の造成時に取り残された部分であることが判明した。遺物は採取されるものの、地形の改変は著しく、調査地付近に窯跡が良好に残存している可能性は乏しいと予想された。その所見を受け、本窯跡の調査は、ごく小規模な発掘調査によって対処することを愛知県教育委員会との協議によって決定した。

調査地の現況

試掘調査

発掘調査は平成16年７月１日に着手し、尾根状の高まり部分を中心として、表土、表土下位の堆積層を重機によって除去しつつ、遺構の有無を確認し、遺物を採取する作業を継続した。遺物は表土中のものを含めて、国土座標に準じたグリッドに従って採取した。しかし、丘陵斜面の堆積層は相当に厚く、地表下に灰原を確認することができたものの、排土はとても処理できる土量ではなく、灰原の完掘は事実上、不可能であった。

発掘調査

丘陵斜面の堆積層除去後は、斜面を精査し、７月15日にラジコンヘリによる空中写真撮影、航空測量を実施した。土層断面の観察、記録等の作業は掘削作業と併行して実施し、現地における調査、埋め戻し、資材撤去までの作業は７月17日に終了した。

なお、両古窯跡出土遺物の洗浄は発掘調査期間中、注記は平成16年度中に実施した。

整理作業

また、分類、接合、実測、復元、図版作成、写真撮影、収納等の整理作業、報告書の執筆、編集は、夏敷古窯跡を平成17年10月～平成18年２月の５ヶ月、蛇廻間古窯跡を平成18年３月の１ヶ月の期間内に実施し、平成19年３月に本書を刊行した。

報告書作成

文献

愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2005『愛知県埋蔵文化財情報』20　平成15年度
早野浩二2005「夏敷古窯跡」『年報』平成16年度　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二2005「蛇廻間古窯跡」『年報』平成16年度　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二2006「夏敷古窯跡」『愛知県埋蔵文化財情報』21　平成16年度　愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二2006「蛇廻間古窯跡」『愛知県埋蔵文化財情報』21　平成16年度　愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

写真２　夏敷古窯跡調査風景

写真３　蛇廻間古窯跡調査風景

第１表　調査工程表

調査年度	調査機関 調査担当	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成15年度 試掘調査	愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室 蟹江吉弘・高橋信明							● 10.8-9	● 10.24				
平成16年度 発掘調査	(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 宮腰健司・早野浩二	4.22 地形測量	■	■	○ 空中写真撮影6.16	■	7.17 夏敷古窯跡 現地説明会7.8						
					7.1 空中写真撮影7.15	■	○ 7.17 蛇廻間古窯跡						
平成17年度 報告書作成	(財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 早野浩二						夏敷古窯跡 10.3	■	■	■	■	2.28	
											蛇廻間古窯跡 3.1	■	3.31
平成18年度 報告書刊行	(財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター												● 3.31刊行

第３章　周辺の環境

地形・地質

地形

知多半島は、標高 100 m以下の小起伏の丘陵帯によって形成され、丘陵の周辺と低地沿いには台地（段丘）が発達する。夏敷古窯跡は知多半島中央丘陵から西に派生する尾根先端付近の南西斜面、蛇廻間古窯跡は同尾根の小谷内の東斜面にそれぞれ立地する。窯跡が立地する斜面の標高は夏敷古窯跡が約 33 m、蛇廻間古窯跡が約 37 mである。市域は大河川に恵まれず、愛知用水が通水する以前は人口湖である溜池が市域の主要な水資源の供給源を担っていた。夏敷古窯跡が立地する丘陵周辺にも夏敷池が築かれ、蛇廻間古窯跡が立地する丘陵斜面の東には現在、愛知用水の幹線水路が南流している。

地質

常滑市域に連なる丘陵は、第三紀鮮新世後半（600 ～ 200 万年前）に東海湖と呼ばれる堆積盆地の堆積物によって形成された常滑層群からなる部分が多い。常滑層群は、下位より豊丘累層、河和累層、布土累層に区分され、布土累層はさらに上部層と下部層に区分されている。

夏敷古窯跡は下部層の分布域上、蛇廻間古窯跡は上部層の分布域上にそれぞれ立地する（第６図左）。常滑層群の層中の泥岩や砂質泥岩は低耐火度の炻器粘土（頁岩粘土）で、両古窯跡の製品原料に供されたばかりでなく、現在においても窯業原料として地域の産業を支えている。

地名・地誌

夏敷古窯跡、蛇廻間古窯跡は旧瀬木村に属する。なお、「瀬木」は当て字で「堰」、あるいは伊勢山田「世儀寺」にちなむ村名であるという。

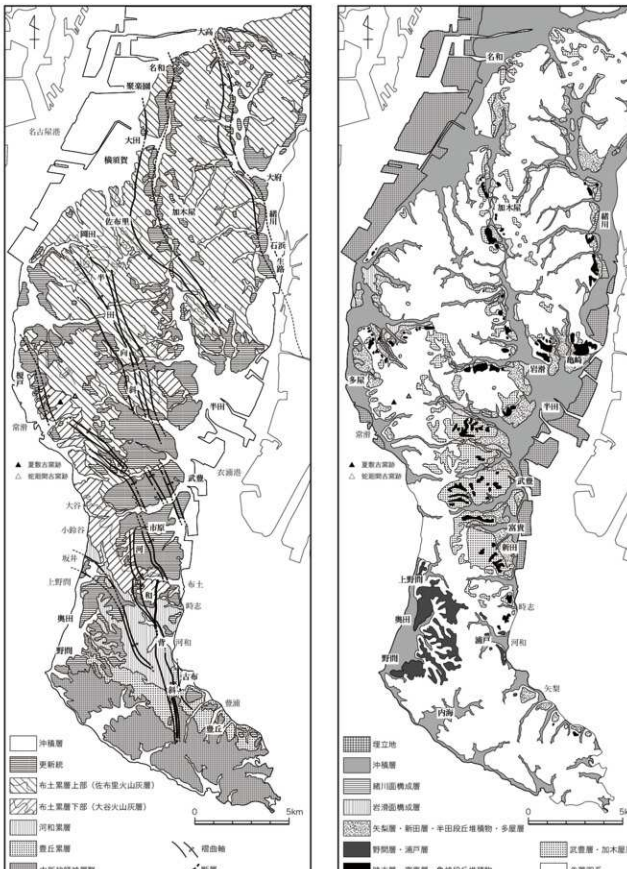
字「夏敷」

小字名としての「夏敷」は、北条・瀬木両村入会絵図（第 10 図）に溜漑用の溜池、「なつき池」としての記載がある。

字「蛇廻間」

「蛇廻間」については、「蛇」と「廻間」の合成による地名である。「ハザマ（廻間）」はこの地方に多い地勢由来の地名で、山間の狭い谷あいの地形を意味する。「蛇」については、『張州雑志』に瀬木村の土産として、「山の中蛇廻間という谷に瑪瑙あり。真物にはあらず、木化石なり。土人の言う、往古この谷に蛇を殺せしが、その血石となる」と伝えていることに由来する。

第５図　近世瀬木村の風景（『張州雑志』より）



第６図　知多半島の地質（牧之内1988ａ・ｂより作成、1:200,000）

周辺の遺跡と歴史的環境

柴山の周辺

夏敷古窯跡（1）と蛇廻間古窯跡（2）は、付近の最高峰である柴山（標高 81.7 m、「北条・瀬木両村入合図」には「芝山」、「芝山池」とある）の周辺に分布する窯跡で、周辺の丘陵一帯には松渕古窯群（20 ～ 22）、四池古窯群（44・45）、金色古窯群（32 ～ 35）、金色東古窯群（28 ～ 31）、金色南古窯群（40 ～ 43）、二ノ田古窯群（46 ～ 48）、柴山古窯群（49 ～ 51）、高坂古窯群（53 ～ 55）などが群在する（第 8 図）。これらは、「柴山・金色周辺の古窯群」とも呼称され、その多くが 12 世紀後半、平安時代末に築かれた古窯であることが判明している。またこれらの古窯群中からは三筋壺が複数検出されることも多い。この事実は、これらの古窯群が甕の集約的生産を担ったのみならず、同時期における特殊器種生産の中心地の一つであったことを示す。

平安時代末の古窯群

鎌倉時代の古窯

一方、13 世紀、鎌倉時代には四池古窯群中、柴山古窯群中、高坂古窯群中にそれぞれ窯が 1 基程度残るのみで、陶器生産は急速に衰退する。蛇廻間古窯跡はこれら古窯群の群中に立地するが、夏敷古窯跡はこれらの古窯群とは小谷を介した平野側の丘陵斜面上に単独で立地している。

荘園分布と荘域

中世には東北院領枳豆志荘に常滑市域南部の樽水・檜原地区（「安寿楽院文書」、「御前落居記録」）、堤田荘に市域中部の常滑地区（『尾張名所図絵』）、八条院領大野荘に市域北部が含まれていたと推定される（第 7 図）。東北院領枳豆志荘の成立年代は不明であるが、長元 3 年（1030）の上東門院藤原彰子の発願によって東北院が創建された直後の寄進と思われる。

枳豆志荘

堤田荘

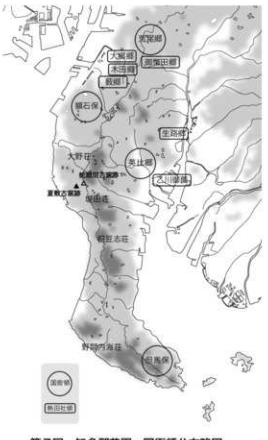
堤田荘は、春部・海東・中島・知多・丹羽の五郡に散在した荘園で、治暦元年（1065）には藤原教通によって仁和寺に寄進された（「仁和寺御伝・仁和寺文書」）。これらの摂関家領が成立するのは、当地域に中世窯が出現する直前である。さて、仁和寺に瓦を供給した瓦陶兼業窯として、金山地区の上白田古窯（9）、久米地区の濁池西古窯（4）が知られているが、これらの古窯は堤田荘域ではなく、大野荘域に含まれていたと考えられる。なお、八条院領大野荘は 12 世紀半ばに成立する皇室領である。

大野荘

一色氏による支配

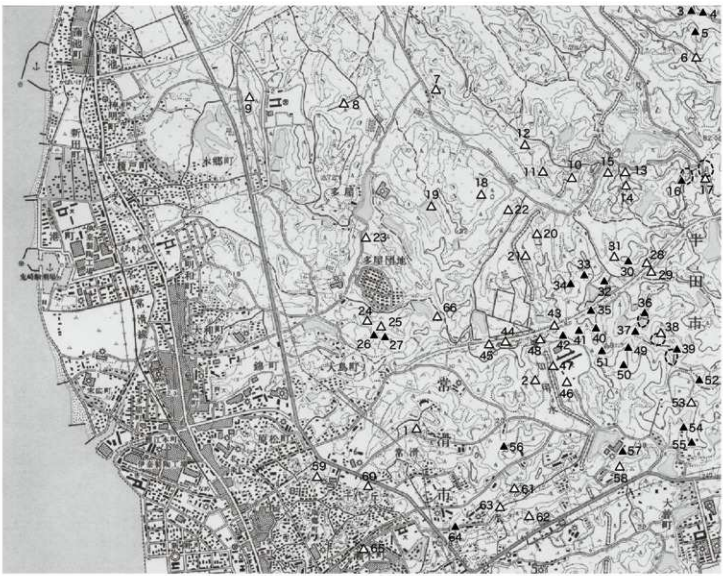
南北朝最末期、14 世紀末に知多郡は一色詮範の支配下に置かれ（「醍醐寺文書」）、以後、15 世紀半ばまで、三河守護一色氏による分郡守護が続くことになる。そして、水野氏、佐治氏、戸田市らによる半島割拠の情勢を経て、知多郡は 16 世紀後半には織田氏の傘下に入る（『信長文書』上）。

織田氏による支配



第 7 図　知多郡荘園・国衙領分布略図

（上村1989より作成）



	県遺跡番号	遺跡名	基数 / 検成器種	備考
1	42194	夏敷古窯	1 基 / 甕、鉢、壺、三筋壺	滅失
2	42195	蛇淵開古窯	甕、鉢、壺、三筋壺	滅失
3	42026	潮池北 A 古窯	2 基 / 壺	
4	42027	潮池北 B 古窯	3 基 / 山茶碗、瓦	
5	42028	潮池 A 古窯	6 基以上 / 壺	
6	42029	潮池 B 古窯群	2 基 / 山茶碗、鉢、甕	滅失
7	42036	石坂古窯	甕	滅失
8	42037	清水山古窯	山茶碗、小皿、鉢、壺、瓦	滅失
9	42038	上台田古窯	山茶碗、小皿、壺、瓦	滅失
10	42042	南山 A 古窯	山茶碗	滅失
11	42043	南山 B 古窯	山茶碗	滅失
12	42044	南山 C 古窯	山茶碗	滅失
13	42039	坊田池 A 古窯	山茶碗	滅失
14	42040	坊田池 B 古窯	山茶碗	滅失
15	42041	坊田池 C 古窯	山茶碗、壺、三筋壺	滅失
16	41025	三ツ池 A 古窯群	2 基 / 山茶碗、壺	
17	41026	三ツ池 B 古窯群	3 基 / 山茶碗、小皿、鉢、壺	滅失
18	42060	出地田古窯群	5 基 / 山茶碗、小皿、鉢、壺	滅失
19	42061	江南田古窯	山茶碗	滅失
20	42057	松洲 A 古窯群	2 基 / 山茶碗、鉢、大壺	滅失
21	42058	松洲 B 古窯群	6 基 / 山茶碗、鉢、大壺	滅失
22	42059	松洲 C 古窯	壺	滅失
23	42064	南大根山古窯	甕	滅失
24	42065	庇沙ケゼ A 古窯	甕	滅失
25	42066	庇沙ケゼ B 古窯群	2 基 / 壺	滅失
26	42067	庇沙ケゼ C 古窯群	2 基 / 壺	市指定史跡
27	42068	庇沙ケゼ D 古窯群	2 基 / 壺	市指定史跡
28	42045	金色東 A 古窯群	3 基 / 山茶碗、壺、甕	滅失
29	42046	金色東 B 古窯	山茶碗	滅失
30	42047	金色東 C 古窯群	2 基以上 / 壺	
31	42048	金色東 D 古窯	甕	滅失
32	42049	金色 A 古窯	甕	
33	42050	金色 B 古窯群	4 基以上 / 壺	

	県遺跡番号	遺跡名	基数 / 検成器種	備考
34	42051	金色 C 古窯群	甕	
35	42052	金色 D 古窯群	甕	
36	41033	行人 A 古窯群	2 基 / 山茶碗	
37	41034	行人 B 古窯	山茶碗、小皿	
38	41035	行人 C 古窯群	2 基 / 山茶碗、小皿、壺	滅失
39	41036	行人 D 古窯群	3 基 / 山茶碗、小皿、鉢、大壺	
40	42053	金色南 A 古窯群	3 基 / 壺	
41	42054	金色南 B 古窯群	2 基 / 壺	
42	42055	金色南 C 古窯	山茶碗、鉢	
43	42056	金色南 D 古窯群	2 基 / 山茶碗、鉢、壺	滅失
44	42062	四池 A 古窯	山茶碗	滅失
45	42063	四池 B 古窯	山茶碗	滅失
46	42073	二ノ田 A 古窯群	5 基 / 山茶碗、小皿	滅失
47	42074	二ノ田 B 古窯群	2 基 / 山茶碗、鉢、壺、羽釜	滅失
48	42075	二ノ田 C 古窯群	2 基 / 壺	滅失
49	42070	柴山 A 古窯群	3 基以上 / 山茶碗、小皿	
50	42071	柴山 B 古窯群	8 基以上 / 山茶碗、鉢、壺、三筋壺	
51	42072	柴山 C 古窯群	2 基以上 / 山茶碗、鉢、壺	
52	41037	十三塚 A 古窯	壺	
53	42077	高坂 A 古窯群	5 基 / 鉢、壺類	滅失
54	42078	高坂 B 古窯群	3 基 / 山茶碗、鉢、壺	市指定史跡
55	42079	高坂 C 古窯	壺	市指定史跡
56	42082	御厨神社古窯群	2 基 / 山茶碗、小皿、鉢	
57	42080	権志古窯群	2 基以上 / 壺	
58	42081	古道東割古窯群	2 基 / 鉢、大壺	滅失
59	42087	千代ヶ丘 A 古窯	壺	滅失
60	42088	千代ヶ丘 B 古窯	壺	滅失
61	42083	鳥居古窯	壺	滅失
62	42084	古道古窯	三筋壺	滅失
63	42085	総心寺古窯	壺	滅失
64	42086	千代古窯	山茶碗	
65	42089	野間口古窯	鉢、壺	滅失
66	42148	笠間開古窯群	2 基以上 / 壺、鉢、壺、三筋壺	滅失

第 8 図　周辺遺跡分布図（国土地理院発行1:25,000地形図「常滑」より作成、1:25,000）

禁窯令

天正２年（1574）、織田信長は禁窯令を発し、瀬戸窯に対して陶器生産の独占権を保証する一方、知多半島などの尾張領国における陶器生産を統制した。いわゆる禁窯令である。禁窯令によって知多半島の陶器生産は壊滅的な打撃を被ったとされるが、禁窯令が実際に与えた影響を疑問視する意見も多い。

第９図　瀬木山御番所（北条・瀬木両村入会絵図より）

近世の北条・瀬木両村

禁窯令を経て近世には、丘陵地に散在していた窯は北条村・瀬木村・常滑村の市街地近くに集結され、窯体構造も窖窯から大窯に変化する。窯数は近世前期の元禄７年（1694）には北条村８基、瀬木村２基、奥条村（常滑村の枝郷）２基の計 12 基（「北条村萬覚帳」）、中期の天明５年（1785）には北条村９基、瀬木村１基、奥条村２基の計 12 基（「横須賀代官所控書」）、後期の文政年間には北条村９基、瀬木村２基、奥条村１基の計 12 基（「尾張徇行記」）で、時代を通じて大きな増減はない。北条村について尾張徇行記は、陶器生産（瓶細工）に加えて、農業、運送業が発達し、イサバ（波不知）船によって伊勢、三河方面に陶器を、逆に伊勢、三河方面から燃料材となる松葉を輸送したことを記している。また、瀬木村について同じく尾張徇行記は、瀬木山に「海上守番所」があること、やはり、陶器生産に加えて、にイサバ船による運送、海産物生産が行われていたことを記している。

文献

名古屋市教育委員会1969『名古屋叢書続編』第八巻　尾張徇行記（五）
常滑市1974『常滑窯業史』
愛知県郷土資料刊行会1975『名古屋市蓬左文庫蔵　張州雑志』第一巻七
常滑市1976『常滑市誌』
常滑市1977『常滑市誌』近世村絵図集
常滑市1983『常滑市誌』文化財編
牧之内猛1988ａ「常滑層群」『日本の地質５　中部地方Ⅱ』共立出版
牧之内猛1988ｂ「知多半島地域」『日本の地質５　中部地方Ⅱ』共立出版
上村喜久子1989「中世」『新修　半田市誌』本文編上巻　半田市
上村喜久子1990「尾張国」『講座日本庄園史５　東北・関東・東海地方の庄園』吉川弘文館
柴垣勇夫1990「仁和寺とその周辺出土の尾張産瓦」『愛知県陶磁資料館研究紀要』９　愛知県陶磁資料館
日本福祉大学知多半島総合研究所1994『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
愛知県教育委員会1995『愛知県遺跡地図（Ⅱ）　知多・西三河地区』
鬼頭剛1995「地理的環境」『刀池古窯跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第64集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

第10図　文政２年　北条・瀬木両村入会絵図（徳川林政史研究所蔵、常滑市1977より作成）

II　夏敷古窯跡

第1章　遺構

（1）検出遺構

中世の遺構

検出遺構

本窯跡の発掘調査の結果、中世の窯業生産に関係する遺構として、窯体1基（SY01）、窯体に付随する前庭部と関連遺構（SD01、SK01・02など）、前庭部周辺の斜面に形成された灰原を確認した（第11・12図）。SY01は無釉の大型貯蔵容器を中心に焼成したいわゆる「甕（主体）窯」で、灰原もSY01によって形成されたと推定される。

甕（主体）窯

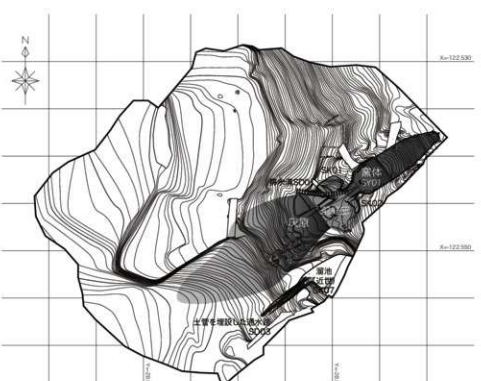
造成、土砂の採取

本窯跡は市街地に近接していることもあって、SY01の周囲は、農地や溜池の造成、土砂採取、宅地開発などによる大規模な改変を受けていた。よって、本窯跡を構成する窯体の正確な基数を把握することは不可能であった。なお、SY01の北東斜面にはやや幅広な平坦面も確認されたが、精査した結果、何らの遺構、遺物も確認されなかったことから、遺構としなかった。また、SY01は陶器窯としての操業停止後、炭焼窯として再利用された形跡が認められた。

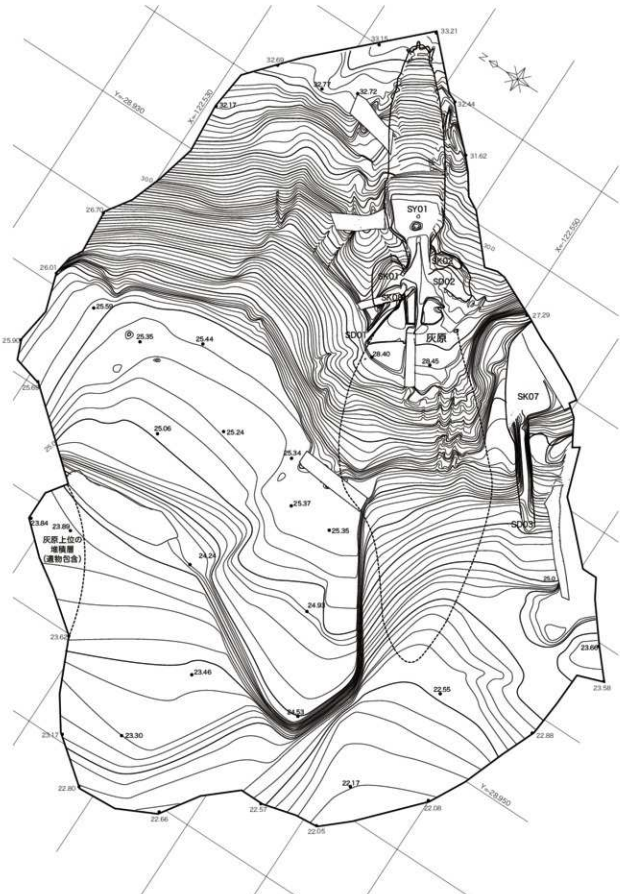
近世の遺構

近世の農地

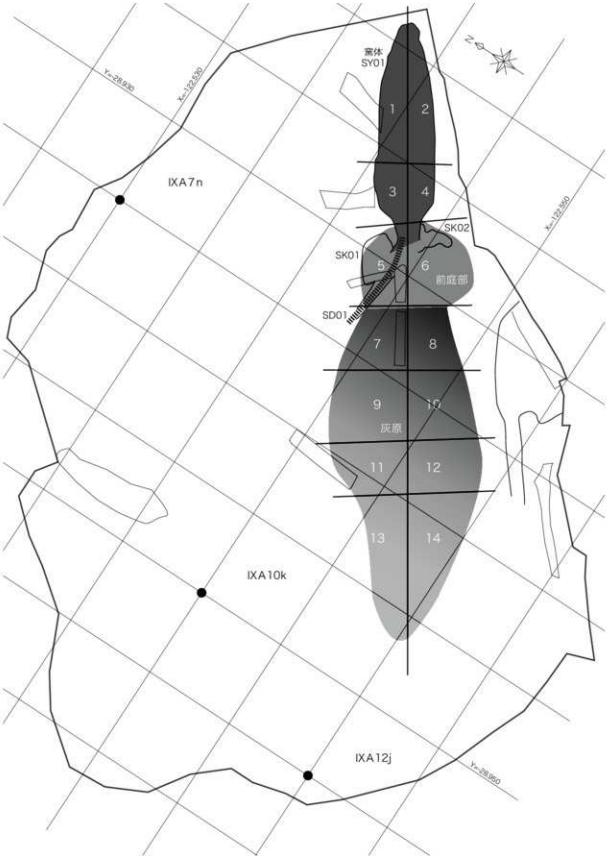
これらに加えて、近世の農地に関係する遺構として、灰原南西の造成地において近世の溜池（SK07）とそれに付随する通水路（SD03）を検出した（第11・12図）。なお、通水路には土管が埋設されていた。



第11図　主要遺構配置図（1:400）



第12図　基本遺構図 (1:200)



第13図　グリッド設定図（1:200）

第２表　検出遺構一覧表

遺構	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
SY01	IXA8k9o	11.5	3.0	4.5	12世紀後半	窯体
SD01	IXA9n		0.5	0.3	12世紀後半	前庭部左　SY01排水溝
SD02	IXA10o	1.6	1.5	0.4	12世紀後半	前庭部右
SK01	IXA9n9o	3.2	1.9	0.8	12世紀後半	前庭部左　SK08→SK01
SK02	IXA9p10p	1.8	1.5	0.4	12世紀後半	前庭部右
SK08	IXA8k20o	2.3	1.5		12世紀後半	前庭部左　SK08→SK01

遺構	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
SD03	IXA11n12m		0.8	1.5	19世紀前半	溜池の通水路(土管埋設)
SK07	IXA11o12n		6.5	1.8	19世紀前半	溜池

（2）窯体

概要

調査区の東端においてSY01を検出した（第11・12、14～18図、写真4～9）。主軸方向はN－123°－W、焚口付近の標高は28.7 m前後、煙道部付近の標高は33.0 m前後、現存する長さは約11.5 m、最大幅は約3.0 mである。窯体の残存は比較的良好で、燃焼室の天井の一部、窯体の側壁の大部分が最終焼成時の状態を維持していた。

SY01

残存状況

側壁や床面は硬化した面が1面（1層）確認され、全面的な窯体の補修が1回以上あったことを示している。ただし、硬化した床面は焼成室に一部分が残存するのみで、大部分は被熱赤変した地山（補修前の1次床面）が露出していた。なお、床面下施設も構築されていなかった。

窯体の補修

SY01から出土した遺物はごくわずかである。そのほとんどが窯体内の埋土中に混入したもので、床面付近から出土した遺物は片口鉢（第77図300）など数点があるにすぎない。

窯体内遺物

燃焼室

長さは焚口から分焔柱中心まで約2.0 m、幅は分焔柱中心で約3.0 m、焚口で約1.2 mである。焚口から分焔柱まで床面の傾斜はほぼ水平で、床面の床面の高さはこの付近が最も低くなる。側壁は焚口の左右で約0.6 m、分焔柱の左右で約0.8 mまでの高さが残存する。床面には焼土や炭化物を濃密に含む層（12層）が薄く広がっていたことから、地山直上の面または整地面を床として直接利用していたとみられる。

分焔柱

平面形は楕円形で、下端部の奥行き約2.4 m、幅約1.7 mである。床面から約0.5 mまでの高さが残存する。地山を掘り残して芯柱とし、若干の厚みの壁材（10cm前後が残存、1層）を付加して構築されていた。壁材は灰白色の粘土が主で、粘土中には陶器片も混和されていた。

分焔柱の壁材

焼成室

長さは分焔柱の中心からダンパーまで約9.0 m、最大幅は分焔柱の中心から煙道部側約0.8 mの部分で約3.0 mである。床面は、5～10cmの厚さで掘削土や焼土・炭化物を部分的に充填して1次床面（被熱赤変した床面）とし、さらにその直上に灰白色の粘土を約

1次床面と2次床面

床面傾斜

5cm 貼って２次床面（硬化した床面）としていた。床面傾斜は分焔柱から 1.5 m付近までは約 14°と緩やかで、その上位から約 27°に角度を増し、ダンパーまでその傾斜を維持する。焼台は焼成室にほとんど遺存していなかったが、硬化した床面には片口鉢の高台が接地した痕跡（第 103 図 480）が残されていた（第 15 図）。

高台の痕跡

側壁

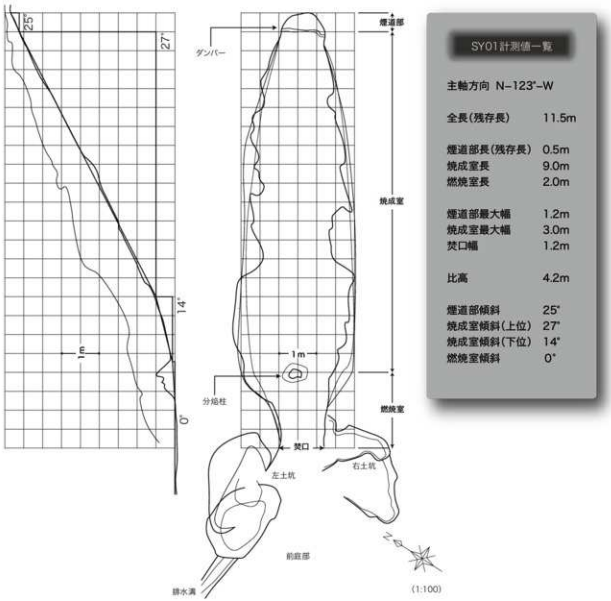
側壁は、（天井が一部維持されていた左右の部分で）約 1.0 mまでの高さが残存する。側壁には、補修時の壁材として灰白色の粘土が約５cm の厚さで貼られ、壁材の表面には粘土整形時の工具痕跡が明瞭に観察された。

最終操業時

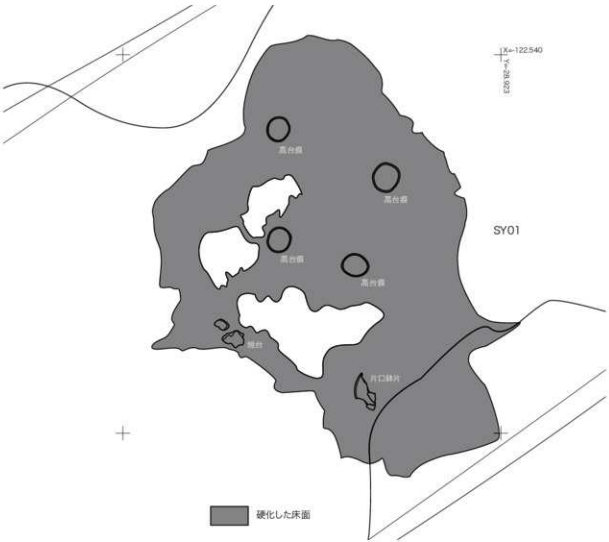
なお、第 77 図 300 は SY01 窯体内の床面付近に残されていた片口鉢で、SY01 の最終操業時の年代を示唆する遺物と思われる。

ダンパー・煙道部

ダンパー・煙道部は、地表から浅い位置に構築されていたので詳細な観察は困難であっ



第14図　窯体部位名称とSY01計測値一覧



第15図　SY01床面詳細図（1:20）

たが、煙道部付近で傾斜が緩慢になり、段状となる部分をダンパーが構築された部分として認識した。またその付近（8層中）で、わずかながらダンパーの構築材と考えられる炭化材を確認した。ダンパー付近から煙道部先端までの長さは約0.5 m、床面傾斜は約25°である。

炭化材

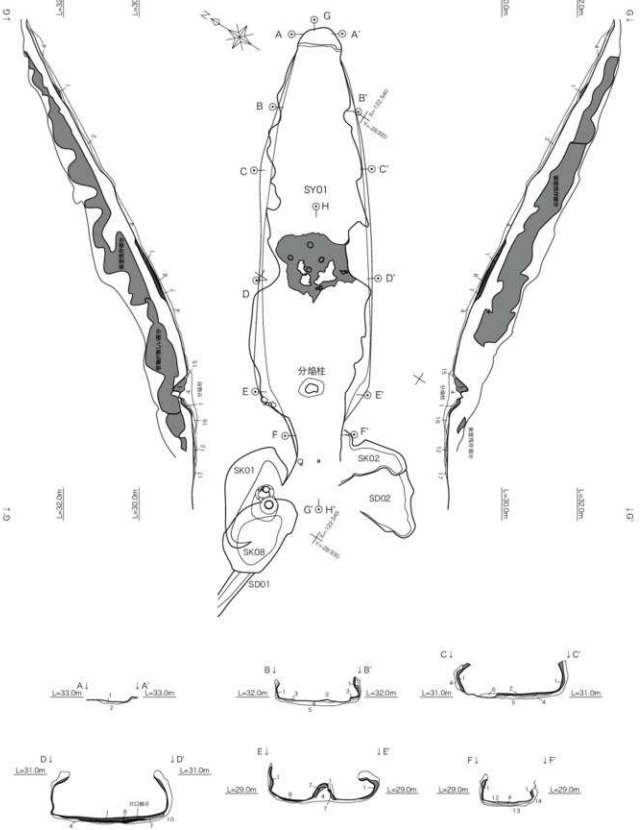
窯体の再利用

窯体内（焼成室）、燃焼室側の天井崩落土（16・19・25層）の上位には、層厚約5 cmの炭化物層（同15層）が堆積し、さらにその上位には煙道部側の天井崩落土（9層）が堆積していた。つまり、窯体廃絶後に燃焼室側の天井が早くに崩落する一方で、煙道部側は窯体廃絶後もしばらく天井が維持していたとみられる。これらの所見から、炭化物層の形成は、煙道部側の天井が維持している（焼成室が窯室の状態を維持している）段階に炭焼窯として窯体が再利用されたこと起因するものと考えられた。

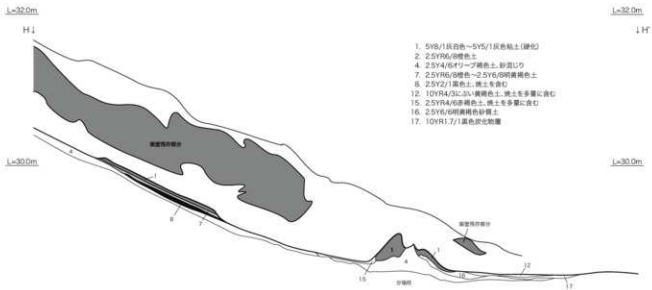
炭焼窯

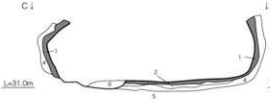
なお前庭部において、炭化物層から連続する層理面付近から土師器伊勢型鍋（第91図436）、山茶碗（第89図386）が出土した（第12図）。これらは、炭焼窯の操業時に使用された雑器である可能性が高い。

伊勢型鍋と山茶碗

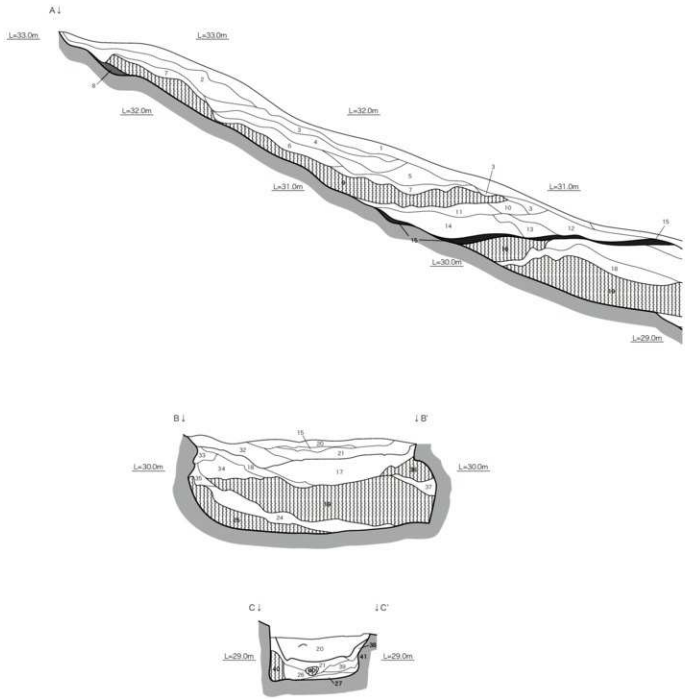


第16図　SY01遺構図（1:100）

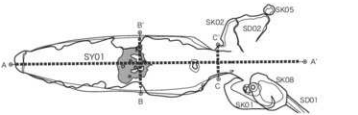


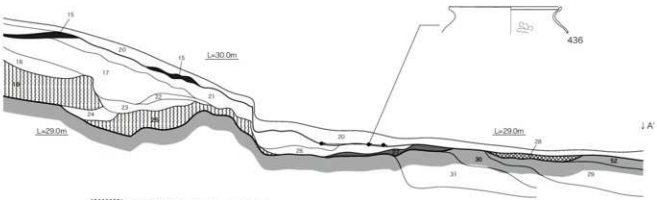


第17図　SY01断面詳細図（1:20）



第18図　SY01・前庭部土層断面図（1:50）





築窯時の掘出土１（炭化物を含まない層）
築窯時の掘出土２（炭化物を含む層）
窯操業時の炭化物層
崩落した天井片を大量に含む層
炭焼窯操業時の炭化物層

1. 10YR6/6 明黄褐色砂質土
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土。2～5cm の焼土粒を多量に含む、しまりなし
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
5. 10YR6/2 灰黄褐色土
6. 7.5YR4/4 褐色土
7. 7.5YR4/1 褐灰色土
8. 2.5Y2/1 黒色土
9. 5YR5/6 明赤褐色土
10. 7.5YR5/6 明褐色土
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色土
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色土
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土。1～2cm の焼土粒を含む、しまりなし
14. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土。炭化物を少量含む、しまりなし
15. 10YR1.7/1 黒色炭化物層
16. 5YR5/6 明赤褐色砂質土。しまりなし
17. 2.5Y6/4 にぶい黄色と、2.5Y7/1 浜白色土混入。しまりなし
18. 2.5Y6/2 灰黄色と、2.5Y6/4 にぶい黄色土混入
19. 7.5YR4/1 褐灰色と、5YR5/8 明赤褐色土、2.5Y5/4 にぶい黄色土の斑土
20. 5Y6/1 灰色土、炭化物を少量含む、しまりあり
21. 5Y6/4 オリーブ黄色土、しまりあり
22. 2.5Y6/2 灰黄色土、2.5Y6/4 にぶい黄色土混入
23. 2.5Y5/3 黒褐色土
24. 2.5Y5/4 黄褐色土
25. 7.5YR4/1 褐灰色と、5YR5/8 明赤褐色土の斑土
26. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土、炭化物を少量含む
27. 2.5Y6/2 灰黄色土、焼土・炭化物を多量に含む
28. 2.5Y6/1 黄灰色土、2.5Y5/4 黄褐色土の斑土
29. 2.5Y6/4 にぶい黄色土
30. 2.5Y6/2 灰黄色土、炭化物を少量含む
31. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土、炭化物を少量含む
32. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土、5YR5/6 明赤褐色土を含む
33. 10YR5/6 黄褐色砂質土、5YR5/6 明赤褐色土を含む
34. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土、2.5Y6/2 灰黄色砂質土の斑土、しまりなし
35. 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土、5YR5/6 明赤褐色土を含む
36. 2.5Y6/4 にぶい黄色土、5YR5/6 明赤褐色土の斑土、しまりなし
37. 2.5Y5/3 黒褐色粘質土、炭化物を少量含む
38. 10YR5/6 黄褐色粘質土、炭化物を含む
39. 2.5Y6/6 明黄褐色土、炭化物を少量含む
40. 10YR6/4 にぶい黄褐色土、5YR5/6 明赤褐色土、5YR7/8 橙色土の斑土
41. 2.5Y5/4 黄褐色土
42. 10YR7/6 明黄褐色土
43. 2.5Y6/4 にぶい黄色と、しまりなし
44. 2.5Y6/4 にぶい黄色と、しまりなし
45. 7.5YR5/6 明褐色砂質土、7.5YR3/1 黒褐色砂質土を互層状に含む、しまりなし
46. 7.5YR3/1 黒褐色砂質土、7.5YR5/6 明褐色砂質土を互層状に含む
47. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土
48. 5YR5/6 明赤褐色と、しまりなし
49. 5YR5/6 明赤褐色と、しまりなし
50. 10YR3/1 黒褐色と、焼土・炭化物を多量に含む
51. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土
52. 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土、2.5Y7/1 浜白色粘土混入
53. 2.5Y6/1 黄灰色と、炭化物を少量含む
54. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土
55. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土、7.5YR6/6 橙色粘土混入
56. 7.5YR6/6 橙色粘土、砂混じり

SY01検出状況（北から）
煙道部・ダンパー付近の検出状況。被熱赤変した側壁が窯体の輪郭として検出された。

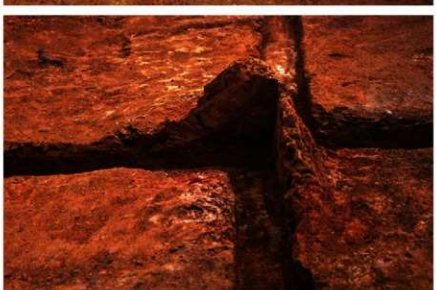
SY01掘削状況（南西から）
天井崩落後に堆積した土砂を除去した状態。

SY01焼成室土層断面（南西から）
焼成室手前（燃焼室側）の窯体内の堆積状況。陶器窯としての操業を停止後、比較的早くに天井が崩落したことが観察される。

写真4　SY01（1）

SY01焚口土層断面（南西から）
崩落した天井片を含む層の堆積後、均質な灰色土（20層）が堆積する。この層理面が窯体再利用時の機能面に対応する。

分焔柱近景（北から）
焼成室側から焚口の方向をみる。分焔柱の表面は激しい熱変化によって脆くなっている。分焔柱には陶器片が混和されている。



分焔柱断面（南西から）
焚口側から焼成室側をみる。分焔柱は、地山を掘り残した芯柱に若干の壁材を付加して構築されている。壁材は灰白色粘土で陶器片も混和されていた。

写真5　SY01（2）

焚口床面（南西から）

焚口の床面には焼土や炭化物を含む薄層が広がる。地山直上の面、あるいは若干の整地を施した面を床として利用していた。

焼成室床面（南西から）

灰白色粘土を貼った２次床面が残存する部分。硬化した２次床面上には片口鉢が壊地した痕跡、焼台、片口鉢片が残る。

片口鉢の接地痕跡近景（南西から）

高台径は14cm前後。片口鉢の窯詰め方法を示す。床面は切り取って採取した（第103図480）。

写真6　SY01（3）

焼成室側壁（北西から）

焼成室の側壁。補修時の壁材としてスサ入りの灰白色粘土が約5cmの厚さで貼られている。

焼成室側壁近景（北西から）

補修された壁面には整形時の工具痕跡が明瞭に残る。

焼成室手前の側壁（東から）

焼成室手前（燃焼室側）左壁の状況。窯壁が激しく溶融する。

写真7　SY01（4）

SY01断面1（南西から）

硬化した2次床面が残存する部分の窯体の断面。SY01は焼土を含む黒色土を充填後、窯体の掘削土を整地した面を1次床面として、その直上に灰白色粘土を貼って2次床面としていた。

SY01断面2（南西から）

被熱赤変した面が補修前の窯壁で、その上から灰白色粘土を貼って窯体を全面的に補修している。

煙道部近景（北東から）

わずかに段状となって、床面傾斜も煙道部先端まで緩慢となる。

写真8　SY01（5）

煙道部土層断面（北西から）

ダンパーが構築されたと推定される部分では、ダンパーの構築材と推定される炭化材を確認した。左が煙道部。

焼成室内の炭化物層（北西から）

左が煙道部側。右が燃焼室側。燃焼室側の天井崩落後に炭化物層が堆積。煙道部側は床面直上に堆積。煙道部側の天井が維持している状態で、窯体が炭焼窯として再利用されたことを示す。

焚口付近の土層断面（北西から）

焼成室の炭化物層から連続する層理面（窯体再利用時の機能面）付近からは土師器伊勢型鍋（第91図436）が出土した。伊勢型鍋は、SY01の床面から浮いた位置で出土している。つまり伊勢型鍋は、炭焼窯の操業時に使用されたことが確認される。

写真9　SY01（6）

（3）前庭部

概要

作業場

SY01 の焚口前面に確保され、陶器生産に関連する作業場として利用された平坦面を SY01 に付随する前庭部（以下、前庭部とする）とした（第 11・12、19 図、写真 10）。

前庭部の整地

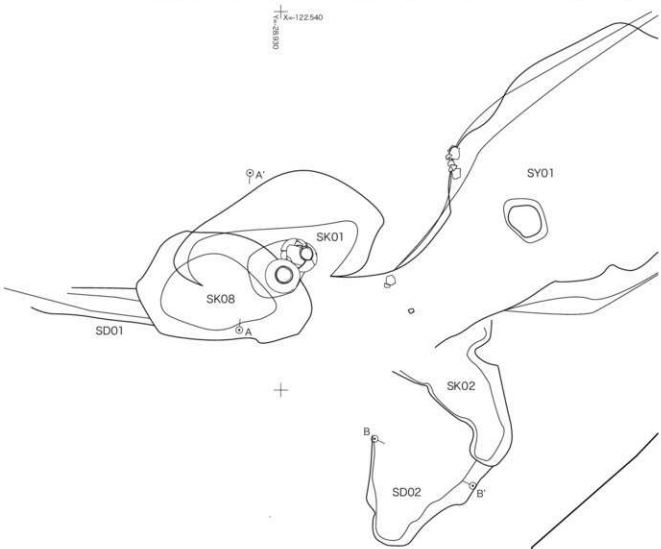
平坦面は、東西（北西―南東）約 6 m、南北（北東―南西）約 4 m の範囲が確保されている。また前庭部の整地には、築窯時に生じた排出土（28 層）を利用していることが観察された。整地土は、地山を突き崩した塊状の赤褐色土で、炭化物や陶器を包含しない。

前庭部の遺構配置

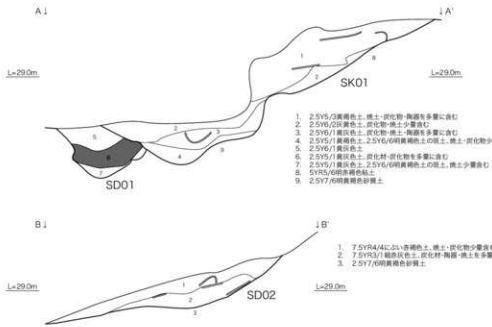
その他 SY01 に付随する遺構としては、前庭部左（西）に取り付く排水溝 SD01、前庭部左右（西東）にそれぞれ掘削された土坑 SK01・02 がある（第 19 図、写真 10・11）。土坑には製品や窯道具、焼土や炭化物が大量に廃棄されていた。

排水溝SD01

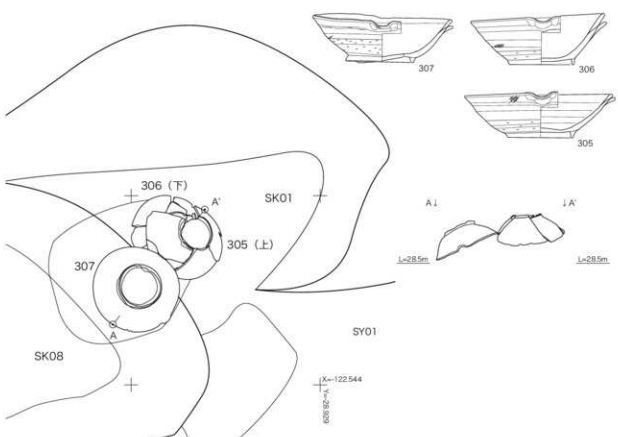
前庭部左に配置され、土坑 SK01 に接続するが、SY01 の焚口には接続しない（第 19 図）。



第19図　SY01前庭部周辺遺構図（1:50）



第20図　SD01、SK01・02土層断面図（1:20）



第21図　SK01遺物出土状態図（1:20）

前庭部全景（南西から）

東西（北西–南東）約６m、南北（北東–南西）約４mの平坦面が造成される。焚口左手に土坑SK01、右手にSK02が配され、SK01にはSD01が接続する。

前庭部の整地層

前庭部には築窯時の排出土を利用した整地が確認された。整地土は地山を突き崩したような塊状の土で、焼土・炭化物、遺物を含まない。

SD01・SK01土層断面（南東から）

排水溝SD01はSY01の排水、除湿を目的とした付属施設で、下層には炭化材の充填が確認された。SK01には遺物の廃棄層が形成されている。

写真10　前庭部

SK01遺物出土状況（南東から）
SK01に廃棄された遺物の出土状況。灰原の産状とほとんど変わるところがない。

SK01完掘状況（南東から）
土坑の底面には、3個体の片口鉢が伏せられた状態で遺棄されていた。

SK01片口鉢出土状況（南東から）
出土した片口鉢はいずれも完形で、単純な焼成不良品の廃棄とは趣を異にする。
左が第77図307で、右は同305（上）と同306（下）が入れ子状に重ねられている。

写真11　SK01

炭化材の充填

溝の断面形状は、明瞭な逆台形である。下層に除湿を目的としたと思われる炭化材の充填を確認した（第 20 図）。同定した炭化材は、いずれもマツ属複維管束亜属であった（第 3 章（2）を参照）。

前庭部左土坑SK01・SK08

遺物廃棄
片口鉢

前庭部左に掘削された土坑で（第 19 図）、土坑中や土坑上面、さらにその周囲には遺物が大量に廃棄されていた。土坑底面には片口鉢 3 点（第 77 図 305 ～ 307）が伏せ置かれ、2 点（305・306）は、（305 を上、306 を下として）入れ子状に重ねた状態で残されていた（第 21 図）。さらに片口鉢除去後、SK01 の底面で SK08 を検出した。なお、SK08 からは山茶碗（第 89 図 383）などがわずかに出土した。

前庭部右土坑SK02・SD02

遺物廃棄

SK02 は前庭部右に掘削された土坑で、SK01 と同様に、土坑中、土坑上面、土坑周囲に大量の遺物が廃棄されていた（第 19 図）。また、SK02 の前面に炭化物が広がった範囲を SD02 としたが、その掘り込みはごく曖昧であったことから、SD02 として認識した遺構埋土は SK02 の埋土が流出し、二次的に堆積したものと理解した。

（4）灰原

規模と残存状況

本窯跡の灰原は前庭部の南西斜面に形成されていた（第 11・12、22 図、写真 12）。灰原の周囲は農地の造成や土砂の採取によって削り取られていたが、灰原の中心部分は比較的良好に保存されていた。ただ、盗掘など新旧の撹乱が多く認められ、周囲には近世～近代の遺物も散見された。灰原の分布、堆積状況から、灰原の形成は窯体 1 基（SY01）に付随する可能性が高いと思われる。

堆積

斜面には原則的に下位から、地山直上に堆積した焼土・炭化物を多量に含む黒褐色土（50 層）、黒褐色砂質土と明褐色砂質土の互層状の堆積（45・46 層）、均質な黄色土（43 層）が堆積する。ただし、斜面の下方の堆積は、色調や土質が相互に類似する地山（55・56 層）、築窯時前後の堆積層（53 層、後述）、均質な黄色土（44 層）の区分にやや曖昧な部分を残す。

築窯時の排出土

地山直上に堆積した黒褐色土層（50 層）は、焼土や炭化物を大量に含むものの、遺物をほとんど包含しないことから、陶器を焼成する直前（築窯時前後）に形成された層であると考えられた。斜面下方の地山直上においても、炭化物の含有は認められないものの、築窯時前後と考えられる遺物を包含しない堆積層を確認した。

層区分

黒褐色土層上位の黒褐色砂質土と明褐色砂質土の互層状の堆積が、陶器焼成時に形成された廃棄層で、その層厚は残存が良好な部分で約 1 m である。著しく締まりを欠く同層は、斜面では容易に流出する土層であると判断して、掘削遺物採取に際しては層区分を考慮しなかったが、試みに土層観察用畦のみを対象として、上層（45 層）と下層（46 層）の区分に応じて遺物を採取した。

灰原上位の堆積層

均質な黄色土層（43 層）は、灰原形成後、廃棄層上位に堆積した層で、遺物を一定量包含する。堆積環境によって色調や土質は多少異なるが、同層は前庭部、窯体内に連続し、南西の谷地形にまで広範に堆積する。さらに、土砂の採取から免れた調査区北西の斜面においても、同層に類似する堆積を確認した。

灰原土層断面（北西から）

9区の堆積状況。層厚は約1m。下位から地山直上に堆積した焼土・炭化物を多量に含む築窯時の排出土、廃棄層（上層と下層に区分）、均質な黄色土（灰原上位の二次堆積層）が堆積する。

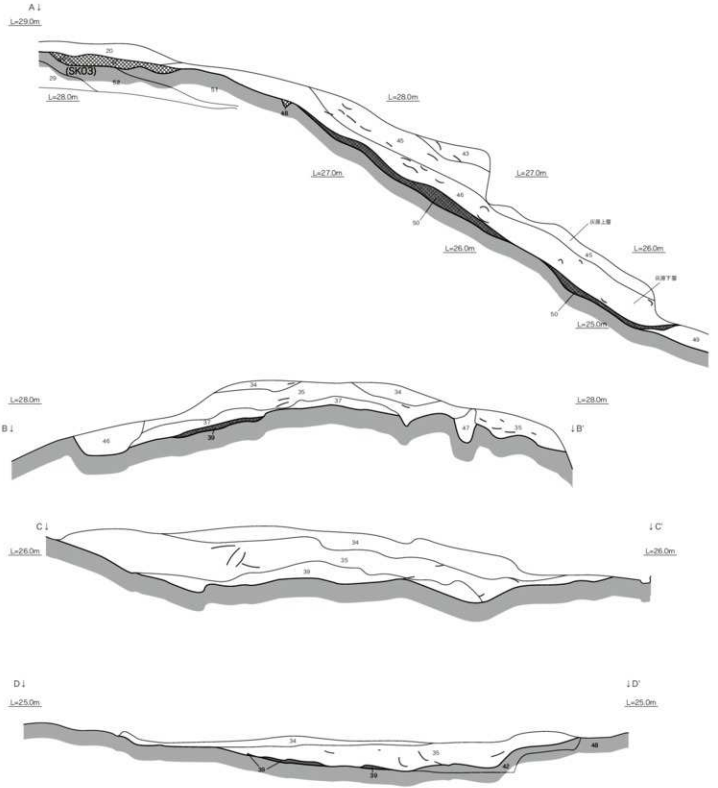
灰原の産状

7区の産状。灰原は黒褐色砂質土と明褐色砂質土の互層状の堆積で、著しく締まりを欠く。

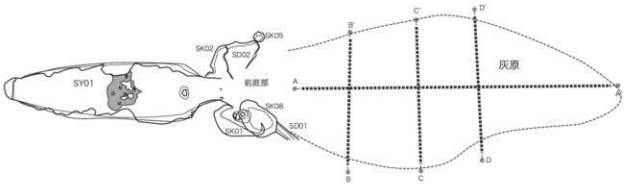
灰原遺物出土状況

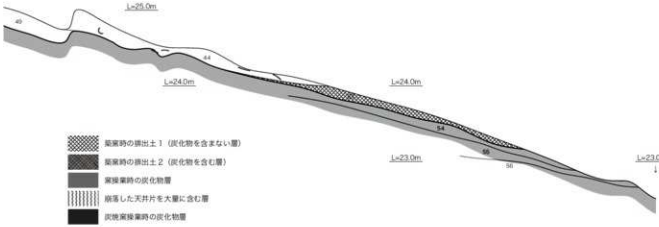
灰原から出土した焼成不良品の数々。

写真12　灰原



第22図　灰原土層断面図（1:50）





1. 10YR6/6 明黄褐色砂質土
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土。2~5cm の焼土粒を多量に含む、しまりなし
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
5. 10YR6/2 灰黄褐色土
6. 7.5YR4/4 褐色土
7. 7.5YR4/1 褐灰色土
8. 2.5Y2/1 黒色土
9. 5YR5/8 明赤褐色土
10. 7.5YR5/6 明褐色土
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色土
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色土
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土。1~2cm の焼土粒を含む、しまりなし
14. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土。炭化物を少量含む、しまりなし
15. 10YR1.7/1 黒色炭化物層
16. 5YR5/6 明赤褐色砂質土。しまりなし
17. 2.5Y6/4 にぶい黄色土。2.5Y7/1 灰白色土斑入。しまりなし
18. 2.5Y6/2 灰黄色土。2.5Y6/4 にぶい黄色土斑入
19. 7.5YR4/1 褐灰色土。5YR5/8 明赤褐色土。2.5Y5/4 にぶい黄色土の斑土
20. 5Y8/1 灰色土。炭化物を少量含む、しまりあり
21. 5Y6/4 オリーブ黄色土。しまりあり
22. 2.5Y6/2 灰黄色土。2.5Y6/4 にぶい黄色土斑入
23. 2.5Y5/3 黄褐色土
24. 2.5Y5/4 黄褐色土
25. 7.5YR4/1 褐灰色土。5YR5/8 明赤褐色土の斑土
26. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土。炭化物を少量含む
27. 2.5Y6/2 灰黄色土。橙土・炭化物を多量に含む
28. 2.5Y6/1 黄灰色土。2.5Y5/4 黄褐色土の斑土
29. 2.5Y6/4 にぶい黄色土
30. 2.5Y6/2 灰黄色土。炭化物を少量含む
31. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土。炭化物を少量含む
32. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土。5YR5/6 明赤褐色土を含む
33. 10YR5/6 黄褐色砂質土。5YR5/6 明赤褐色土を含む
34. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土。2.5Y6/2 灰黄色砂質土の斑土。しまりなし
35. 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土。5YR5/6 明赤褐色土を含む
36. 2.5Y6/4 にぶい黄色土。5YR5/6 明赤褐色土の斑土。しまりなし
37. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土。炭化物を少量含む
38. 10YR5/6 黄褐色粘質土。炭化物を含む
39. 2.5Y6/6 明黄褐色土。炭化物を少量含む
40. 10YR6/4 にぶい黄褐色土。5YR5/6 明赤褐色土。5YR7/8 橙色土の斑土
41. 2.5YR4/6 赤褐色土
42. 10YR7/6 明黄褐色土
43. 2.5Y6/4 にぶい黄色土。しまりなし
44. 2.5Y6/4 にぶい黄色土。しまりなし
45. 7.5YR5/6 明褐色砂質土。7.5YR3/1 黒褐色砂質土を互層状に含む、しまりなし
46. 7.5YR3/1 黒褐色砂質土。7.5YR5/6 明褐色砂質土を互層状に含む
47. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土
48. 5YR5/6 明赤褐色土。しまりなし
49. 5YR5/6 明赤褐色土。しまりなし
50. 10YR3/1 黒褐色土。焼土・炭化物を多量に含む
51. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土
52. 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土。2.5Y7/1 灰白色粘土斑入
53. 2.5Y6/1 黄灰色土。炭化物を少量含む
54. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土
55. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土。7.5YR6/6 橙色粘土斑入
56. 7.5YR6/6 橙色粘土。砂混じり

（5）近世の遺構

溜池SK07と通水路SD03

遺構配置　調査区南東、灰原南西の平坦な造成地において近世の小規模な溜池 SK07 と、それに付随する通水路（SD03）を検出した（第 11・12、23 図、写真 13）。

SK07　SK07 は径 6 m以上の不整な円形で、検出面からの深さは約 1.5 mである。土坑の中位までは自然堆積により埋没するが、上位は廃絶時に一気に埋め戻されている。

SD03　SD03 は造成地から南西の谷地形の方向に通じるが、土砂の採取によってすでに一部は破壊されていた。検出面からの深さは約 1.5 mで、断面は明瞭な逆台形である。溝底面には底樋としての土管が設置され、溝は検出面の上面まで一気に埋め戻されている。土管は 11 本（第 104 図 481 ～ 485・第 105 図 486 ～ 491）の埋設が確認され、ソケット部と基部を相互に連結して底樋としていた。土管は組作りのいわゆる常滑の赤焼土管で、土管の特徴からその製造年代は 19 世紀と考えられる。

溜池の埋め戻し土には近現代の遺物が含まれることからも、溜池と通水路の廃絶は、愛知用水の通水後、つまり 1961 年（昭和 36 年）直後の可能性が高い。

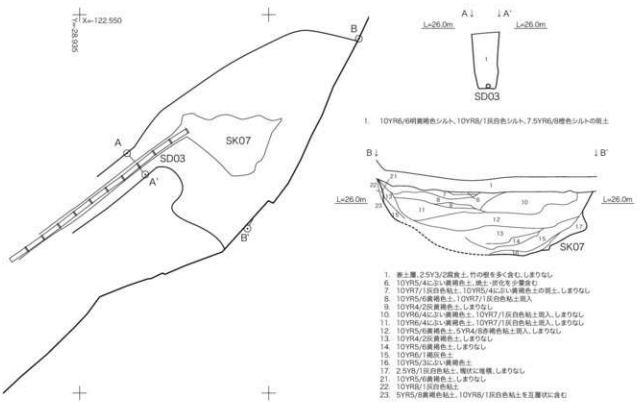
文献

植田富造1992「土管使用の変遷−古代から明治まで−」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会

植田富造1994「わが町の土管の歩み」『土管の歴史展―飛鳥から現代まで―』常滑市民俗資料館

植田富造1994「「土管」製作技法の変遷−近代常滑を中心として−」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅵ　常滑市教育委員会

松原隆治編2004『西溝馬古窯群―第三次発掘調査―』知多市文化財資料第37集



第23図　SK07・SD03遺構図（1:100）

SK07・SD03全景（北東から）
灰原（右手）南西の造成地で確認された。溜池SK07には土管（第104図481～485・第105図486～491）を埋設した通水路SD03が接続する。

SD03土管埋設状況（南西から）
土管11本分の埋設を確認した。ソケット部と基部を相互に連結して土樋とする。奥が溜池SK07。

SD03土層断面（南西から）
SD03は造成面から約1.5mの深さまでほぼ垂直に掘削され、掘削土で一気に埋め戻されている。

写真13　近世の遺構

第２章　遺物

（１）中世の遺物

概要

遺物の構成

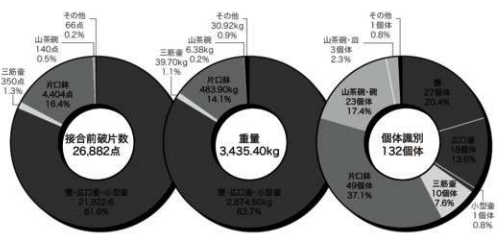
本窯跡における中世の出土遺物は、本窯において生産された無釉の焼き締め陶器と、生産に関係する窯道具が大半を占める。窯道具を除いた窯業生産に関係する遺物（土師器伊勢型鍋などを含む中世の遺物）の接合前破片数は26,882点、総重量は3,435.4kg、底部による個体識別（底部が二分の一以上残存するものを１個体として集計）は132個体、体積は10,377ｌ（参考）である（第６表・第24図）。これらの遺物について、436点（接合後破片数）、307.92kg（９％）、2,322ｌ（22％）分を図化の対象とした。

器種

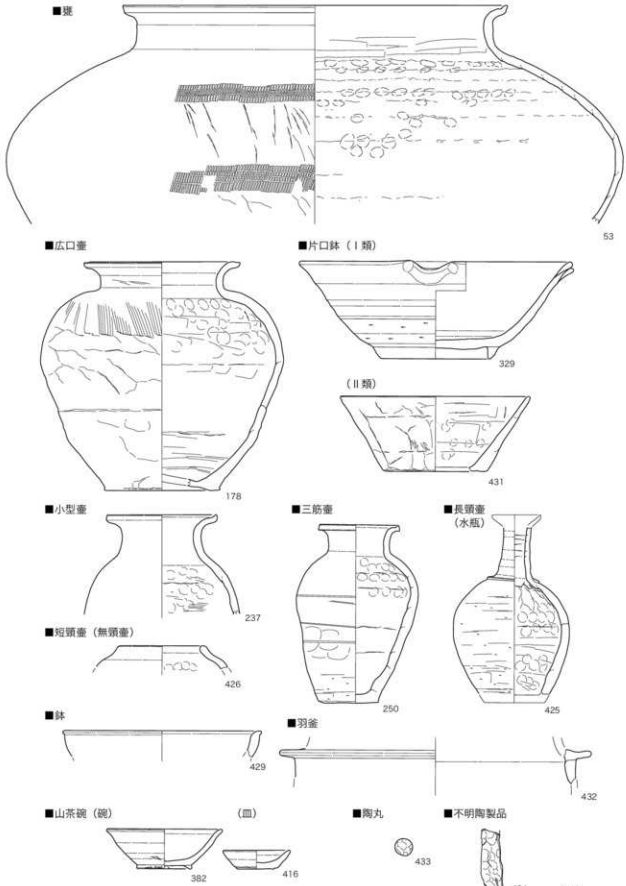
無釉の焼き締め陶器として確認した器種は、甕、広口壺、小型壺、三筋壺、長頸壺、短頸壺、鍋（鉢）、片口鉢（Ⅰ・Ⅱ類）、山茶碗（碗・皿）、羽釜、陶丸、不明陶製品（第25図）で、甕・広口壺、片口鉢が圧倒的に多く、三筋壺、山茶碗がそれに次ぐ。その他の器種はごくわずかに確認されるのみである。これら焼成品に加えて、焼き締め陶器の焼成に使用した焼台（充填材）などの窯道具が出土している。その他、明らかに他から本窯跡にもたらされた遺物として、土師器伊勢型鍋がある。

資料の提示

焼き締め陶器の多くは灰原や前庭部周辺から出土した焼成失敗品で、窯体内から出土した遺物はごく少ない。また、窯の操業時、あるいは窯体の再利用時（後述）に他からもたらされた製品も少なからず出土遺物に含まれていると予想されるが、それらを出土状況から識別することはできなかった。そこで、以下の資料の提示に際しては、器種による区分を出土状況による区分に優先させ、甕、広口壺、小型壺、三筋壺、片口鉢、山茶碗（碗・皿）、その他の焼き締め陶器、土師器の順序で配列した。また、それぞれの器種については、出土状況に即して、窯体SY01、排水溝SD01、土坑、前庭部、灰原、灰原上位の堆積層（検出として表記）、表土、表採・試掘の配列に従って整理した。なお、灰原の出土遺物については、層区分の有無と出土層位に従い、灰原下層、灰原上層、灰原一括の順序で配列した。



第24図　中世の遺物の構成（窯道具を除く）



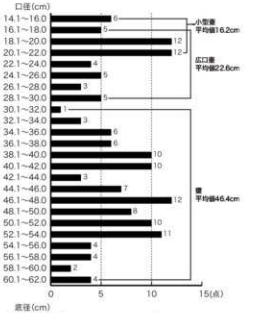
第25図　夏敷古窯跡出土陶器器種分類

甕・広口壷・小型壷

概要

甕と広口壷は器形を同じくし、厳密な区分が困難な個体もある。また、広口壷、三筋壷とは器形を異にする壷の一群を小型壷として分類したが、相互の区分については曖昧な部分がある。これら一群の器種は、21,922点（接合前破片数）、重量2,874.5kg、55個体（底部による個体識別）が出土した。甕と広口壷は、完形に復原できた個体はなく、全形が判明する個体もごくわずかにすぎない。器種分類に際しては口径の度数分布（第26図）を参考として、30.1cm（≒1尺）以上を甕、30.0cm以下を広口壷として図示した。

口径の度数分布



第26図　甕（広口壷他）の口径・底径度数分布

甕（1～169／第32～56図・写真18～21）

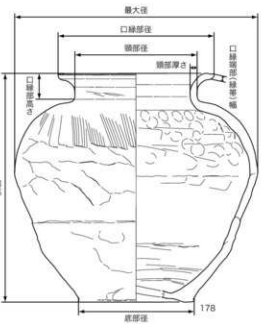
概要

27個体（底部による個体識別）が出土し、169点、24個体を図示した。全形が判明する個体はない。

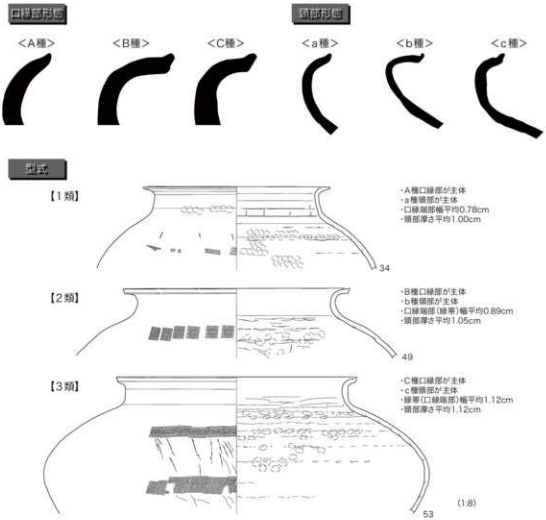
法量　口径は31.6～62.0cmに分布し、平均値は46.4cmである（第26図上）。ただし、数値は歪みの程度に大きく影響を受けている。53など残存部分が比較的多い個体を参考にすると、甕の口径の最大値は54cm程度（≒1尺8寸）と推測される。底径は14.8～24.0cmに分布し、平均値は17.9cmである（第26図下）。甕の底部は底径によって広口壷から明確に区分することは不可能で、区分においては器形を併せて参考とした。

計測方法

形態　口縁部形態、頸部形態をそれぞれA～C種、a～c種の3種に区分した（第28図上）。また、口径、底径、器高に加えて最大径、頸部径、口縁部の高さ、頸部の厚さ、口縁端部（縁帯）の幅をそれぞれ計測した（第27図）。口縁端部（縁帯）幅は1.0cm前後のものが多く、1.5cmに達するものは認められない。



第27図　甕（広口壷他）の計測部位



第28図　甕（広口壺）の分類

口縁部　A種　先端が丸みをもつもの
　　B種　先端をわずかに上方に摘み上げるもの
　　C種　先端に縁帯を形成するもの

頸部　a種　緩やかに外反するもの
　　b種　「コ」字状に緩やかに外反するもの
　　c種　「コ」字状に屈曲気味に外反するもの

変化の傾向

相対的にA種口縁部、a種頸部が古相、C種口縁部、c種頸部が新相、B種口縁部、b種頸部がその中間、さらに器壁が均一で薄いものが古相、頸部付近の器壁が厚いものが新相と判断される。型式分類に際しても、上記の区分を指標とするが、各属性は相互に関連しつつ、多様な器形を生成しているので、系列的に把握することは難しい。本報告においては、各属性を総合的に考慮して型式を以下の3類に分類した（第28図下）。各属性の変化の傾向から、相対的に1類が古相、3類が新相、2類がその中間として理解される。

1類　頸部から口縁部にかけて「く」字状に緩やかに外反し（a種頸部）、口縁部先端は丸みを帯びる（A種口縁部）。器壁は全体に均一で薄い。口縁端部幅の平均値は0.78cm、頸部の厚さの平均値は1.00cmである。

2類　1類と2類の中間的な形状で、縁帯の形成を意識するかのように口縁部先端をわずかに摘み上げ状とするもの（B種口縁部）。ただし、口縁部形状には変異の幅が大きい。また、口縁部先端外面に窪みを生じるものが多い。縁帯（口縁端部）幅の平均値は0.89cm、頸部の厚さの平均値は1.05cmである。

3類　頸部から口縁部にかけて「コ」字状に屈曲気味に外反し（c種頸部）、口縁部先端を立ち上げて縁帯を形成するもの（C種口縁部）。頸部付近の器壁が体部より厚くなるものが多い。縁帯幅の平均値は1.12cm、頸部の厚さの平均値は1.12cmである。

出土状況との関係

図示した資料は1類24点、2類41点、3類37点、底部33点である。出土状況に有意な傾向を指摘することは難しいが、結果として、窯体内・前庭部付近に1・2類、灰原付近に2・3類が多い傾向が示された。

第3表　口縁端部（縁帯）幅・頸部厚さとの相関

口縁端部（縁帯）幅(cm)	1類	2類	3類
0.5	1	1	
0.6	3		
0.7	4	7	
0.8	10	6	
0.9	4	14	2
1.0	2	9	13
1.1		2	6
1.2		1	10
1.3		1	2
1.4			3

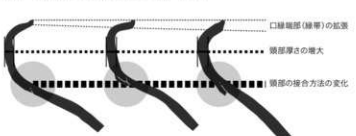
頸部厚さ(cm)	1類	2類	3類
0.7	1	1	
0.8	2	2	1
0.9	7	5	5
1.0	7	13	6
1.1	4	8	11
1.2	1	4	5
1.3	1	3	4
1.4	1	1	3
1.5			1

~10%　~20%　~30%　~40%

頸部の接合方法

技法　頸部の形状（または型式）は、頸部付近の厚さに相関する傾向がある（第3表）。つまり、頸部の屈曲に際して、一定の強度が求められた結果が頸部付近の厚さに反映していると考えられる。この意味において、81、86、106など、2類を中心として確認される頸部下位内面接合部分の補強を意識した造作は、頸部の形態の変化に即した技法であったと推察できる（第29図）。一方で、3類の頸部内面には明確な段を生じることが多い。

写真14　頸部～体部内面の接合部分の造作（106）



第29図　甕型式と頸部の接合方法、各属性との対応関係

また、底部資料のほとんどには離れ砂の付着が確認されるが、付着する程度には差がある。

焼成　甕は、窯内において高火度で硬質に焼成された結果、暗赤褐色に発色し、胎土中の長石や鉄分が器表面に溶出したものが多い。一方で、いわゆる「赤物」に近い橙色のもの、片口鉢や山茶碗に近似する灰色のものも少なくはない。

窯詰め方法

底部資料には、焼台や床の釉着した状況から、窯詰め方法を推測させるものがある。その典型例が112（底径18.3cm）で、底部周囲と床面との隙間に粘土塊を3塊充填して製品を支持し、据置時の安定を確保している。70（底径16.4cm）のように、焚口側に焼台を2塊充填し、焼台と製品の隙間には陶片を詰めた例も比較的多い。

記号文　体部上半（頸部と1段目の押印文帯間）にヘラによって抽象的な文様を記した資料を2点図示した（51・54）。その他、文様を記した体部破片資料として7点（136～142）を図示した。なお、138は広口壺の可能性が高いが、同時に図示した。

記号文の意匠

記号は、いずれも単純な直線と曲線によって構成される簡素な文様で、ごく普遍的なものである。意匠としては「十」、「个」、「中」などがある。ヘラの原体は幅1～2mmの細いもの（51、136～138）と、幅3～5mmの太いもの（54、139～142）に大別される。

押印文　押印文は、成形工程に対応して4～5段の帯状に連続施文される。体部上半に1段目、体部最大径付近に2段目、体部下半に2～3段を配するものがほとんどであるが、体部最大径付近に1段目を配するもの（37）もある。ただし、37は口径、押印文の打捺によって潰として分類したが、器形からは、（押印文を施した）広口壺の可能性もある。

施文原体

本窯跡において抽出した押印文の原体の種類は19種類である（第5表・第30図・写真15・16）、143～167）。これらを意匠によってA～D類の4種類に大別し、さらにA類とB類をそれぞれA a類、A b類、B a類、B b類の2種類に細別した。押印文の多くは櫛目を横線や斜線によって区画するもの（A～C類）である。

原体の形状は、長方形または方形であるが、縦横比は変異に富む。大きさは幅5cm以下のものがほとんどで、5cmを超えるものは1種類（D類）に限られる。

第4表　押印文の施文比率と各型式との相関

	1類	2類	3類	不明	計	%	計	%
Aa1			2	4	6	13.6		
Aa2		2		1	3	6.8		
Aa3					0	0.0	11	25.0
Ab1			1	1	2	4.6		
Ab2					0	0.0		
Ba1			1		1	2.3		
Ba2		2	2		4	9.1		
Ba3					0	0.0		
Bb1	4	8	2	1	13	29.5		
Bb2			1	1	2	4.5	26	59.1
Bb3				1	1	2.3		
Bb4	2		1	2	5	11.4		
Bc1					0	0.0		
Bc2					0	0.0		
Bc3					0	0.0		
C1					0	0.0		
C2				1	1	2.3	1	2.3
C3					0	0.0		
D		2		1	3	6.8	3	6.8
不明				3	3	6.8	3	6.8

施文比率

図示した甕を対象にして押印文の施文比率を示した表が第4表である。主要な意匠は26点（59.1%）を図示したB類で、11点（25.0%）を図示したA類がそれに次ぐ。D類、C類はそれぞれ3点（6.8%）、1点（2.3%）と少ない。型式との相関を同時に示した第3表からは、B類は1・2類に多用され、A類は2・3類に多用される傾向が認められる。

格子状のA類、櫛目を斜線で分割したB・C類は、同時期にごく普遍的に認められる意匠であるが（第

第５表　押印文分類一覧表

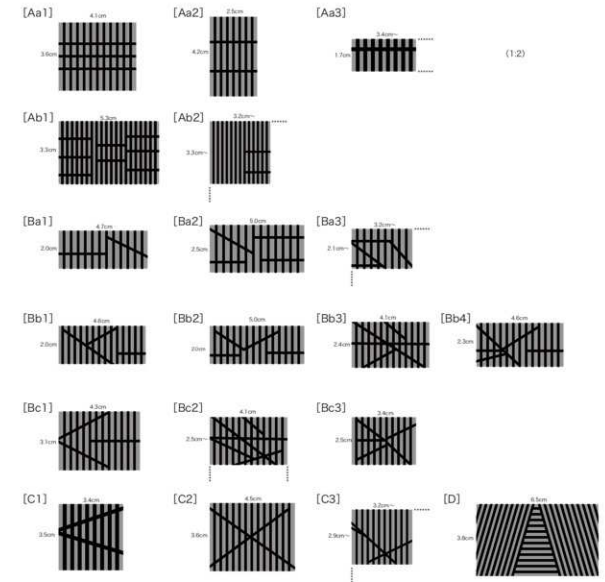
意匠による分類		原体の種類／大きさ（縦横比）
A 櫛目を横線で分割した格子状	a 櫛目が太筋	Aa１／3.6×4.1cm(87.8)
		Aa２／3.3×5.3cm(62.3)
		Aa３／1.7×3.4~cm(~50.0)
	b 櫛目が細筋	Ab１／3.3×5.3cm(62.3)
		Ab２／3.3~×3.2~cm(~103.1~)
B 櫛目を横線と斜線で分割	a 細長い原体で櫛目が太筋（縦横比~60）	Ba１／2.0×4.7cm(42.6)
		Ba２／2.5×5.0cm(50.0)
		Ba３／2.1~×3.2~cm(~65.6~)
	b 細長い原体で櫛目が細筋（縦横比~60）	Bb１／2.0×4.6cm(43.5)
		Bb２／2.0×5.0cm(40.0)
		Bb３／2.4×4.1cm(58.5)
		Bb４／2.3×4.6cm(50.0)
	c 短小な原体（縦横比60~）	Bc１／3.1×4.3cm(72.1)
		Bc２／2.5~×4.1cm(61.0~)
		Bc３／2.5×3.4cm(73.5)
C 櫛目を斜線で分割		C１　／3.5×3.4cm(102.9)
		C２　／3.6×4.5cm(80.0)
		C３　／2.9~×3.2~cm(~90.6~)
D　斜／横方向の櫛目を交互に充填		／3.8×6.5cm(58.5)

二ノ田古窯群

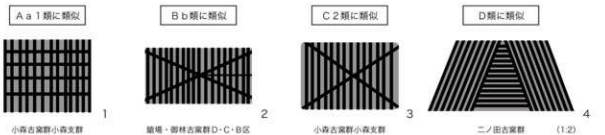
31図１～３）、斜方向と横方向の櫛目を交互に組合せた特徴的な意匠であるD類は、常滑市二ノ田古窯群（２・３型式）などにおいて確認できる（第31図４）。なお、二ノ田古窯群は夏敷古窯の北東約1.0㎞の位置に所在する（蛇廻間古窯の北東に隣接）。

体部内面への施文
小森古窯群
六反田古窯群

なお、体部内面に押印文を施したとみられる破片を２点抽出した（168・169）。内外面の対応する位置に意匠が異なる押印文が施された例として、常滑市小森古窯群小森支群（２・３型式）、同六反田古窯群（１b型式）にすでに報告例がある。これらは、当て具として使用した工具、さらには押印文の技術系譜を示唆する資料として興味深い資料である。ただし、本例については、表面調整によってかなりの確度で内外面が識別されるものの、外面の対応する位置に押印文が施されないことから、内外面の判別には不安な点も残される。



第30図　押印文分類模式図



第31図　類似する意匠の例（青木1991、中野1992より作成）

Aa1
143

Aa2
144

Aa3
145

Ab1
146

Ab2
147

Ba1
148

Ba2
149

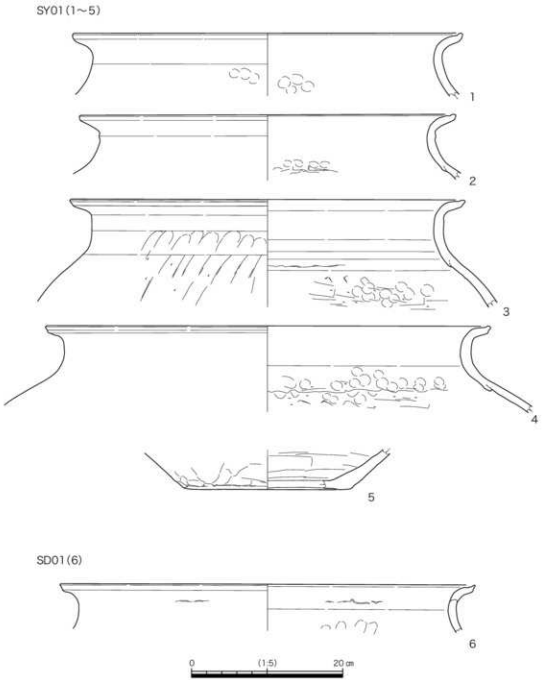
Ba3
152

Bb1
154

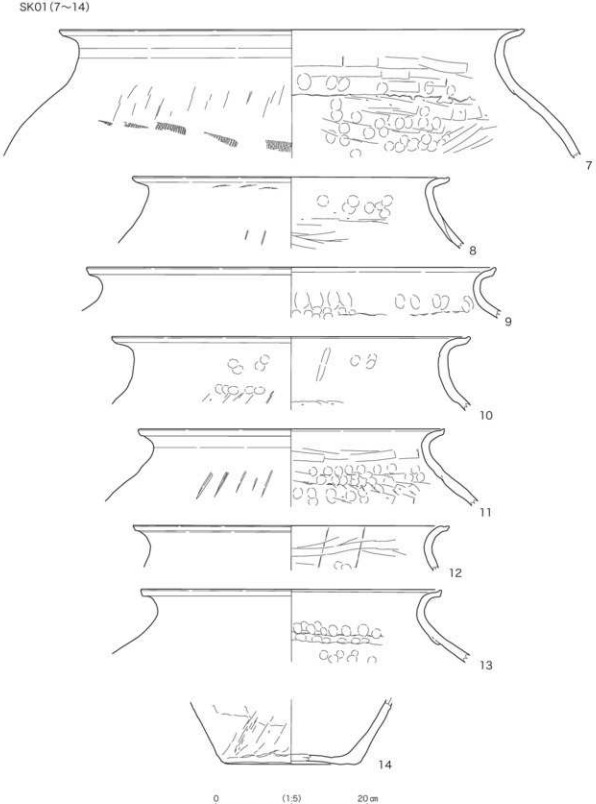
Bb2
155

写真15　押印文（1）

写真16　押印文（2）

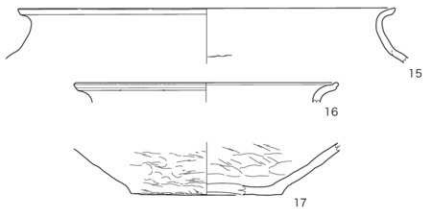


第32図　中世遺物実測図（1）—壺1（1:5）

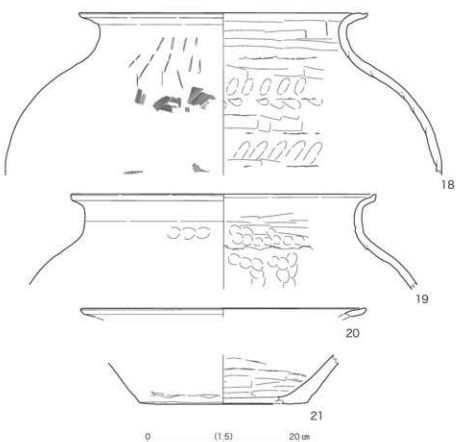


第33図　中世遺物実測図（2）—鍛2（1:5）

SK02(15～17)

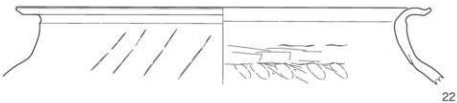


前庭部左(18～21)

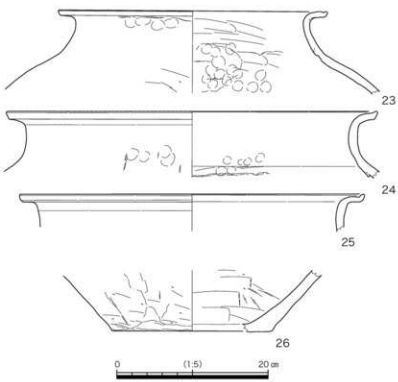


第34図　中世遺物実測図（3）—壕3（1:5）

前庭部(22)

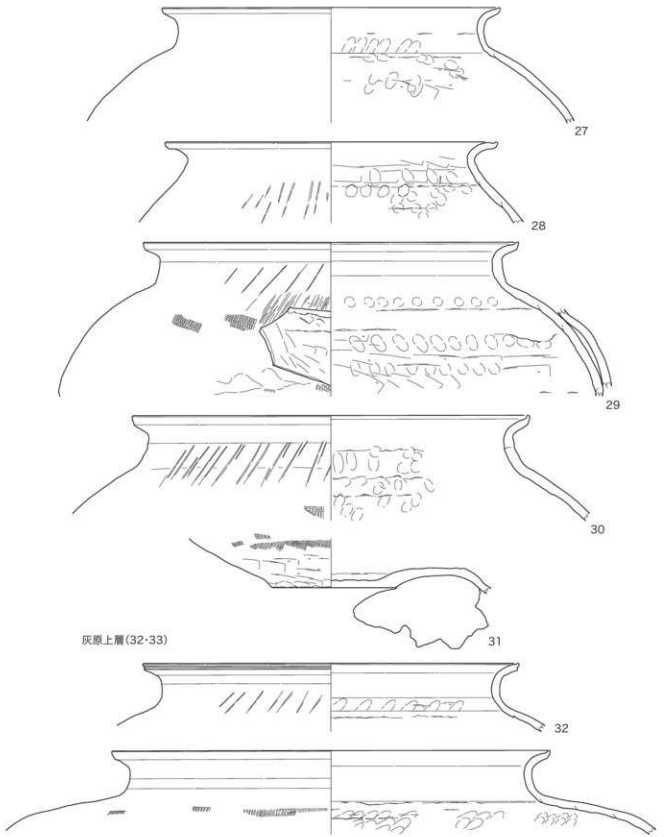


前庭部右(23～26)



第35図　中世遺物実測図（4）—褓4（1:5）

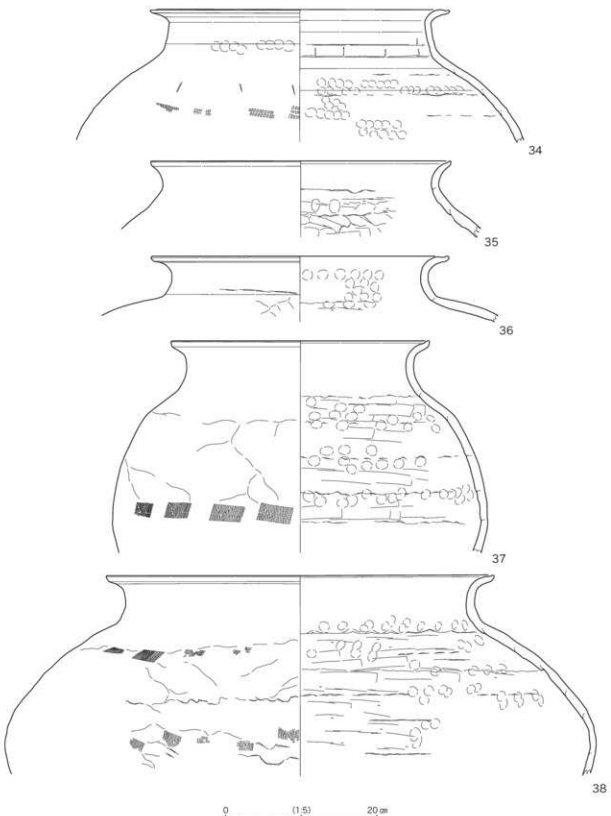
灰原下層(27~31)



灰原上層(32･33)

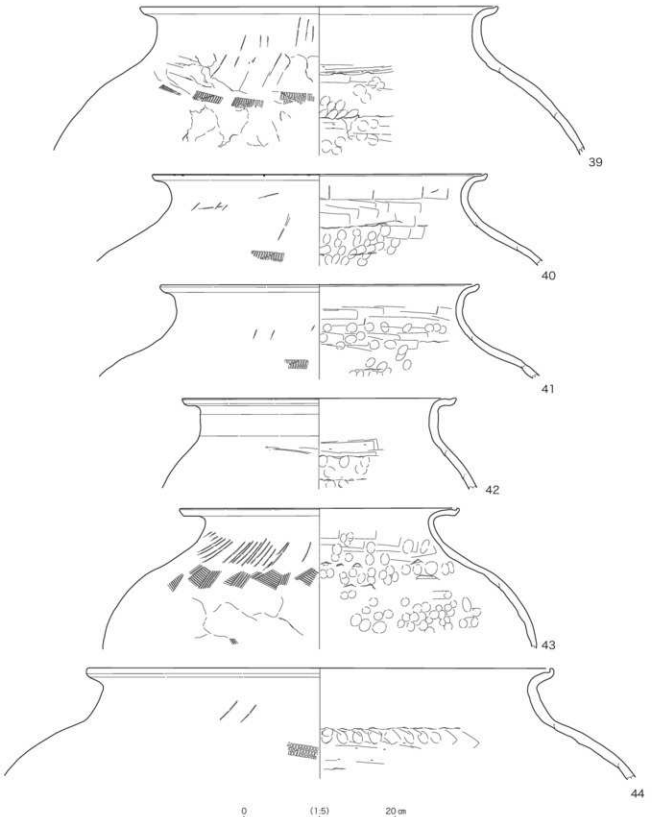
第36図　中世遺物実測図（5）—壁5（1:5）

灰原一括-1（34～38）

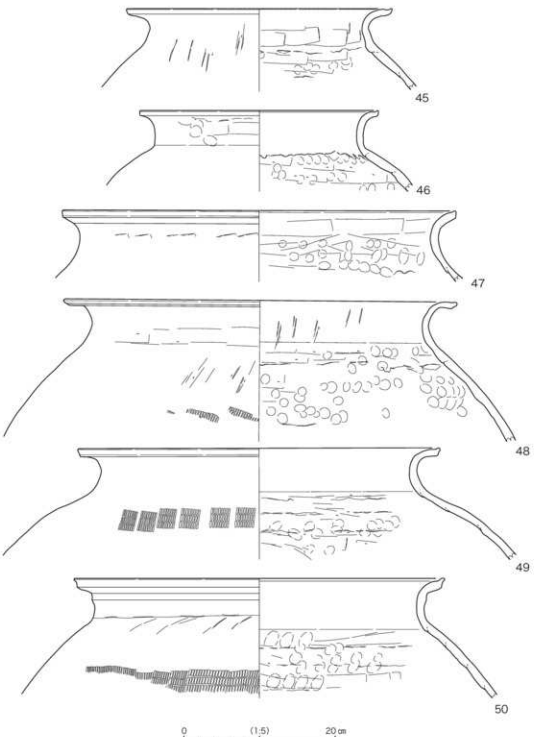


第37図　中世遺物実測図（6）—鍛6（1:5）

灰原一括-2(39～44)

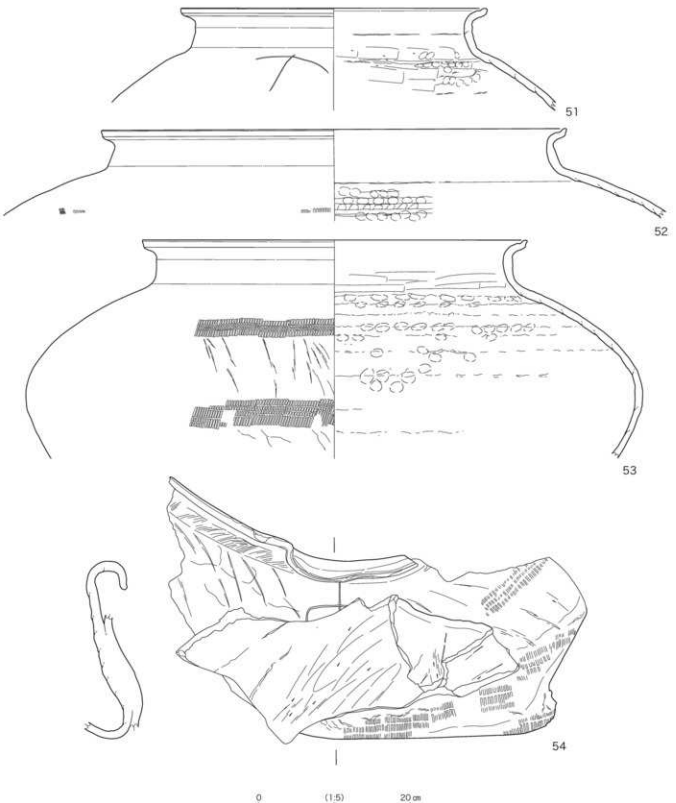


第38図　中世遺物実測図（7）—甕7（1:5）

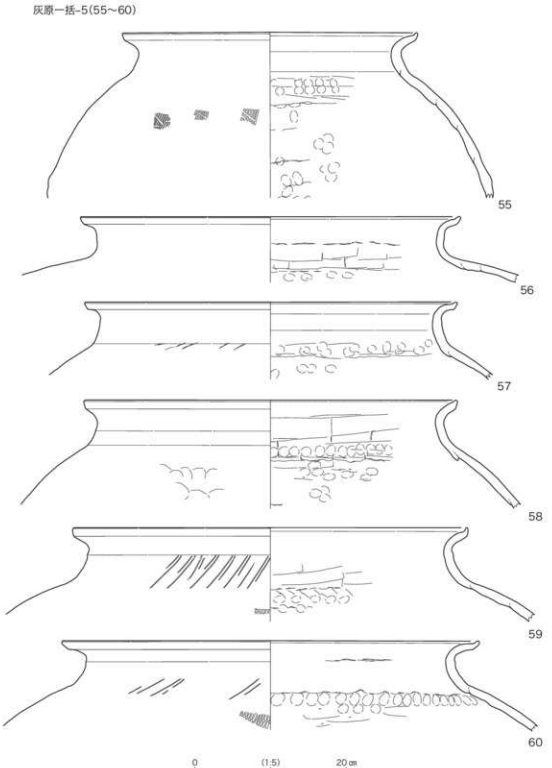


第39図　中世遺物実測図（8）—鍛冶8（1:5）

灰原一括-4(51～54)

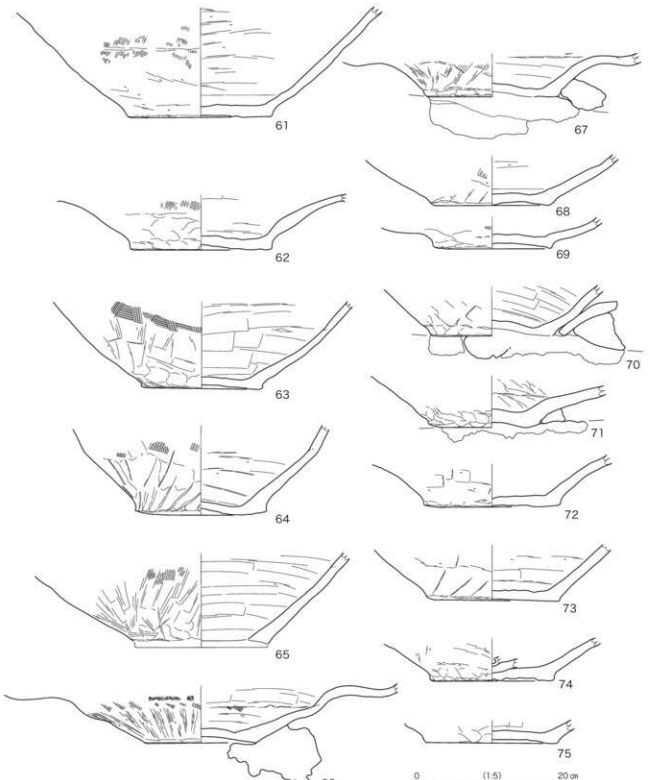


第40図　中世遺物実測図（9）—甕9（1:5）



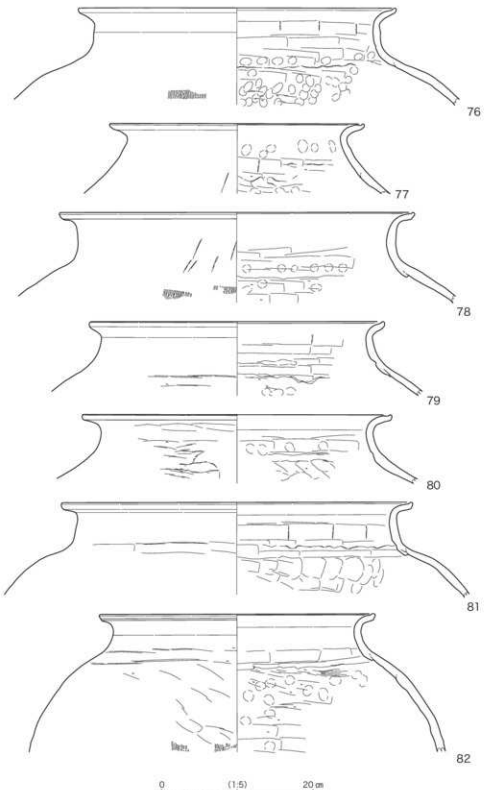
第41図　中世遺物実測図（10）—鍛10（1:5）

灰原一括-6(61～75)



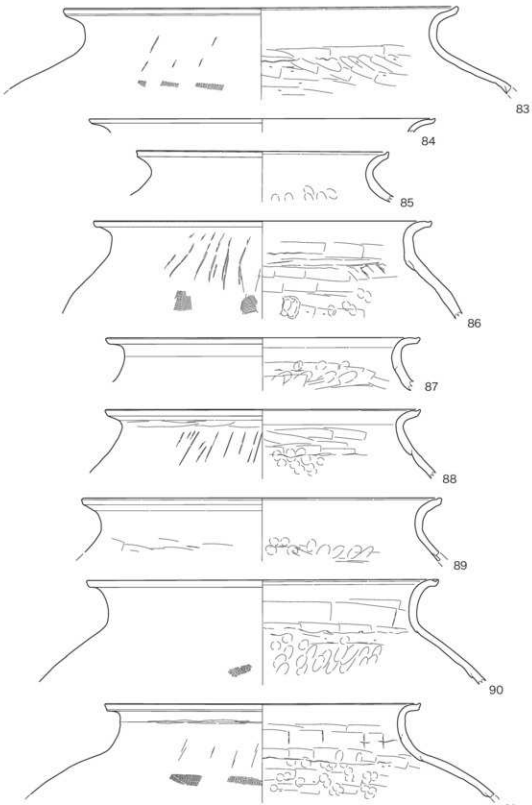
第42図　中世遺物実測図（11）—壁11（1:5）

検出-1（76～82）

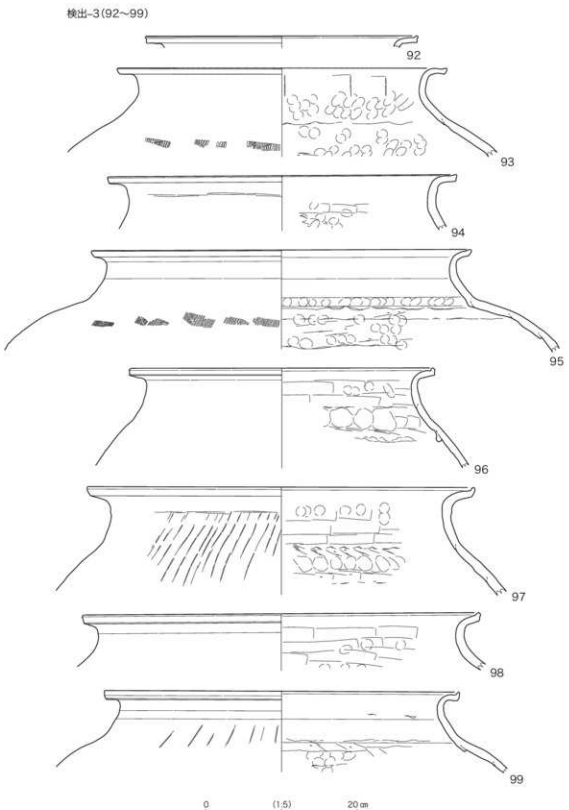


第43図　中世遺物実測図（12）—甕12（1:5）

検出-2(83～91)

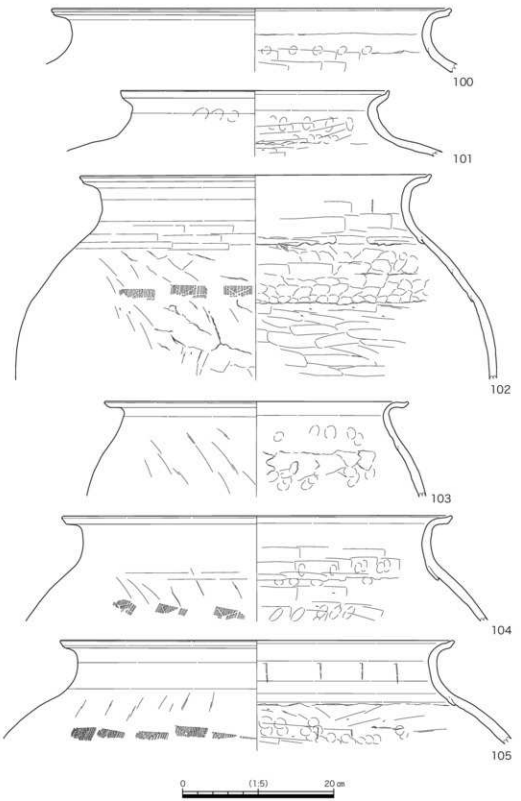


第44図　中世遺物実測図（13）—壁13（1:5）



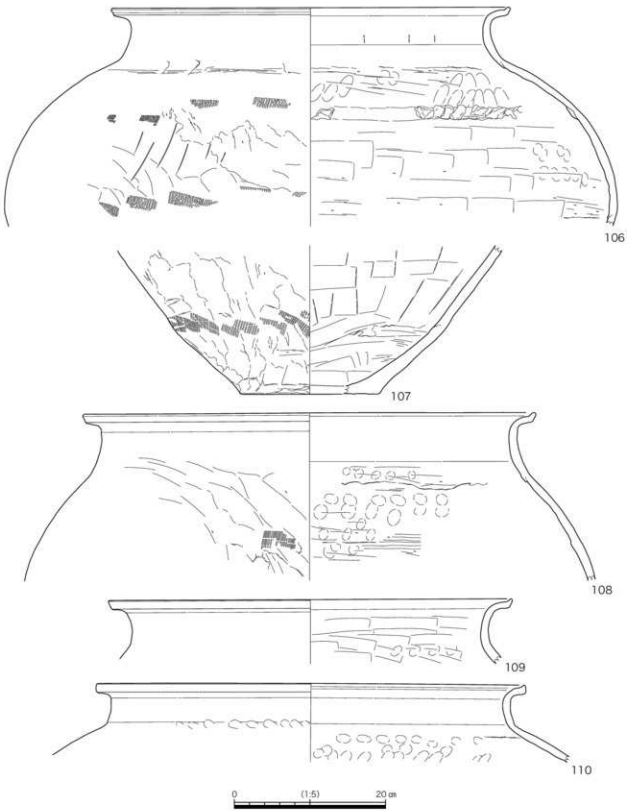
第45図　中世遺物実測図（14）—壁14（1:5）

検出-4(100～105)



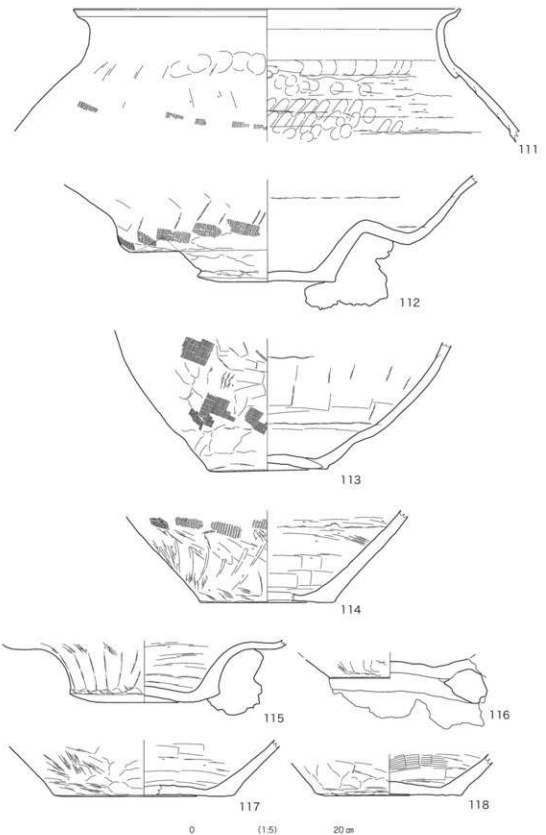
第46図　中世遺物実測図（15）—壁15（1:5）

検出-5(106~110)

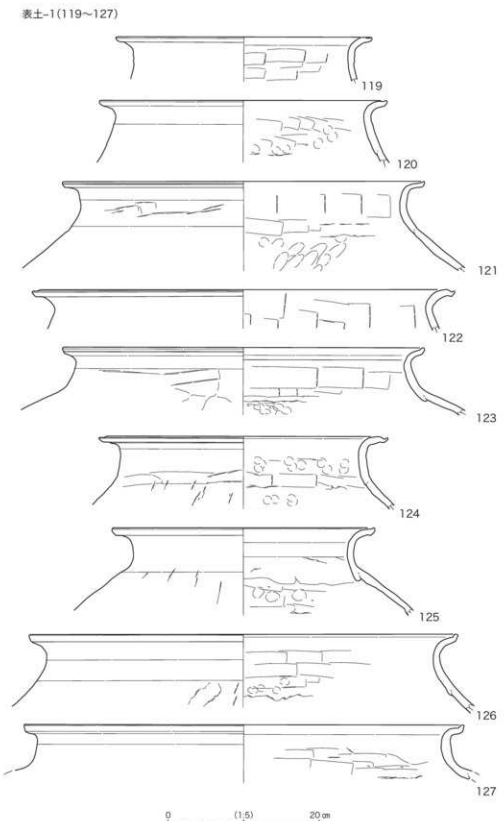


第47図　中世遺物実測図（16）—堤16（1:5）

検出-6(111～118)

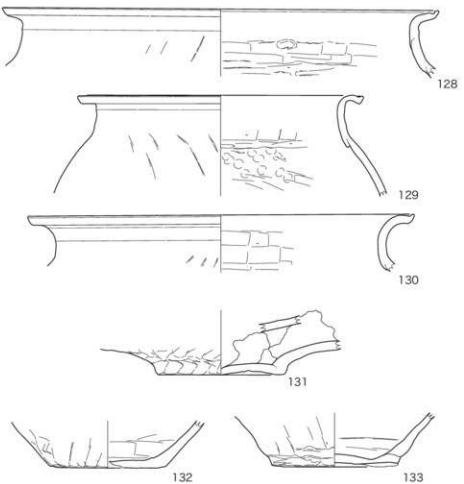


第48図　中世遺物実測図（17）—壁17（1:5）

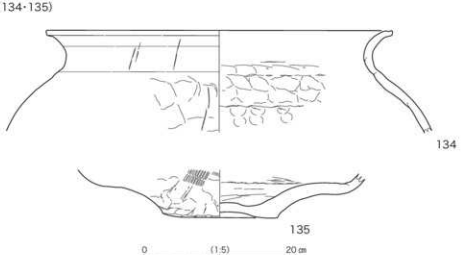


第49図　中世遺物実測図（18）—壁18（1:5）

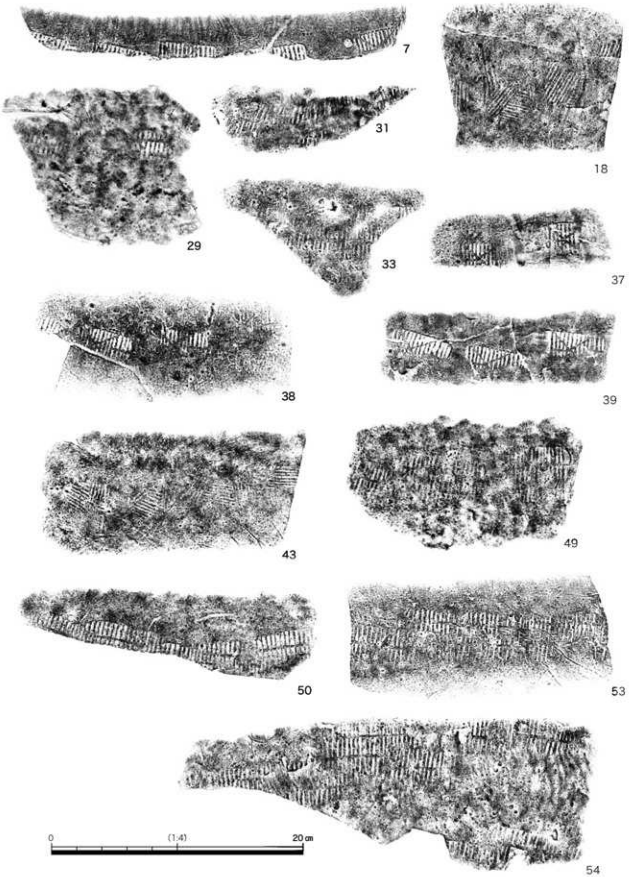
表土-2(128～133)



表採(134・135)



第50図　中世遺物実測図（19）—壕19（1:5）



第51図　壺押印文拓影（1）（1:3）

63

66

91

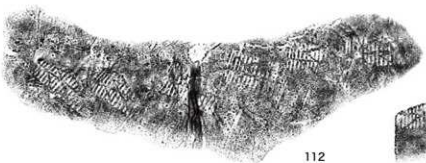
102

104

105

106

107

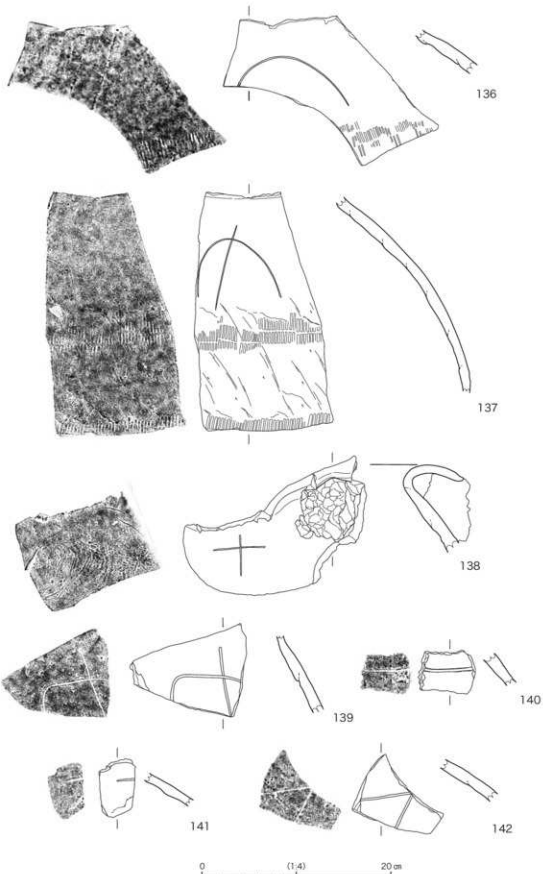

112

114

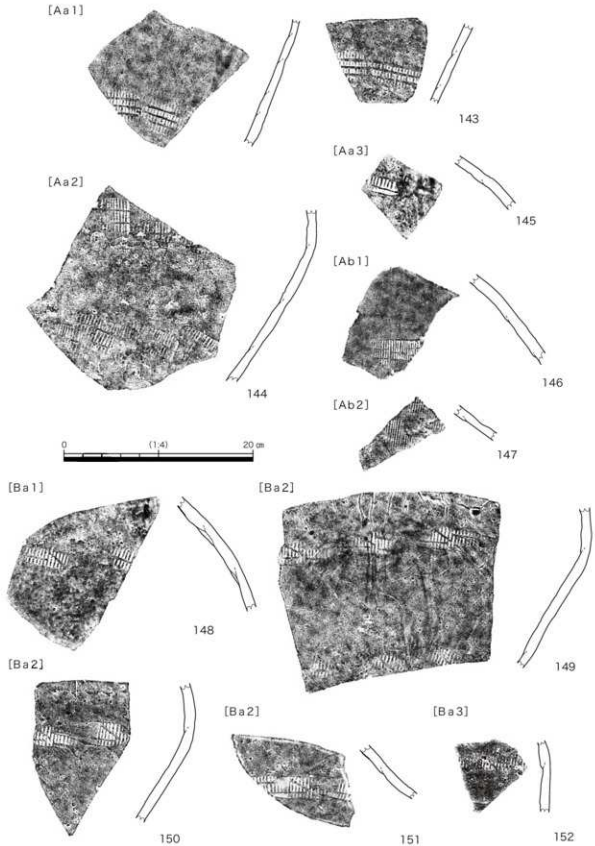
113

0 (1:4) 20cm

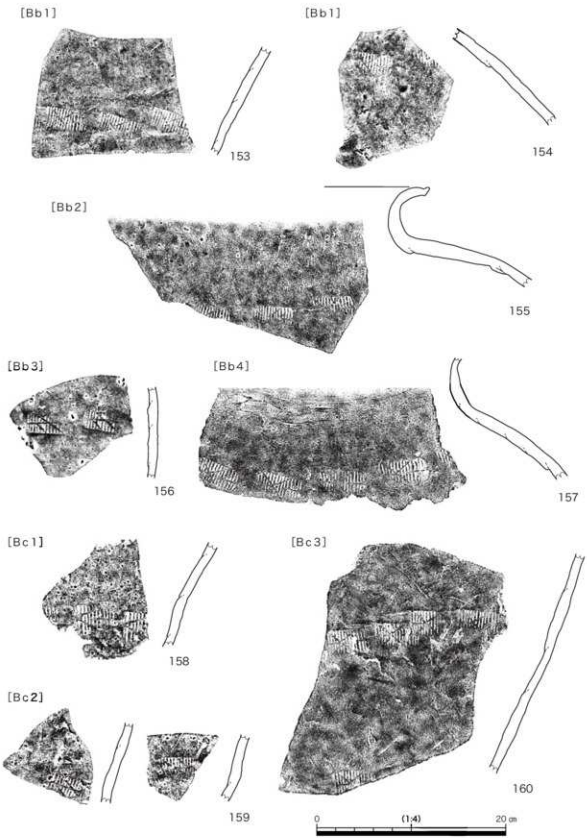
第52図　壺押印文拓影（2）（1:3）



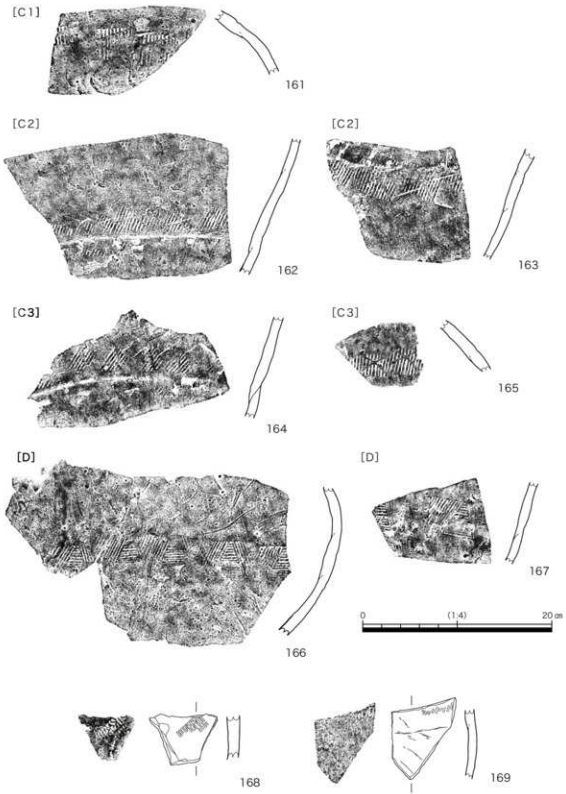
第53図　中世遺物実測図（20）—墨記号文（1:4）



第54図　中世遺物実測図（21）—擬押印文1（1:4）



第55図　中世遺物実測図（22）—壁押印文2（1:4）



第56図　中世遺物実測図（23）—掻押印文３（1:4）

広口壺（170～229／第57～62図・写真22）

概要

甕と相似形の器形で、体部に押印文帯をめぐらさないものを広口壺として分類した。口径を指標として甕と区分することが可能であるが、底径のみを指標として甕から区分することは困難である（第26図）。18個体（底部による個体識別）が出土し、60点、18個体を図示した。

法量　口径は16.4～30.0cmに分布し、平均値は22.6cmである（第26図上）。底径は10.9～16.0cmに分布し、平均値は13.9cmである（第26図下）。灰原下層出土の178はほぼ全形が判明する個体であるが、被熱による変形が著しい。参考に178の計測値を示すと口径20.6cm、底径15.3cm、最大径32.2cm、器高30.2cmである（底径の推定にはやや難がある）。

分類

型式変化

形態　甕と同様にして、口縁部形態、頸部形態をそれぞれA～C種、a～c種の3種に区分した（第28図上）。型式分類についても甕のそれをそのまま援用し、1～3類の3類に分類した（同下）。やはり、A種口縁部、a種頸部が古相、C種口縁部、c種頸部が新相、B種口縁部、b種頸部がその中間的な形状で、型式的にも1類、2類、3類の順序で変化する傾向にあると考えられる。また、口径、底径、器高に加えて最大径、頸部径、口縁部の高さ、頸部の厚さ、口縁端部（縁帯）の幅をそれぞれ計測した（第27図）。

計測方法

三筋壺系

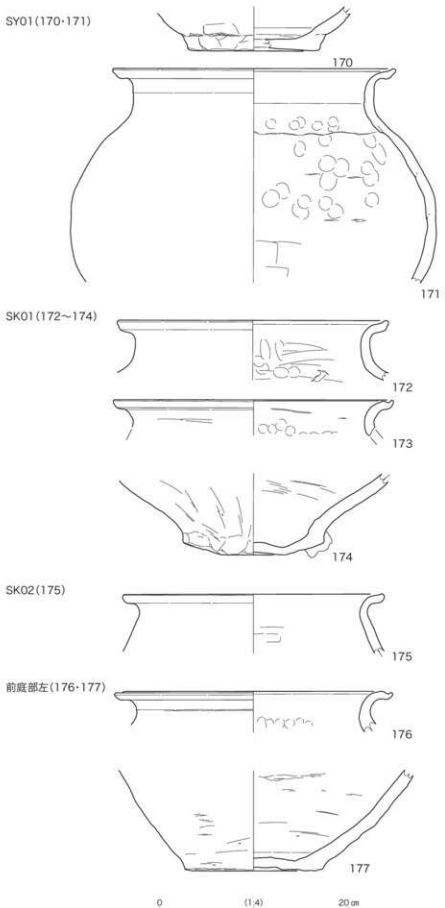
図示した資料は1類8点、2類12点、3類12点、底部20点であるが、口縁部が均一に薄く、「コ」字状に緩やかに屈曲する三筋壺（A種口縁部、後述）に近似した一群（188～193、211・212）が8点認められる。全形が判明する個体はないが、仮に三筋壺系として（3類から）区分した。なお、1類とした181、226に認められる頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁部先端を細く仕上げる特徴は、むしろ先行する段階（2型式）の広口壺にも類似する。灰原中には2型式の広口壺に類似する181（1類）と、直立気味の頸部から口縁部が外反し、先端がわずかに上方に立ち上がる182（2類）、強いヨコナデによって頸部に稜を生じ、縁帯（縁帯幅1.1cm）を形成する180（3類）がそれぞれ共存することからも、出土状況と型式の対応関係に有意な傾向を指摘することは難しい。ただし、結果として灰原に対して灰原上位の堆積層に2・3類が多い傾向は認められた。

出土状況との関係

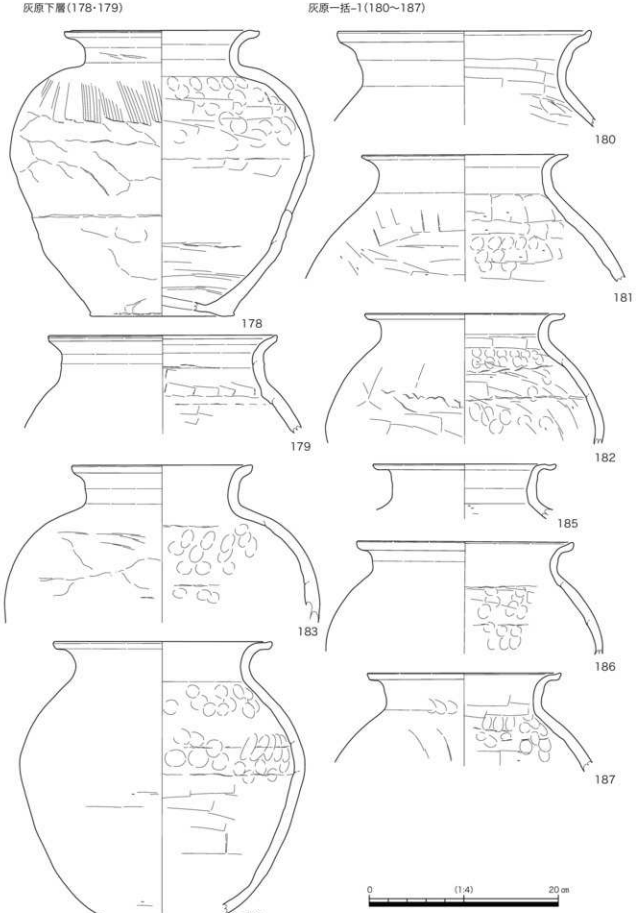
焼成　甕と同様に広口壺は、窯内において高火度で硬質に焼成された結果、暗赤褐色に発色し、胎土中の長石や鉄分が器表面に溶出したものが多い。ただし、三筋壺にしばしば認められるような黒褐色の色調に発色する個体も一定量存在する（183、194、201、206、224、225）。三筋壺系として分類した8点については、灰色や黒褐色に発色する個体が多く（188～191、212が灰色、192、211が黒褐色）、暗赤褐色に発色する個体は少ない（210）。この傾向は三筋壺と広口壺との関連を示すと同時に、分類の曖昧さをも示す。その一方で、「赤物」に近い橙色に発色する個体は認められない。

窯詰め方法

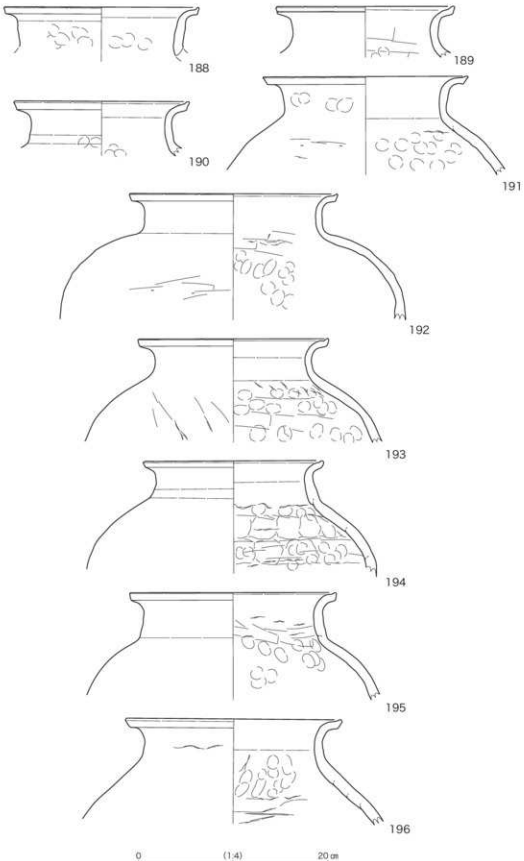
底部資料には、床が直接に付着する個体が認められる一方で、焼台が付着する個体は少ないことから、窯詰めに際しては、直立させる場合が多かったと推測できる。焼台が付着する202（底径13.7cm）についても、充填される粘土はごく少量であることに加えて、1塊による支持である点において、甕の窯詰め方法とは異なる。202は床面傾斜のわずかな調整を意図して窯詰めされたものであろう。



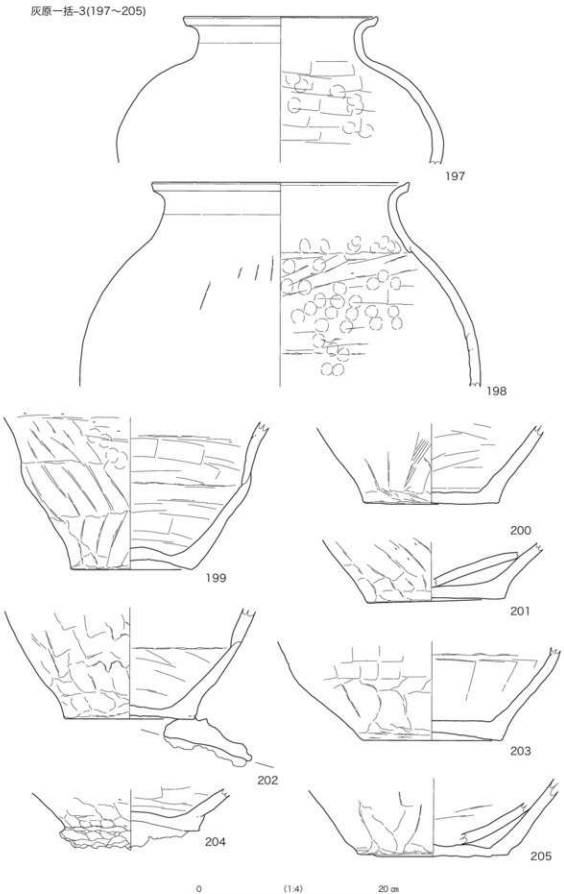
第57図　中世遺物実測図（24）—広口壺1（1:4）



第58図　中世遺物実測図（25）—広口壷2（1:4）

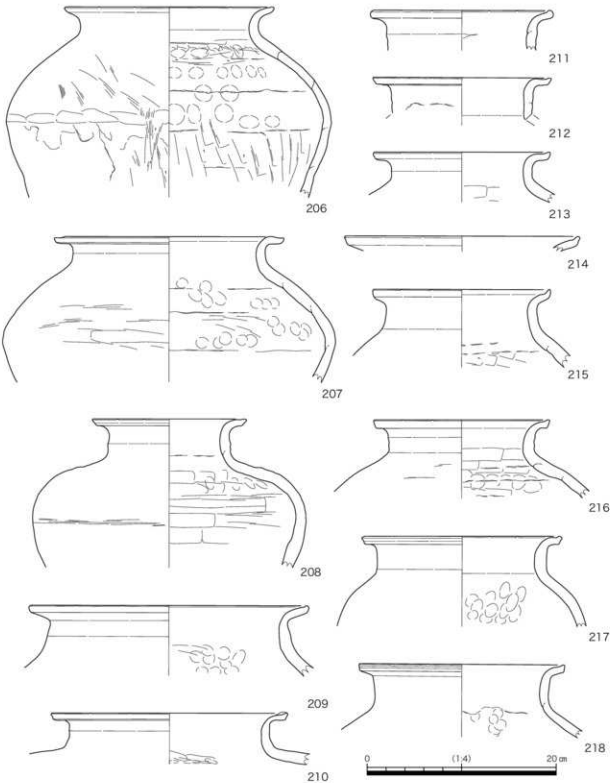


第59図　中世遺物実測図（26）—広口壺3（1:4）



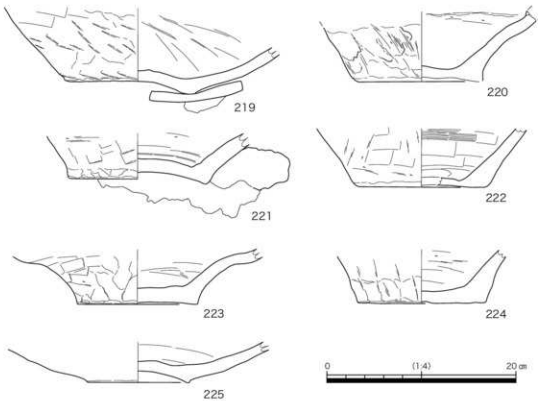
第60図　中世遺物実測図（27）—広口壺4（1:4）

検出-1(206～218)

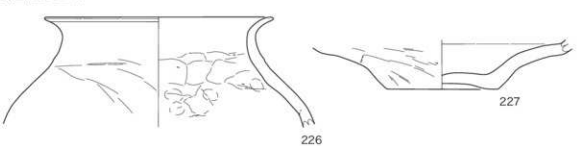


第61図　中世遺物実測図（28）—広口壺5（1:4）

検出-2(219～225)



表土(226・227)



試掘(229)

表採(228)

第62図　中世遺物実測図（29）—広口壷6（1:4）

小型壷（230～243／第64図）

概要　三筋壷、広口壷など他の壷形式との弁別に苦慮するものの、およそ広口壷と三筋壷の中間的な形状、大きさ(口径14.1～20.0cm)を示すものを便宜的に小型壷として一括した(第26図上)。実際は異なる複数の器種を包摂しているものと思われる。全形が判明する個体はないが、広口壷とは異なり、著しく体部上半（肩部）の張りを欠き、また三筋壷とは異なり、口径が大きく、筋線がないことを特徴とする個体を特に抽出した。1個体（底部による個体識別）が出土し、14点、1個体を図示した。

法量　口径は14.4～19.5cmに分布し、平均値は16.2cmである（第26図上）。底径は9.9～10.2cmに分布し、平均値は10.1cmである（同下）。また、甕・広口壷と同様に、口径、底径、器高に加えて最大径、頸部径、口縁部の高さ、頸部の厚さ、口縁端部の幅をそれぞれ計測した（第27図）。

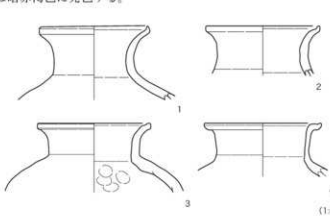
分類　小型壷として分類した一群は、その形態から、三筋壷、広口壷、あるいは広口長頸瓶、有耳壷などにそれぞれ近似する一群におよそ分けられるであろうが、有意な分類を設定することは不可能である。232は口縁部から体部が緩やかな曲線によって構成されるもので、広口長頸瓶との類似を思わせるが、それと比較して頸部から上位は著しく萎縮した形状となる。三筋壷として分類した246にも類似するが、232に筋線は施されない。本窯跡において広口長頸瓶の出土は確認されていないので、それの退化した型式である可能性を想定しておきたい。

ハンヤ古窯跡　233は筒状の頸部、厚い器壁を特徴とする個体で、やはり広口長頸瓶との関連も想起されるが、変形によって著しく原形を損なっている可能性もある。239も同様に厚い器壁を特徴とする個体で、3型式の大府市ハンヤ古窯跡から出土した壷（第63図1）に類似した個体として理解したい。237についても、ハンヤ古窯跡（同2）に類似する個体が認められる。240など頸部が直立するものは、三筋壷、あるいは三筋壷系とした広口壷の一群に類似し、3型式の知多市西浦馬古窯群SY06灰原（同3）、2～4型式の常滑市松渕11号窯（同4）などに類例がある。

西浦馬古窯群

松渕11号窯

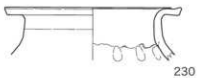
窯詰め方法　**焼成**　底部資料（231・241）には、床が直接付着することから、窯内の床面には直接に設置されることが多かったと推測される。多くは甕・広口壷と同様に高火度で焼成され、器表面は暗赤褐色に発色する。



1・2　ハンヤ古窯跡
3　西浦馬古窯群
4　松渕11号窯

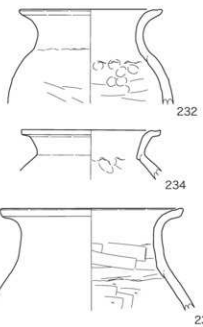
第63図　小型壷の類例

SK01(230)

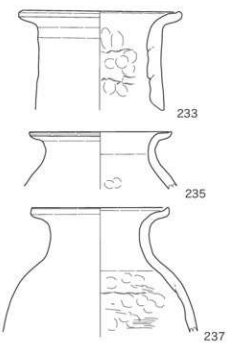


前庭部左(231)

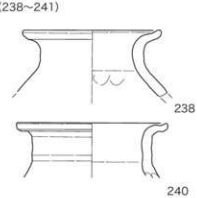
灰原下層(232)

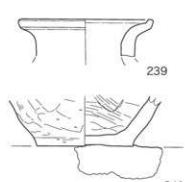


灰原一括(233~237)

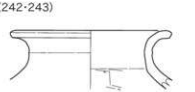


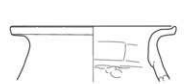
検出(238~241)





表土(242·243)





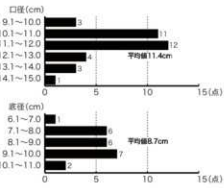
第64図　中世遺物実測図（30）—小型壷（1:4）

三筋壷（244～299／第69～71図・写真23）

概要

体部に筋線をめぐらす細身の壷を三筋壷とした。接合前破片数として350点、重量39.7kg、底部による個体識別として10個体が出土した。図示した個体は56点、10個体で、全形を知りうる個体が10個体前後ある。

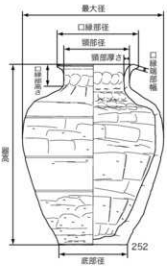
法量　口径は9.6～14.6cmに分布し、平均値は11.4cmであるが、多くは10～12cmである（第65図上）。246は口径が14.6cm、頸部径が11.8cmと大きく、器形が広口壷（小型壷）に類似するものの、筋線を施すことから、三筋壷として分類した。器高は23～25cm程度で、平均値は24.2cmである。底径は6.6～10.6cmに分布し、平均値は8.7cmであるが、多くは7～10cmである（第65図下）。



第65図　三筋壷の口径・底径度数分布

単線三筋文

三筋文　261が二筋である以外、いずれも三筋で、三筋文はすいずれも単線である。体部最大径の位置から上位に筋線を施す個体はほとんど認められず、体部がやや太身の247、252のみ、体部最大径の位置のやや上位に筋線が施される。沈線幅は2～3mmで、総じて太い。三筋文の配置は規則性に乏しく、262など、底部近くに筋線を施す個体や281のように体部下半に筋線が集約される個体までもが認められる。



第66図　三筋壷の計測部位

口縁端部の刻み

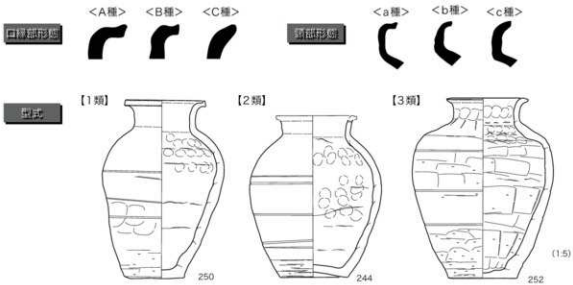
その他、装飾を意図したものとして、口縁端部下端に刻みを加えた特異な個体（312）がある。

分類

形態　個体の変異が一様に大きく、有意な分類は困難であるものの、口縁部形態、頸部形態をそれぞれA～C種、a～c種の3種、型式を1～3類の3類に区分した（第67図）。また、口径、底径、器高に加えて最大径、頸部径、口縁部の高さ、頸部の厚さ、口縁端部の幅をそれぞれ計測した（第66図）。

計測方法

口縁部　A種　緩やかに外反し、先端を上方に引き出すもの
　　B種　先端付近が緩やかに屈曲するもの
　　C種　先端が単純な形状なもの
頸部　a種　「コ」字状に屈曲気味に外反するもの
　　b種　緩やかに外反するもの
　　c種　直立気味に立ち上がり、先端付近がわずかに外折するもの
1類　肩が張らず、体部が細みとなるもの
2類　肩が張らず、体部が寸胴に近いもの
3類　肩が張り、底部が小さいもの



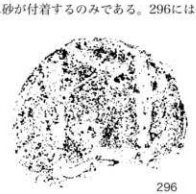
第67図　三筋壷の分類

口縁部形態、頸部形態の変異と型式はそれぞれ一定に相関し、口縁部形態はA種、B種、C種、頸部形態はa種、b種、c種、型式は1類、2類、3類の順序で変化する傾向にあることが予測できる。しかし、出土状況と変化の傾向は、有意な対応関係を示さない。　**変化の傾向**

252は体部上位が大きく張る独特な形態で、口縁部先端を水平に引き出す。内外面の調整が粗雑で、焼成も十分でない。3類とした型式、C種とした口縁部形態、c種とした頸部形態の諸点からも、三筋壷の退化型式を示す個体として把握されるであろう。　**退化型式**

技法　成形は薄い円盤状の底部に体部を積み上げるものが多いが、299は体部の積み上げ後、さらに底部内面に円盤を充填している。底部から大きく外反する器形であること、筋線を施さないことから、広口長頸瓶など、三筋壷以外の器種である可能性も考慮したい。

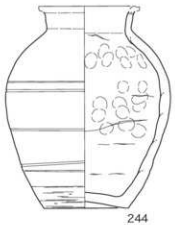
296は底部外面にいわゆる「下駄痕」、「下駄印」などと称される「二」字状の圧痕が認められる（第68図）。この圧痕は、轆轤の心棒を円筒状に包む軸受と轆轤盤とを結合させるためのホゾの痕跡とされ、常滑に加えて越前、信楽、丹波などの製品にも認められるが、14〜15世紀の製品に多いとされている。296の底径は9.2cmで、下駄痕は長さ6.0cm、幅0.7cm、二条の内法4.0cm、外法5.4cmである。なお、通有の底部外面には離れ砂が付着するのみである。296には体部下位にカキメ状の条線も残されている。　**「下駄痕」**



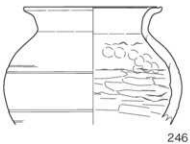
第68図　下駄痕拓影（1:2）

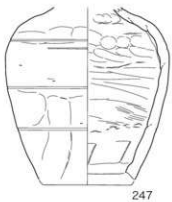
焼成　色調は黒褐色のもの、山茶碗に近似する灰白色のものが多い。これに加えて、甕・広口壷に類似した暗赤褐色のもの、焼成が十分でない灰色のものなどがある。299は三筋壷ではない可能性もあるが、床と焼台（充填材）が軸着した底部資料で、陶器片を加えた粘土塊が床と体部下位との隙間に充填される。他の底部資料からも、三筋壷は原則として床面に直接に設置され、体部下位の側面が支持されたと推測される。　**窯詰め方法**

SY01(244)

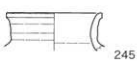


灰原下層(246・247)

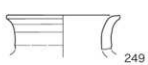




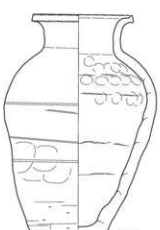
前庭部(245)

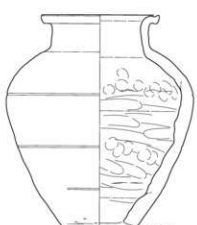


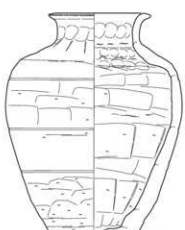
灰原上層(248・249)

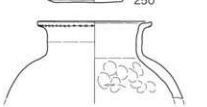


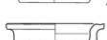
灰原一括-1(250～260)

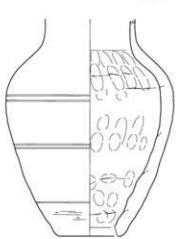


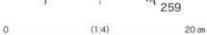






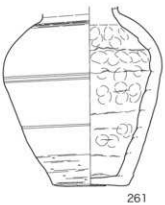


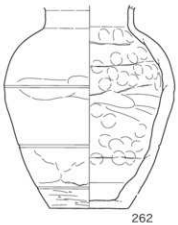


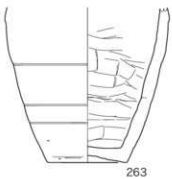


第69図　中世遺物実測図（31）—三筋畦1（1:4）

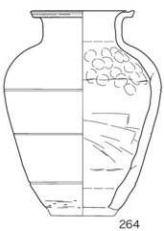
灰原一括-2(261～263)

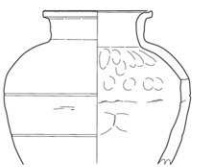

261

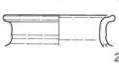

262

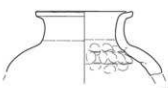

263

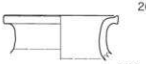
検出-1(264～280)

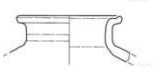

264

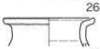

265

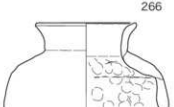

266

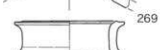

267


268


269


270

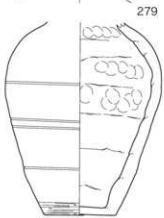

275


279

271

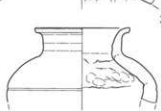
272

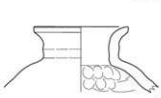
276


280

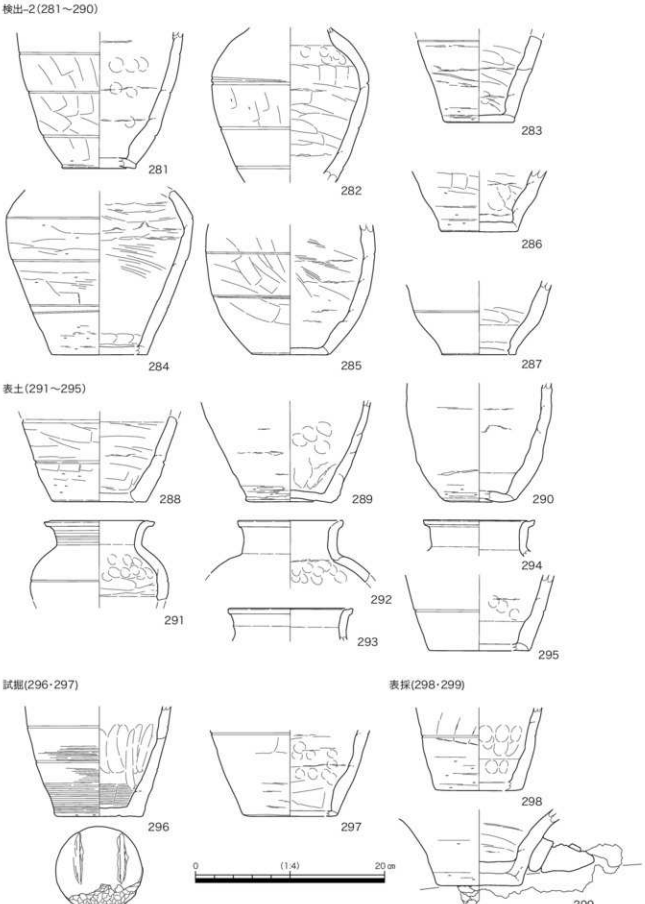
273

277


274


278

第70図　中世遺物実測図（32）—三筋壷2（1:4）



第71図　中世遺物実測図（33）—三筋壷3（1:4）

片口鉢（300～378／第77～84・写真24～26）

山茶碗と製作系譜を同じくし、同胎土で製作された器種で、「片口鉢Ⅰ類」とも呼称される。製作系譜が甕（広口壺）に求められる高台を付さないいわゆる「片口鉢Ⅱ類」(431) もごく例外的に出土しているが、その他の器種として扱うこととした。また、片口鉢とはやや器形が異なる鉢状の器種（427～429）についても、同様にその他の器種として扱う。なお、本報告においては、特に断らない限り、片口鉢とする呼称は「片口鉢Ⅰ類」を示すこととする。

片口鉢Ⅰ類
片口鉢Ⅱ類

接合前破片数として4,404点、重量483.9kg、49個体（底部による個体識別）が出土し、全形を知りうる個体を中心に79点を図示した。口径は17.4～42.0cm、器高は6.4～15.5cm、高台径は9.8～22.8cmに分布する（第72図）。

概要

形態　型式を1～4類の4類に大別し、口縁部の形態をA・B種の2種、高台の形態をa～c種の3種にそれぞれ区分した（第74図）。また、口径、底径、器高に加えて高台基部幅、口縁端部付近と高台付近の体部の厚さ、回転ヘラケズリが施される部分の高さをそれぞれ計測した（第73図）。

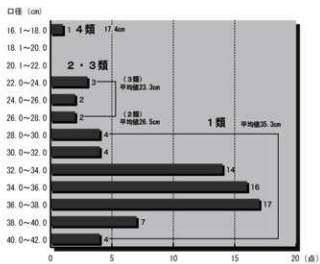
分類
計測方法

1類　通有の法量のもの　口径28cm～
口径 28.2～42.0cm（平均 35.3cm）・高台径 12.4～22.8cm（平均 17.2cm）
器高 10.1～15.5cm（平均 12.7cm）・径高指数 24.04～46.01（平均 36.05）

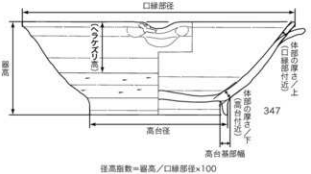
2類　小法量で碗状のもの　口径～28cm／径高指数～40
口径 25.2～27.6cm（平均 26.5cm）・高台径 13.4～15.1cm（平均 14.1cm）
器高 9.0～9.8cm（平均 9.4cm）・径高指数 32.61～37.70（平均 35.45）

3類　小法量で深碗状のもの　口径～28cm／径高指数40～
口径 23.2～23.6cm（平均 23.3cm）・高台径 11.5～14.0cm（平均 12.5cm）
器高 10.1～13.4cm（平均 10.8cm）・径高指数 43.22～52.16（平均 46.30）

4類　極小法量で碗状のもの
口径 17.4cm・高台径 9.8cm・器高 6.4cm／径高指数 36.78

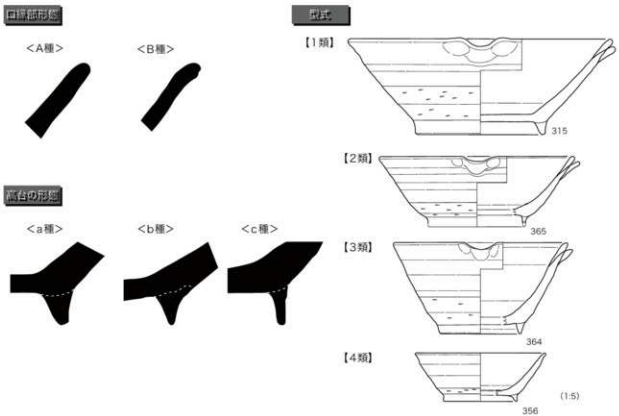


第72図　片口鉢の口径度数分布

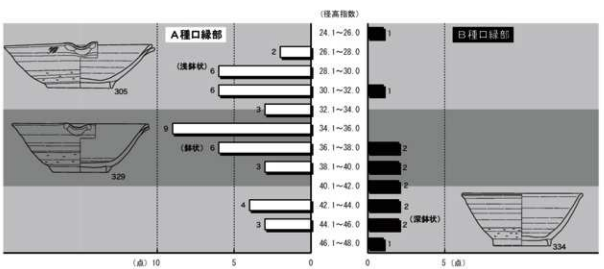


第73図　片口鉢の計測部位

口縁部　A種　先端に丸みをもつもの
　　B種　先端が角形で、凹線がめぐるもの
高台　a種　全体に重厚なもの
　　b種　断面三角形状のもの
　　c種　細身で高い形状のもの



第74図　片口鉢の分類



第75図　片口鉢（1類）の分類と径高指数の相関

型式については、1類が圧倒的多数で、2・3類は少なく、4類は例外的に存在するのみである。1類を70点、2類を4点、3類を4点、4類を1点図化した。

1類の細分

1類はさらに径高指数の分布から、浅い鉢状の器形（指数＝24～33）、一般的な鉢状の器形（指数＝33～41）、深い鉢状の器形（指数＝指数41～47）に区分されるようにも思われるが、傾向として区分されるもので、製品の規格化を示唆するものではない。ただし、相対として、B種口縁部のほとんどが径高指数36以上を示す、つまり深い器形に相関する一方で（第68図）、新古の傾向を示す高台の形態に口縁部形態が相関する傾向は認められないことから、細分された型式の違いが緩やかな製作系統の差を反映していた可能性を指摘したい。

緩やかな製作系統

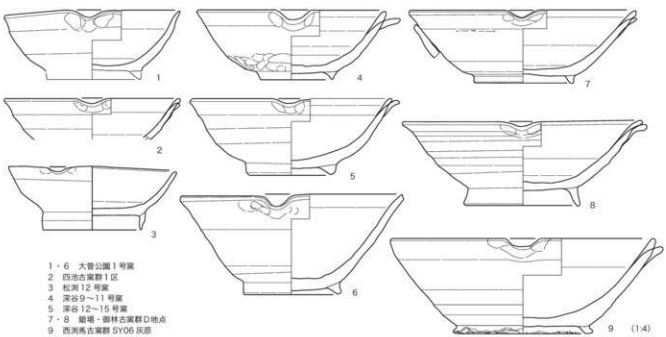
小型片口鉢

小型品としての2・3類、さらに極小型品としての4類は、口径、指数の分布域を異にすることから、製品として明確に作り分けられていた可能性が高い。2・3類にA種口縁部のみが認められ、B種口縁部が認められないことも、これらの小型品が規格化されていた可能性を示唆するものであろう。規格上、通有の片口鉢と区分される小型片口鉢は、蛇廻間古窯（2型式）、常滑市大曽公園1号窯（2型式）、同四池古窯群1区（2型式）、半田市深谷古窯群（2・3型式）、知多市西洲馬古窯群（3型式）などにおいても認められる（第76図）。西洲馬古窯群SY06灰原の小型片口鉢（同9）は口径28.0cm、器高10.1cm、高台径14.8cm、径高指数36.07、大曽公園1号窯の小型片口鉢（同6）は口径23.6cm、器高10.6cm、高台径10.3cm、径高指数44.92で、それぞれ本報告における2、3類に相当する。

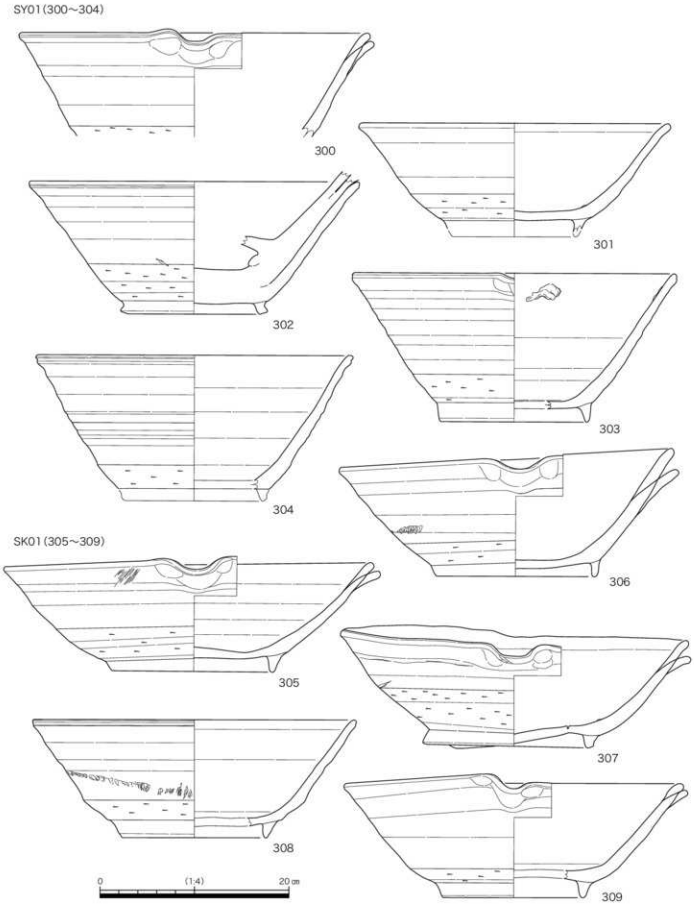
西洲馬古窯群

大曽公園1号窯

4類として図示した356は、本窯跡において出土する平均的な山茶碗の器形に相似し、山茶碗を約1.2倍に拡大した規格である。また、通有の片口鉢を縮小した製品とすることも可能で、1類に対して、約0.5倍の規格である。片口は遺存しないが、体部下位にはヘ

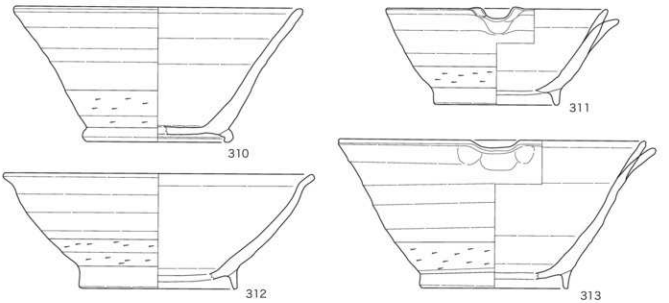


第76図 小型片口鉢の類例

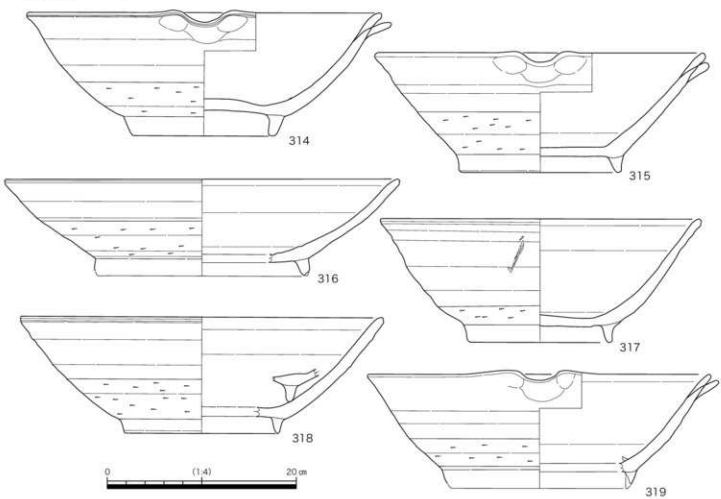


第77図　中世遺物実測図（34）—片口鉢1（1:4）

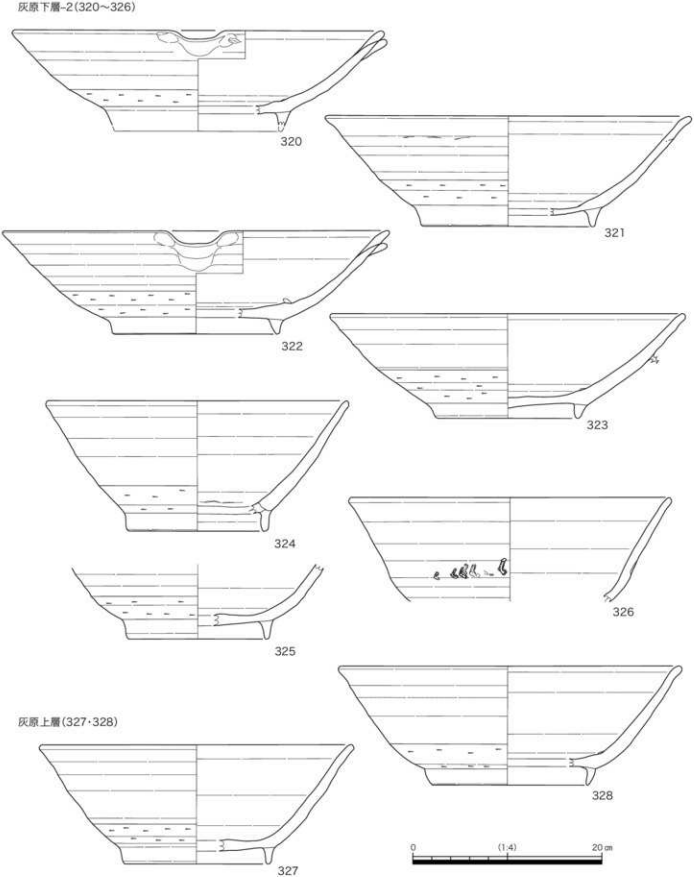
前庭部右(310～313)



灰原下層(314～319)

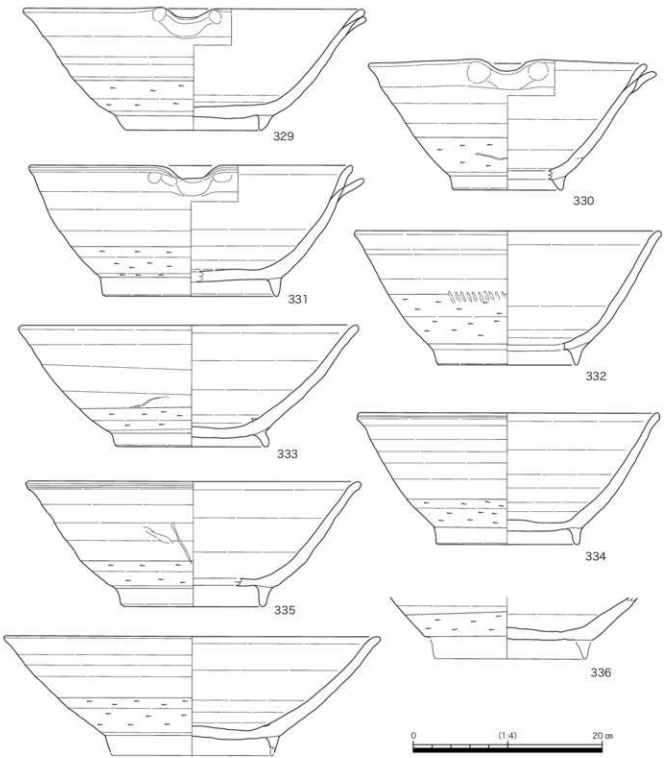


第78図　中世遺物実測図（35）—片口鉢2（1:4）

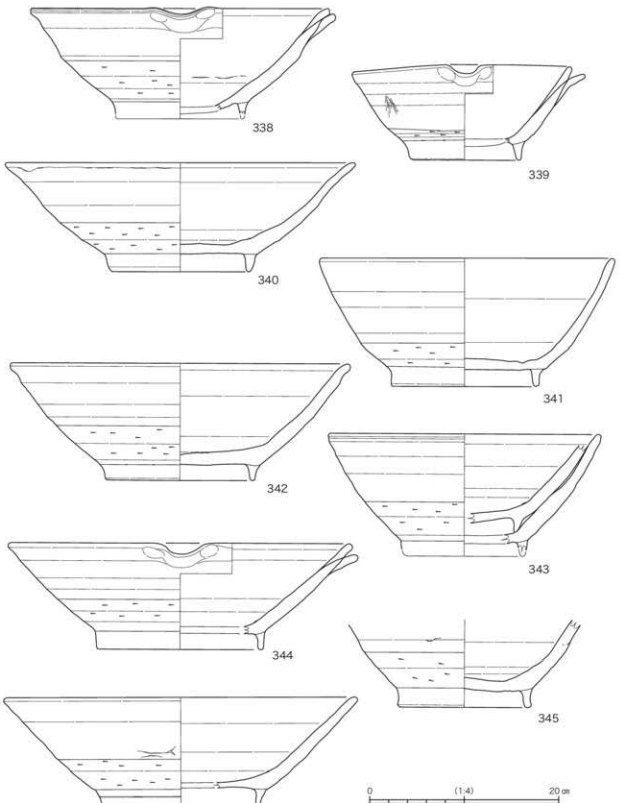


第79図　中世遺物実測図（36）—片口鉢3（1:4）

灰原一括-1（329～337）

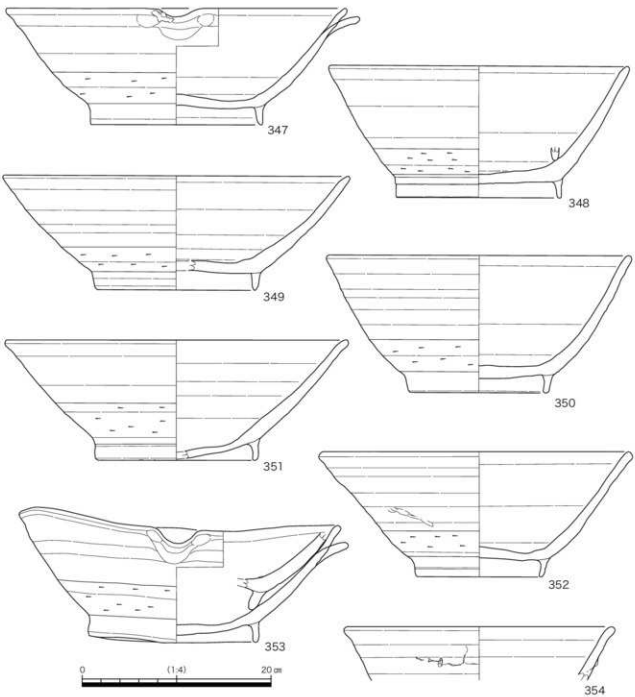


第80図　中世遺物実測図（37）—片口鉢4（1:4）

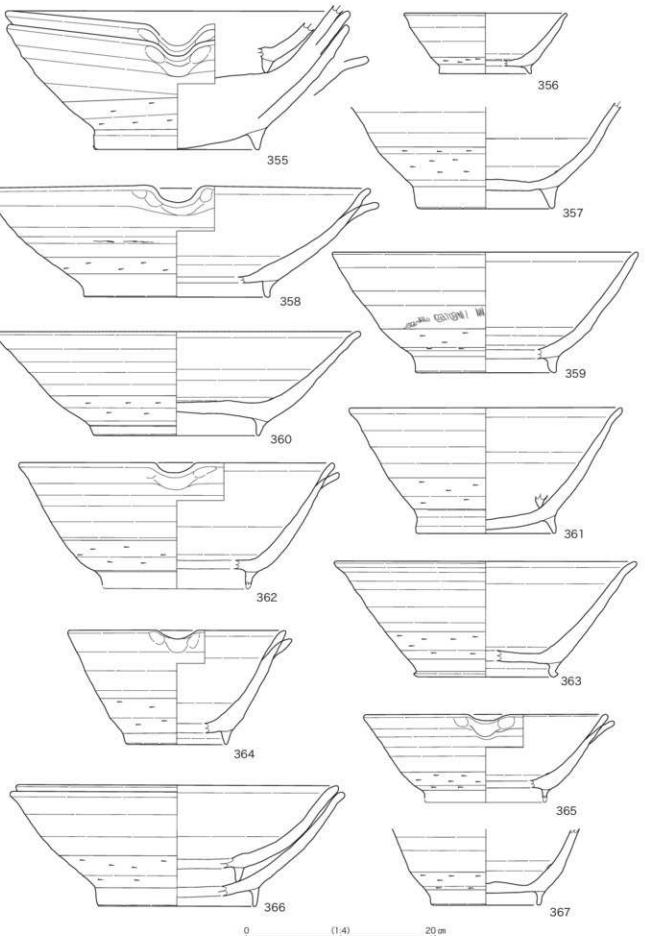


第81図　中世遺物実測図（38）—片口鉢5（1:4）

灰原一括-3(347～354)

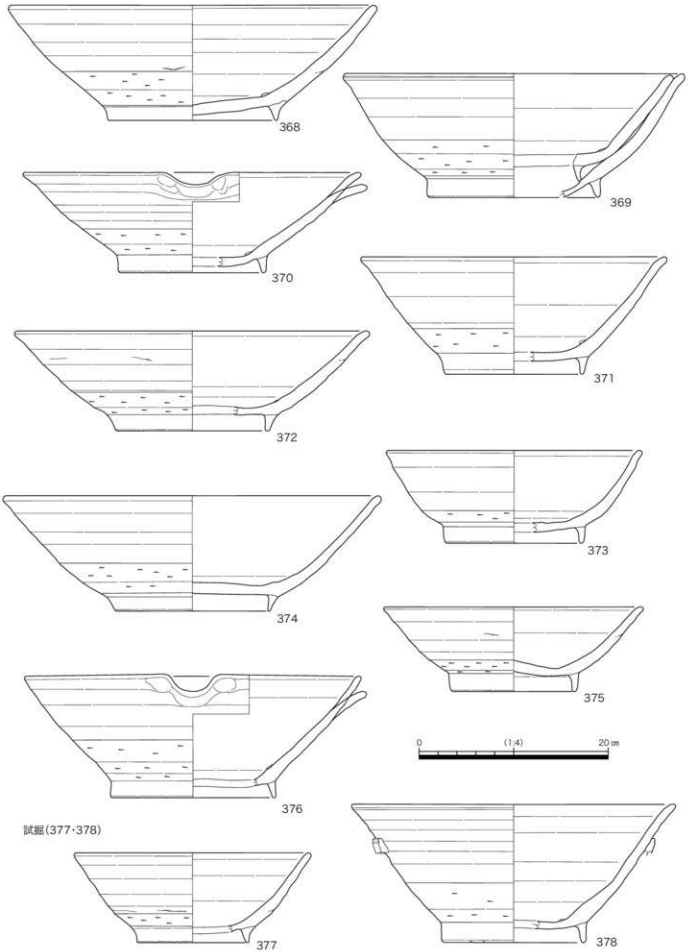


第82図　中世遺物実測図（39）—片口鉢6（1:4）



第83図　中世遺物実測図（40）—片口鉢7（1:4）

表土(368~376)



第84図　中世遺物実測図（41）—片口鉢8（1:4）

ラケズリを施し、底部外面は砂が付着したままで山茶碗に通有の回転糸切痕は認められない。これらは明らかに片口鉢に共通する特徴である。また、降灰の状態からは、焼成時にはさらに製品が重ねられていたことが判明する。

大曽公園１号窯
四池古窯群１区

４類と同様の片口鉢の例は、やはり大曽公園１号窯において１点認められ（第76図１）、常滑市四池古窯群１区（２型式）においても、類例の可能性が指摘される個体が報告されている（同２、片口山茶碗として報告）。大曽公園１号窯の例は、高台が剥離するも、片口が確認できる製品である。法量は、口径18.0cm、底径9.8cm、残存する器高6.1cm（推定器高7.0cm）で、夏敷古窯の例（356）とほぼ同一の規格である。

「飛鉋」状の痕跡

技法　332は、ヘラケズリを施す範囲の上端付近に「飛鉋」状の痕跡が残る。意図的な技法ではなく、調整時に工具の接する角度が大きくなったことで生じた痕跡と思われる。

紐・熊手状圧痕

体部には成形後に製品を持ち上げる際の工具痕跡が残ることが多い。多くは紐の圧痕（306、308、359など）で、まれに熊手状工具を器面に接触させたような痕跡が残るもの（326）がある。

積み上げ痕跡

片口鉢には354など、粘土紐を積み上げた痕跡が外面にしばしば残される。また、303の口縁部内面付近には粘土を付加して器面の割裂を補修した痕跡が残る。

補修痕跡

焼成　片口鉢は高火度によって焼成され、胎土中の長石や鉄分が器表面に溶出する個体が多いが、やや軟質に焼成された個体もある。色調は一様に灰～灰白色を呈するが、SY01床面付近から出土した300のみ甕（広口壺）に近似した褐色系の色調である。常滑市茨廻間古窯群B地点（２型式）から出土した片口鉢は、過半数が褐色系で、その特異性が注意されている。色調変化には窯内における製品の位置が影響を与えたことが想定されているが、300は窯内の上位（１区）において出土している。

褐色系の色調

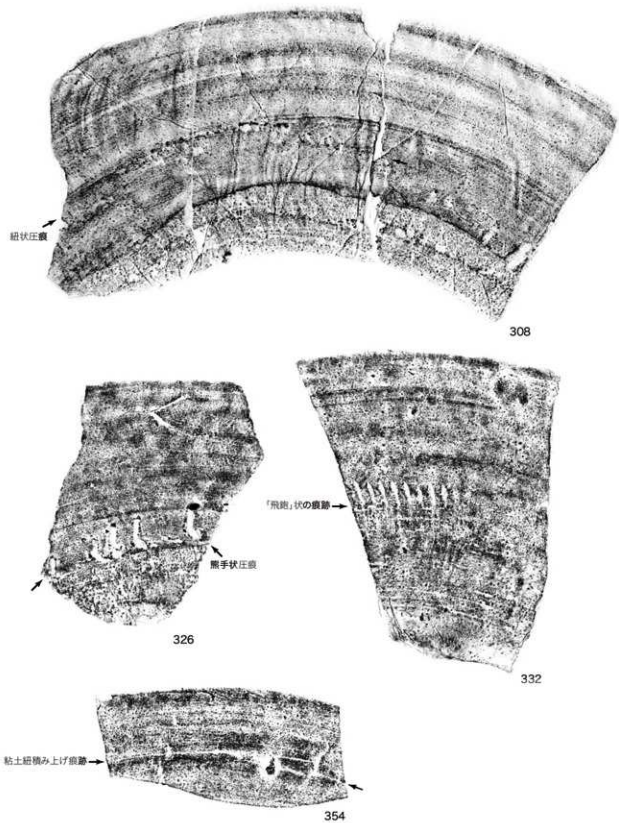
重ね焼き

片口鉢は原則として重ね焼きの痕跡を残すが、２類とした小法量で碗状のもの１点（377）、３類とした小法量で深碗状のもの２点（311・364）は、最上段に重ねられ、内面全面に自然釉が付着した個体である。つまり、片口鉢の窯詰めに際しては、通有の大きさの片口鉢を重ねた上に小型の片口鉢を重ねたことが容易に推測される。先に例示した西洞馬古窯群の小型片口鉢（第76図９）も内面全面に自然釉が付着することから、同様の窯詰め方法はごく普遍的に行われていたと考えられる。また、２類と３類には重ね焼きの痕跡がある個体と重ね焼きの痕跡がない個体が、ほぼ同数確認できることから、小法量の片口鉢は通有の片口鉢の上に２～３個体が重ねられていたと推測されることも付言しておきたい。なお、常滑市鎗場・御林Ｆ２号窯（６ａ型式）は焼成中の天井落下により廃棄された窯で、片口鉢の窯詰め状態を知ることができる興味深い窯跡で、それによると、通有の大きさの片口鉢９個体の上に小型の片口鉢３個体が重ねられていたという。

窯詰め方法
西洞馬古窯群
鎗場・御林Ｆ２号窯

釉着資料

本窯跡においては焼成時に重ねられた片口鉢の個体数を知る材料はないが、４個体が釉着した資料（355）、３個体（302）が釉着した資料などが確認できる。いずれもほぼ同形同大の片口鉢を重ねたものであるが、353、366など釉着した個体間で型式変化の指標とされる高台の形態が異なっていることは、製作者と型式の対応関係を理解する際に注意すべき事実であると思われる。また、片口鉢を焼成した焼台（焼台Ｂ、後述）によって、焼成方法の一端を知ることができるが、それについては項を改めて詳述する。



第85図　片口鉢製作痕跡拓影（1:2）

山茶碗（379～424／第89～90図・写真27）

本報告においては碗と小碗から変化した皿（小皿）によって組合せを構成する器種を「山茶碗」として総称する。

碗

概要

碗は接合前破片数として 134 点、6.38kg（皿を含めた重量）、26 個体（底部による個体識別）が出土した。碗として図示した個体は 43 個体で、全形を知りうる個体は 17 個体である。

法量

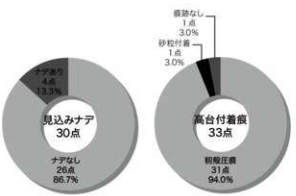
口径は 14.0～17.4cm に分布し、平均値は 15.4cm である。器高は 4.3～6.3cm に分布し、平均値は 5.3cm である。高台径は 6.2～9.6cm に分布し、平均値は 7.2cm である（第 88 図）。径高指数は 29.86～43.15 に分布し、平均値は 35.51 である（第 87 図）。

底部内面のナデ

底部内面（見込み）のナデの有無について、図示した 30 個体を観察した結果、ナデを施さない個体が 26 個体（86.7%）であったのに対して、ナデを施した個体は 4 個体（13.3%）であった（第 86 図左）。また、ナデの有無と器形については有意な相関関係を見出すことができなかった。

高台の付着痕跡

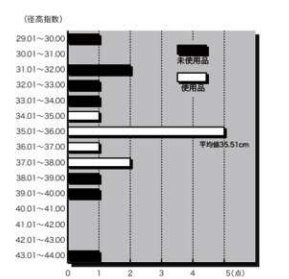
高台下端部の付着物の痕跡については、図示した 33 個体を観察した結果、籾殻の圧痕を残すものが 31 点（94.0%）で、籾殻の圧痕を残さずに砂粒のみが付着するもの（402）、籾殻の圧痕、砂粒の付着のいずれもが確認されないもの（412）が、それぞれ 1 点（3.0%）ずつ確認された（第 86 図右）。



第86図　見込みナデの有無と高台付着痕の比率

輪花（片口）

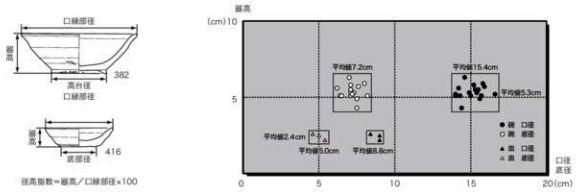
なお、391、401、404 は口縁部を輪花（片口）状に整えたものとして図示したが、これらは偶発的な変形である可能性がより高いと思われる。391 についても、軽く押さえたような痕跡が複数確認され、三輪花となる可能性もあるが、意図的な造作とまでは断定できない。その他、404、413 は口縁端部をわずかに内面に肥厚させる特徴が認められる。402 は胎土中には砂粒が多く、底部の亀裂を防止する意図があったためか、高台を幅広にして付加している。389 は体部に片口鉢に類似した製作痕跡が残る。片口鉢と山茶碗相互における技術系譜の関連を示唆する資料である。



第87図　使用痕跡と器形の相関

使用痕跡

製作痕跡とは別に、図示した 43 個体について、内面の摩耗



第88図　山茶碗の計測方法と法量分布

の程度から、使用品と未使用品を識別した。その結果は、使用品が26点（60.5%）、未使用品が17点（39.5%）で、全形を知りうる個体を対象にした場合は、使用品が9点（52.9%）、未使用品が8点（47.1%）であった。径高指数に応じて使用品と未使用品の比率を示すと、標準的な器形の山茶碗（径高指数34.01～38.00）のいずれもが使用された痕跡を残す一方で、浅い器形の一群（径高指数29.01～34.00）と深い器形の一群（径高指数38.01～40.00）には使用された痕跡が認められなかった（第87図）。387、407、419は最上段に重ねられ、内面全面に自然釉が付着した個体で、いずれも未使用品である。422は、見込み全面に自然釉が付着するが、顕著な摩耗も確認できる。

搬入された可能性

出土した個体数が少ないこと、半数以上の碗に使用痕跡が残ることから、碗は本窯跡において焼成されたとするより、他から搬入された可能性がより高いと推測される。その推測は使用品が多いことに加えて、釉着資料、焼け歪んだ個体といった明らかな焼成失敗品が少ないこと、山茶碗を焼成した焼台が確認されないことなどによっても補強される。ただし、先述のように片口鉢の上に碗が重ねられ、例外的に焼成された可能性はある。内面に窯壁塊が付着した387がその可能性を示す個体である。

皿

概要

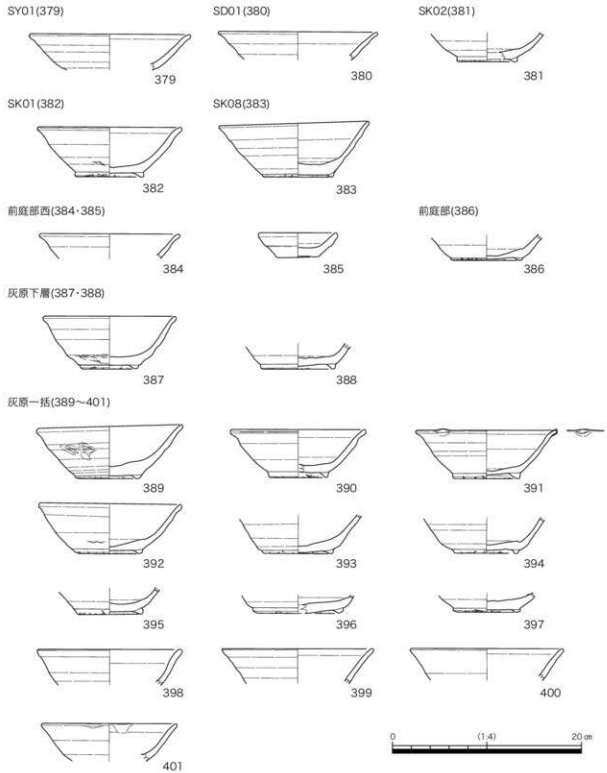
接合前破片数として6点、3個体（底部による個体識別）が出土し、個体識別した3個体を図示した。口径は8.4～9.0cmに分布し、平均値は8.8cmである。器高は2.2～2.6cmに分布し、平均値は2.4cmである。底径は4.6～5.4cmに分布し、平均値は5.0cmである（第88図）。径高指数は24.44～27.78に分布し、平均値は27.72である。

法量

使用痕跡

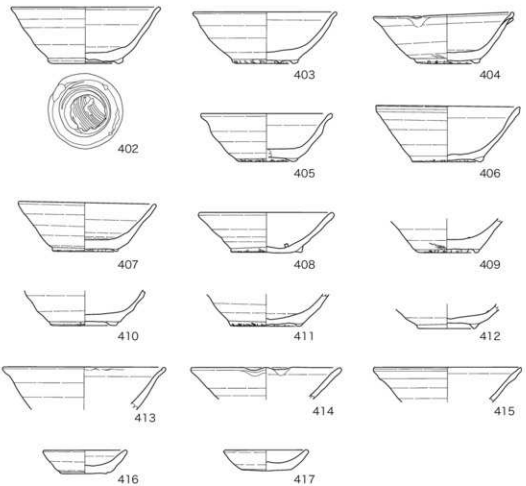
出土した3個体について、内面の摩耗の程度から、使用品と未使用品を識別した。その結果は、使用品が2点（66.67%）、未使用品が1点（33.33%）であった。識別した個体数は少ないが、使用品と未使用品の比率は碗のそれに近似する。碗と同様に、個体数や使用痕跡から、皿も本窯跡において焼成されたとは考えにくく、他から搬入された可能性が高いと推測される。皿のいずれもが歪みがないこともその推測を補強する。

搬入された可能性

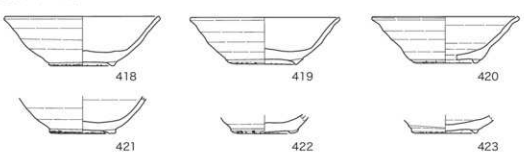


第89図　中世遺物実測図（42）—山茶碗1（1:4）

検出(402～417)



表土(418～423)



表採(424)

第90図　中世遺物実測図（43）—山茶碗2（1:4）

その他の器種（425～436／第91図・写真28）

概要

その他の器種として、長頸壺（水瓶）、短頸壺、鉢、鍋あるいは鉢、甕（広口壺）系の鉢（片口鉢Ⅱ類）、羽釜、陶丸に加えて、不明陶製品が出土した。いずれも数個体までの出土に限定される。

長頸壺（425）

接合前破片数として12点が出土し、接合した1個体（425）を図示した。なお、底部と思われる破片も認められたが、接合しなかった。

体部上半は半球形に近く、内面には成形時のシボリ痕跡が残る。頸部は細身で、上位がより細い。頸部直下には無装飾の低平な突帯を付す。筋線は施されない。

椎ノ木山古窯群
大曽公園1号窯
鍛場・御林D1号窯

長頸壺は、半田市椎ノ木山古窯群に出土例が多いことが古くから知られているが、大曽公園1号窯（2型式）、鍛場・御林D1号窯（3型式）に近年の発掘調査を通じた出土例がある。なお、大曽公園古窯群は椎ノ木古窯群に近接する。椎ノ木山古窯群、大曽公園1号窯の長頸壺は体部に複線による筋線を施す個体、鍛場・御林D1号窯のそれは筋線を施さない個体である。

短頸壺（426）

出土した口縁部1点（426）を図示した。短頸壺特有の頸部の屈曲はごく曖昧で、著しく退化した型式と考えられる。形態のみからは、むしろ無頸壺と称すべきかもしれない。

鉢（427～429）

口縁部先端を外上方に緩やかに屈曲させる器形を鉢として、3点を抽出した。口縁部として抽出されるのみで、他の部位の識別は不可能であった。よって、全形については判然としない。口径は25～30cmに復原されるものが多いが、片口の有無については不明である。抽出した口縁部3点（427～429）を図示した。

器形としては、器壁が薄手で、口縁部先端を薄く引き出すもの（427）と、器壁が厚手で、先端をわずかに引き出すもの（428・429）の二者がある。前者は甕と同様に暗赤褐色を呈し、後者は羽釜などに近似した灰～黒褐色を呈する。類似する個体は、大曽公園1号窯、松渕21号窯（2型式）などにおいて認められる。

大曽公園1号窯
松渕21号窯

鍋または鉢（430）

口縁部上位が屈曲気味に外反する個体で、器種を特定することが難しいものの、仮に鍋（鉢）とした。鉢と同様に口縁部として抽出されるのみで、抽出した1点（430）を図示した。口径も鉢に近似する。黄色がかった灰色を呈する色調は、焼成温度が低かったことを示す。本窯跡における焼成品ではない可能性もある。

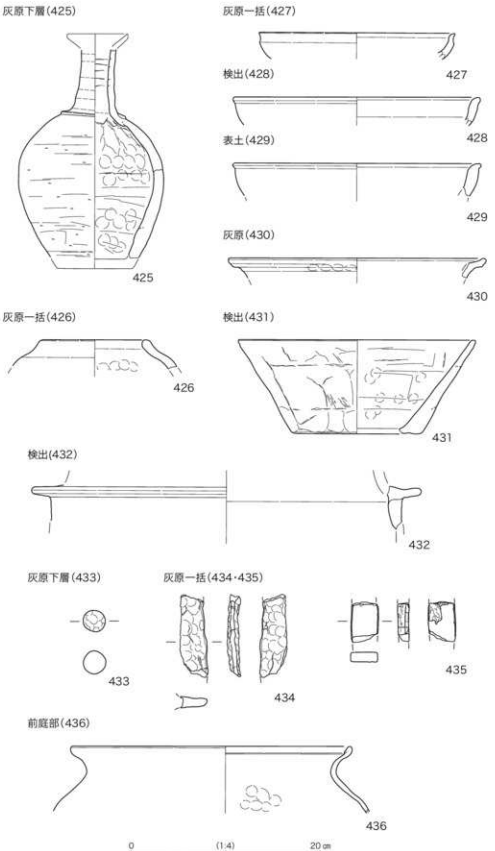
甕（広口壺）系の鉢（片口鉢Ⅱ類）（431）

山茶碗系の「片口鉢Ⅰ類」から区別される甕（広口壺）系の片口鉢で、いわゆる「片口鉢Ⅱ類」である。底径は13.8cmで、底径からは甕系というよりもむしろ広口壺系とすべきである。接合前破片数として4点出土し、1点（431）を図示した。

成形、内外面の調整は甕（広口壺）に共通し、底部は薄く、外面には離れ砂が付着する。口縁部先端のヨコナデはごく曖昧である。なお、片口部分は残存していない。色調は青灰色にも近い灰色で、甕（広口壺）の一群の色調に近似する。

大砂古窯群

従来、甕の技法を応用した片口鉢Ⅱ類は5型式以降に顕在化し、高台を付さない器形は



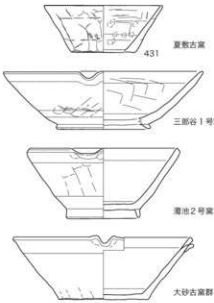
第91図　中世遺物実測図（44）—その他の器種（1:4）

三郎谷１号窯

阿久比町大砂古窯群など、５型式後半になって出現するとされてきた。また、３型式の常滑市三郎谷１号窯から出土した体部下半に縦位のヘラケズリを施した片口鉢が、片口鉢Ⅱ類の萌芽ともされるが、本窯跡における出土から、高台を付さない片口鉢Ⅱ類が３型式においてすでに出現していることが明らかとなった（第92図）。

羽釜（432）

体部に鍔をめぐらした煮炊具で、出土した体部１点を図示した（432）。高火度によって黒褐色に焼き締められ、胎土中の長石や鉄分が器表面に溶出する。一方、同器種は、低火度によって褐色系の色調に焼成されることが多いという。つまり本例は、窯内において低火度によって焼成しようとした意図に反して、固く焼き締められた結果、廃棄された可能性が考えられる。



第92図　片口鉢Ⅱ類の系譜

陶丸（433）

中田池古窯群

出土した１点を図示した（433）。433は、溶融した窯壁が付着した状態で灰原に廃棄されていた。高火度によって焼成され、瘤などと同様に暗赤褐色を呈する。陶丸は４型式以降に顕在化する焼成品とされるが、本窯跡において出土した陶丸は、武豊町中田池Ｂ－Ｙ号窯（３・４型式）、同Ｅ－１～８号窯（３・４型式）などの山茶碗主体窯に対しても先行するごく初期の段階における製品の例として注目される。

不明陶製品（434・435）

器種の特定が不能な焼き締め陶器を不明陶製品として、２点図示した（434・435）。

434は剥離した痕跡がある鍔（脚）状の破片である。何らかの容器、あるいは器物の一部分として付加されていたものと考えられるが、剥離した辺とそれに対する端辺は直線的であることから、羽釜の鍔の部分などを想定することは難しいと思われる。整形は指による押圧のみで、ごく粗雑である。胎土や焼成の程度からして、本窯における焼成品であることはほぼ疑いない。

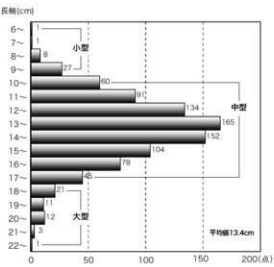
435は板状の陶製品で、一方の側面には縦横の線刻がある。瘤の一群と同様の橙色を呈し、焼成温度は相対的に低かったとみられる。灰原から出土したものの、本窯の製品ではない可能性も同時に示しておきたい。

土師器伊勢型鍋（436）

窯体の再利用時

明らかな搬入品で、前庭部付近から接合前破片数として39点出土した。出土した破片は、胎土や焼成の程度、出土状況から、１個体分（436）に相当すると考えられる。また出土状況から、436は、本窯跡の操業時ではなく、むしろ炭焼窯としての再利用時に関与する遺物と考えられる（第１章（２）を参照）。器表面の風化が著しいが、煤が付着した痕跡を部分的に確認できる。器壁は薄く均一で、口縁部はやや長く、緩やかに外反する。これらの特徴から436は12世紀後半～13世紀前半の年代が与えられる。

焼台・充填材（437～474／第98～101図・写真29）



第93図　焼台大きさの度数分布

本窯跡において出土した焼台・充填材は、いずれも通有の馬爪焼台で、914点（約二分の一以上残存する個体）が出土した。これらは甕・広口壺の窯詰め時に充填材として使用した焼台、片口鉢の窯詰め時に使用した焼台に大別される。ここでは便宜的に前者を焼台A、後者を焼台Bとして呼称する。ただし、判別に苦慮する個体も少なからずある。なお、山茶碗など他の器種の窯詰めに使用したと思われる焼台は抽出されなかった。

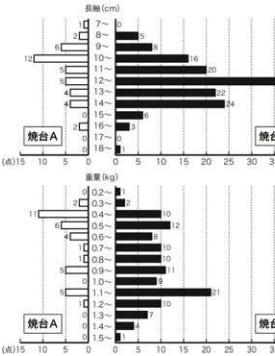
馬爪焼台

焼台A／B

出土した焼台の大きさ（長軸）は、6～22cmに分布し、平均値は13.4cmで、およそ6～9cmの小型の一群、10～17cmの平均的な大きさの一群、18～22cmの大型の一群に大別される（第93図）。

出土した焼台については、充填材の一部としての陶器片が付着したもの、製品の一部が釉着したものを選別して採集し、充填材の一部としての陶器片が付着した焼台184点を焼台A、焼台Bに分類後、集計と統計処理を実施した。その結果、前者は41点・28.7kg（個体数比22.3%・重量比17.8%）、後者は143点・132.99kg（個体数比77.7%・重量比82.2%）であった。しかし、この数値は製品（甕・広口壺）に付着した焼台は加算していないので、焼台Aの個体数、重量は、実際より少ない数値が算出されていることになる。さらに、ほぼ完存する焼台を対象として、重量の平均値を算出した結果、焼台Aが0.70kg、焼台Bが0.93kgであった。

陶器片付着



第94図　焼台A・Bと大きさ（長軸）・重量の相関

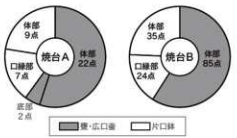
試みとして、本窯跡において出土した焼台の総重量を求めた。方法としては、陶器片が付着した焼台A、焼台Bの個体数比を、陶器片が付着しない（未計測の）焼台730点に適用し、両者のおよその個体数を求め、それぞれの重量の平均値を乗した。ただし、陶器片の重量は考慮していない。結果、出土した焼台の推定重量は、焼台A 142.7kg、

焼台の推定総重量

焼台 B 660.5kg、計 803.1kg として算出された。

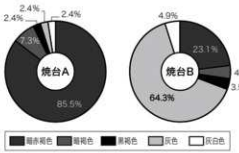
使用された器種

充填材の一部として使用された陶器片の器種は、甕（広口壺）と片口鉢で、使用頻度は甕（広口壺）が片口鉢をやや凌駕する（第 95 図）。また、焼台 A と焼台 B において両者の使用頻度は類似した数値を示した。



第95図　使用された器種の比率

焼台 A　大きさ（長軸）は 7 ～ 16cm に分布し、10cm前後のものが多い（平均値11.0cm）。重量は0.3～1.3kgに分布し、0.4～0.5kgのものが多い（平均値0.70kg）。色調は、焼成品である甕（広口壺）と同様、暗赤褐色のものが多い（第96図左）。



第96図　焼台の色調の比率

焼台Aとして、陶器片が付着した焼台 15 点（437 ～ 451）、陶器片が付着しない焼台 4 点（452 ～ 455）を図示した。437 は床と接地する面に、砂礫と炭化した植物遺体、土器片が固着した焼台である。441 は広口壺の底部破片を逆位にして粘土塊に被せたもの。452 は陶器片ではなく、長石片が混和された焼台。453 は床の下位に陶器片（甕・広口壺）の体部が付着したもの。陶器片は、床の補修時に混和されたものと思われる。

陶器片が付着した焼台は、陶器片の平坦な面を利用して製品を支持するもので、焼台と床面が接着する面と陶器片と製品が接着する面の角度は一定しない。陶器片の大きさや形状、粘土塊との接着位置がそれぞれ一定しないことからも、焼台Aは製品の傾きの微妙な調節を意図して適宜、製品と床の隙間に充填されたと推測される。それに対して、455 など粘土塊のみで製品を支持する焼台は、主として底部縁辺から体部下位に充填される。

焼台 B　焼台Bは陶器片の上面に付着した片口鉢の高台、または高台が接地していた痕跡から容易にそれと識別されるものが多い。陶器片は片口鉢の負荷に窯内における温度上昇が相俟って破損、変形しているものも少なくなくない。大きさ（長軸）は 8 ～18cm に分布し、10～14cmに集中する（平均値12.1cm）。重量は0.2～1.6kgに分布し、1.1～1.2kgのものが相対的に多い（平均値0.93kg）。焼台Aと比較して明らかに大きく、重い傾向がある（第94図）。色調は焼成品である片口鉢と同様、灰色、灰白色のものが多いが、甕（広口壺）の色調に類似した暗赤褐色のものも一定量認められる（第96図右）。

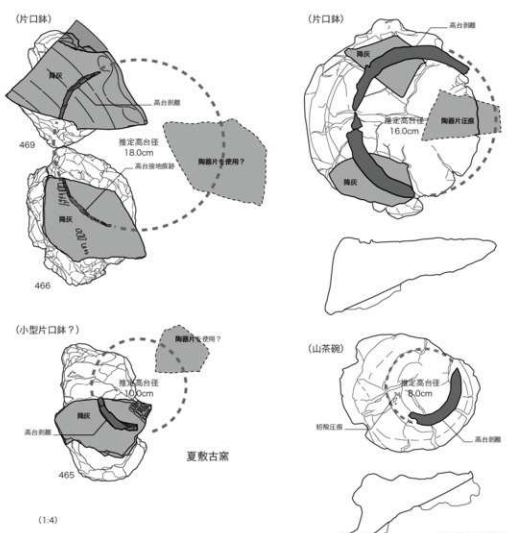
小型の片口鉢

焼台 B として、19 点を図示した。462 は粘土中にスサの混和が観察される。465 の陶器片に付着した高台からは、片口鉢の高台径は単純には約 10cm に復原されるので、焼台は小型の片口鉢（本報告の 4 類）の焼成に使用されたことになる（第 97 図左下）。ただし、2・3・4 類とした小法量の片口鉢は、通有の法量の片口鉢を重ねた上に数個体が重ねて焼成されたとする先の推定とは矛盾する。また、床面が接着する面と、陶器片と片口鉢が接着する面が形成する角度が異常に大きい点も疑問として残る。

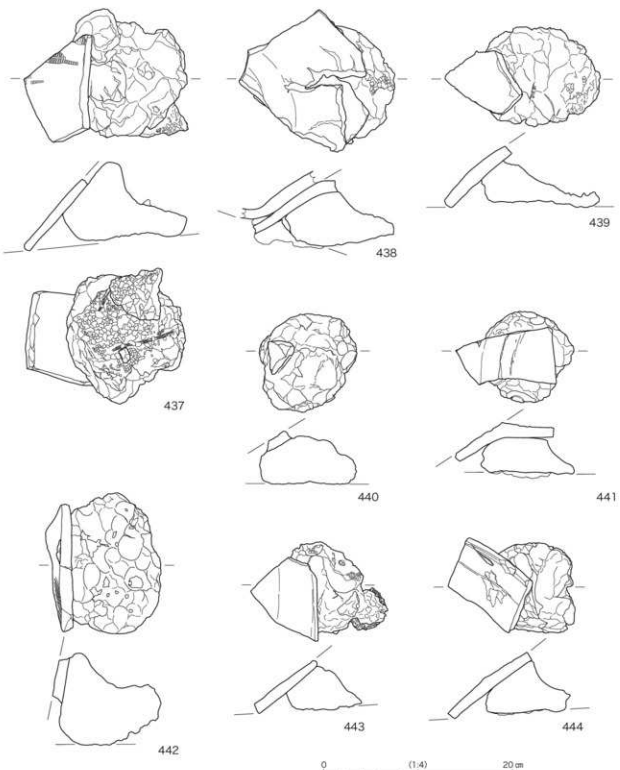
片口鉢の窯詰め方法
西渕馬古窯群

焼台と付着した片口鉢の高台の位置関係からは、２点の焼台（と１点の陶器片）で片口鉢を支持する窯詰め方法が復原される（第97図左上）。一方、３型式の山茶碗主体窯である知多市西渕馬古窯群では、片口鉢の窯詰めに使用した20cm前後の馬爪焼台が報告されている（同右上）。西渕馬古窯群における片口鉢の窯詰めに際しては、焼台の上面に陶器片を敷いて製品を安定させる点は夏敷古窯に共通するものの、大型の焼台１点のみで片口鉢を支持する点が異なる。また、この焼台は山茶碗を焼成した焼台（同右下）と相似の関係にあることは明らかである。つまり、甕主体窯の夏敷古窯において、片口鉢の窯詰めに甕の焼台とほとんど変わるところがない焼台が使用され、山茶碗主体窯の西渕馬古窯群において、山茶碗と相似形の馬爪焼台が使用されていることが確かめられる。これらの事例が他の甕主体窯と山茶碗主体窯にどの程度にまで普遍化されるかは不明であるが、甕主体窯と山茶碗主体窯における生産者集団の編成、協業の実態を示唆する一つの要素として今後も注視する必要がある。

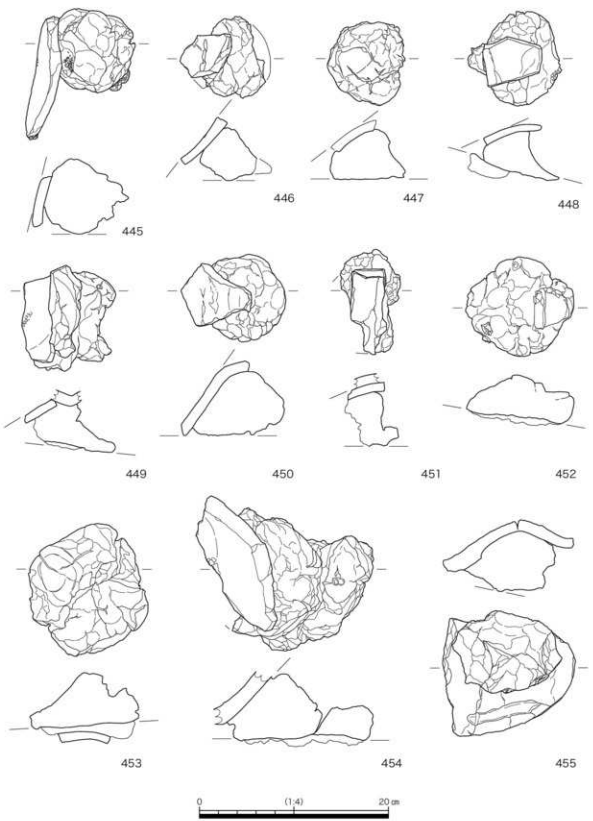
写真17　西渕馬古窯群の片口鉢用の焼台



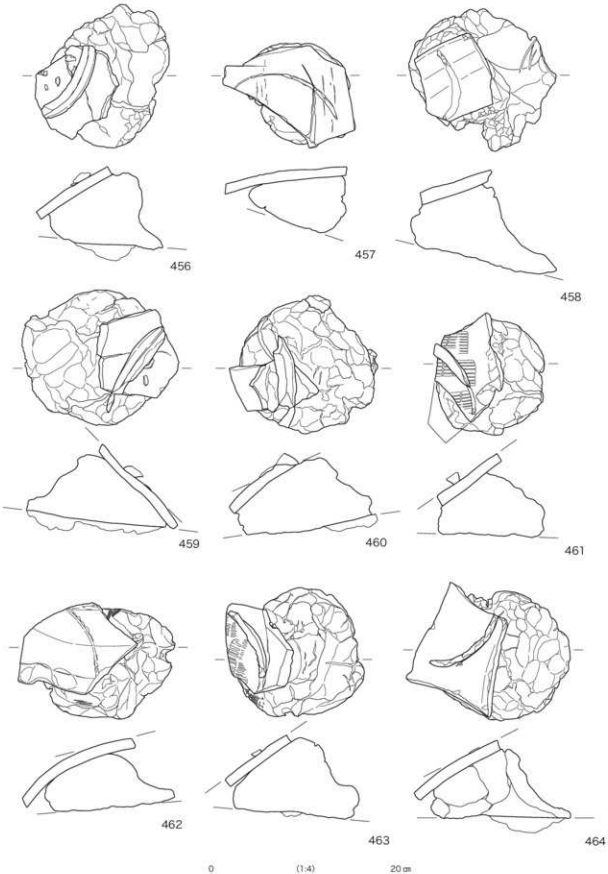
第97図　片口鉢の窯詰め方法の復原



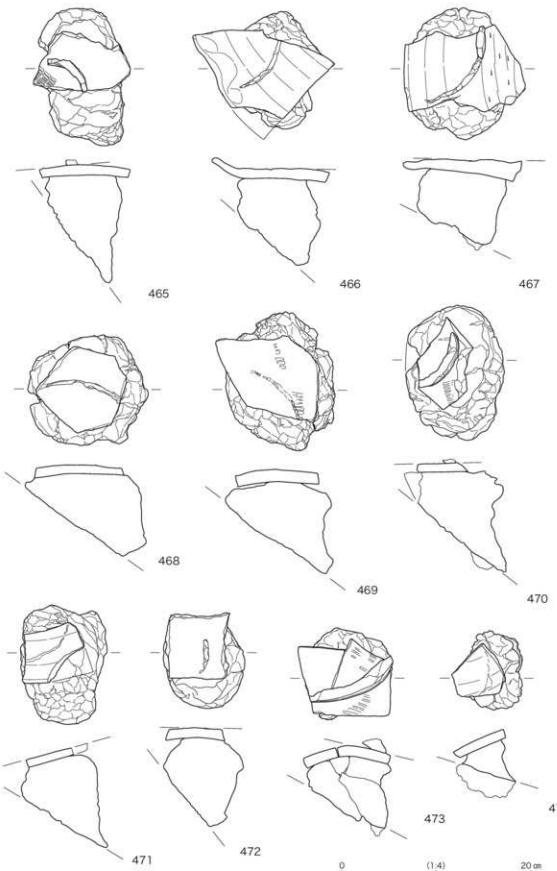
第98図　中世遺物実測図（45）—焼台1（1:4）



第99図　中世遺物実測図（46）—焼台2（1:4）



第100図　中世遺物実測図（47）—焼台3（1:4）



第101図　中世遺物実測図（48）—焼台4（1:4）

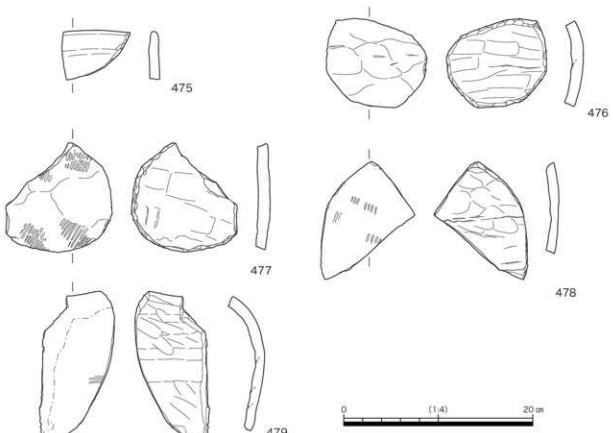
転用具（475～479／第102図）

陶器片に再加工を施して、何らかの用途に転用した可能性があるものを転用具として5点を図示した。片口鉢の口縁部の破断面に研磨を施したもの（475）、甕の体部の破断面に連続する剥離を認めるもの（476～479）がある。ただし、再加工の有無を判断する基準から曖昧さを排除することは難しい。また、いずれも灰原から出土したものに限って抽出、図化したが、上位の堆積層から混入している恐れもある。

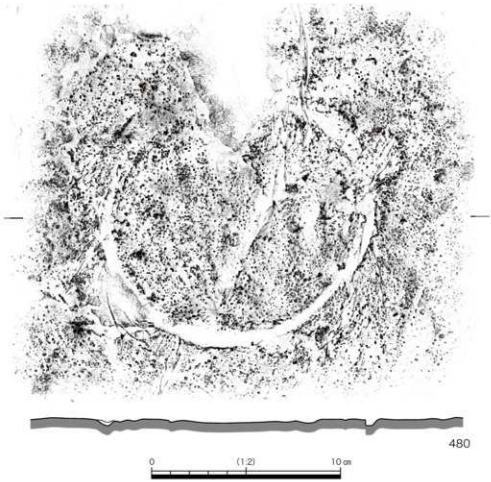
床（480／103図）

2次床面

480は硬化した2次床面に残された片口鉢の高台の痕跡を図示したもの。痕跡から求められる高台径は約14cmで、本報告における片口鉢1類でもやや小型の一群の高台径に相当する。



第102図　中世遺物実測図（49）—転用具？（1:4）



第103図　中世遺物実測図（50）—高台接地痕跡（1:2）

第6表　中世遺物集計表（窯道具を除く）

	甕 広口壺 小型壺	三筋壺	片口鉢	山茶椀		その他の器種								土師器	計
				椀	皿	長頸壺	短頸壺	鉢	鍋／鉢	片口鉢Ⅱ期	羽釜	陶丸	不明	伊勢型鍋	
SY01	222	3	101	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	354
SD01	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
SK01	471	4	98	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	577
SK08	16	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22
SK02	46	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	51
SD02	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
前庭部左	230	1	23	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	256
前庭部右	212	1	244	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	457
前庭部	36	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37
灰原	8379	124	1462	49	1	9	1	1	0	0	0	1	4	0	10031
検出	9388	159	1443	46	4	2	0	1	1	4	1	0	0	13	11062
表土	2534	50	914	27	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3527
SK07	39	0	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	64
SD03	73	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	91
試掘・表採	261	3	70	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	337
計	21922	350	4404	134	6	12	1	3	1	4	1	1	4	39	26882

（2）近世の遺物

概要

本窯跡における発掘調査において、若干の近世の遺物が出土した。溜池 SK07 の通水路 SD03 に設置された赤物土管、各地点から出土した転用砥具は、周辺の農地に関連する遺物で、その他、赤物炭櫃、火鉢、甕、竈などの製品はその周辺に廃棄された遺物である。

土管（481～491／第104～105図・写真30）

赤物土管

常滑では土樋（どい）、水門（すいも）、鼈くぐり（いたちくぐり）とも呼ばれる赤物（赤焼、素焼）土管である。いずれもソケット式で、口縁部（接続部分）は受口状に緩やかに彎曲する。溜池の通水路 SD03 に設置されたまま残されていた 11 個体を図示した。

口（外）径は 11.1 ～ 13.8cm（平均値 12.6cm）、底（外）径は 9.9 ～ 11.7cm（平均値 10.8cm）、器高（長さ）は 50.3 ～ 55.3cm（平均値 52.3cm）、重量は 3.3 ～ 3.7kg（平均値 3.48kg）、紐作りによる成形でやや規格性に欠ける製品である。内面は紐作り成形の痕跡がそのまま残され、外面は平滑に整えられる。底部外面は成形時の自重による粘土のはみ出しをケズリ調整によって整形している。

土管の製造年代は、真焼土管の製造が開始される天保・弘化年間以前あるいはその前後、19 世紀前半と考えられる。この年代は、清須市清洲城下町遺跡 SK6691 において赤物土管が瀬戸美濃陶器広東茶碗（瀬戸美濃陶磁器編年第 10 ～ 11 小期）などに共伴して出土していることとも矛盾しない。

その他の土器・土製品（492～536／第106～108図）

赤物炭櫃

492 は赤物炭櫃で、溜池 SK07 から出土した。溜池の廃絶時に廃棄された遺物と思われる。裁頭角錐形で、口縁部の一辺は 35cm 前後に復原される。493 は瀬戸美濃陶器丸碗。

瀬戸美濃陶器

産地不明陶器

494 は産地不明の陶器で、口縁部が肉厚で体部の器壁はかなり薄い。内面には煤が付着するが、器種を明確に特定することは難しい。495・496 は浅鉢状を呈する小型の赤物火鉢で、清須市朝日西遺跡 SK375、名古屋市名古屋城三の丸遺跡名古屋第一地方合同庁舎地点 SK130、同愛知県警察本部地点 SK304 などで類品が出土している。

赤物火鉢

赤物甕

497 ～ 500 は赤物甕。497 は内端（うちば）と呼ばれる口縁部内面の突帯が付加され、口縁部上面はわずかに窪む特徴から、18 世紀後半に対比される。498 ～ 500 は口縁部上面を平坦とする特徴から、19 世紀後半に対比される。501 ～ 503 は赤物竈と推定される。502 は口縁部直下から櫛描波状文を施す。名古屋城三の丸遺跡愛知県警察本部地点

土管

SK101 などで類品が出土している。504 はソケット部がない土管状の製品で 19 世紀後半

スクラッチタイル

以降のもの。505 ～ 507 は土管製作用の窯道具。19 世紀後半以降に相当する。508 は建築用装飾建材の無釉スクラッチタイルで、20 世紀前半の製造。

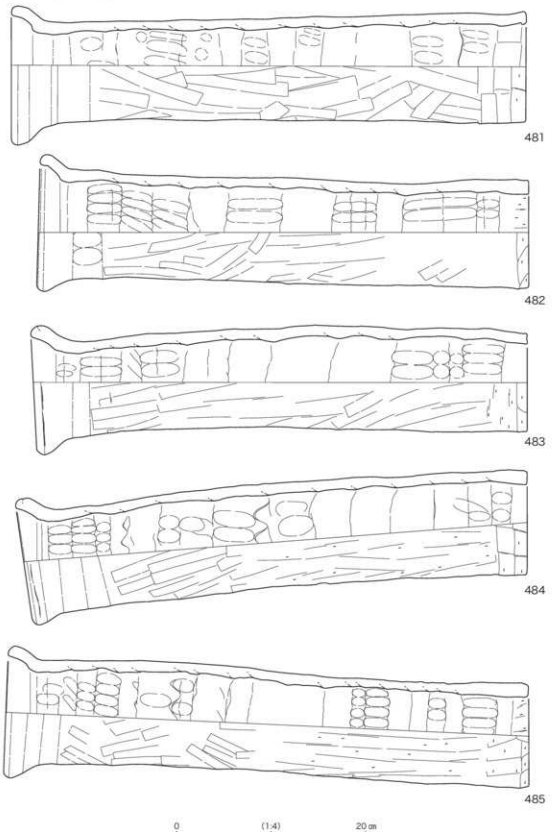
転用砥具

509 ～ 536 は転用砥具で、主として表土付近で採集されたものである。509 ～ 520 は不定形な形状で、509 ～ 513 が中世陶器を利用したもの、514 ～ 520 が近世陶器を利用したものである。使用された器種とその部位は、片口鉢の高台周辺（509）、甕の体部（510・511）、小型壺の底部（512）、赤物甕の体部（514）、赤物甕の口縁部（515 ～ 520）である。521 ～ 536 は板状のもので、形状や大きさも一定に整えられている。多くが赤物甕の体部を使用したものと思われる。

文献

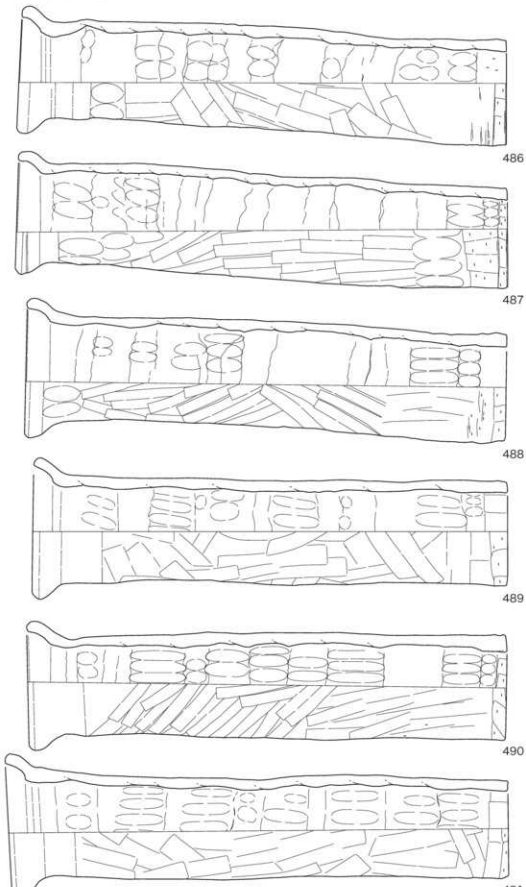
中沢三千夫他1974『常滑窯業史』常滑市
赤羽一郎・小野田勝一編1977『日本陶磁全集８　常滑渥美』中央公論社
水野九右衛門1977「越前」『世界陶磁全集３　日本中世』小学館
古岡康暢1977「加賀・珠洲」『世界陶磁全集３　日本中世』小学館
河原正彦1977「信楽」『世界陶磁全集３　日本中世』小学館
楠崎彰一1978「初期中世陶における三筋文の系譜―第１部　三筋文系陶器とその編年―」『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV　史学25　名古屋大学文学部
荻野繁春他1981『老洞古窯群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会
酒井清治1985「千葉市大森第２遺跡出土の百済土器」『古文化談叢』15　九州古文化研究会
中野晴久1986「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ　常滑市教育委員会
小澤一弘他1990『名古屋城三の丸遺跡（Ⅱ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第16集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
青木修1991「まとめ」『長曽古窯址発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第20集　常滑市教育委員会
柚田富蔵1992「「土管」使用の変遷−古代から明治まで−」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会
鈴木正貴・小澤一弘他1992『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
中野晴久1992「中世知多古窯址群の押印文―ミクロ流通史のための予備的研究―」『知多半島の歴史と現在』№.4　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房
青木修1993「片口鉢の研究―中世知多古窯跡群を中心として―」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第１輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
遠藤才文編1993『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）―愛知県警察本部地点の調査―』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
中野晴久1994「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
常滑市民俗資料館1994『土管の歴史展～飛鳥から現代まで～』常滑市教育委員会
鈴木正貴編1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
中野晴久1995「知多半島古窯址群の箆描記号文について」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅶ　常滑市教育委員会
常滑市民俗資料館1995『常滑の赤物展～もう一つの常滑焼～』常滑市教育委員会
木戸雅寿1995「信楽」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
北村和宏1996「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報』平成７年度　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
中野晴久1996「常滑窯の研究～近世赤物について～」『知多古文化研究』10　知多古文化研究会
中野晴久1998「大曽古窯跡群の研究」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅷ　常滑市教育委員会
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2002『江戸時代の瀬戸窯』
松原隆治編2004『西溝馬古窯群―第三次発掘調査―』知多市文化財資料第37集　知多市教育委員会

SD03-1（481～485）

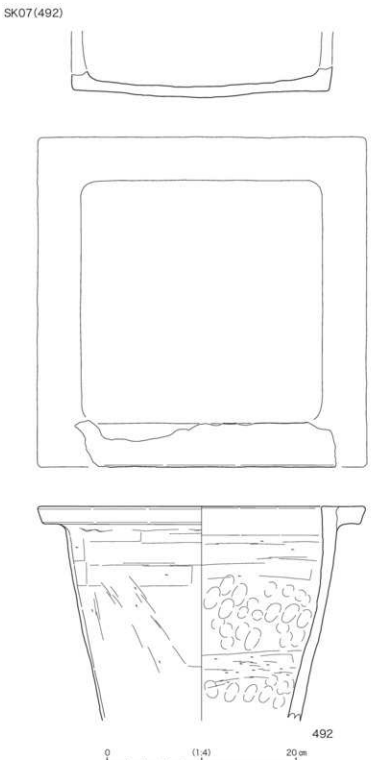


第104図　近世遺物実測図（1）—土管1（1:4）

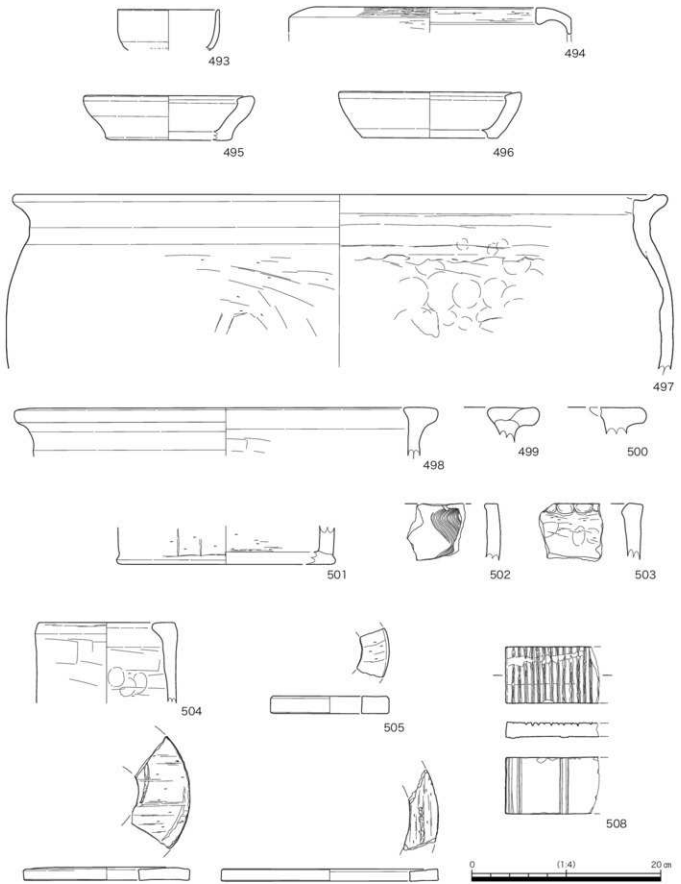
SD03-2(486～491)



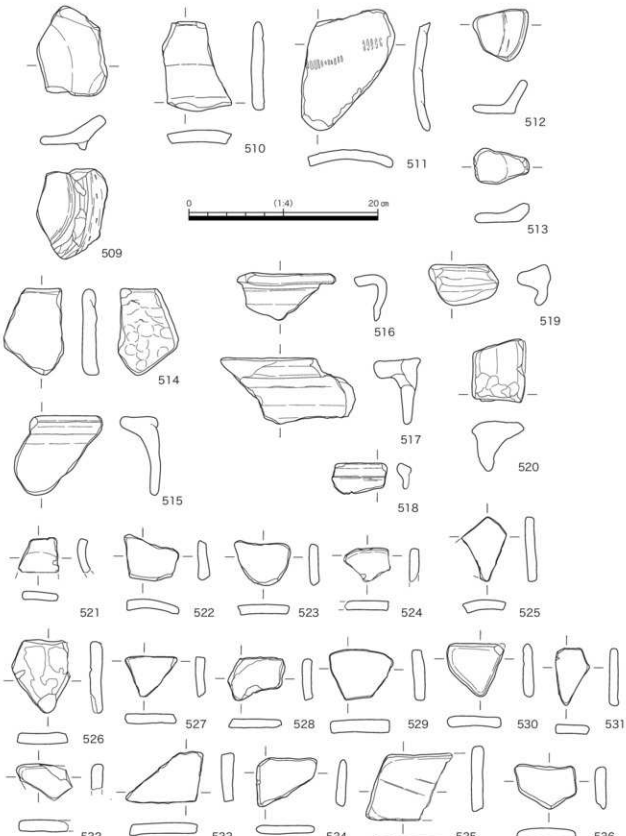
第105図　近世遺物実測図（2）—土管2（1:4）



第106図　近世遺物実測図（3）—炭櫃（1:4）



第107図　近世遺物実測図（4）—その他の陶器（1:4）



第108図　近世遺物実測図（5）—転用砥具（1:4）

写真18　遺物写真（1）—壺1

34

37

38

43

48

50

51

53

写真19　遺物写真（2）—壺2

54

54

59

60

105

106

111

107

写真20　遺物写真（3）—壺3

写真21　遺物写真（4）—提4

178

181

184

194

198

199

202

206

写真22　遺物写真（5）—広口壺

244

250

251

252

260

261

262

264

280

写真23　遺物写真（6）—三筋壺

写真24　遺物写真（7）—片口鉢1

317

329

333

335

342

349

353

353

写真25　遺物写真（8）—片口鉢2

写真26　遺物写真（9）—片口鉢3

写真27　遺物写真（10）—山茶碗

425

425

431

432

433 434 435

433 434 435

写真28　遺物写真（11）—その他の器種

焼台A

焼台B

写真29　遺物写真（12）—焼台・充填材

写真30　遺物写真（13）—土管

第３章　自然科学分析

（１）放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

１　はじめに

愛知県常滑市・夏敷古窯跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報、調整データは第７表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

３　結果

第８表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta\ ^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示すものである。

暦年較正　なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

第７表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5657	位置:5区前庭部	試料の種類:炭化物・材 試料の性状:不明 状態:dry カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5658	遺構:SK01 層位:下層一括	試料の種類:炭化物・材 試料の性状:不明 状態:dry カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5659	遺構:SY01 層位:焼成室床面	試料の種類:炭化物・材 試料の性状:不明 状態:dry カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5660	位置:7区灰原	試料の種類:炭化物・材 試料の性状:不明 状態:dry カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5661	位置:8区灰原	試料の種類:炭化物・材 試料の性状:不明 状態:dry カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5662	位置:10区灰原	試料の種類:炭化物・材 試料の性状:不明 状態:dry カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

第８表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-5657	-29.0±0.17	865±20	1160AD(68.2%)1210AD	1050AD(5.2%)1080AD 1150AD(90.2%)1230AD	866±20
PLD-5658	-25.97±0.21	890±20	1050AD(28.5%)1080AD 1120AD(4.0%)1140AD 1150AD(35.7%)1190AD	1040AD(34.3%)1100AD 1110AD(61.1%)1220AD	892±19
PLD-5659	-27.54±0.19	835±20	1170AD(68.2%)1225AD	1165AD(95.4%)1260AD	836±20
PLD-5660	-26.55±0.20	915±20	1040AD(42.3%)1100AD 1120AD(25.9%)1160AD	1030AD(95.4%)1170AD	917±19
PLD-5661	-27.40±0.20	890±20	1050AD(26.6%)1080AD 1120AD(1.4%)1140AD 1150AD(36.7%)1190AD 1200AD(3.5%)1210AD	1040AD(32.9%)1100AD 1110AD(62.5%)1220AD	891±19
PLD-5662	-26.69±0.18	865±20	1160AD(68.2%)1210AD	1050AD(5.9%)1080AD 1150AD(89.5%)1230AD	867±20

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4　考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

（2）炭化材の樹種同定

植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）

1　はじめに

ここでは、常滑市に所在する12世紀後半の夏敷古窯跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

常滑古窯群の12世紀後半の窯跡（中田池古窯址群、1992、茨廻間古窯群、2001、大曽公園古窯跡群、2001）ではシイノキ属・アカガシ亜属の照葉樹、クヌギ節・コナラ節の落葉広葉樹、マツ属複維管束亜属の針葉樹など、複数の樹種が燃料材に使用されていたことが知られている。当窯跡では、どのような樹種が燃料材として利用されていたかを明らかにする目的で樹種同定が実施された。

№3・8・9・10・14のそれぞれひとつの破片を用いて、AMSの年代測定が実施されている（本章（1）参照）。

2　試料と方法

取上げられていた試料（試料№1～14）から、形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種同定試料とした。

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3　結果

各試料の同定結果一覧を、第9表にまとめた。14試料のすべてから、マツ属複維管束亜属だけが検出された。炭化材は保存がよく、各試料からは比較的大きな破片が出土している。樹芯部を含む破片は少なかったが、10区灰原の試料No.13には多く見られた。直径1～2cmの細い枝が出ている破片が試料No.9・14にあった。それ以外の炭化材は、部位が不明の破片で、そこに含まれる年輪数は3～25年輪ほどであった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

（1）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　写真31

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪幅は広く、晩材の量は多い。分野壁孔は窓状で、放射組織の上下端や中間に鋸歯状肥厚がある放射仮道管が1～3層ほどある。

このような形質から、マツ属の複維管束亜属に属するアカマツまたはクロマツである。放射仮道管内壁の肥厚は、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすが、クロマツは比較的ゆるやか傾向がある。炭化材では、内腔に張り出た肥厚の形状が判らないので、マツ属複維管束亜属の同定に留めた。

アカマツとクロマツは暖帯から温帯下部に生育し、アカマツは人間との関係が深く二次林の主要樹であり過去には現在ほど広く分布していなかった。クロマツは海岸部に分布す

第９表　炭化材の樹種同定結果一覧

試料番号	遺構	検出樹種	備考		年代測定番号
			最大破片の横断面 放射径×接線径cm	破片の 年輪数	
1	SK01	マツ属複維管束亜属	4.0×3.5の破片	ほか20破片	
2	SK01	マツ属複維管束亜属		1.5cm角の破片複数	
3	SK01	マツ属複維管束亜属	2.0×2.0の破片	3年輪	PLD-5658
4	SK01	マツ属複維管束亜属	2.5×5.0の破片	12年輪　ほか15破片	
5	SK01	マツ属複維管束亜属	3.3×4.5の破片	18年輪　ほか7破片	
6	SK01	マツ属複維管束亜属	3.0×2.5の破片	13年輪　ほか6破片	
7	SK01	マツ属複維管束亜属	5.0×7.0の破片	25年輪　ほか4破片	
8	7区灰原	マツ属複維管束亜属	4.0×5.0の樹芯含む破片	18年輪	PLD-5660
9	8区灰原	マツ属複維管束亜属	幅5cm角の節部破片	直径1.2cm(年輪数不明)の枝が分枝している	PLD-5661
10	10区灰原	マツ属複維管束亜属	5.0×8.0の破片	10年輪　ほか40破片 大きな破片が多い	PLD-5662
11	10区灰原	マツ属複維管束亜属	4.0×6.5の破片	17年輪	
12	9区灰原	マツ属複維管束亜属	2.5×4.0の破片	8年輪　ほか5破片	
13	10区灰原	マツ属複維管束亜属	5.0×4.0の破片	18年輪　ほか13破片 樹芯を含む破片が多い	
14	5区前庭部	マツ属複維管束亜属	直径5cm芯持ち丸木	15年輪　直径1.4cm,6年輪ある枝が分枝している	PLD-5657

るといわれるが内陸部にもみられる。

4　考察

炭化材は、全体的に保存がよく、比較的大きな形状の破片も多かった。これらは焼成の最終段階に使用された燃料材であったために、残りがよいのかも知れないが、いずれにせよ燃料材にはマツ属複維管束亜属が多く利用されていたと言える。同時期の常滑古窯からは、マツ属複維管束亜属以外の広葉樹材も多く検出されている（中田池古窯址群、1992、茨廻間古窯群、2001、大曽公園古窯跡群、2001 など）ので、マツ属複維管束亜属だけが検出された当窯跡の燃料材樹種利用は、今まで知られている常滑古窯群の中では異なる樹種利用または樹種構成であった。この違いの要因を考えるには、周辺窯跡の燃料材資料のさらなる蓄積を待つ必要がある。また、立地環境や、焼成品の特徴、燃料材の流通範囲などの検討も考慮する必要があると思われる。

炭化材は樹芯部を含む破片は少なかったが、直径５cm の芯持ち丸木（試料 14）や、直径１～２cm の枝が出ている炭化材（試料 No. 9・14）があったことから、枝材を燃やしていたことが想像された。

引用文献

「中田池古窯址群」(1992) 武豊町教育委員会.
「茨廻間古窯群発掘調査報告書 常滑市文化財調査報告書24集」(2001) 常滑市教育委員会.
「大曽公園古窯跡群発掘調査報告書 常滑市文化財調査報告書25集」(2001) 常滑市教育委員会.

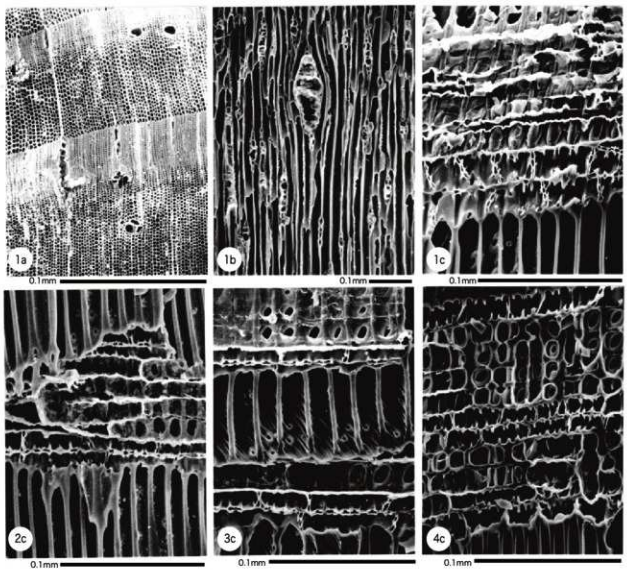
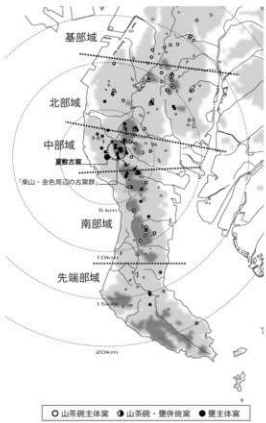


写真31　炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

1a-1c:マツ属複維管束亜属(No.3:PLD-5658)　2c:マツ属複維管束亜属(No.9:PLD-5661)
3c:マツ属複維管束亜属(No.10:PLD-5662)　4c:マツ属複維管束亜属(No.14:PLD-5657)
a:横断面 b:接線断面 c:放射断面

第4章　考察とまとめ



第109図　常滑古窯跡群の古窯分布と地域区分
（12世紀～13世紀初頭）

（1）編年的考察

既往の編年的研究

中世常滑焼の編年については、楢崎彰一（楢崎1967など）、杉崎章（杉崎1981など）、赤羽一郎（赤羽1984など）、中野晴久（中野1983・1986など）ら各氏による研究が精力的に続けられてきた。これらの研究成果を受けた現今では、全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」（日本福祉大学知多半島総合研究所1994）開催時に赤羽一郎と中野晴久の両氏が共同で再構成した、いわゆる「赤羽・中野生産地編年」（中野1994・1995ｃ）が現段階の編年研究の到達点として高い評価を受けている。その「赤羽・中野生産地編年」は、知多半島における中世陶器生産を3段階12型式に区分する編年で、本報告における記述もこの編年に依拠している。以下、「赤羽・中野生産地編年」と対照しつつ、本窯跡の編年的位置を考察する。

「赤羽・中野生産地編年」

窯体構造

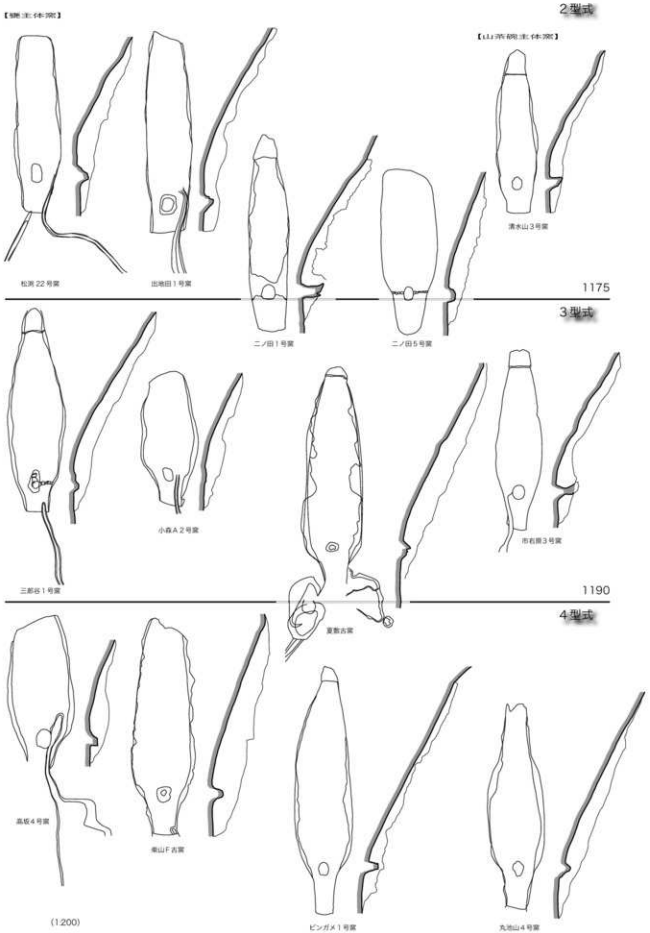
常滑古窯跡群中部域

夏敷古窯を包摂する常滑古窯跡群（以下、常滑古窯跡群を省略、知多半島古窯跡群とも呼称される、第109図）中部域には、2型式に甕を盛んに生産した常滑市出地田古窯群、同松渕古窯群、同金色東古窯群などの古窯群が群在する。これらの古窯群は、およそ2km圏内に集中して分布し、「柴山・金色周辺の古窯群」として把握されることもある（中野2006）。これらの古窯群中に築かれた窯体には、出地田1・3号窯、松渕21・22号窯、金色東B1・2号窯など、焼成室の胴張りが顕著でない窯体の平面形状、全長10m、焼成室最大幅2.5m、焼成室長6m前後の規模、分焔柱の背後が平坦に近く、焼成室内で40°近くにまで急傾斜となる床面など、相互に類似する特徴が認められる。また、同時期の窯体には付属施設として、間仕切り障壁、床下施設とそれに付随する排水溝がしばしば設置される（第110図上段）。

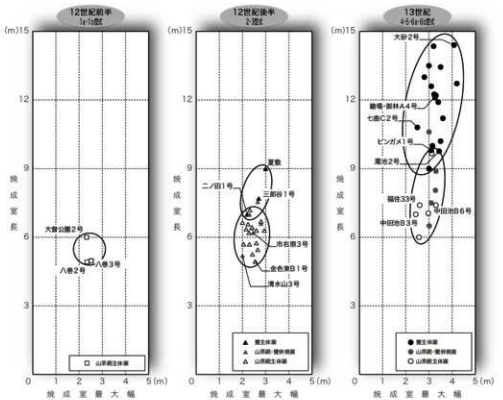
柴山・金色周辺

一方、これら群在する古窯群からやや離れて平野側に単独立地する夏敷古窯は、焼成室の胴張りが明確で、規模も全長11.5m、焼成室最大幅3.0m、焼成室長9.0mまでに長大化する。また、分焔柱背後の平坦面は消失する（焼成室床面の傾斜変化が解消する）傾向にあって、床面傾斜は相対的に緩慢化する。これに最も類似した構造の窯体としては、

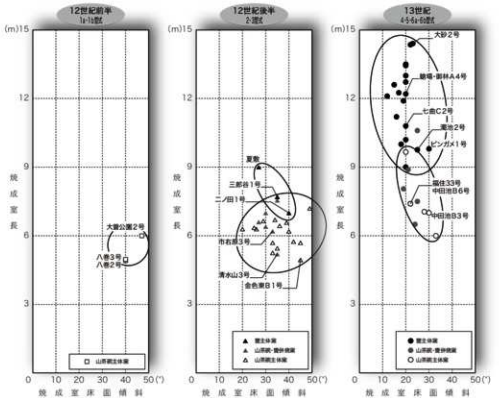
三郎谷1号窯



第110図　窯体構造の変遷



第111図　焼成室長・最大幅の変化



第112図　焼成室長・床面傾斜の変化

第10表　窯体計測値一覧

所在	古窯名	型式	主要製品	焼成室計測値			文献
				長 (m)	最大幅 (m)	床面傾斜 (°)	
東海市	梅廻山古窯	3	山茶碗	6.30	2.94	26	白鳥古文化研究所1965『梅廻山古窯址』
大府市	神明1号窯	2	山茶碗	5.70	2.05	33	大府市教育委員会1996『海陸端古窯址群　神明古窯址群』
	神明2号窯	2	山茶碗	5.70	2.30	45	
東浦町	丸池山5号窯	3	山茶碗	6.65	2.00	29	東浦町教育委員会『東脇坊・丸池山古窯址群』
	市石原3号窯	3	山茶碗・甕	6.20	2.45	33	愛知県教育委員会1961『愛知県知多古窯址群』
	大原古窯	2・3	山茶碗	5.46	2.66	35	東浦町教育委員会1968『東浦町誌』
	八巻2号窯	1	山茶碗	4.82	2.34	40	愛知県教育委員会1962『愛知県知多古窯址群』
	八巻3号窯	1	山茶碗	4.97	2.52	40	
知多市	七曲A3号窯	5・6	甕	10.20	3.50	20	知多市教育委員会1987『七曲古窯址群第一次発掘調査』
	七曲C2号窯	5・6	甕	10.80	2.50	20	知多市教育委員会1989『七曲古窯址群第三次発掘調査』
	刀池12号窯	3・4	山茶碗・甕	6.36	2.16	25	愛知県埋蔵文化財センター『刀池古窯跡群』
常滑市	提浄タゼ1号窯	5・6	甕	11.90	3.40	19	常滑市教育委員会1971『提浄タゼ古窯址群』
	提浄タゼ2号窯	5	甕	10.00	3.15	18	
	二ノ川1号窯	2・3	甕	7.00	2.20	40	常滑市教育委員会1978『二ノ川古窯址群』
	金色東1号窯	6	甕	11.20	3.60	16	常滑市教育委員会1979『金色東古窯址群』
	清水山3号窯	2	山茶碗・甕	5.20	2.00	35	常滑市教育委員会1980『清水山古窯址群』
	瀧池2号窯	5	甕	9.76	3.44	25	常滑市教育委員会1983『瀧池古窯址群発掘調査報告書』
	鎗場・鋼林A4号窯	6	甕	12.20	3.30	20	常滑市教育委員会1985『鎗場・鋼林古窯址群』
	鎗場・鋼林B3号窯	5	山茶碗・甕	10.60	3.00	25	
	鎗場・鋼林B4号窯	3	山茶碗・甕	6.40	2.40	30	
	鎗場・鋼林B9号窯	6	甕	9.00	3.00	20	
	鎗場・鋼林D1号窯	3	山茶碗・甕	7.00	2.30	30	
	鎗場・鋼林D3号窯	5・6	山茶碗・甕	7.50	3.10	25	
	檜原山東1号窯	5・6	山茶碗・甕	6.50	3.01	24	愛知県教育委員会1960『愛知県知多古窯址群』
	亀塚池13号窯	5・6	山茶碗・甕	8.05	3.28	19	常滑市教育委員会1993『亀塚池古窯址群発掘調査報告書』
	亀塚池15号窯	6	山茶碗	9.66	3.12	20	
	亀塚池16号窯	6	山茶碗・甕	8.89	3.30	21	
	二部谷1号窯	3	甕	7.70	2.70	35	知多古文化研究会・常滑市1981『二部谷第一号窯』
	大曽公園2号窯	1	山茶碗	6.00	2.32	47	常滑市教育委員会2001『大曽公園古窯跡群発掘調査報告書』
	金色東B1号窯	2	山茶碗	4.95	2.55	45	常滑市教育委員会2004『金色東B古窯群』
	金色東B2号窯	2	山茶碗	5.75	2.60	42	
	夏敷古窯	3	甕	9.00	3.00	27	愛知県埋蔵文化財センター2007『夏敷古窯跡　蛇廻間古窯跡』
阿久比町	福住4号窯	5・6	甕	12.25	3.22	17	新興ヶ丘団地開発遺跡調査団1978『福住古窯址群』
	福住5号窯	5・6	甕	14.35	3.20	22	
	福住6号窯	5・6	甕	13.44	3.50	20	
	福住7号窯	6	甕	12.10	3.26	12	
	福住22号窯	6	甕	12.60	3.10	15	
	福住23号窯	6	甕	13.50	3.00	20	
	福住24号窯	6	甕	13.00	2.80	20	
	福住33号窯	4・5	山茶碗	7.40	2.60	22	
	福住51号窯	3・4	山茶碗	6.30	2.60	20	
	大神1号窯	6	甕	12.72	4.20	20	
	大神2号窯	6	甕	14.40	4.08	23	
半田市	深谷5号窯	3・4	山茶碗	6.70	2.80	34	愛知県教育委員会1969『知多半島道路埋蔵文化財調査報告』
	大池4号窯	3	山茶碗	7.20	2.32	49	半田市教育委員会2001『大池古窯址群　池田古窯址群』
	大池5号窯	3	山茶碗	6.20	2.28	40	
武豊町	中田池A4号窯	3・4	山茶碗	6.58	2.24	39	武豊町教育委員会1990『中田池古窯址群　その1』
	中田池A5号窯	3・4	山茶碗	5.26	2.43	33	
	中田池A6号窯	3・4	山茶碗	6.44	2.41	36	
	中田池B9号窯	5・6	山茶碗	6.00	2.57	33	
	中田池B3号窯	4	山茶碗	7.00	2.43	30	
	中田池B6号窯	6	山茶碗	7.40	3.30	22	
	中田池D3号窯	4	山茶碗	7.05	2.97	28	武豊町教育委員会1992『中田池古窯址群　その2』
	中田池G2号窯	3・4	山茶碗・甕	7.55	2.66	35	
	ビンガメ1号窯	4・5	甕	9.80	3.10	30	武豊町1983『武豊町史』資料編二
美浜町	込水C2号窯	3	山茶碗・甕	6.60	2.80	27	美浜町教育委員会2004『込水古窯跡発掘調査報告書』

焼成室の規模が判明する窯について、焼成室長・最大幅・床面傾斜を計測した。計測値は第14図の窯体部位名称に従って遺構実測図から求めた数値と、各文献に記載された計測値と比較しつつ、原則として各文献に記載された数値を優先した。床面傾斜については、焼成室内において最も安定して傾斜する部分の数値を採用した。
型式と主要製品は、『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』（日本福祉大学知多半島総合研究所1994）、本報告付編の中世常滑窯一覧による。

南部城の常滑市三郎谷１号窯がある。同じく南部城の同小森Ａ２号窯も同様の構造と思われる。なお、これらは３型式の甕主体窯である。ただし、三郎谷１号窯は分焔柱背後が平坦に近く、床面傾斜が急である点といった断面形の特徴において、２型式の窯体により近似する。また、これらの窯体にも付属施設として、間仕切り障壁、床下施設などが設置されることがあるが、排水溝は三郎谷１号窯、夏敷古窯のように、焼成室に達しない退化したものも少なくない（第 110 図中段）。

二ノ田１号窯

同じく中部域に群在する常滑市二ノ田古窯群中の二ノ田１号窯は、焼成室の胴張りがほとんど認められない点など、平面形は出地田古窯群、松渕古窯群中の窯体に類似するものの、分焔柱背後の平坦面は狭いことから、出地田古窯群、松渕古窯群中の窯体の一群と夏敷古窯の中間的な位置にあることが確認できる。また、二ノ田５号窯は焼成室が大型化し、床面傾斜もより緩慢であることなど、より夏敷古窯に近似する要素が多く認められる（第 110 図上～中段）。なお、二ノ田古窯群は２～３型式の甕主体窯である。

二ノ田５号窯

４型式の甕主体窯である常滑市柴山Ｆ古窯、同高坂４号窯などは床面傾斜がより緩慢化し、焼成室床面の傾斜変化はほとんど消失する。ただし、４～５型式の甕主体窯である武豊町ビンガメ１号窯は大型化しつつも、床面は急傾斜を維持している。排水溝などの窯体の付属施設はなお設置されるが、柴山Ｆ古窯の排水溝は夏敷古窯などのそれと同じく焼成室には達していない（第 110 図下段）。

ビンガメ１号窯

焼成室の計測値

さて、第 111・112 図において、12～13 世紀（１ａ～６ｂ型式）の常滑古窯跡群における既調査窯の焼成室長と焼成室最大幅（第 111 図）、焼成室長と焼成室床面傾斜（第 112 図）を相互に比較した。その結果、12 世紀後半まで灰釉陶器窯以来の伝統的な構造の山茶碗主体窯に埋没していた甕主体（山茶碗・甕併焼）窯が 13 世紀には山茶碗主体窯から明確に分離することが明確に示された。また、夏敷古窯は 13 世紀（４型式）以降の甕主体窯の一群に接する位置にあることが確かめられ、２型式から３型式にかけて、二ノ田１号窯、三郎谷１号窯、夏敷古窯を経て、甕主体窯が析出する流れも予測される。

甕主体窯の析出

小結

以上、２型式から４型式までの窯体構造の変化の傾向を確認し、窯体の形態、規模、付属施設などの特徴から、夏敷古窯の窯体構造が３型式に対応することを確認した。同時に、夏敷古窯は中部域に群在する２型式の窯の窯体構造を継承しつつ、さらに４型式以後、甕主体窯が大型化し、山茶碗主体窯から分離する流れを先導したとする見通しも示されたであろう。

各生産器種

夏敷古窯において確認した器種は、甕・広口壺、三筋壺、長頸壺（水瓶）、片口鉢Ⅰ・Ⅱ類（青木 1993）、山茶碗（碗・皿）、羽釜、陶丸などである。以下、各器種の型式的な内容を確認しつつ、編年上の位置関係を示す。

甕・広口壺　甕・広口壺の各個体は口縁部形態、頸部形態にそれぞれ変異を内包する。本報告では各属性の変異を考慮して１～３類に細分しつつ、１類から２、３類を経て、口縁端部（縁帯）幅が拡張し、頸部を中心として器壁が厚くなる傾向を確認した。このことから、１類が古相、３類が新相、２類がその中間的な形態であることが予測される。また、１類は２型式、３類は４型式の甕・広口壺に型式的に近似するが、３型式の範疇を逸脱するものではない。よって、細分された諸型式の混在は、操業期間内における生産内容の時

変化の傾向

時代的な傾向差

代的な傾向差を示している可能性が想定される。

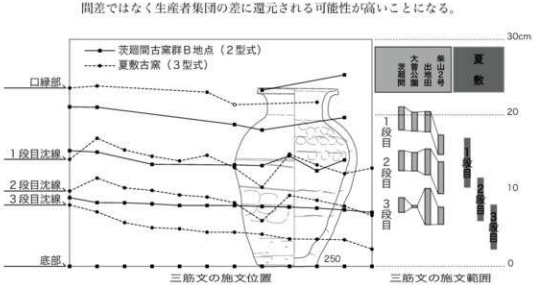
押印文　甕に帯状に連続して施された押印文は、いずれも幅４cm 以下の小型の原体によるもので、中野晴久による押印文の原体を指標とした時期区分（中野 1992）では、その第三段階に対応する。また、近隣の松渕古窯群、出地田古窯群、柴山古窯群、蛇廻間古窯などにおいて第二段階の原体の意匠として頻繁に使用されている連弧文は、夏敷古窯において認められない。中野によると連弧文は第三段階以降、ほとんどみられなくなるという。なお、原体を指標とした時期区分である第二、三段階は、それぞれ、「赤羽・中野生産地編年」における２、３型式に対応する。

三筋壷　夏敷古窯からは10個体前後の三筋壷が出土した（第114図25～34）。一定量の三筋壷を生産したことが明らかとなっている古窯は、常滑市大曽公園１号窯（同１～５）、同茨廻間古窯群Ｂ地点（同６～10）、出地田古窯群（同11～15）、柴山２号窯

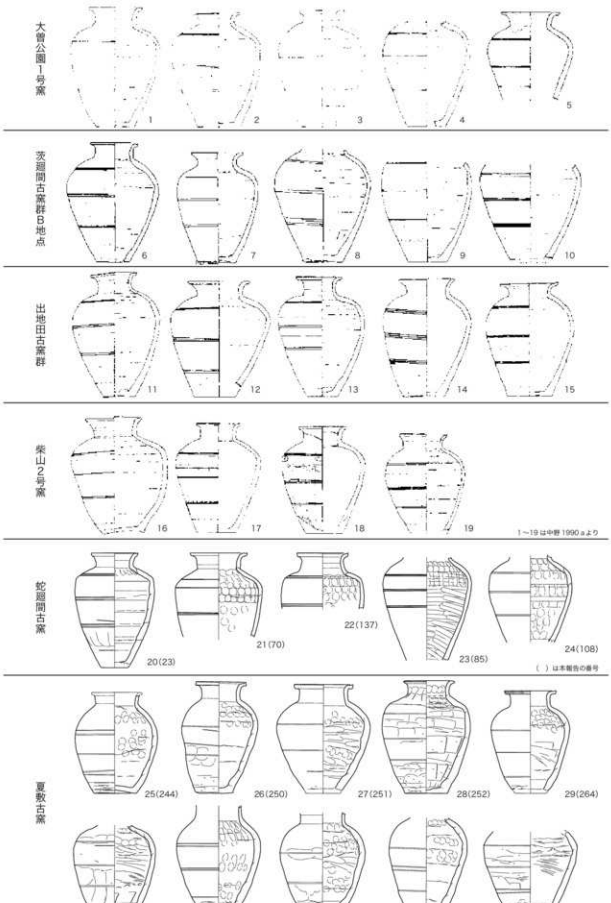
三筋壷の単位文様　（同16～19）、蛇廻間古窯（同20～24）などが知られる程度で決して多くはない。これらは２型式を主体とする甕主体（山茶碗・甕併焼）窯で、出土した三筋壷の単位文様は、複線三筋文を主体とする。一方、夏敷古窯の三筋壷の単位文様は太筋の単線三筋文のみである。従来から指摘されている三筋壷の単位文様の原体を指標とした区分（楢崎1978など）を適用すれば、夏敷古窯の三筋壷は、２型式の諸窯のそれに後出し、３型式の所産として理解して差し支えないと思われる。

三筋文の施文位置　また、茨廻間古窯群Ｂ地点の三筋壷と夏敷古窯の三筋壷について、三筋文が施される位置を比較すると（第113図左）、前者の三筋文が施される位置と比較して、後者のそれは明らかに低く、加えて施文位置も一定しない傾向が認められる。大曽公園１号窯、出地田古窯群、柴山２号窯出土の三筋壷を通じて、三筋文が施される位置を比較した場合においても（同右）、同様の傾向が確認できる。これによって、三筋文の原体に加えて、その文様配置によっても型式が区分される見通しが示される。

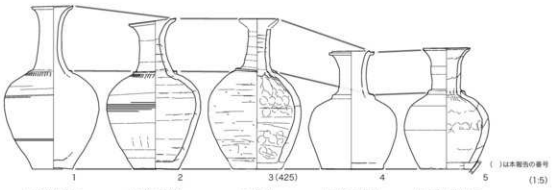
生産者集団の差　その一方で、出土した三筋壷は器形、口縁部形態、頸部形態にそれぞれ変異を内包するが、各属性に対応した変化の傾向は抽出されなかった。つまり、これらの属性の変異は時間差ではなく生産者集団の差に還元される可能性が高いことになる。



第113図　三筋文の施文位置の比較



第114図　三筋壷の比較



第115図　長頸壷（水瓶）の比較

長頸壷（水瓶）　長頸壷については、半田市椎ノ木山1号窯（西椎ノ木山窯）とそれに近接する大曽公園1号窯、常滑市鎗場・御林D1号窯などの諸例との比較（第115図）から型式的な位置を把握する。

装飾　最初に長頸壷の装飾性に着目すると、頸部突帯直下の刻みと体部の筋線を有する椎ノ木山1号窯（第115図1）、大曽公園1号窯（同2）の諸例と、これらの装飾が欠落した夏敷古窯（同3）、椎ノ木山古窯群（同4）、鎗場・御林D1号窯（同5）の諸例に区分される。次に、

器形　器形については、夏敷古窯の細長い頸部、長胴気味の体部といった器形の特徴は、椎ノ木山1号窯、大曽公園1号窯のそれに類似し、短小な頸部、偏平化した体部を特徴とする椎ノ木山古窯群、鎗場・御林D1号窯とは大きく異なる。大曽公園1号窯は2型式、鎗場・御林D1号窯は3型式にそれぞれ相当することが確かめられるので、長頸壷は装飾が欠落し、頸部が短小化、体部が扁平化する変化の傾向を示すことは明らかである。つまり、椎ノ木山1号窯と大曽公園1号窯の長頸壷が型式的に先行し、椎ノ木山古窯群と鎗場・御林D1号窯の長頸壷がそれらに後出することになる。夏敷古窯の長頸壷は、器形は前者に、装飾の有無としては後者に共通することから、両者の中間的位置、つまり2型式新相から3型式古相に対比されることになる。

片口鉢　山茶碗系のいわゆる片口鉢Ⅰ類については、前後の型式と連続した変化の傾向を示すこと、形態差が製品規格に関係する可能性があること、同一個体あるいは同時焼成された個体間に新旧の要素が混在することから、型式の特徴から明確に編年的位置関係を示すことは難しい。やや曖昧ながら、2型式の片口鉢の口縁部にしばしば認められるような鋭利な角形の口縁部はほとんど認められないこと、断面三角形状の高台と細身で高い形状の高台が混在すること、胎土中に砂礫を多く混和するようになること、体部下半の回転ヘラケズリが幅広で雑になることなどの特徴から、3型式に対応するものと判断したい。

山茶碗　山茶碗は碗の個体数が多く皿は少ない。碗は玉縁碗、輪花碗などの特殊形態を含まず、皿は小皿形態のみで小碗形態がない。このような個体の構成内容から、山茶碗には3型式以降の編年的位置が与えられる。

碗の計測値の比較　さて、3型式以降、碗は口径と高台径が縮小し、器高が高くなる変化の傾向、皿は扁平化する変化の傾向を示す。ここでは、夏敷古窯17個体の山茶碗の口径、高台径、器高を

第11表　山茶碗計測値（平均値）比較表

		碗　平均値			皿　平均値			
	型式	口径	高台径	器高	口径	底径	器高	（碗／皿の個体数）
清水山3号窯	2型式	16.4	7.9	4.8	8.4	4.2	2.3	（57／6個体）
濁池西古窯	3型式	15.7	7.3	5.1	7.9	4.5	2.1	（24／31個体）
南蛇ヶ谷1号窯	4型式	15.4	7.3	5.2	8.5	5.0	2.1	（73／57個体）
蛇ヶ谷6号窯	5型式	15.4	7.2	5.2	8.5	5.2	1.7	（29／92個体）
夏敷古窯	**（3型式）**	**15.4**	**7.2**	**5.3**	**8.8**	**5.0**	**2.4**	（17／3個体）

それぞれ計測した平均値と、「赤羽・中野生産地編年」において提示されている2型式の常滑市清水山3号窯57個体、3型式の同濁池西古窯24個体、4型式の武豊町南蛇ヶ谷1号窯73個体、5型式の同蛇ヶ谷6号窯29個体のそれ（中野1994）とを比較した（第11表）。その結果、口径の平均値は16.4cm／15.7cm／15.4cm／15.4cm／15.4cm（清水山3号窯／濁池西古窯／南蛇ヶ谷1号窯／蛇ヶ谷6号窯／夏敷古窯、以下同じ）、高台径の平均値は7.9cm／7.3cm／7.3cm／7.2cm／7.2cm、器高の平均値は5.1cm／5.2cm／5.2cm／5.3cmで、個体数は少ないものの、夏敷古窯の碗は、4～5型式の碗の法量に近似することが確かめられる。

皿の計測値の比較

同様に皿は、清水山3号窯6個体、濁池西古窯31個体、南蛇ヶ谷1号窯57個体、蛇ヶ谷6号窯92個体、夏敷古窯3個体の口径、高台径、器高をそれぞれ計測した平均値の比較で、口径の平均値は8.4cm／7.9cm／8.5cm／8.5cm／8.8cm、底径の平均値は4.2cm／4.5cm／5.0cm／5.2cm／5.0cm、器高の平均値は2.3cm／2.1cm／2.1cm／1.7cm／2.4cmである。比較に堪える個体数ではないが、皿についても碗と同様に4～5型式の法量に近似する傾向が認められる。

窯体の再利用時

上の比較から明らかなように、法量などから対比される山茶碗の型式は、他の主要器種が示した型式とは明らかな齟齬を生じている。つまり、山茶碗は本窯において生産されたものではなく、窯の操業時に加えて、その後の窯体再利用時（第1章（2）を参照）に他からもたらされて使用された可能性が高いと判断される。よって、山茶碗の型式内容は、本窯における陶器生産の操業年代の推定に反映させることは適当でないことになる。

羽釜

その他　羽釜は、柴山2号窯、出地田1号窯、金色3号窯、松渕2号窯、松渕12号窯、松渕13号窯、二ノ田7号窯、鎗場・御林D1号窯、鎗場・御林E2号窯、濁池西古窯、蛇廻間古窯など、夏敷古窯周辺の2～3型式の窯でしばしば生産される器種である。ただし、羽釜の生産量そのものは少なく、形態から詳細な編年的位置を導くことはできない。

片口鉢Ⅱ類・陶丸

甕系のいわゆる片口鉢Ⅱ類、陶丸については、いずれも第二段階5型式から顕在化する器種とされるが（中野1994）、夏敷古窯における出土は、ごく例外的ながらも、より以前の段階からそれらの器種が生産されていたことを示す事例として理解したい。

短頸壺・広口長頸瓶

なお、1b型式の山茶碗主体窯においてしばしば生産された短頸壺や広口長頸瓶については、無頸壺とも呼称すべきような個体、小型壺として分類した個体として、著しく退化したような製品がごくわずかに確認されるのみであることから、夏敷古窯においてこれらの器種は生産品目としての位置をほとんど失っていたと考えられる。

小結―夏敷古窯の年代と操業期間

3型式

以上、夏敷古窯の窯体構造、各生産器種は、「赤羽・中野生産地編年」3型式の範疇でおよその理解が可能であることを示した。主体的に生産された甕・広口壺、片口鉢については、新旧の要素をそれぞれ内包した個体が混在することから、一定程度の期間に及ぶ操業も示唆される。さらに、より古相の要素としては、4型式以降に生産が著しく低調となる三筋壺を少なからず生産している点、長頸壺が2型式に通じる型式的特徴を保持する点が認められると同時に、より新相の要素としては、片口鉢Ⅱ類、陶丸を生産している点、すでに窯体が大型化を志向している点を列挙することができる。これらの諸状況を考慮すると、夏敷古窯はほぼ3型式が継続する期間を通じて操業した可能性が考えられる。

編年基準資料

さて、3型式の年代を示唆する編年基準資料として、東京都白山神社経塚の仁平4年(1154)、和歌山県王子神社経塚の保元3年(1158)、大阪府若宮八幡宮経塚の養和元年(1181)、埼玉県利仁神社経塚の建久7年(1196)、山梨県熊野権現社境内秋山経塚の建久8年(1197)の紀年銘経筒を伴う広口壺がある。広口壺の型式は、前三者が2型式、後二者が4型式とされる(中野1994)。また、文治5年(1189)の奥州藤原氏の滅亡後に衰微する岩手県平泉遺跡群において、3型式新相までの常滑製品が出土する一方で、「(4型式の)特徴をもつ壺・甕類は平泉遺跡群では、ほとんど認められない」こと(中野1995b)も3型式の下限の年代を示す有力な材料である。

これらの事例を根拠として、「赤羽・中野生産地編年」3型式に対しては、1175～1190年の年代が付与されている。加えて、中野晴久が指摘するように、若宮八幡宮経塚の養和元年(1181)の紀年銘経筒を伴う広口壺の事例から、2型式が1180年代にまで存続したことを考慮すると、理論上、3型式の継続期間は10年前後にまで圧縮される可能性もある。

操業年代と操業期間

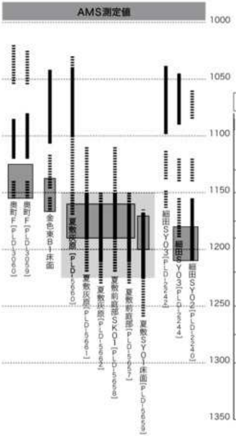
このとき、夏敷古窯の操業が3型式の継続期間におよそ対応するとした先の理解を踏まえるなら、その操業年代は1175～1190年、あるいは1180～1190年で、操業期間は10～15年であったと推定される。1基の窖窯が操業した期間については必ずしも明確ではないが、中野晴久は古窯群の群集状況から10年以内(中野1990b)、藤澤良祐は山茶碗窯における試算から年2回で10～20回程度の焼成回数、すなわち5～10年の操業期間を推定している(藤澤1995)。夏敷古窯が単独窯であったとすれば、10～15年とした操業期間は、窖窯の操業期間としてはやや長いが、窯体には全面的な補修も施されているので著しく不合理なものでもない。ただし、10～15年とした3型式の継続期間は、他の型式における一型式の継続期間が25～50年であることと比較して相対的に短いこと、窯内一括の遺物群でさえ複数型式の要素が混在する現状(中野2006)など、型式の存続期間、一括遺物が内包する属性の変異幅を、単純な理解によって律することにはなお問題も多く、操業年代、操業期間の推定は仮説の域を脱するものではない。

AMS法

そこで視点を変えて、SY01床面、前庭部、灰原からそれぞれ採取した炭化材を対象として実施した放射性炭素年代測定(AMS法)の結果(第3章(1)を参照)をも参照する。なお、炭化材は測定試料として保存状態が良好であったとの所見(パレオ・ラボAMS年代測定グループ、株式会社パレオ・ラボ植田弥生氏による)が寄せられていることは、検討するに好都合である。

さて、今回の測定によって示された年代範囲（1σ暦年代範囲）はそれぞれ、SY01 床面が 1170AD (68.2%) 1225AD、前庭部が 1150AD (35.7%) 1190AD、1160AD (68.2%) 1210AD、灰原が 1040AD(42.3%) 1100AD、1150AD(36.7%) 1190AD、1160AD(68.2%) 1210AD である。これらは灰原の 1 点を除いていずれも近接した年代幅を示し、1170 ～ 1190 年に各年代幅が重複する。この測定結果は考古学的な所見から導かれた年代幅ともほぼ整合する。また、前庭部と灰原の試料と比較して、最終操業時に関係する可能性がある SY01 床面の試料は相対的に新しい年代範囲を示した。出土状況と年代範囲の新古が対応することが示されたことも重要な成果であろう。今後も良好な試料の測定結果の蓄積が望まれるところである。

第12表　編年対比表



型式			編年基準資料など		
常滑	猿投	瀬戸	1091(寛治5年)	平安京左京四条一坊SE8	猿投VII—1型式(山茶碗)
1a	VII—1	第3型式	1125(天治2年)	今宮神社境内四方仏石	常滑1a型式?(三筋壷)
1b	VII—2	第4型式	1131(天承元年)	仁和寺南院創建	常滑1b型式(瓦)
2			1137(保延3年)～	鳥羽東殿建設	常滑1b型式(瓦)
			1154(仁平4年)	白山神社経塚	常滑2型式(広口壷)
			1158(保元3年)	王子神社経塚	常滑2型式(広口壷)
			1181(養和元年)	若宮八幡宮経塚	常滑2型式(広口壷)
3	VII—3	第5型式	1189(文治5年)	奥州藤原氏滅亡	～常滑3型式
			1196(建久7年)	利仁神社経塚	常滑4型式(広口壷)
			1197(建久8年)	熊野権現社境内秋山経塚	常滑4型式(広口壷)
4	VIII—1	第6型式			
5					
6a	VIII—2	第7型式	1259～60(正元年間)	中田池A1号窯	常滑6a型式(陶硯)
6b					
7	VIII—3	第8型式			
		第9型式			

夏敷古窯跡の灰原・前庭部試料は、較正した暦年代範囲で「確からしさの確率が最も高い年代範囲」が1160～1190年に重複した。よって、夏敷古窯の操業の一端は、1160～1190年に求められる可能性が高いと判断される。以下、試みとして、年代範囲の推定幅を30年として各古窯採取試料と対比整合させた。
夏敷古窯の最終操業時に関係する可能性があるSY01床面試料は、「確からしさの確率が最も高い年代範囲」の上限は1170年で、灰原・前庭部試料より相対的に新しく、年代範囲を1170～1200年と推定した。他の古窯採集試料の暦年代範囲はやや不安定で、想定される年代より50～100年古い年代を示すが、年代範囲の下限を起点として単純に30年の年代推定幅を付与して、各型式相互を整合させた。
その結果、半田市奥町F古窯群の山茶碗窯（1b型式）が1125～1155年、金色東B1号窯（2型式）が1132～1162年、夏敷古窯（3型式）が1160～1190年、夏敷古窯最終操業時（3型式新相）が1170～1200年、美浜町細田古窯群（4型式）が1180～1210年の範囲に年代の一端が求められると仮に推定した。

（2）生産の動向

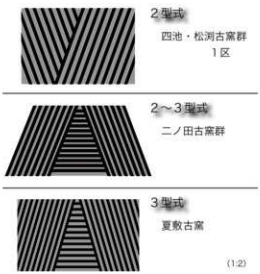
夏敷古窯の調査を通じて注意された中世前期の陶器生産に関係する幾つかの問題を以下に列記しつつ整理しておきたい。具体的には窯体構造と押印文の連関から抽出される生産者集団の実体、特殊器種の生産窯の分布から示される生産体制、生産器種（片口鉢）に反映された山茶碗主体窯と甕主体窯の分離専業化（山茶碗、甕の生産者集団の協業体制）などの問題である。

窯体構造と押印文の連関

窯体構造

前節において、夏敷古窯の窯体構造は、２型式に甕・広口壺の生産を確立した松渕古窯群、二ノ田古窯群など、同じく中部域に分布する甕主体窯の技術系譜を受けたものであることを示した。また、甕に施された押印文についても、窯体間の系譜関係を示唆する事例がある。それは、本報告においてD類とした斜方向の櫛目の組合せを基調とした意匠の原体で、原体そのものは同一ではないものの、類似の意匠は、松渕古窯群、常滑市四池・松渕古窯群、二ノ田古窯群などにおいて共有される。この意匠は、斜方向の櫛目を単に組合せて一単位とするもの（松渕古窯群・四池・松渕古窯群１区など）から、斜方向と横方向の櫛目を組合せて一単位とするもの（二ノ田古窯群）、さらに斜方向と横方向の櫛目によって長方形の区画内を充填して一単位とするもの（夏敷古窯跡）へと連絡する流れが想定される（第116図）。ここに想定した押印文の意匠の系譜的な流れは、すでに示した甕主体窯の窯体構造の系譜関係とも照応する。ただし、２型式に蛇廻間古窯を含む中部域のごく限られた範囲（「柴山・金色周辺の古窯群」中）に認められる連弧文の意匠は（中野1998）、夏敷古窯においては採用されず、系譜の断絶も同時に指摘できる点にも留意する必要がある。

押印文



第116図　斜方向の櫛目を基調とする意匠の系譜

柴山・金色周辺

特殊器種の生産

三筋壷の分布

甕・広口壺と同時に生産された特殊器種についても、夏敷古窯跡と中部域の古窯群には密接な関係を認めることができる。ここでは特に、三筋壷、長頸壷（水瓶）を生産した古窯の分布の様態から幾つかの特徴を指摘する。

三筋壷を出土した古窯は、半島基部域の大府市森岡１号窯や同神明２号窯から半島先端部域の南知多町大井釜山１号窯に広域に分布しつつも、その重心は明らかに半島中部域にある（第13表・第117図）。加えて12世紀後半に一定量の三筋壷を生産した古窯は、先にも述べたように、出地田古窯群、柴山２号窯、蛇廻間古窯、夏敷古窯など、「柴山・金色周辺の古窯群」を含む中部域に集中する。なお、夏敷古窯は３型式、それ以外のいずれもが２型式の古窯、古窯群である。つまり、三筋壷生産の高潮時に同地域が三筋壷生産

柴山・金色周辺

第13表　三筋壷出土窯一覧

所在	No.	古窯名	型式	主要製品
大府市	1	森岡1号窯	2型式	山茶碗
	2	神明2号窯	2型式	山茶碗
知多市	3	翼が丘3号窯	3型式	山茶碗
常滑市	4	鎗場・御林B-2・B-4号窯	3型式	山茶碗・甕
		D-1・D-2号窯		
	5	出地田1～5号窯	2型式	山茶碗・甕
	6	松渕2・21・22号窯	2型式	甕
	7	四池松渕古窯群1・2区	2型式	甕
	8	茨廻間古窯群B地点	2型式	甕
	9	金色東3号窯	6a・6b型式	甕
		B-1・B-2号窯	2型式	山茶碗
	10	柴山1・2号窯	2型式	甕
	11	夏敷古窯	3型式	甕
	12	二ノ田2・4号窯	2・3型式	甕
	13	蛇廻間古窯	2型式	甕
	14	高坂1-2・6号窯	2・3型式	山茶碗・甕
	15	大曽公園1号窯	2型式	山茶碗・甕
	16	長曽1・2号窯	3・4型式	甕
半田市	17	大池1～5号窯	1b・3型式	山茶碗
	18	長成池1号窯	3型式	甕
	19	椎の木1号窯	2型式	甕
	20	奥町F古窯群	2型式	甕
武豊町	21	中田地C-1～5号窯	5・6a型式	山茶碗
南知多町	22	大井釜山1号窯	3型式	山茶碗

第117図　三筋壷出土窯の分布

の中核的な地域であったことは疑いなく、3型式の夏敷古窯は2型式までの中部域における三筋壷の集約的な生産体制を引き継いだと考えられる。

長頸壷（水瓶）の生産
椎ノ木山古窯群周辺

また、長頸壷（水瓶）については、2型式に中部域の南東端付近に位置する椎ノ木山古窯群を中心とする地区で特別に生産されたとする赤羽一郎の指摘がある（赤羽・小野田編1977）。また、長頸壷を出土した2型式の大曽公園1号窯も、椎ノ木古窯群の近在に立地する。一方、3型式には中部域西端の夏敷古窯、あるいは中部域の北東端の鎗場・御林古窯群において長頸瓶の生産が確認されるようになることから、3型式以後、長頸壷の生産は継続しつつも前段階までの集約的な生産体制は解消され、生産域がやや拡散したと理解することも可能であろう。

山茶碗主体窯と甕主体窯の分離専業化

夏敷古窯の窯体構造の編年的位置を考察する過程において、夏敷古窯が甕主体窯として山茶碗主体窯から明確に分離する流れの起点にあることを述べた。続けて、甕主体窯が山茶碗主体（山茶碗・甕併焼）窯から分離専業化する志向性を反映したと思われる事象として、片口鉢Ⅱ類の生産、片口鉢の窯詰め方法を例示する。

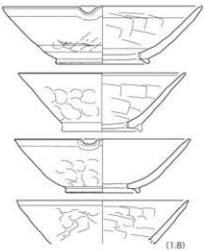
片口鉢Ⅱ類の生産
三郎谷1号窯

夏敷古窯において生産された片口鉢の大部分は山茶碗系のいわゆる片口鉢Ⅰ類であるが、わずかながらも甕（広口壷）系の片口鉢Ⅱ類（第91図431）が生産されていた。すでに三郎谷1号窯において甕の製作に通じる片口鉢Ⅱ類が製作されていたことが知られ（第118図）、「片口鉢Ⅱ類の萌芽」とする評価も与えられていたが（中野1994）、夏敷古窯の片口鉢Ⅱ類は、広口壷の体部下半を直接に製品とした高台を付さない個体で、高台を付した三郎谷1号窯の製品とはまた異なっていた。つまり、個体の特徴から、夏敷古窯の片口鉢Ⅱ類の生産は、より甕（広口壷）の生産に近い位置にあったことが推察される。こ

の推察は、前節において明らかにしたように、三郎谷1号窯の窯体構造と比較して、夏敷古窯が甕主体窯としてより明確に山茶碗主体窯から分離する傾向を見せていたことをも調和する。

片口鉢の窯詰め方法

また、夏敷古窯における片口鉢の窯詰め方法は甕の窯詰め方法に通じる点において、知多市西洞馬古窯群など山茶碗主体窯におけるそれが山茶碗の窯詰め方法に通じる点とは異なっていた。つまり、片口鉢Ⅱ類の生産からも推察したように、夏敷古窯においては、片口鉢における山茶碗の製作志向が山茶碗主体窯のそれと比較して、相対的に希薄であったと解釈される。



第118図　三郎谷1号窯の片口鉢

協業体制

これらの数少ない事例によって山茶碗と甕の生産者の関係を律することはできないが、甕主体窯が山茶碗主体窯から分離専業化しつつあった流れを背景として、片口鉢の生産部門に対する山茶碗の生産者集団と甕の生産者集団の関与のありよう（山茶碗生産者集団と甕生産者集団の協業体制）に何らかの変化の兆候があったことを推定することも不可能ではないと思われる。

小結

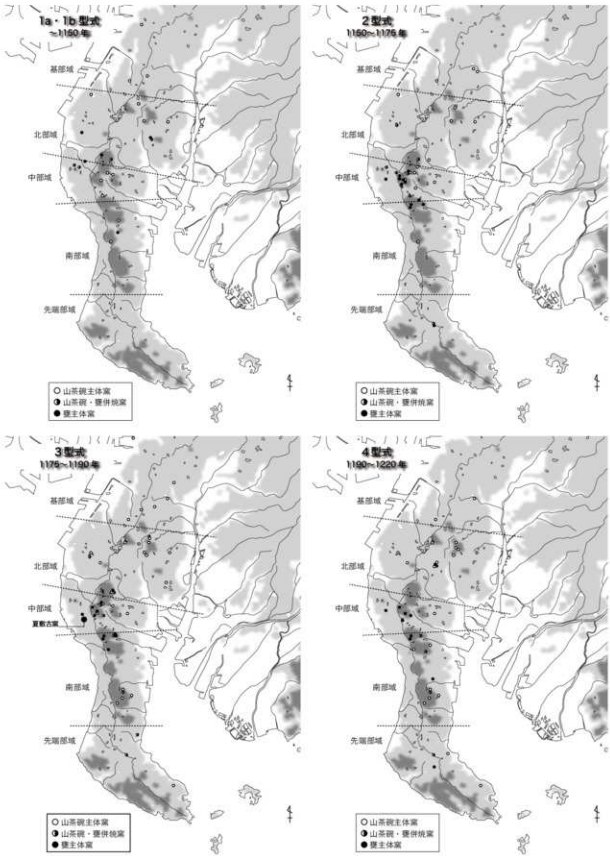
夏敷古窯は、2型式において確立した中部域における甕・広口壺、三筋壺など各器種の生産体制を継承したと理解した。幾つか例示した系譜の流れからは、生産者集団の移動を含めた直接的な関係も推量されてよい。その一方で、2型式における顕著な群集化から離れ、単独（あるいは散在した）立地に変化すること、それと同時に、松洞古窯群、出地田古窯群、柴山古窯群など群集化する古窯群において採用される連弧文も止揚されることなど、継続しない側面についても注意された。これら系譜の不連続は、窯体構造が甕主体窯として析出する流れとも連関して、生産内容、あるいは生産者集団の協業体制が変化しつつあったことを予見したこととも決して無関係ではない。

窯の分布

ただし、知多半島おける窯の分布の変化（第119図）からは、夏敷古窯が操業した3型式の前後に画期的な変化を看取することは難しく、半島内において生産の集約化が加速度的に達成された結論することはできない。より適確には、出地田1号窯などすでに2型式にその存在が確認される「甕の量産を志向する窯」（中野2006）からさらに進んで、夏敷古窯が集約的な甕生産を明確に志向したと評価すべきであろう。つまり、個別生産地単位で、窯体構造の機能向上、器種の分離専業化が求められたと考えられる。さらに理解を進めるなら、同時期、築窯に際しての技術改良や生産品目の決定、生産方式については、支配者層からの強力な規制が作用したというようりはむしろ、生産者集団間において一定の自由な発想、経済性の追求が許容されていたと解釈することも可能であろう。池本正明は床下施設の分布状況から、（窯体の改修）技術の導入が広域を掌握する存在を介していたことを推測するが（池本1998）、3型式以降には床下施設を含めた窯体の付属施設が退要する現象は生産者集団の相対的な自立化を暗示するようでもある。ここに、生産者集団の自立性や経営形態をめぐる論点として提起しておきたい。

甕の量産志向

生産者集団の位置



第119図　各型式における窯の分布

（3）夏敷古窯の特質

前節までにおいて夏敷古窯の生産内容の時代的傾向、生産体制の実体を整理した。以上の内容を踏まえつつ、夏敷古窯の特質を積極的に抽出し、その史的背景の素描を試みることとする。

立地

夏敷古窯は常滑常滑古窯跡群（知多半島古窯跡群）中部域の西端に位置しながらも、沖積地に面した丘陵上に単独で立地する。最初に、夏敷古窯が松洲古窯群、二ノ田古窯群（「柴山・金色周辺の古窯群」）など群集する中部域の甕主体（山茶碗・甕併焼）窯からの系譜を受けながら、それらとは対照的な立地を志向する特徴を起点としてその特質を明確にしたい。

立地と製品輸送

夏敷古窯の立地の背景に関連する重要な要素として、まずは海運を前提とした製品輸送の利便性が想起される。沖積地に面し、汀線にも近い立地は、大型貯蔵容器の搬出に有利であることは容易に想像されるし、広域に流通する広口壺、三筋壺、長頸壺（水瓶）などの特殊器種についても、同様に輸送の利便性が考慮されたのであろう。三筋壺（三筋文系陶器）については、遠隔にありながら有数の消費地である平泉遺跡群において生産地に例がない三筋文横耳四耳壺、突帯付横耳四耳壺などが出土していることから、広域流通を前提とした受注生産が想定されることすらある（八重樫 2001）。また、生産地において三筋壺に規格性が乏しいと指摘されることも、受注生産に傾倒した生産志向を反映した結果であるようにも思われる。あるいは夏敷古窯において出土した口縁部下端に装飾としての刻みを施した他例にない三筋壺（第 69 図 253）は、あるいは受注生産による個体の可能性もある。

広域流通と受注生産

広域流通の志向性

逆に、夏敷古窯跡では片口鉢が大量に出土するものの、山茶碗の出土はごく少なく、その生産はごく低調であったことは明らかである。この事実も夏敷古窯の広域流通に対する志向性を反映した結果であろう。

上白田古窯群
茨廻間古窯群Ｂ地点

なお、夏敷古窯と同様に中部域の西端、沖積地に近い丘陵上に立地する古窯として、常滑市上白田古窯群、茨廻間古窯群Ｂ地点がある。上白田古窯群は、平安京の仁和寺北院、仁和寺南院、法金剛院に瓦を供給した１ｂ型式の瓦陶兼業窯（柴垣 1990）で、茨廻間古窯群Ｂ地点は夏敷古窯と同じく多数の三筋壺を生産したことが特徴的な２型式の甕主体窯である。なお、茨廻間古窯群Ｂ地点は、生産器種に山茶碗がごく少ない特徴も夏敷古窯に共通する。これらの古窯が操業したのは、夏敷古窯の前段階ではあるものの、瓦や三筋壺など、広域流通を前提とした製品を少なからず生産していることは、夏敷古窯の特質を理解するうえで注意される。折しも夏敷古窯が操業したと推定される 12 世紀後半は、平泉遺跡群など遠隔地への製品供給が本格化していた時期である。その流通戦略において夏敷古窯が占める位置は重要であったに違いない。

操業停止の一因

また、先の編年的考察において、夏敷古窯が 1175 ～ 1190 年に操業したことを推定した。10 ～ 15 年の一世代にも満たない短期間で、夏敷古窯とその周辺地区での操業が停止し、その後の築窯が著しく低調化したのは、文治５年（1189）に奥州藤原氏が滅亡し、海運を前提とした平泉遺跡群への製品の供給が停止したこととも無関係ではなかったようにも思われる。

燃料材

樹種同定　窯の立地と不可分の要素として燃料材の問題がある。窯跡に残された燃料材の残渣である炭化材について、これまでに知多半島とその周辺において検出された樹種の同定結果を集成し、第120図・第14表として示した。これらの同定結果を受けて植田弥生は、12世紀における知多半島の陶器生産にはシイノキ属が主要燃料材として利用され、その後シイノキ属の無秩序な伐採によって周辺の植生が二次林化し、13世紀以降は主要燃料材がマツ属複維管束亜属に移行する構図を提示している（植田2001など）。その構図を示す典型的な事例が中部域の茨廻間古窯群（2、4型式）、常滑市柴山F古窯（4型式）・同椎池古窯群（5～6a型式）、南部域の武豊町中田池古窯群（3・4、5・6a型式）などの同定結果である。

燃料材の樹種

二次林化

しかし、夏敷古窯の各地点において検出された14点の炭化材の樹種は、第3章（2）において報告したように、マツ属複維管束亜属によって占められていた。夏敷古窯周辺においては、先行する時期、あるいは同時期の中世窯は周知されず、周辺に窯が群集していたとも考えにくい。つまり、燃料材が周辺の山林から供給されたのであれば、シイノキ属など自然林に近い状態の山林から伐採された燃料材が使用されたはずである。本報告を含めて、幾つかの知多半島に分布する古窯の樹種同定の報告を手掛けた植田弥生も、夏敷古窯におけるマツ属複維管束亜属の利用が、従来知られていた常滑古窯群における樹種利用とは異なることに注目し、立地環境、焼成品の特徴、燃料材の流通範囲などについても考慮する必要性を述べている。このとき、先に例示した上白田1号窯（1b型式）においてマツ属複維管束亜属が卓越し、茨廻間古窯群B地点（2型式）においてもマツ属複維管束亜属が検出されていること、つまり、沿岸近くに立地する中世窯の燃料材にはマツ属複維管束亜属が普遍的に使用される傾向についても同じく注意される。

マツ属複維管束亜属

上白田1号窯

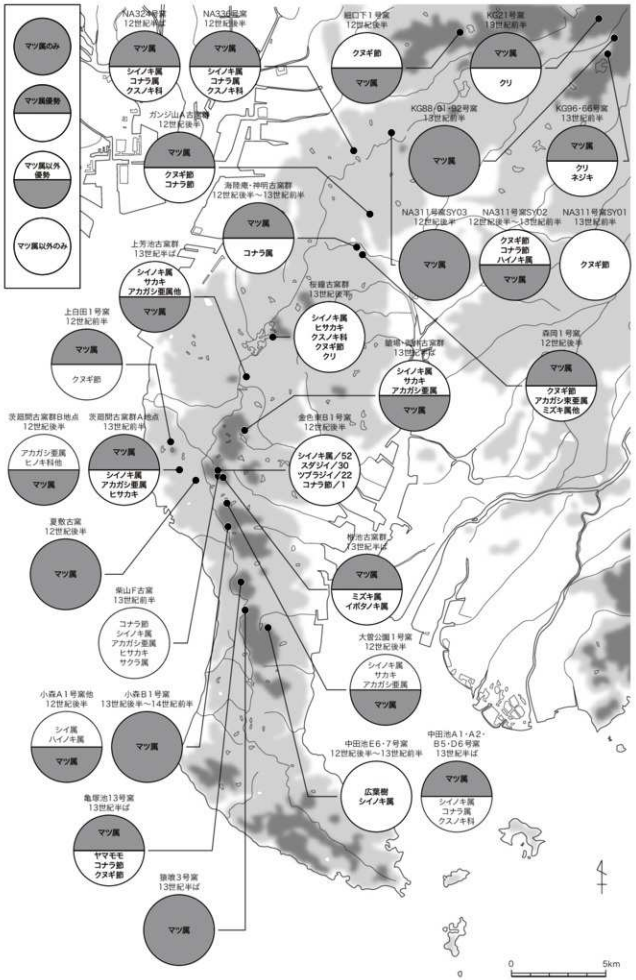
茨廻間古窯群B地点

燃料材流通の可能性　さて、前項において類推したように夏敷古窯の立地が製品輸送とも無関係でなかったとすれば、植田が指摘するように燃料材が流通していた可能性についても改めて考慮する必要がある。中野晴久は、近世の窯は常滑地域（旧常滑町域）でも沿岸部に近い丘陵上に立地することが多いことから、そこで消費する燃料の多くは海運によって輸送されていたと理解し、さらに中世後期と近世の窯の立地が類似することから、燃料材の輸送体制が中世後期に成立したことを推測する（中野1990）。赤羽一郎も、中世窯の移動は燃料の確保と不可分とする前提から、中世後期における常滑地域への陶器生産の集約化の背景の一つとして、燃料材となる薪の枯渇を指摘する（赤羽1990）。この赤羽の言説も燃料の集約的な利用を想定してのことである。

燃料材の流通を示す史料　このとき、中世における燃料材の輸送を推測する手掛かりとして注目されるのが、文政5年（1822）の『尾張徇行記』（『名古屋叢書続編』第八巻）における北条村と瀬木村の記載内容である。

尾張徇行記

> 一此村（北条村）ハ西浦海道筋ニ民戸軒ヲ連一村立ノ所ナリ、農業ノ外瓶細工ヲ産業トシ、又船カセキヲシ商貨交易段盛ノ地ナリ、此村高ニ准シテハ戸口多ク他村ノ田畝ヲ承佃スルト也、甕ヲ焼産業トスル者九十戸ホトアリ、竈ハ四立半アリ、一立ヲ十六戸ホトツヽニテ所持セリ、土ハ多屋種水ノ山中ニテ取来リ松葉ハ熊野又ハ山州ノ山ヨリ買ヨスルト也、甕ハ名古屋美濃三河遠江志摩ノ国其外ヘモ売ツカハシ、播



第120図　知多半島とその周辺における燃料材の樹種

第14表　知多半島とその周辺における燃料材の樹種一覧

古窯	所在地	型式 〈主要製品〉	時期	検出樹種	文献
ガンジ山A古窯群	大府市桃山町	3型式 〈山茶碗〉	12世紀後半	マツ属複維管束亜属34＞クヌギ節32＞コナラ節8	植田弥生2000「炭化物について」『ガンジ山A古窯跡群』大府市文化財調査報告書第4集　大府市教育委員会
海陸庵・神明古窯群	大府市古田町海陸庵	2～4型式 〈山茶碗〉	12世紀後半～13世紀前半	コナラ属コナラ亜属26＞マツ属6	木方洋二1996「出土炭材の樹種同定」『海陸庵古窯址群　神明古窯址群』大府市文化財調査報告書第2集　大府市教育委員会
森岡1号窯	大府市森岡町	2型式 〈山茶碗〉	12世紀後半	マツ属複維管束亜属多数＞クヌギ節3・アカガシ亜属3＞クリ2・ミズキ属・2・エゴノキ属2	植田弥生1999「森岡第1号窯跡出土炭化材の樹種同定」『森岡第1号窯跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第85集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
桜鐘古窯群	知多市佐布里字奥茂長田	6a～6b型式 〈甕〉	13世紀後半	シイノキ属6＞ヒサカキ6＞クスノキ科1・クヌギ節1・クリ1	池本正明・植田弥生2006「出土炭化材の樹種同定」『桜鐘古窯群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第153集　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
上芳池古窯群	阿久比町草木字上芳池	5～6a型式 〈甕〉	13世紀半ば	シイノキ属6＞サカキ3＞アカガシ亜属2＞マツ属複維管束亜属1・コナラ節1・ハイノキ属1	パリノ・サーヴェイ株式会社1990「材同定」『上芳池古窯址群発掘調査報告書』阿久比町教育委員会
鎗場・御林A5・B3・F1号窯他	常滑市久米字鎗場～御林	5～6a型式 〈山茶碗・甕〉	13世紀半ば	シイノキ属8＞マツ属複維管束亜属2＞クマシデ1・クヌギ節1	パリノ・サーヴェイ株式会社1988「知多古文化研究会　上白田古窯発掘調査に伴う炭化材同定」『上白田古窯址群』常滑市文化財調査報告第16集　常滑市教育委員会
上白田1号窯	常滑市金山字上白田	1b型式 〈山茶碗・甕〉	12世紀前半	マツ属複維管束亜属6＞クヌギ節3	パリノ・サーヴェイ株式会社1988「知多古文化研究会　上白田古窯発掘調査に伴う炭化材同定」『上白田古窯址群』常滑市文化財調査報告第16集　常滑市教育委員会
茨廻間古窯群B地点	常滑市字多屋字茨廻間	2型式 〈甕〉	12世紀後半	アカガシ亜属＞マツ属複維管束亜属＞ヒノキ科・サカキ・ミズキ属・ハイノキ属	植田弥生2001「茨廻間古窯群出土炭化材の樹種同定」『茨廻間古窯群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第24集　常滑市教育委員会
茨廻間古窯群A地点		4型式 〈甕〉	13世紀前半	マツ属複維管束亜属＞シイノキ属＞アカガシ亜属・ヒサカキ	
夏敷古窯	常滑市夏敷	3型式 〈甕〉	12世紀後半	マツ属複維管束亜属14	植田弥生2007「夏敷古窯跡出土炭化材の樹種同定」『夏敷古窯跡　蛇廻間古窯跡』愛知県埋蔵文化財調査報告書第152集　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
金色東B1号窯	常滑市金山字金色	2型式 〈山茶碗〉	12世紀後半	シイノキ属52＞スダジイ30＞ツブラジイ22＞コナラ節1	パリノ・サーヴェイ株式会社2004「金色東B古窯群1号窯に関する自然科学分析」『金色東B古窯群』常滑市文化財調査報告書第36集　常滑市教育委員会
柴山F古窯	常滑市柴山	4型式 〈甕〉	13世紀前半	コナラ節・シイノキ属・アカガシ亜属・ヒサカキ・サクラ属	植田弥生2005「柴山F古窯出土炭化材の樹種同定」『椎池古窯跡群・柴山F古窯跡』常滑市文化財調査報告書第28集　常滑市教育委員会
椎池古窯群	常滑市椎池	5～6a型式 〈甕〉	13世紀半ば	マツ属複維管束亜属＞ミズキ属＞イボタノキ属	植田弥生2005「椎池古窯群3号窯跡出土炭化材の樹種同定」『椎池古窯跡群・柴山F古窯跡』常滑市文化財調査報告書第28集　常滑市教育委員会
大曽公園1号窯	常滑市大曽町	2型式 〈山茶碗・甕〉	12世紀後半	シイノキ属多数＞マツ属複維管束亜属＞サカキ≧アカガシ亜属	植田弥生2001「大曽公園古窯跡群出土炭化材の樹種同定」『大曽公園古窯跡群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第25集　常滑市教育委員会
小森A1号窯他	常滑市樽水字小森	2～3型式 〈甕〉	12世紀後半	シイ属4＞ハイノキ属3＞マツ属複維管束亜属1	青木修1991「常滑市小森古窯出土炭化材の樹種同定」『長谷古窯址発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第20集　常滑市教育委員会
小森B1号窯		6a～7型式 〈甕〉	13世紀後半～14世紀前半	マツ属複維管束亜属1	
亀塚池13号窯	常滑市大谷字北原	5～6a型式 〈山茶碗・甕〉	13世紀半ば	マツ属複維管束亜属147＞ヤマモモ19＞コナラ節17＞クヌギ節14	パリノ・サーヴェイ株式会社1994「亀塚池13号窯における燃料材の種類」『常滑市民俗資料館研究紀要』6　常滑市教育委員会
猿喰3号窯	常滑市小鈴谷字猿喰	5～6a型式 〈山茶碗〉	13世紀半ば	マツ属複維管束亜属2	青木修1991「常滑市猿喰古窯出土炭化材の樹種同定」『長谷古窯址発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第20集　常滑市教育委員会
中田池E6・7号窯	武豊町富貴字中田・樽田・黒山	3～4型式 〈山茶碗〉	12世紀後半～13世紀前半	広葉樹5＞シイノキ属1	パリノ・サーヴェイ株式会社1993「中田池古窯址群出土炭化物樹種同定報告」『中田池古窯址群その2』武豊町文化財調査報告第9集　武豊町教育委員会
中田池A1・A2・B5・D6号窯		5～6a型式 〈山茶碗・甕〉	13世紀半ば	マツ属複維管束亜属8＞シイノキ属4＞コナラ属3＞クスノキ科2＞広葉樹1	
NA324号窯	名古屋市緑区大高町東植松	Ⅶ—2 〈山茶碗〉	12世紀半ば	マツ属複維管束亜属＞コナラ節・クヌギ節・クリ	植田弥生1998「炭化材の樹種同定」『大高地区遺跡発掘調査報告書　NA207号窯　NA324号窯群　NA336号窯群』名古屋市教育委員会
NA336号窯	名古屋市緑区大高町北南休	Ⅶ—3 〈山茶碗〉	12世紀後半	マツ属複維管束亜属＞コナラ節・クヌギ節・クリ	
NA311号窯SY03	名古屋市緑区大高町高根	Ⅶ—3 〈山茶碗〉	12世紀後半	マツ属複維管束亜属19	池本正明・植田弥生2005「出土炭化材の樹種同定」『NA311号窯』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第133集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
NA311号窯SY02		Ⅶ—3～Ⅷ—1 〈山茶碗〉	12世紀後半～13世紀前半	クヌギ節10＞マツ属複維管束亜属3＞コナラ節3＞ハイノキ属1	
NA311号窯SY01		Ⅷ—1 〈山茶碗〉	13世紀前半	クヌギ節17	
細口下1号窯	名古屋市天白区中平	Ⅶ—3 〈山茶碗〉	12世紀後半	クヌギ節13＞マツ属複維管束亜属3	池本正明・植田弥生1999「出土炭化材の樹種同定」『細口下1号窯　鳴ノ地古窯　高針原1号窯』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第61集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
KG21号窯	三好町福谷字根浦	Ⅷ—1 〈山茶碗〉	13世紀前半	マツ属複維管束亜属多数＞クリ1	植田弥生2001a「K-3・K-G-21の出土炭化材の樹種同定」『三好根浦特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書(K-3・K-4・K-G-21)』三好町教育委員会
KG88・91・92号窯	三好町明知字後田	Ⅷ—1 〈山茶碗〉	13世紀前半	マツ属9	木方洋二1996「出土材の樹種同定について」『県営北部堆地帯総合土地改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』三好町教育委員会
KG96・66号窯	三好町苗生字曽和	Ⅷ—1 〈山茶碗〉	13世紀前半	マツ属複維管束亜属11＞クリ1・ネジキ1	植田弥生2001「K-G-66・96出土炭化材の樹種同定」『北部堆地高工区曽和地内埋蔵文化財発掘調査報告書(K-G-66・67・68・95・96・97・99)』三好町教育委員会

州赤穂ヘハ塩ノタラシ瓶ヲ焼售ツカハスト也、此北条瀬木常滑ノ三村ヨリ出ス甕ヲ総テ常滑焼ト称ス、又此村ニ波不知船五十艘ホトアリ、其中二十二艘ホトハ熊野浦ヘ運漕シテ薪ヲ積来レリ、其余ハ甕ヲツム船モアリ、是種々商ヒ物ヲ入合セニツミ総テ運漕ヲ以テ生産トス、又酒屋ニ戸アリ江戸伊勢ノ内ヘ積送レリ、覚書ニハ小船二艘トアリ、サレハ往昔ヨリハ運漕ノ生産盛ニナレリ

一此村（瀬木村）ハ北条村ヨリ古キ所ニテ元北条村ハ瀬木村ヨリ出ル也、サレハ海上守番所ノアル山ヲ瀬木山ト云モ宜ナル乎、民屋ハ北条村ト一ツヽキニアリ、此村ハ北条常滑トハチカヒ小百姓ハカリ也、一体高ニ準シテハ戸口多ク個力足レリ、甕釜先年二本立ナリシカハ今ハ一本立ニナリ細工人ハ五人アリ、又船カセキヲスル者モアリテ波不知船十一艘所持シ、薪松葉或ハ甕ヲ積ミ運漕シ生産トスルナリ、藻草ハ海浜ニテ歩行ニテ採ル故漁採船ハナシ

これらの記述からは、近世には「波不知（イサバ）船」と呼ばれる荷船が、常滑焼の甕（瓶）と燃料を輸送したことが知られる。綿貫友子はこの記述を参考として、中世における外洋航海船による大型廻船、伊勢湾内を航行する小廻船による陶器と燃料材の輸送を類推した（綿貫 1993）。村瀬正章も綿貫と同様の理解から、中世において燃料材が輸送されていたことを類推している（村瀬 2004）。

今切湊出船証文

また、寛文 10 年（1670）の今切湊の出船・入船の証文（『新居町史』第八巻）には、

指上申手形之事

船主
一尾州常鍋（滑）舟壱艘かこ弐人乗　佐左衛門㊞
新居城町宿
九内右衛門㊞

右之舟瓶を積、五月十二日ニ当湊へ入、海辺地ニ而払、真木□（詰カ）積只今出舟仕ニ付、御法度之女・鉄炮其外何ニ而も不審成荷物積不申候所、実正ニ御座候、積申由脇ゟ訴人御座候ハ何様ニも曲事ニ可被仰付候、為後日手形ニ加判差上申候、為後日手形ニ加判差上申候、仍如件、

新居町庄屋　八郎兵衛㊞
同　六郎右衛門㊞
同　武右衛門㊞
同　市三郎㊞
同所問屋　九郎左衛門㊞

寛文十年戌七月九日
藤田清兵衛殿
服部久左衛門殿

とあって、「船主佐左衛門」が水主数２人乗の荷船で、行き荷を「瓶」、帰り荷を「薪」としていたことが記されている。高部淑子は、寛文10年（1670）～明和元年（1764）今切湊の出船・入船の手形と、宝暦２年（1752）～明和８年（1771）の「新居町方記録」（『新居町史』第五巻）に記された常滑の荷船の基本的な運行形態が、往路で常滑焼を輸送し、復路で薪を輸送した佐左衛門船を典型としていたことを述べている（高部 2005）。

新居町方記録

北条村　萬覚帳

その一方、寛政 11 年（1799）の北条村「萬覚帳」（『常滑窯業史』）には、元禄７年（1694）

5月9日の項に

覚

（前略）

一、松葉八千八百弐拾束

代金拾両弐分　但シ百文ニ十六束八分弐尺廻リ

金〆拾壱両ト弐貫九百三十文

（中略）

セキ庄屋
六郎右衛門
北条庄屋
勘左衛門
ヲク条庄屋
仁左衛門

元禄七年戌五月九日

御殿様へ上ル跡

御取次御台所勘定奉行

長坂留右衛門殿

（後略）

覚

（前略）

金弐両壱分　松葉代

此利足段々ニかゝり申候

弐百文 藻代 五十文火箸木代

五十文　口当本

かまうらふさき

からかめ代

〆弐両壱分三百文

此外酒代等段々入用御座候

（中略）

元禄十二年　庄や

卯十二月　与頭

吉田権右衛門殿へ上ル

とあって、「松葉八千八百二拾束」を「代金拾両弐分」で購入したことと、元禄12年（1699）12月の項に「金弐両壱分」を「松葉代」としたことが記されている。これらは燃料材（松葉）を外部から購入していたことを示す史料であるが、「盛田家文書」（『常滑市誌』文化財編、『盛田家文書目録』上・下巻）には、村内（小鈴ヶ谷村）の松山から枝下し松葉三万束内外を世儀（瀬木）村や北条村の常滑焼窯元に送付したことが記されているから、近隣の山林から燃料が供給される場合もあったことも分かる。

盛田家文書

『尾張徇行記』等に記された製品と燃料の流通形態を中世前期に直接には投影できないが、中世前期の伊勢湾内における燃料材の流通を示す史料として、建仁3年（1203）の「官宣旨（伊勢微古文府二）」（『鎌倉遺文』一四〇〇）がある。

建仁3年　官宣旨

左辯官下 伊勢太神宮

仰下當宮領志摩國國崎神戸内永停止 [(麻生カ)□] 浦住人壹志守房濫妨、於所押取供祭船

并勝載物等、付同意輩致解謝、令糺返 [□]、於縁者注申守房在所事、

右、得祭主神祇大副大中臣能隆卿去七月廿日解状□、□大神宮司同日解偁、禰宜等同月廿一日注文偁、得彼所司等今月日解状偁、謹検案内、相佐須庄住人等請□神戸船一艘、積塩木為交易漕出之刻、遇暴風、於船□者寄付麻生浦、至于水手者、暫歸向住所之間、彼守房相具子息二人・聟一人、盗取件船并勝乗薪畢、又當神戸住人眞光之船付置同浦之處同以盗取之、所犯旨已如海賊、仰守房伐亡神戸内山木、押取供祭船、盗取塩木、陵轢神人事、可被糺断罪之由、度々経言上之處、下宣旨遣官使、雖被召其身、守房違背論言、對捍詔使之條、罪科不経、適雖参洛、不曾沙汰、竊逃下畢、先日之狼藉未被断罪之故、彌所成此犯也、麻生浦者、自當神戸参大神宮之要路也、而守房云海上云山中、依制止其路、神戸神人輙不得住之間、難備進二宮朝夕御饌料・荷前御蚫并恒例供祭者也、凡所行之旨言語道断也、罪科既重疊、糺断何(不脱カ)被拘、守房誇自慢致狼藉、不従官使之催、然者仰武家可被召進其身哉、望請二宮廳裁、早経次第上奏、糺断罪科、被糺返祭船并勝裁薪、令勤進色々神役矣者、仰件守房濫行事、度々奏聞之處、糺断不早之間、重致狼藉之由、有此愁、前後所為其科彌重、然則早経上奏、且糺断所當罪科、且糺返供祭船等、穏欲被致恒例神役者、二所太神宮使等去九月廿六日注文偁、當神戸者、忝皇太神宮御垂跡昔、為國造貢進地、自古(至脱カ)于今神役厳重、未聞人間執論、謂其四至者、東限大海、南限奈久佐濱、西限大石淵滑石、北限白瀬上山、谷峰草木分通海者、鳥石一島、北堺如本文書堺也、而近年守房不憚神威、妄巧無道、乱入四至内毛鳥黒島、至自由狼藉、并依切亡山木、就彼所司等之訴、被宣旨、雖召其身、對捍詔使、更不参洛、爰去四月、仰齋宮寮家、適召上其身、可對決理非之由、被宣下之後、遁對決逃下、猶施自由狼藉、押取供祭役船二艘勝載物等畢、因茲重言上之處、下宮使被召上於記録所、可遂對決之由宣下之間、又以逃失畢、乍進奉、不経一決、両度逃隠、違背勅定、蔑爾神威、罪科旁重、然則於守房并子息二人者、任度々神宮解状、禁獄其身、永被絶向後濫妨、至于船并勝載物等者、付守房縁坐同意連署之輩、至承前之解射、早糺返、欲被叶神役者、仍相副言上如件者、大納言藤原朝臣忠良宣、奉勅、國崎神戸内永停止守房等濫妨、且於所押取之船并勝載物等、付同意輩致解謝(謝)、令糺返其物、於縁者令注申守房在所者、宮宜承知、依宣行之、

建仁三年十一月四日 大史小槻宿禰(花押)

権右中辨藤原朝臣(花押)

この記事には、「(答志郡) 相佐須庄住人等」が「積塩木為交易漕出」したとあり、塩焼き用の薪が伊勢湾内を流通していたことを示している。燃料材の使用量からしても、製塩と陶器生産を同列に扱うことはできないが、参考として例示する。

マツ材の選択利用　陶器生産の燃料としては、高温になり、火焔が長くて煤の出が少ないマツ材が最適とされるが（神崎1982）、山口慶一・千野裕道は古代から近世にかかる燃料材の樹種を全国的に調査することによって、窯業の影響による二次林化は極端なものではなく、マツ材の選択利用は近世初頭まで行われていなかったとする結論を導いた（山

口・千野1990）。しかし、本報告における樹種の同定結果を踏まえ、史料なども参考としつつ、燃料材が流通した可能性をも考慮するなら、近世以前におけるマツ材の選択利用についても改めて問題が提起されることになる。というのも、夏敷古窯の窯体構造において、その規模が大型化し、床面傾斜が緩慢化する背景に、燃料材として幅の長く伸びるマツ材が輸送によって賄われていたことが関係していた、つまり、マツ材の選択利用が介在していたことが考慮されるからである。

窯体構造の変化

中野晴久も「二次林としての松林の成長が窯体構造の転換をもたらした可能性」をすでに示唆しつつも（中野1995）、窯体の大型化とマツ材の検出例の増加が明確に相関しないとして、焼成段階によって使用する樹種が異なる、つまり、発掘調査時に検出される炭化材の残滓が、実際に使用された燃料材をそのまま反映しないことに注意を向けている（中野2006）。また、池本正明・植田弥生はＮＡ311号窯など、築窯時からすでにマツ属複維管束亜属を利用し、その後自然林から伐採した燃料材を利用したと想定される事例を報告し、燃料材の選択には、焼成する製品を考慮した燃料材の選択、山野の入会権など、より複雑な事情が介在していた可能性を示唆している（池本・植田2005）。

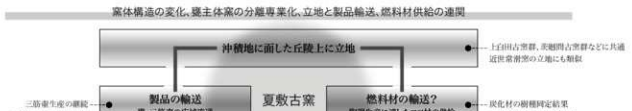
いずれにせよ、自然林が二次林化する過程を樹種同定結果から復原する従来の単純な論法、試料に対する無批判な態度が許されないことは確かである。今後、より多くの事例を集積する必要があることは他言を要しないが、中野の注意にも従うなら、それらの事例については、生産の場面における作業内容をも意識した出土情報が盛り込まれる必要がある。

小結　史料に記されたような製品と燃料材の輸送体制が、中世前期に成立していたとするのは早計であるが、夏敷古窯において検出された炭化材の樹種同定結果は、燃料材が供給されていた可能性を提起する事例として注目される。夏敷古窯の立地と生産器種、さらにその窯体構造の特徴をも加味するなら、その蓋然性はさらに増すことになる。この事例の評価は、中世海運史の総体的な評価とも決して無関係ではありえない。

中世海運史

同時に、この章を通じて述べさたった窯体構造の変化―本章（1）、生産器種の内容と生産者集団の分離専業化、消費地の動向―同（2）、窯の立地と群集化、燃料材の選択利用―同（3）のいずれもが、密接に相互連関しつつ（第121図）、夏敷古窯の特質を規定していたことを展望することも可能であろう。その特質は、窯業生産の中世的展開過程の一断面でもある。

窯業の中世的展開



第121図　夏敷古窯を構成する特質

（4）まとめ

甕主体窯

中世常滑焼の古窯である夏敷古窯は、伊勢湾に面した平野側に単独立地する甕主体窯で、窯体構造や生産器種の諸特徴から、「赤羽・中野生産地編年」における３型式に対比し、

操業年代

操業した年代を12世紀後半、操業した期間を1175～1190年の15年間と推定した。また、この年代を放射性炭素年代測定（AMS法）によって観測できた意義も大きい。

窯体

窯体の規模は、現存する長さ約11.5m、焼成室の最大幅約3.0mで、窯体は同時期の他の窯体と比較しても、より大型化を志向している点に特徴がある。窯体の規模と独立した立地は決して無関係ではないと思われ、増大する甕・壺類の需要に対して、従来の「１基あたりの生産量は少量ながら、より多くの窯で壺甕類の生産を行う」生産体制ではなく、単独の窯でより多くの壺・甕類を生産することが志向された（中野2001など）ものと理解したい。とするなら、甕主体窯と山茶碗主体窯に規模の差が顕在化し、生産者集団の分離専業化が進展するのは５型式、13世紀半ばとされるが、その萌芽、あるいは起点が夏敷古窯にあったとすることもそれほど不合理ではない。それは、夏敷古窯において山茶碗の生産がごく低調であったことからも推測される。

立地の特質

また、その立地については、製品輸送の問題が関与していた可能性を指摘し、炭化材の樹種同定結果と幾つかの史料を参考としつつ、燃料も同時に輸送されていた可能性を指摘した。つまり、夏敷古窯の立地には、流通の動向が大きく反映されていたと考えられる。と同時に、夏敷古窯は流通までを含めたより合理的な生産体制を志向したと理解することも可能である。

生産器種

生産された器種は、甕・広口壺、三筋壺、長頸瓶、羽釜、片口鉢、山茶碗などで、前段階の２型式に生産された器種の多くを継承し、特定の器種を集約的に生産する意図は概して希薄である。特に三筋壺については、前段階から一貫した生産が継続されていること、製品に規格性が乏しいことに非集約的な生産志向がよく反映されている。一方で、ごく例外的ながら、甕・広口壺系の片口鉢（片口鉢Ⅱ類）、陶丸も生産されていた。これらは５型式以降に顕在化する器種である。つまり生産内容については、原則として前段階からの流れが踏襲されながらも、同時に生産器種の刷新に向けた準備が整えられつつあったことも見逃すわけにはいかない。

中世の陶器生産と夏敷古窯

５型式、13世紀半ばには、生産地の分布、窯体構造、生産内容などによって示されるように、常滑古窯跡群の生産体制は大きな変革を経験する。夏敷古窯が操業していた段階には、その生産体制の刷新に向けた変化が顕在化しつつあったと考えられるが、夏敷古窯が操業を停止する前後には、平泉遺跡群の廃絶に象徴される消費地の動向をも敏感に反映して、生産、流通戦略の転換が促されたのであろう。つまり、中世常滑窯跡群の構造変革の起点に夏敷古窯は存在したのである。

標識窯

いずれにせよ、常滑古窯跡群の標識窯たりうる夏敷古窯について、保存状態が良好な窯体と周辺の付帯施設を調査し、生産器種の具体的内容にかかる情報を整理した意義は大きい。その調査成果は、中世陶磁史のみならず、ひいては中世の生産流通史、社会史に大きく貢献することにもなるであろう。

文献

赤羽一郎1984『常滑焼―中世窯の様相―』考古学ライブラリー23　ニュー・サイエンス社
赤羽一郎1990「常滑窯をめぐる若干の考察」『知多半島の歴史と現在』№2　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房
赤羽一郎・小野田勝一編1977『日本陶磁全集8　常滑 渥美』中央公論社
池本正明1998「灰釉系陶器窯の床下施設について―細口下1号窯の事例を中心に―」『年報』平成9年度　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
池本正明・植田弥生2005「出土炭化材の樹種同定」『NA311号窯』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第133集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
市橋勝・尾崎久弥・佐々木隆美・所三男編1969『名古屋叢書続編』第八巻　尾張徇行記（五）　名古屋市教育委員会
岩崎鐵志・渡辺和敏1986『新居町史』第八巻　近世資料四　宿方・地方資料　新居町
植田弥生2001「茨廻間古窯群出土炭化材の樹種同定」『茨廻間古窯群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第24集　常滑市教育委員会
神崎宣武1982『日本人の生活と文化4　暮らしの中の焼きもの』ぎょうせい
柴垣勇夫1990「仁和寺とその周辺出土の尾張産瓦」『愛知県陶磁資料館研究紀要』9　愛知県陶磁資料館
杉崎章1981「常滑古窯製品の編年」『高坂古窯址群』常滑市文化財報告第10集　常滑市教育員会
杉崎章・中沢三千夫1974『資料』『常滑窯業史』常滑市
高部淑子2005「新たな尾州廻船研究に向けて」『知多半島の歴史と現在』№13　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房
高牧実1983『盛田家文書目録』上巻　財団法人鈴渓学術財団
高牧実1983『盛田家文書』『常滑市誌』文化財編　常滑市
高牧実1987『盛田家文書目録』下巻　財団法人鈴渓学術財団
竹内理三編1972『鎌倉遺文』古文書編第三巻　東京堂出版
中野晴久1983「知多半島古窯址群における山茶碗の研究―その編年に関する試論―」『常滑市民俗資料館研究紀要』I　常滑市教育委員会
中野晴久1986「鍛場・御林古窯址群の編年的研究」『知多古文化研究』2　知多古文化研究会
中野晴久1990a「三筋碗・その造形と意味をめぐって」『常滑市民俗資料館研究紀要』IV　常滑市教育委員会
中野晴久1990b「中世窯業産地としての知多半島」『知多半島の歴史と現在』№2　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房
中野晴久1992「中世知多古窯址群の押印文―ミクロ流通史のための予備的研究―」『知多半島の歴史と現在』№4　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房
中野晴久1994「赤羽・中野「生産地における編年について」」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
中野晴久1995 a「知多古窯址群の研究（3）」『知多古文化研究』9　知多古文化研究会
中野晴久1995 b「常滑焼編年作業と今後の課題」『考古学ジャーナル』№396　ニュー・サイエンス社
中野晴久1995 c「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
中野晴久1998「 知多古窯址群の研究（4）～工人集団に関する覚え書き～」『常滑市民俗資料館研究紀要』VIII　常滑市教育委員会
中野晴久2001「まとめ」『大曽公園古窯跡群発掘調査報告書』常滑市埋蔵文化財調査報告書第25集　常滑市教育委員会
中野晴久2006「知多半島の中世群集窯に関する素描」『伊勢湾考古』20　知多古文化研究会
楢崎彰一1967「中世窯業の成立と展開」『日本の考古学VI　歴史時代（上）』河出書房新社
楢崎彰一1978「初期中世陶における三筋文の系譜―第1部 三筋文系陶器とその編年―」『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV　史学25　名古屋大学文学部
日本福祉大学知多半島総合研究所1994『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
藤澤良祐1995「山茶碗の生産体制」『常滑焼と中世社会』小学館
村瀬正章2004『伊勢湾海運・流通史の研究』法政大学出版局
八重樫忠郎2001「東北における初期中世陶磁器の分布」『都市・平泉-成立とその構成-』（日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集）日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会
山口慶一・千野裕道1990「マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について」『研究論集』VIII　財団法人東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター
渡辺和敏1983『新居町史』第五巻　近世資料一　新居町町方記録　新居町
綿貫友子1993「尾張・参河と中世海運」『知多半島の歴史と現在』№5　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房

Ⅲ　蛇廻間古窯跡

第1章　遺構

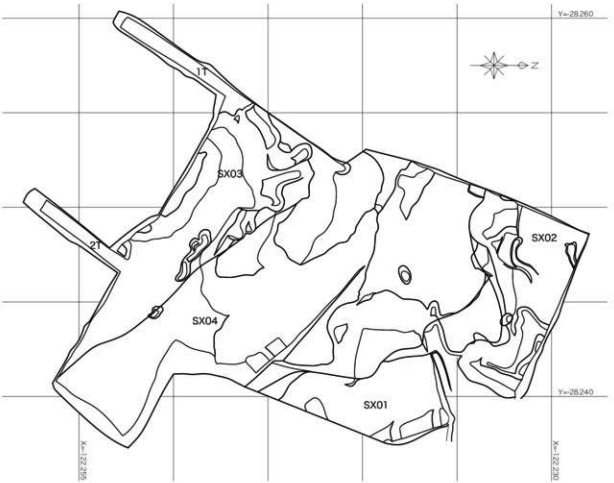
（1）検出遺構

遺物の散布
窯体の滅失

調査区を設定した尾根状の高まりの部分には、北東斜面を中心として遺物が散布するが、発掘調査の結果、窯体やそれに付随する施設はすでに滅失した可能性が高く、灰原も地表下深くに埋没した尾根の斜面にその末端部分が残存するのみであることが明らかとなった。また、調査地周辺における旧地形そのものも、農地の造成、土砂の採取や流出によってかなり損なわれ、尾根の北東斜面のみが相対として旧地形に近似することが推測されるにすぎなかった。

谷地形と斜面
灰原

遺物は表土中、表土下位の堆積層中に散見されたので、便宜的に南東の谷地形をSX01、東斜面をSX02、西斜面をSX03、南西斜面をSX04として、地点別に掘削と遺物の採集を行った（第122図）。灰原はSX04とした南西斜面に埋没していた。遺物は北東の丘陵、SX02とした東斜面、SX04とした尾根状の高まりから続く南西斜面に相対的に多く、さらに調査区外の地表下に埋没した丘陵斜面上にも含まれることは明らかであったものの、排土処理などの関係上、完掘は不可能であった。



第122図　遺構配置図（1:200）

（2）遺構の概要

SX01

尾根状の高まりの南東で確認した小谷状の地形をSX01として、地表面下1.8 m以上の堆積を確認した（第122、124・125図、写真33）。大部分が斜層理の発達した粗粒砂によって埋積される。中位以上に遺物が比較的多く包含されていた。

小谷状の地形

SX02

尾根状の高まりの東斜面に埋没した地形をSX02とした（第122、124・125図、写真33）。地表下1.5 mに斜面から続く緩傾斜面、さらにそれに続く谷地形を確認した。下位は斜層理の発達した粗粒砂が堆積し、塊状の粘土が混入する。上位は比較的均質な黄橙色土が堆積する。下位の粗粒砂層中に遺物が多く包含されていた。

東斜面

SX03

尾根状の高まりの西斜面に埋没した地形をSX03とした（第122、124、126図、写真33）。堆積環境が不安定で、地形も一定しないことから、ごく頻繁に斜面が崩壊、流出を繰り返していたことが推測された。主に粗粒砂によって埋積される。遺物の出土は少ない。

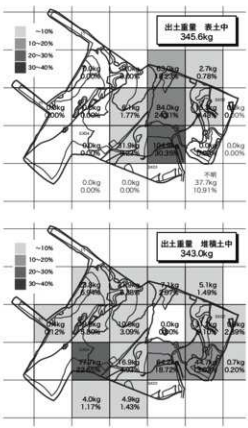
西斜面

SX04（灰原）

尾根状の高まりとそれに続く南西斜面に埋没した地形をSX04とした（第122、124・125図、写真34）。斜面の上面には均質な褐色土が堆積する。地表下1～2 m、標高約33 m付近において焼土・炭化物を多量に包含する黒褐色土の堆積を確認し、その産状、遺物の包含状況などから灰原と判断した。灰原は斜面に連続して堆積していたが、その分布範囲を確認することはできなかった。灰原の厚さは0.2～0.3 mと薄いこと、焼土・炭化物、遺物の包含状況などから、灰原はその末端部分に相当するものと考えられる。灰原からは相対的に多くの遺物が出土した。

南西斜面

灰原の末端



第123図　出土遺物重量分布

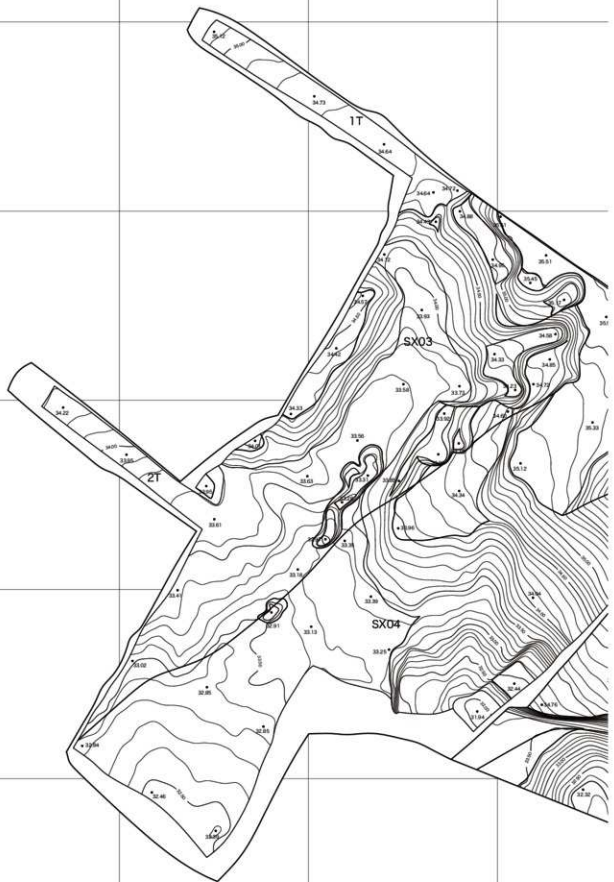
（3）遺物の分布状況

採取した製品は、それぞれ体積と重量にそれぞれ換算して1,647l、688.6kgで、297l（18％）、74.0kg（11％）を図化の対象とした。

総体積と総重量

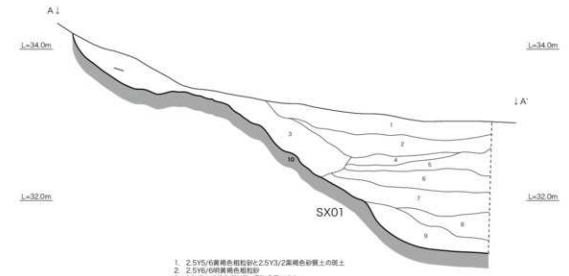
出土した製品の重量を各グリッドで集計した結果が第123図である。第123図は、表土中の遺物の約8割が尾根状の高まりの東斜面に分布することを示す一方、表土下ではSX04、SX01を中心とした斜面の下位に遺物が集中して出土する傾向を示す。

出土遺物重量分布

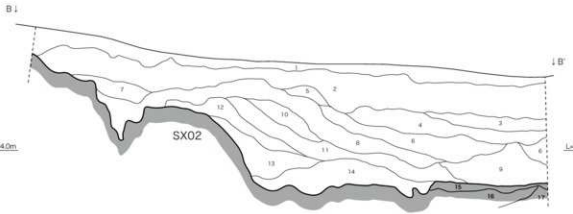


第124図　基本遺構図（1:100）

Y=-28,260
SX02
SX01
Y=-28,240
X=-122,230

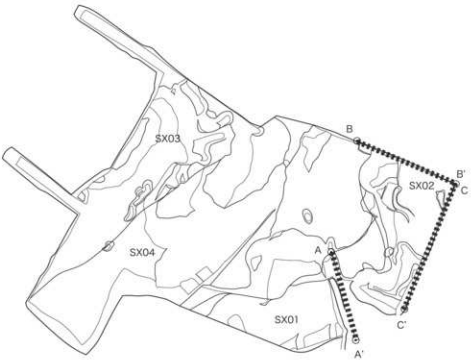


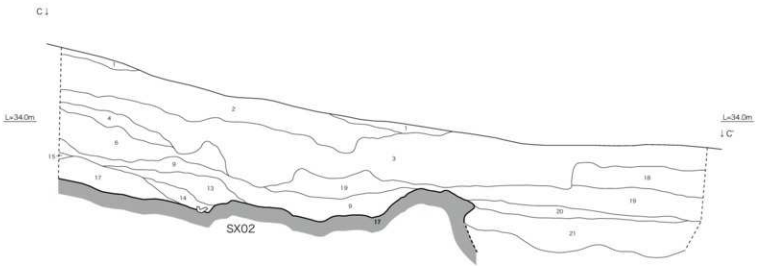
1. 2.5Y5/6黄褐色粗粒砂と2.5Y3/2黒褐色砂質土の斑土
2. 2.5YR/6明黄褐色粗粒砂
3. 10YR4/6褐色粗粒砂、遺物多量に含む
4. 2.5Y7/3浅黄色粗粒砂、しまりなし
5. 2.5Y5/4黄褐色粗粒砂、しまりなし
6. 2.5YB/2灰白色粗粒砂、斜層理が発達
7. 2.5Y5/3黄褐色粗粒砂
8. 2.5YB/2灰白色粗粒砂、斜層理が発達
9. 10YR5/6黄褐色粗粒砂、しまりなし、遺物多量に含む
10. 2.5YB/1灰白色粗粒砂～細礫(地山)

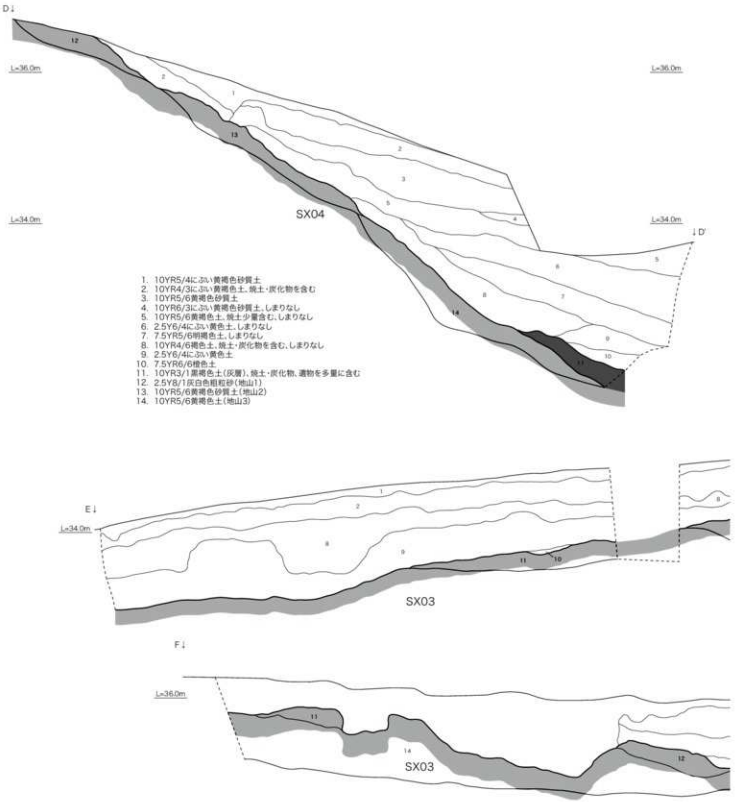


1. 2.5Y3/1黒褐色土
2. 2.5Y5/6黄褐色粗粒砂と2.5Y3/2黒褐色砂質土の斑土
3. 10YR6/4にぶい黄色砂質土
4. 10YR7/2にぶい黄橙色砂質土
5. 10YR6/3にぶい黄橙色砂質土
6. 2.5Y7/2淡黄色砂質土
7. 2.5Y7/3浅黄色中粒砂
8. 7.5YR6/6明褐色砂質土と10YR8/1灰白色粘土の斑土
9. 10YR7/2粗粒砂と10YR8/1灰白色粘土の斑土
10. 10YR7/3にぶい黄橙色砂質土
11. 2.5YB/2灰白色シルト質粘土、2.5YB/2粗粒砂混じり
12. 7.5YR6/4にぶい橙色シルト質粘土と10YR8/3浅黄橙色粗粒砂の斑土
13. 2.5Y7/3浅黄色粗粒砂、2.5YB/1灰白色シルト質粘土ブロック混入、しまりなし
14. 2.5Y6/2灰黄色粗粒砂
15. 5YR5/6明褐色粗粒砂(地山1)
16. 2.5YB/1灰白色中粒砂(地山2)
17. 2.5YB/1灰白色粘土(地山3)
18. 2.5Y7/3浅黄色砂質土、しまりなし
19. 2.5Y5/3黄褐色粗粒砂、斜層理が発達、しまりなし
20. 2.5Y7/1灰白色粗粒砂、斜層理が発達、しまりなし
21. 2.5Y5/3黄褐色粗粒砂、斜層理が発達、しまりなし(14層に近似)

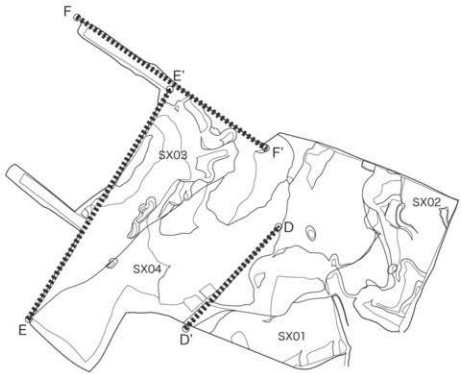
第125図　SX01・02土層断面図（1:50）

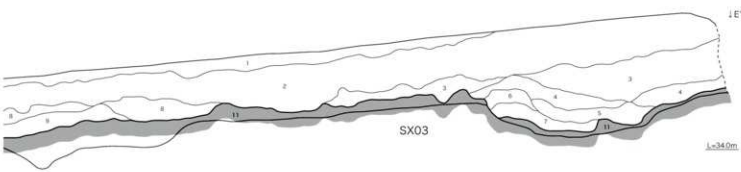

SX03
SX04
SX01
SX02
A
A'
B
B'
C
C'

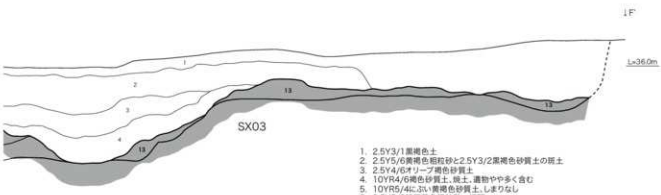

C↓
L=34.0m
L=34.0m
↓C'
SX02



第126図　SX04・03土層断面図（1:50）







1. 2.5Y3/1黒褐色土
2. 2.5Y5/6黄褐色粗粒砂と2.5Y3/2黒褐色砂質土の斑土
3. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土
4. 10YR4/6褐色砂質土、焼土、遺物やや多く含む
5. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土、しまりなし
6. 2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂～細礫
7. 2.5Y8/3淡黄色中粒砂、しまりなし
8. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
9. 2.5Y7/3淡黄色中粒砂、斜層理が発達、しまりなし
10. 2.5Y6/4にぶい黄色粗粒砂、しまりなし
11. 2.5Y8/2灰白色粗粒砂(地山1)
12. 2.5Y6/3にぶい黄色粗粒砂(地山2)
13. 2.5Y8/1灰白色粗粒砂(地山3)
14. 2.5Y8/1灰白色中粒砂(地山4)

調査区全景（垂直写真）

調査区中央の尾根状の高まりを中心として調査区を設定。高まりの周辺は、斜面の埋没、果樹園の造成などによって平坦になっている。

調査区遠景

愛知用水付近から調査地周辺を臨む。里山の景観を残す谷間に蛇廻間古窯跡がある。

写真 32　調査区全景／遠景

調査区全景（東から）

調査区中央の尾根状の高まり。周囲の斜面が埋没後、果樹園が造成されている。窯体、灰原などは尾根状の高まりの周辺で確認できなかった。

調査区全景（北東から）

尾根状の高まりの北東斜面（SX01・02）。地表面には遺物が多く散乱していたが、表土下は尾根の斜面が露呈するにすぎなかった。

調査区全景（南東から）

尾根状の高まりの南東斜面（SX03・04）。土砂の流出、埋積が激しく、旧来の地形はほとんど失われている。

写真 33　調査区全景

SX01土層断面（南東から）

SX01とした北東斜面の土層断面。斜面は急傾斜で、斜層理が発達した粗粒砂によって埋没する。

SX02土層断面（南東から）

SX02とした北斜面の土層断面。斜面は地表下1.5mに埋没していた。下位の粗粒砂層中に比較的多くの遺物が包含されていたが、焼土・炭化物の含有はほとんどみられない。

SX03土層断面（南東から）

SX03とした南斜面の土層断面。土砂の流出が著しく、旧来の地形はほとんど残存し舞う。遺物の包含も少ない。

写真34　SX01・02・03土層断面

SX04土層断面（南東から）
SX04とした南東斜面の土層断面。尾根状の高まりに続く。地表下1～2mの斜面に灰原が埋没していた。

SX04土層断面（部分）
南東斜面に埋没した灰原の産状。焼土・炭化物、遺物を多く包含するが、これに関係する窯体の位置は不明である。

SX04遺物出土状況
灰原に伴う遺物。片口鉢（第132図67）は6個体が軸着した状態の資料。

写真35　SX04

第2章　遺物

（1）中世の遺物

甕（1～30／第127～129図・写真38）

形態分類　口縁部の形態によって分類する。

1・2の口縁端部は内面に凹面をもたず、そのまま丸く収束する。1は焼成がやや軟質である。

3～20は口縁端部内面にヨコナデによる凹面をもつもので、明瞭に凹線状に巡るものと、痕跡程度のものがある。3の口縁部は端部外面に面をもたず、そのまま丸く収束する。4～12は口縁端外面が丸い面を、13～20は平面またはやや凹面をなす。8には補修痕がみられる。21～24は口縁端部がヨコナデにより外方に延びる。

25～30は底部で、25の底部外面端から体部下端部分には砂粒が、30の底部外面端から体部下端部分には、焼台と思われる粘土塊が3方向に付着している。

成形・調整　成形・調整にはナデ・イタナデ・ヨコナデが用いられ、18～20・23～25の肩・体部には押印文が施されている。

広口壺（31～43／第130図・写真38）

形態分類　31～33は口縁端が丸く収束し、内面にわずかな凹面をもつ。33は焼き歪みによる変形がみられる。34～36は口縁端外面が丸い面を、40は平坦面を、37・39は凹面を呈する。38は口縁端部がヨコナデにより下外方に延ばされる。

41～43は頸部～体部で、42の頸部下には広口壺口縁片が付着する。

成形・調整　成形・調整にはナデ・イタナデ・ヨコナデが用いられる。

三筋壺（44～58／第131図・写真37）

形態分類　口縁部が残存しているもののうち、44～46は端部がわずかに上方に引き延ばされる。49・50は端部内面に凹面をもって、やや横方に延び、47・48はさらに強いヨコナデによって下方に垂下している。52・54・55は端部角がさらに上方に引き延ばされ、外面は平坦面をなす。

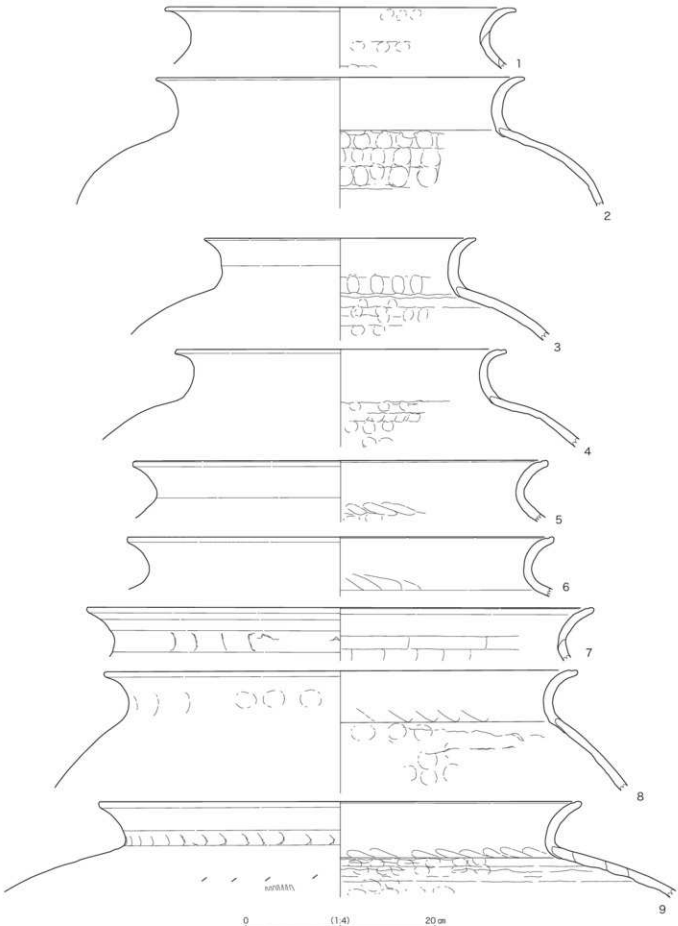
文様　肩部から体部にかけて施された沈線のうち、50～53は2条1対、55・57・58は1条。54も1条で下位のみ2条になる。施文工具は、2条の50・51・53は半裁竹管、52はクシ、1条の54・55・57・58はヘラを用いていると考えられる。

成形・調整　成形・調整にはナデ・イタナデ・ヨコナデが用いられる。

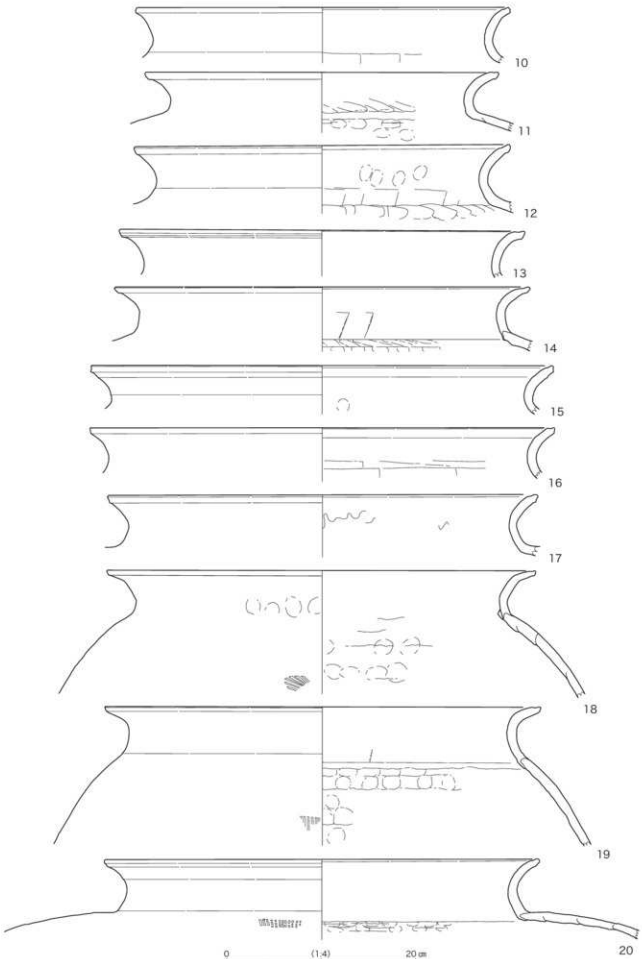
片口鉢（59～126／第132～137図・写真39）

形態分類　口縁部の形態によって分類する。

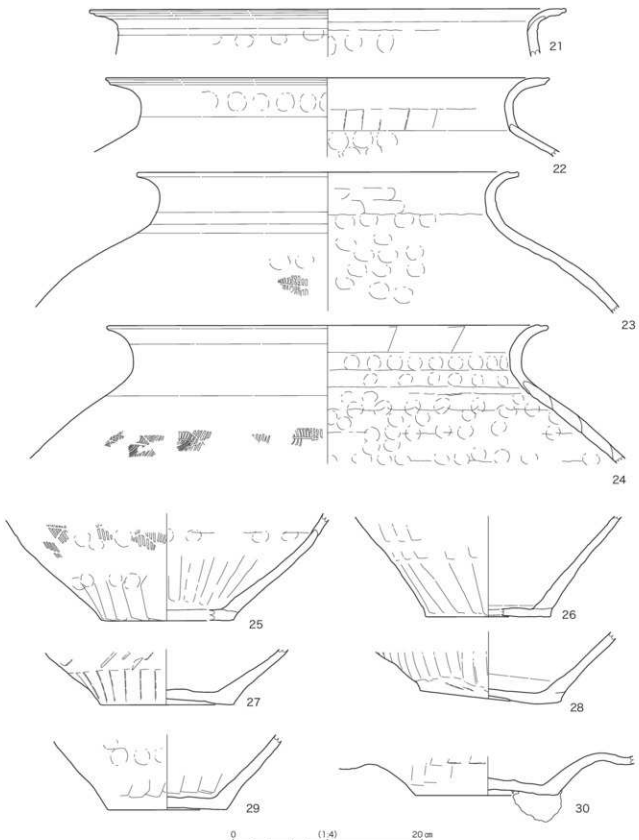
59～76は口縁端部が丸く収束するもので、端面にヨコナデ時に生じた浅い沈線がみられるものもある。59～69は口縁部に比して器高が高く、内身が深くなる。59は小型で、やや内湾する体部と外傾する口縁端部を有する。60は2枚重ね焼きされており、片口部がわずかに残存する。外側の体部外面には中位より下にケズリがみられるが、方向は不明である。67は最も外にある口縁片を含め、6枚重ね焼きされている。片口部がわずかに



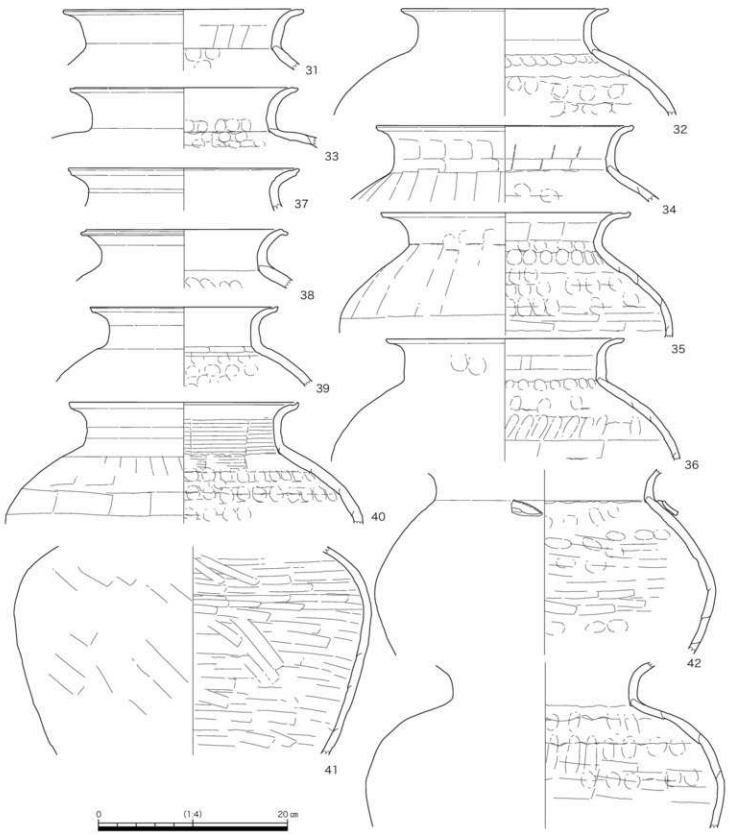
第127図　中世遺物実測図（1）—鍋1（1:4）



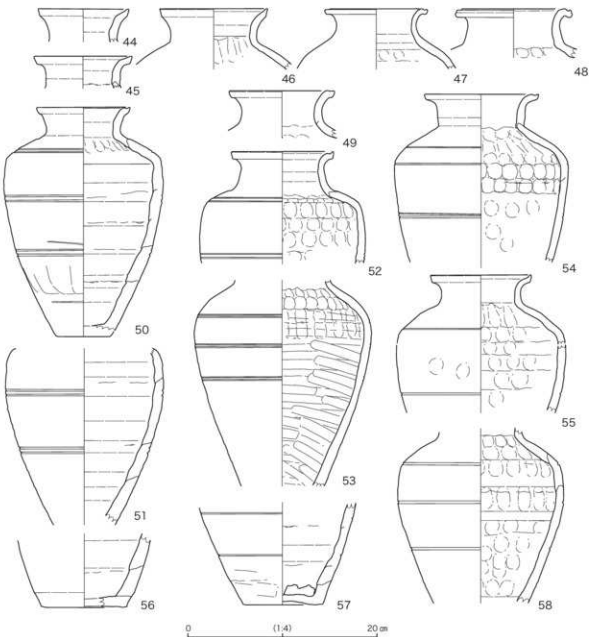
第128図　中世遺物実測図（2）—壺2（1:4）



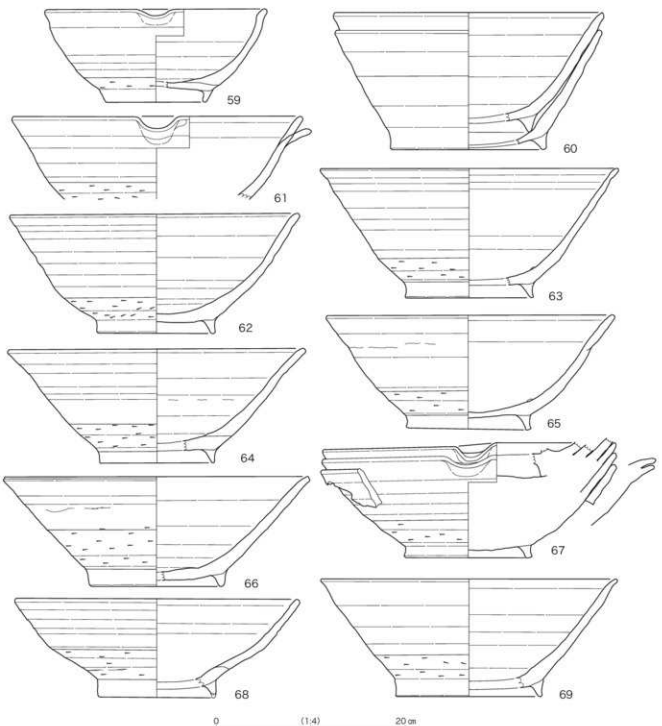
第129図　中世遺物実測図（3）—壇3（1:4）



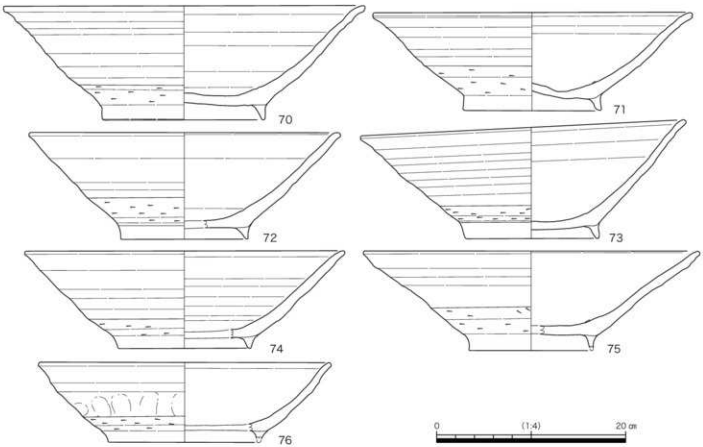
第130図　中世遺物実測図（4）—広口壷（1:4）



第131図　中世遺物実測図（5）—三筋壷（1:4）



第132図　中世遺物実測図（6）—片口鉢1（1:4）



第133図　中世遺物実測図（7）—片口鉢2（1:4）

残る 68 は、体部下半が焼き歪みによりやや変形する。70 ～ 76 は口縁部に比して器高が低く、内身が浅いものになる。71・75 は焼き歪みにより変形している。

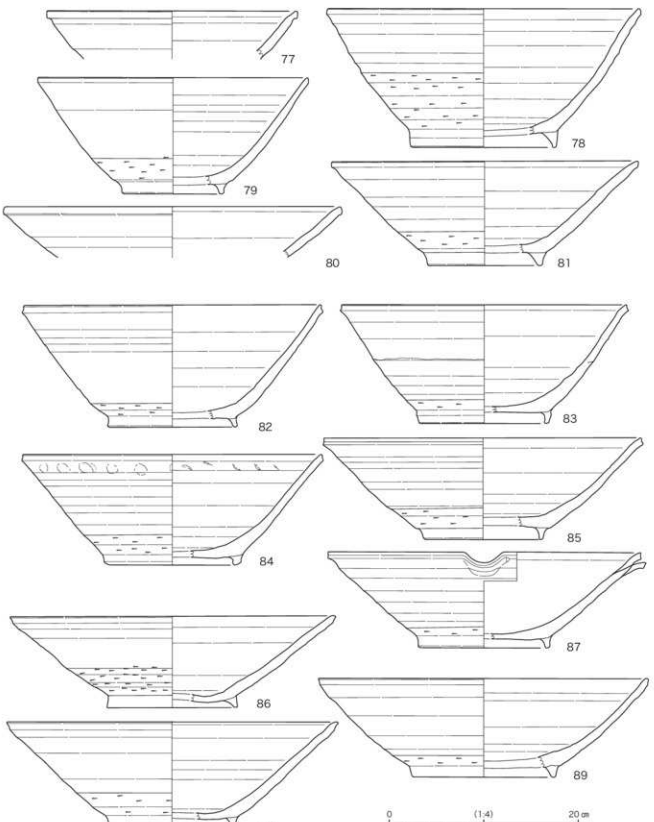
77 ～ 81 は口縁端部外面が平坦な面をもち、82 ～ 85・87 は口縁端部外面が凹面をなし、上角がやや上方に延びる。86・88・89 も凹面を呈するが、やや外傾する。

90 ～ 117 は口縁端部外面がヨコナデにより凹面をなすもので、最も多く出土している。90 ～ 92 は小型品で、やや内湾する体部をもつ。93 ～ 107 は深い内身を、108 ～ 117 は浅い内身をもつが、明瞭な区分をすることはできない。104 の破面の一部には研磨痕が残る。

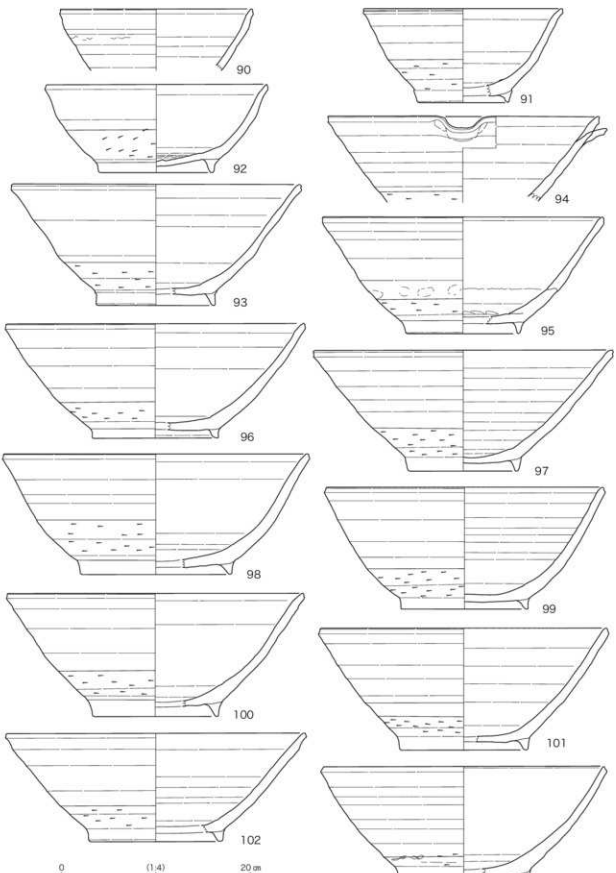
118 ～ 126 は体部から高台部で、126 の高台部は重みで潰れている。

成形・調整

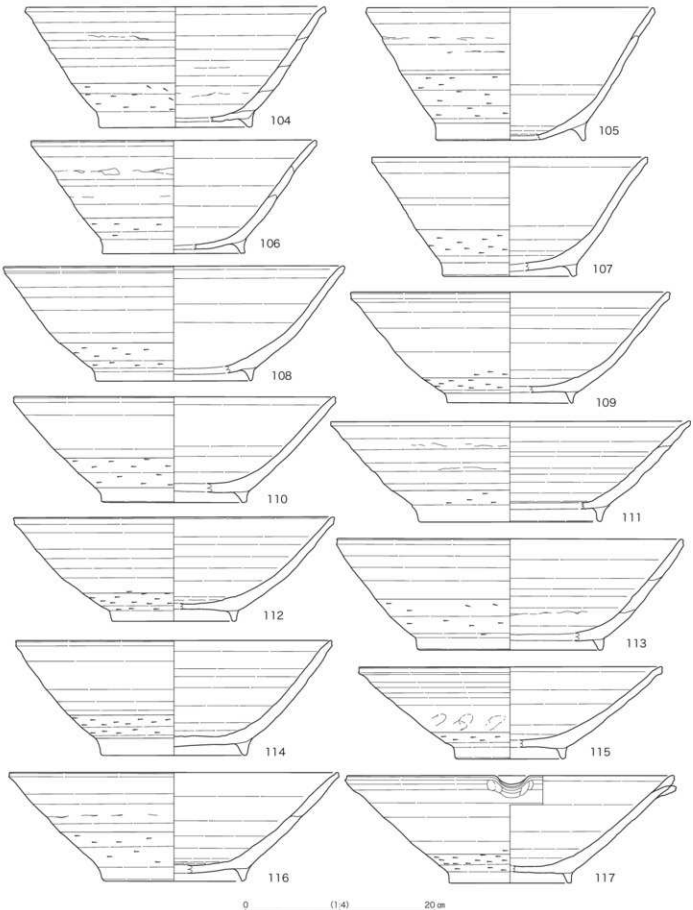
成形・調整には回転ナデ・回転ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデが用いられる。回転ヘラケズリには削る単位が短いものと、長いものがあり、見かけ上左方向に動いている。また粘土（紐）の接合痕が残存しているものや、底部外面・高台部底面に砂粒が付着しているものがある。また焼成には、やや軟質で黄白色を呈するもの、灰色を呈するもの、茶褐色・赤褐色を呈するものがあり、区分が不明瞭なものもみられる。



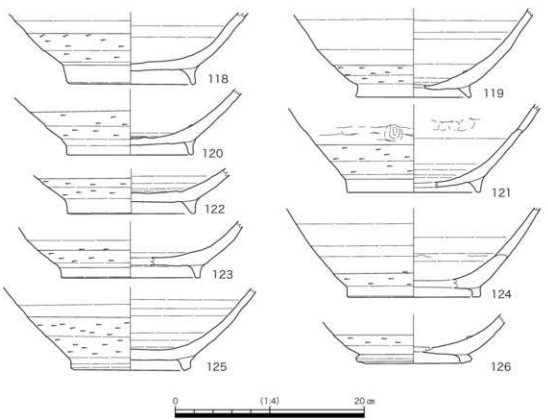
第134図　中世遺物実測図（8）—片口鉢3（1:4）



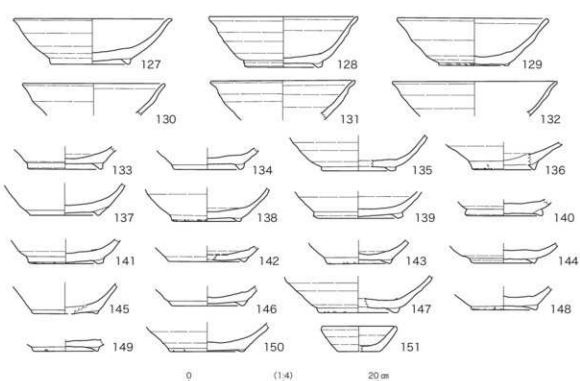
第135図　中世遺物実測図（9）—片口鉢4（1:4）



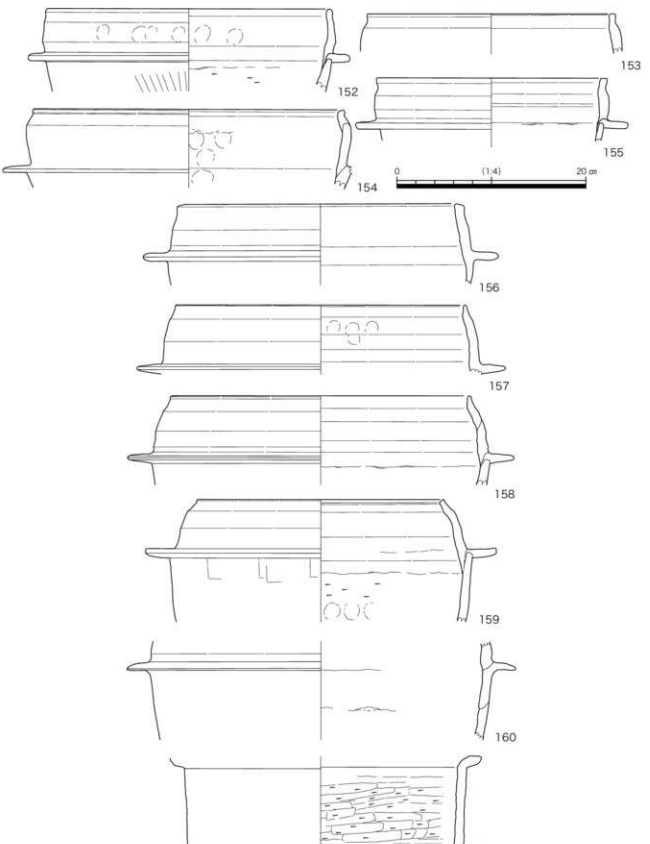
第136図　中世遺物実測図（10）—片口鉢5（1:4）



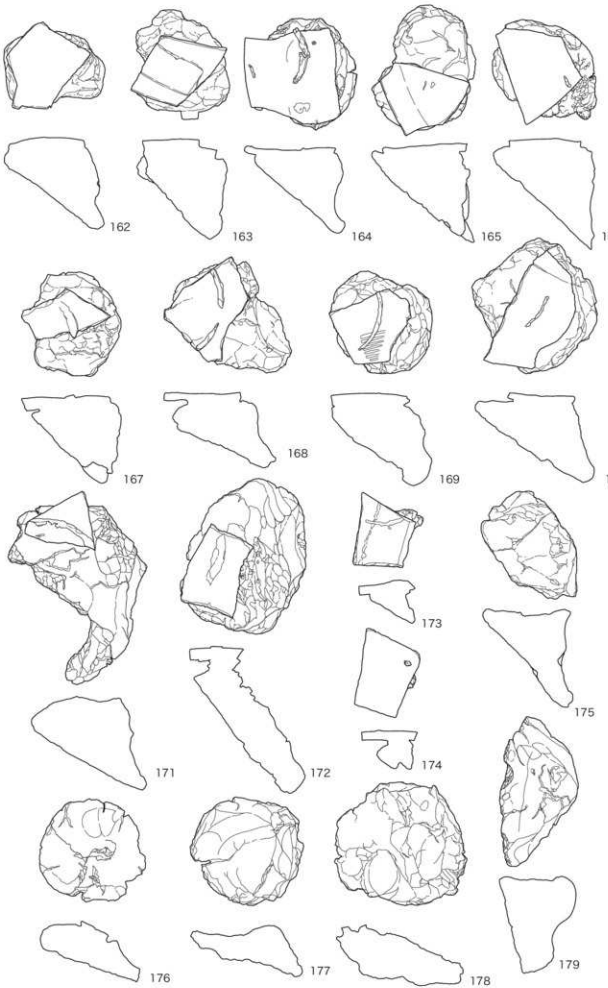
第137図　中世遺物実測図（11）—片口鉢6（1:4）



第138図　中世遺物実測図（12）—山茶碗（1:4）



第139図　中世遺物実測図（13）—羽釜（1:4）



第140図　中世遺物実測図（14）—焼台（1:4）

山茶碗（127～151／第138図・写真39）

山茶碗と小皿

127 ～ 150 は山茶碗、151 は小皿になる。高台部は低く、断面が台形及び三角形をなす。焼成には、灰色を呈するものと、焼き締め状に部分的に褐色を帯びるもの（128・129・135）があるが、大部分は前者である。

成形・調整

成形・調整には回転ナデ・回転糸切り・ナデが用いられ、高台底面にはモミ痕がみられる。

羽釜（152～161／第139図・写真39）

形態の特徴

152 ～ 161 は灰黒色を呈する羽釜で、やや内湾しながら内上方・上方に立ち上がる口縁部と水平またはわずかに下方に延びる鍔部をもつ。口縁端部は丸く収束するもの、上方に摘みあげられるもの、水平・外傾・内傾する面をもつもの、短く屈曲するものなど多様である。159 は口縁部の歪みが激しく、口縁部はもう少し立ち上がる可能性がある。また 161 も激しく変形しており、全体に亀裂や歪みが生じている。

成形・調整

成形・調整には回転ナデ・ヘラケズリ・イタナデ・ヨコナデが用いられる。

焼台（162～179／第140図）

形状と大きさ

162 ～ 175 の焼台は、円柱形の粘土塊の側面を斜めに切り落とし、断面が直角三角形を呈するような形状をしており、上面に甕・片口鉢片が水平に置かれている。大きさは 162 ～ 171 のように、径・高さとも 8 ～ 10cm 程度のものが多いが、細長い 172 や、小型の 173・174 もある。上面に置かれた土器片上面には、載せられた焼成物の高台の痕跡が残る。また上面に土器片が無く、平面及びやや凹み状を呈する粘土塊（175 ～ 179）も出土している。大きさが径、高さとも 8 ～ 10cm 程度のもの（175・179）や、扁平なもの（176 ～ 178）がある。

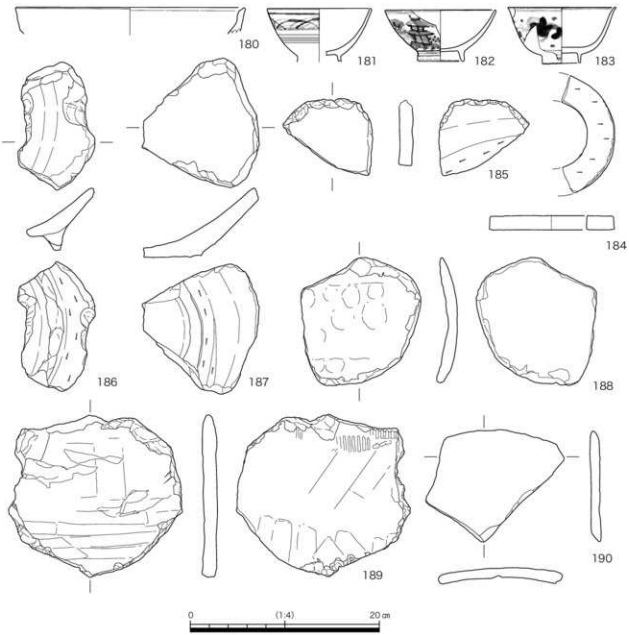
（2）近世の遺物

近世の土器・陶磁器（180～184／第141図）

180 は橙色を呈する土師質の土器で、下端で段をもって屈曲して皿状の形状をなし、口縁端部が外傾する面をなす。全体に磨滅が激しく調整等は不明である。181 ～ 183 は表土部分より出土した磁器の平碗・端反碗で、呉須による文様が描かれている。184 は厚さ 1.5cm のリング状の焼き物で、焼き締められている。上・下面は無釉でヘラケズリ成形・調整が施され、側面には灰釉がかかる。

加工土器片（185～190／第141図）

185 は片口鉢体部片で、一辺が打ち欠かれており、その部分が磨滅している。186 は片口鉢底部・高台部で側辺・高台部が打ち欠かれ、一部磨滅している。187 も片口鉢底部・高台部で、側辺が打ち欠かかれた後に研磨される。188 は甕体部片で、側辺全体に研磨がみられる。189 は押印文がある甕体部で、側辺が打ち欠かれている。190 は甕体部片と思われ、外内面・側辺とも強い研磨が施されている。



第141図　近世遺物実測図―加工土器片・その他（1:4）

写真 36　遺物写真（1）―蛇廻間古窯跡の出土遺物

写真 37　遺物写真（2）―三筋壺

8

9

24

24

36

40

20

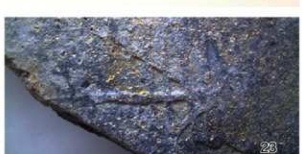

23

写真 38　遺物写真（3）—壺・広口壷

67

70

73

83

127

129

155

159

写真39　遺物写真（4）—片口鉢・山茶碗・羽釜

第３章　まとめ

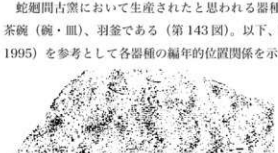
蛇廻間古窯は、大規模な地形の改変によって、窯体やそれに付随する施設はすでに滅失し、灰原の一部が地表下深くに埋没するのみであることが明らかとなった。そこで、本報告のまとめとして、出土遺物の内容から本窯の編年的位置、生産の特質の一端についてのみ簡潔に記述する。

埋没した灰原

（１）編年的位置

蛇廻間古窯において生産されたと思われる器種は、甕・広口壺、三筋壺、片口鉢、山茶碗（碗・皿）、羽釜である（第 143 図）。以下、「赤羽・中野生産地編年」（中野 1994・1995）を参考として各器種の編年的位置関係を示す。

生産器種



第142図　甕押印文拓影（1:2）

甕・広口壺

甕・広口壺は総じて器壁が薄く均一で、甕の押印文は帯状に連続して施される（第 129 図 24・25 など）。また、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁部先端は薄く引き出されるものが多い。上の特徴から甕・広口壺は、２型式に対比することが妥当である。

２型式

また、蛇廻間古窯の押印文に採用されている連弧文を重ねる意匠（第 142 図）は、蛇廻間古窯をも包摂する「柴山・金色周辺の古窯群」（中野 2006）において、しばしば確認される意匠である。なお、柴山・金色周辺の地区は、２型式における甕生産の中核的な地区である。連弧文を重ねる意匠も同段階にほぼ限定され（中野 1998）、次段階の夏敷古窯においては確認されていない。

押印文の意匠

三筋壺

三筋壺は、複線三筋文を施す個体（第 131 図 50 ～ 54）と、単線三筋文を施す個体（同 55、57・58）が混在し、複線三筋文が単線三筋文に卓越する。三筋壺の単位文様の原体を指標とした区分（楠崎 1978 など）を援用すれば、複線三筋文が単線三筋文に先行し、編年上では複線三筋文が２型式、単線三筋文が３型式におよそ対応すると理解してよい。

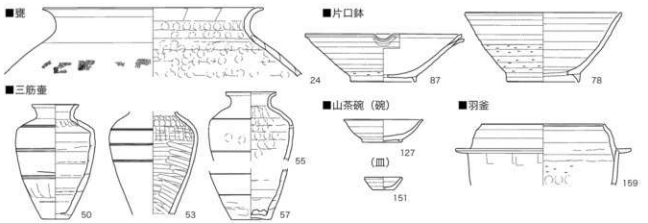
複線三筋文と単線三筋文の混在

また、三筋壺を一定量生産した古窯としては、大曽公園１号窯、茨廻間古窯群Ｂ地点、出地田古窯群、柴山２号窯、夏敷古窯が知られ、前四者は複線三筋文を施す個体のみ、後者は単線三筋文のみを施す個体のみで構成される（第 114 図）。前四者は２型式、後者は３型式に相当するので、蛇廻間古窯の三筋壺は２型式と３型式の生産内容を反映していることになる。

２型式と３型式

しかし、複線三筋文と単線三筋文は相当の共存期間があることが指摘され（中野 1990）、鎗場・御林Ｂ２・４号窯、奥町Ｆ古窯群Ⅰ層などにおいて、複線三筋文を施す個体と、単線三筋文を施す個体が同時に出土する事例が知られている。なお、鎗場・御林Ｂ２・４号窯において共伴する甕・広口壺３型式に相当し、蛇廻間古窯のそれに明らかに後

鎗場・御林Ｂ２・４号窯
奥町Ｆ古窯群Ⅰ層



第143図　蛇廻間古窯の生産器種

出する。いずれにせよ、出土状況についての情報が十分でない現状においては、蛇廻間古窯から出土した三筋壺の構成内容と型式を厳密に対応させることは難しい。ここでは、2型式における生産を中心としつつ、3型式にまで生産が継続していた可能性を指摘するに止めたい。

片口鉢

片口鉢は、口縁部の形状にやや多様な要素が混在するが、口縁部は鋭利な角形の形状（第134図87など）が卓越する。高台の形状も同様に多様であるが、重厚な断面三角形の形状が多く、細身で直立気味の形状のものはほとんど認められない。胎土は全体として精良で、砂粒の混和が少ない。体部下半の回転ヘラケズリは高台周辺を中心として施されるものが多く、体部中位まで回転ヘラケズリが及ぶもの（同78など）は少ない。これらの特徴から片口鉢の多くが2型式に対比されるものと思われる。

2型式

山茶碗

山茶碗は全形が判明する個体が少なく、型式の詳細な対比はやや困難である。全形が判明する3個体の碗（第138図127～129）の口径、高台径、器高の平均値は、16.1cm、8.0cm、5.1cm、皿1個体（同151）の口径、高台径、器高は、8.0cm、4.6cm、2.7cmで、法量の点のみからは山茶碗は2～3型式に対比される（第11表）。

2～3型式

羽釜

羽釜は柴山2号窯、出地田1号窯、金色3号窯、松渕2号窯、松渕12号窯、松渕13号窯、二ノ田7号窯、鎗場・御林D 1号窯、鎗場・御林E 2号窯、潤池西古窯、夏敷古窯など、周辺の2～3型式の窯においてしばしば生産される器種である。形態から詳細な編年的位置を論じることは難しいが、蛇廻間古窯においては一定量の生産が確認できることから（第139図152～161）、生産がより高調な2型式に対比される可能性を指摘したい。

一定量の生産

小結

蛇廻間古窯において生産された各器種は、3型式に対比される可能性がある個体を含みつつも、総じて2型式に対比されるものと理解して大過ない。2型式の年代は、経塚における紀年銘経筒などから、1150～1175（1180）年に相当することが比較的容易に推察される（第12表）。蛇廻間古窯の操業についても、1180年前後にまで継続していた可能性を考慮しつつ、その主体は1150～1175年にあったと理解しておきたい。

操業年代

（2）生産の特質

甕主体窯

今回の発掘調査において出土した遺物が蛇廻間古窯における生産内容を一定程度に反映しているとするなら、蛇廻間古窯の生産内容は（山茶碗主体窯より）甕主体窯のそれに近似する。しかし、底部による個体識別、あるいは図示した個体では山茶碗系の器種である片口鉢が甕・広口壺を大きく凌駕する。つまり、蛇廻間古窯は甕主体窯として分類されながらも、甕を量産する意識はさほど高調であったとは思われない。

甕の生産体制

この生産内容の特徴は、同時期の窯体構造、甕の生産体制とも決して無関係ではない。つまり、近隣に分布する２型式の甕を生産した甕主体（山茶碗・甕併焼）窯の窯体構造が、山茶碗主体窯から明確に機能分化していないことからも、平安時代末における甕の生産体制においては、需要の増大に応じて窯の機能向上を実現する意識より、窯を群集させることによって生産量を向上させる意識が優先したものと考えられる。

押印文の系譜と生産者集団

また、甕に施された押印文については、連弧文を重ねた押印文が特徴的である。同一意匠の押印文は蛇廻間古窯を含む群集窯（「柴山・金色周辺の古窯群」）間においても共有されている。この事象は、次に記述する生産器種の地域的な偏在傾向をも考え合わせ、常滑古窯群（知多半島古窯群）内における生産内容の地域的な特性、さらには生産者集団が組織化される一定の範囲を示唆する。

三筋壺の生産

他の器種については、三筋壺の一定量の出土が注目される。既述のように、蛇廻間古窯の周辺には、三筋壺を一定量生産したことが判明する古窯群が集中していることが知られている（第 13 表・第 117 図）。蛇廻間古窯も 12 世紀における三筋壺生産の一角を担っていたことは確実である。三筋壺に加えて、羽釜の一定量の出土も特徴的で、三筋壺と同様、やはり周辺には羽釜を生産した窯の存在が知られている。羽釜は生産量そのものが限定的である点も三筋壺に通じるが、雑器としての用途、自国域の集落を中心とする供給先は三筋壺とは対照的である。多方面の需要に応じた生産体制も、蛇廻間古窯を含めた周辺の古窯群の重要な特質とみなせよう。

羽釜の生産

生産体制の特質

蛇廻間古窯が操業した平安時代末の陶器生産体制には、甕の需要の増大、多様化した需要を同時に満足させることが求められたものの、高い生産性と品質を維持しつつ、これらの要求に応えることには自ずと限界があった。次段階以後に明確化する窯の機能向上、生産器種の分離専業化による集約的生産は、この限界を克服するための当然の帰結であった。

文献

中野晴久1990「三筋壺・その造形と意味をめぐって」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅳ　常滑市教育委員会

中野晴久1994「赤羽・中野『生産地における編年について』」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館

中野晴久1998「 知多古窯址群の研究（３）～工人集団に関する覚え書き～」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅷ　常滑市教育委員会

中野晴久2006「知多半島の中世群集窯に関する素描」『伊勢湾考古』20　知多古文化研究会

楠﨑彰一1978「初期中世陶における三筋文の系譜―第１部 三筋文系陶器とその編年―」『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV 史学25　名古屋大学文学部

付　編

—常滑古窯跡群既調査窯一覧—

—発掘調査報告書目録—

—遺物一覧表—

—常滑古窯跡群既調査窯一覧—

古窯名	所在地	主製品	型式	文献
海路塊1号窯	大府市吉田町海路塊	山茶碗	3・4	大府市教育委員会1996『海路塊古窯址群　神明古窯址群』
海路塊2号窯		山茶碗	3・4	
神明1号窯	大府市吉田町神明	山茶碗	2	
神明2号窯		山茶碗	2	
神明3号窯		山茶碗	2	
森岡1号窯	大府市森岡町	山茶碗	2	愛知県埋蔵文化財センター1999『森岡第1号窯跡群』
ガンジ山A1号窯	大府市横山町	山茶碗	3	大府市教育委員会2000『ガンジ山A古窯跡群』
ガンジ山A2号窯		山茶碗	3	
ガンジ山A3号窯		山茶碗	3	
鰡池1号窯	東浦町大字石浜字桜見台	山茶碗	2	東浦町教育委員会2006『鰡池古窯跡発掘調査報告書』
鰡池2号窯		山茶碗	2	
鰡池3号窯		山茶碗	2	
鰡池4号窯		山茶碗	2	
鰡池5号窯		山茶碗	2	
刀池11号窯	知多市大興寺字刀池	山茶碗	3・4	知多市教育委員会1995『刀池古窯跡群』
刀池12号窯		山茶碗	3・4	
刀池13号窯		甕	5	
刀池14号窯		甕	5	
刀池15号窯		甕	5	
刀池16号窯		甕	5	
龍池1号窯	知多市岡田字龍池・上り戸	山茶碗	2・3	知多市教育委員会2001『龍池古窯群・西洞坦古窯群』
西洞坦E6号窯	知多市大興寺字西洞坦	山茶碗	3	知多市教育委員会2004『西洞坦古窯群―第三次発掘調査―』
西洞坦E7号窯		山茶碗	4	
西洞坦E8号窯		山茶碗	3・4	
西洞坦F9号窯		山茶碗	5	
西洞坦F10号窯		山茶碗	6a	
桜廻A1号窯	知多市岩布里字奥茂長田	甕	6a	愛知県埋蔵文化財センター2006『桜廻古窯群』
桜廻A2号窯		甕	6a	
桜廻B1号窯		甕	6a	
桜廻B2号窯		甕	6a	
桜廻B3号窯		甕	6a	
桜廻B4号窯		甕	6a	
桜廻B5号窯		甕	6a	
神水古窯	常滑市檜原字神水	山茶碗	6a	常滑市教育委員会1997『神水古窯発掘調査報告書』
三郎谷西(西ヶ巣C)1号窯	常滑市西阿野字西ヶ巣	山茶碗	4	
三郎谷西(西ヶ巣C)2号窯		山茶碗	5	
三郎谷西(西ヶ巣C)3号窯		山茶碗	5	
炭廻間古窯群A地点	常滑市字多屋字炭廻間	甕	4・5	常滑市教育委員会2001『炭廻間古窯跡群発掘調査報告書』
炭廻間古窯群B地点		甕	2	
大曽公園1号窯	常滑市大曽町	山茶碗・甕	2	常滑市教育委員会2001『大曽公園古窯跡群発掘調査報告書』
大曽公園2号窯		山茶碗	1b	
金色東B1号窯	常滑市金山字金色	山茶碗	2	常滑市教育委員会2004『金色東B古窯跡群』
金色東B2号窯		山茶碗	2	
金色東A3号窯		甕	6a	
四池A古窯	常滑市金山字四池	甕	5	愛知県埋蔵文化財センター2004『四池A古窯』
椹池1号窯	常滑市椹池	甕	5・6a	常滑市教育委員会2005『椹池古窯跡群・柴山F古窯跡』
椹池2号窯		甕	5・6a	
椹池3号窯		甕	5・6a	
椹池4号窯		甕	5・6a	
柴山F古窯	常滑市柴山	甕	4	
夏敷古窯	常滑市夏敷	甕	3	愛知県埋蔵文化財センター2007『夏敷古窯跡・蛇廻間古窯跡』
蛇廻間古窯	常滑市蛇廻間	甕	2	
大砂1号窯	阿久比町大字矢高字大砂	甕	6a	阿久比町教育委員会1993『大砂古窯址群』
大砂2号窯		甕	6a	
大砂3号窯		甕	6a	
大砂4号窯		甕	6a	
桜谷A地区	阿久比町大字阿久比字桜谷	甕	6a	阿久比町教育委員会1995『桜谷古窯址群』
桜谷B地区		山茶碗	6a	
桜谷C地区		山茶碗	6a	
桜谷D1古窯		山茶碗	6a	
桜谷D2古窯				
親田1号窯	阿久比町大字卯坂字下親田	山茶碗	5	阿久比町教育委員会1996『親田古窯址群』
親田2号窯		山茶碗	5	
親田3号窯		山茶碗	5	
親田4号窯		山茶碗	5	
親田5号窯		山茶碗	5	

古窯名	所在地	主製品	型式	文献
菅廻間1号窯	阿久比町大字矢高字菅廻間	瓷	6a	阿久比町教育委員会1997『菅廻間古窯址群・大沢古窯跡群』
菅廻間2号窯		瓷	6a	
菅廻間3号窯		瓷	6a	
菅廻間4号窯		瓷	6a	
菅廻間5号窯		山茶碗	6a	
菅廻間6号窯		瓷	6a	
菅廻間7号窯		山茶碗	6a	
菅廻間8号窯		瓷	6a	
菅廻間9号窯		山茶碗	6a	
菅廻間10号窯		山茶碗	6a	
大沢A1号窯	阿久比町大字矢高字大沢	瓷	6a	阿久比町教育委員会1997『菅廻間古窯址群・大沢古窯跡群』
大沢A2号窯		瓷	6a	
大沢B1号窯		瓷	6a	
大沢C1号窯		瓷	6a	
小白根A1号窯	阿久比町大字卯坂字小白根	瓷	4	阿久比町教育委員会1998『小白根古窯址群』
小白根A2号窯		瓷	4	
小白根B1号窯		山茶碗	4	
小白根B2号窯		瓷	4	
小白根B3号窯		山茶碗・瓷	4	
小白根C1号窯		山茶碗	4	
小白根C2号窯		山茶碗	4	
小白根C3号窯		山茶碗	4	
小白根C4号窯		山茶碗	4	
小白根D1号窯		山茶碗	4	
小白根D2号窯		山茶碗	4	
小白根D3号窯		山茶碗	4	
小白根D4号窯		山茶碗	4	
上親田1号窯	阿久比町大字卯坂字上親田	山茶碗	4	阿久比町教育委員会1999『上親田古窯址群』
上親田2号窯		山茶碗	4	
上親田3号窯		山茶碗	4	
上親田4号窯		山茶碗	4	
上親田5号窯		山茶碗	4	
上親田6号窯		山茶碗	4	
八ヶ谷1号窯	阿久比町大字矢高字八ヶ谷	瓷	6b	阿久比町教育委員会2001『八ヶ谷古窯址群』
八ヶ谷2号窯		瓷	6b	
八ヶ谷3号窯		瓷	6b	
八ヶ谷4号窯		瓷	6b	
八ヶ谷5号窯		瓷	6b	
八ヶ谷6号窯		瓷	6b	
大池1号窯	半田市鵜ノ池町	山茶碗	3	半田市教育委員会2001『大池古窯址群　池田古窯址群』
大池2号窯		山茶碗	1b	
大池3号窯		山茶碗	1b	
大池4号窯		山茶碗	3	
大池5号窯		山茶碗	3	
大池6号窯		山茶碗	3	
大池7号窯		山茶碗	1b	
大池8号窯		山茶碗	1b	
池田E1号窯	半田市池田町	瓷	6a	
池田E2号窯		瓷	6a	
池田E1号窯		山茶碗	2	
池田E2号窯		山茶碗	2	
池田K1号窯		山茶碗	2	
池田K2号窯		山茶碗	2	
奥町F古窯群B層	半田市奥町	山茶碗	1b	愛知県埋蔵文化財センター2005『奥町F古窯群』
奥町F古窯群I層		瓷	2	
込水C2号窯	美浜町大字北方字十二谷	山茶碗・瓷	3	美浜町教育委員会他2004『込水古窯群発掘調査報告書』
細田古窯群SY01	美浜町河和	山茶碗	3・4	愛知県埋蔵文化財センター2008『細田古窯群』
細田古窯群SY02		山茶碗	3・4	
細田古窯群SY03		山茶碗	3・4	
打越古窯	南知多町大字内海字打越	瓷	4・5	南知多町1992『南知多町誌』資料編六

2006年3月現在、『「中世常滑焼をおって」資料集』（日本福祉大学知多半島総合研究所1994）所収の「知多古窯址群（既発掘窯）リスト」作成以後に発掘調査された窯を一覧として掲載した。本報告における記述、挿図・挿表は原則として、前記のリストと本一覧に依拠している。

—発掘調査報告書目録—

本編（Ⅰ　調査の概要、Ⅱ　夏敷古窯跡、Ⅲ　蛇廻間古窯跡）における記述、挿図・挿表の作成に際して参考とした常滑古窯跡群の発掘調査報告書を目録としてここに収録した。なお、これらの発掘調査報告書に加えて、『「中世常滑焼をおって」資料集』（日本福祉大学知多半島総合研究所1994）も同時に参考とした部分もある。また、付編における既調査窯一覧に関係する発掘調査報告書についても、一括してここに収録した。

［東海市］
白菊古文化研究所1965『権現山古窯址』

［大府市］
加藤岩蔵・磯辺幸男・山下勝年1979『ハンヤ古窯発掘調査報告』大府市教育委員会
近藤英正・古田功治編1996『海陸庵古窯址群　神明古窯址群』大府市文化財調査報告第２集　大府市教育委員会
中野良法編1999『森岡第１号窯跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第85集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
古田功治編2000『ガンジ山Ａ古窯跡群』大府市文化財調査報告書第４集　大府市教育委員会

［東浦町］
楯崎彰一1961「市右原第３号窯」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会
山田英輔1962「八巻古窯址群」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会
加藤岩蔵1968『大原古窯址群』『東浦町誌』東浦町教育委員会
加藤岩蔵他1983『東仙坊・丸池山古窯址群』東浦町教育委員会
楠美代子編2006『鍛池古窯群発掘調査報告書』東浦町郷土資料館調査報告第７集　東浦町教育委員会

［知多市］
知多町八幡公民館1960『寅が丘古窯址』
杉崎章他1987『七曲古窯址群—第一次発掘調査—』知多市文化財資料第24集　知多市教育委員会
青木修他1989『七曲古窯址群—第三次発掘調査—』知多市文化財資料第29集　知多市教育委員会
余合昭彦編1995『刀池古窯跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第64集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
松原隆治編2001『龍池古窯群・西洲馬古窯群』知多市文化財資料第34集　知多市教育委員会
松原隆治編2004『西洲馬古窯群—第三次発掘調査—』知多市文化財資料第37集　知多市教育委員会
池本正明編2006『板鍋古窯群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第153集　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

［常滑市］
楯崎彰一1960『松原山第１号窯』『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会
楯崎彰一1961『松洲第２号窯』『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会
八賀晋1961「金色第３号窯」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会
磯部幸男・立松宏・大下武他1971『罡沙クゼ古窯址群　南釜谷古窯址　上ゲ遺跡』常滑市文化財調査報告第２集　常滑市教育委員会
杉崎章他1974『柴山古窯址群』常滑市文化財調査報告第４集　常滑市教育委員会
杉崎章他1978『二ノ田古窯址群』常滑市文化財調査報告第５集　常滑市教育委員会
杉崎章他1979『金色東古窯址群』常滑市文化財調査報告書第７集　常滑市教育委員会
杉崎章他1980『清水山古窯址群』常滑市文化財調査報告第８集　常滑市教育委員会
杉崎章他1981『松洲古窯址群』常滑市文化財調査報告第９集　常滑市教育委員会
杉崎章他1981『高坂古窯址群』常滑市文化財調査報告第10集　常滑市教育委員会
杉崎章・中野晴久1981『三郎谷第一号窯』知多古文化研究会　常滑市
中野晴久編1983『出地田古窯址群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告第12集　常滑市教育委員会
中野晴久編1983『瀧池古窯址群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告第13集　常滑市教育委員会
中野晴久・坂野俊哉1985『鎗場・御林古窯址群』常滑市埋蔵文化財調査報告書第15集　常滑市教育委員会
青木修・中野晴久1988『上白田古窯址群』常滑市文化財調査報告書第16集　常滑市教育委員会
中野晴久1990『小森古窯址群』常滑市文化財調査報告書第19集　常滑市教育委員会
青木修1991『長曽古窯址発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第20集　常滑市教育委員会
青木修1992『瀧池西古窯址群の発掘』『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会
中野晴久1993『亀塚池古窯址群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第21集　常滑市教育委員会
中野晴久1993『四池・松洲古窯址群発掘調査報告書』常滑市埋蔵文化財調査報告書第22集　常滑市教育委員会

中野晴久1997『神水古窯発掘調査報告書』常滑市埋蔵文化財調査報告書第23集　常滑市教育委員会
中野晴久1994「六反田古窯址群の研究～幾初現期の様相について～」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅵ　常滑市教育委員会
中野晴久1998「大曽古窯跡群の研究」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅷ　常滑市教育委員会
中野晴久2001『茨廻間古窯跡群発掘調査報告書』常滑市埋蔵文化財調査報告書第24集　常滑市教育委員会
中野晴久2001『大曽公園古窯跡群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第25集　常滑市教育委員会
中野晴久2004『金色東Ｂ古窯群』常滑市埋蔵文化財調査報告書第26集　常滑市教育委員会
赤塚次郎2004『四池Ａ古窯』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第123集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
中野晴久編2005『椎池古窯群・柴山Ｆ古窯跡』常滑市埋蔵文化財調査報告書第28集　常滑市教育委員会
早野浩二編2007『夏敷古窯跡・蛇廻間古窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第152集　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（本書）

［阿久比町］
新興ヶ丘団地関係遺跡調査団1978『福住古窯址群』
中村信幸他1993『大砂古窯址群』阿久比町教育委員会
近藤英正他1995『桜谷古窯址群』阿久比町教育委員会
新美紀元他1996『親田古窯址群』阿久比町教育委員会
中村信幸他1997『背廻間古窯址群・大沢古窯跡群』阿久比町教育委員会
新美紀元他1998『小白根古窯址群』阿久比町教育委員会
新美紀元他1999『上親田古窯址群』阿久比町教育委員会
新美紀元他2001『八ヶ谷古窯址群』阿久比町教育委員会

［半田市］
立松宏1969「椎ノ木第１号窯」『半田市誌　資料編Ⅱ』半田市
猪飼英一1969「長成池第１号窯」『半田市誌　資料編Ⅱ』半田市
杉崎章他1969『深谷古窯址群』『知多半島道路埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会
近藤英正・戸田末紀1989『深谷古窯跡群』半田市教育委員会
近藤英正編2001『大池古窯址群　池田古窯址群』半田市教育委員会
赤塚次郎2005『奥町Ｆ古窯群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第137集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

［武豊町］
奥川弘成他1986『南蛇ヶ谷古窯址群』武豊町教育委員会
奥川弘成編1986『蛇ヶ谷古窯址群』武豊町文化財調査報告書第5集 武豊町教育委員会
磯部幸男・山下勝年1983『ビンガメ古窯址群』『武豊町誌』資料編二　武豊町
磯部幸男・奥川弘成1990『中田池古窯址群　その１』武豊町文化財調査報告第８集　武豊町教育委員会
磯部幸男・奥川弘成1992『中田池古窯址群　その２』武豊町文化財調査報告第９集　武豊町教育委員会

［美浜町］
磯辺利彦他2004『込水古窯群発掘調査報告書』美浜町文化財調査報告第６集　美浜町教育委員会
松田訓編2008『細田古窯群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第149集　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

［南知多町］
鈴木秀文編1987『大井釜山古窯址群』南知多町文化財調査報告書第６集　南知多町教育委員会
山下勝年他1997『打越古窯』『南知多町誌』資料編六　南知多町

登録番号	部種	グリッド	遺構	層位	口径 (cm)	残 /12	底径 (cm)	残 /12	器高 (cm)	最大径 (cm)	胴部径 (cm)	口縁部径 (cm)	底部厚 (cm)	縁帯幅 (cm)	色調	分類	備考
E-1	須	VI A8q9p	2 区	SY01		(51.8)	2		0	残 8.3		46.4		1.1	0.9	黄橙色	1 期	
E-2	須	VI A8o	5 区	SY01		(50.0)	2		0	残 8.7		44.4		1.1	0.7	灰色	1 期	
E-3	須	VI A8o	3 区	SY01		(52.4)	2		0	残 14.2		46.8	7.3	1.4	0.9	灰色	3 期	
E-4	須	VI A8o	5 区	SY01		(59.2)	3		0	残 11.4		53.4	5.0	1.4	1	橙色	3 期	
E-5	須	VI A8o	3 区	SY01			0	22.2	3	残 5.3						赤褐色		
E-6	須	VI A8n	5 区	SD01	下層	(55.0)	2		0	残 6.3		50.0		1.1	1	暗褐色	2 期	
E-7	須	VI A8o	5 区	SK01		(61.8)	1		0	残 17.0		56.4	7.1	1.4	0.9	橙色	1 期	押印文 [？]
E-8	須	VI A8o	5 区	SK01		(42.0)	1		0	残 9.4		37.6		1.0	0.8	暗赤褐色	1 期	
E-9	須	VI A8o	5 区	SK01		(54.0)	2		0	残 6.7		50.2		0.9	1	灰色	2 期	
E-10	須	VI A8n9o	5 区	SK01		(47.5)	1		0	残 9.7		41.8	7.0	1.3	0.8	灰色	2 期	
E-11	須	VI A8o	5 区	SK01		(40.6)	6		0	残 10.2		36.6		1.0	0.7	暗褐色	2 期	
E-12	須	VI A8o	5 区	SK01		(42.0)	2		0	残 5.9		38.2		1.0	0.7	暗褐色	2 期	
E-13	須	VI A9n9o	5 区	SK01		(40.0)	2		0	残 9.5		35.4		1.1	1	暗褐色	3 期	
E-14	須	VI A8o	5 区	SK01			0	(18.3)	5	残 8.5						暗赤褐色		
E-15	須	VI A10o	6 区	SK02		(50.0)	1		0	残 7.3		46.4	5.6	0.7	0.8	暗赤褐色	1 期	
E-16	須	VI A10o	6 区	SK02		(35.2)	1		0	残 2.6					1	暗赤褐色	2 期	
E-17	須	VI A10o	6 区	SK02			0	20.0	3	残 7.0						灰色		
E-18	須	VI A9o	5 区	前庭部土		(38.2)	2		0	残 21.5		33.0	5.0	1.0	0.8	暗褐色	1 期	押印文 [D]
E-19	須	VI A8o	5 区	前庭部土		(40.6)	2		0	残 12.6		36.8	5.0	1.0	0.9	暗赤褐色	2 期	
E-20	須	VI A9n9o	5 区	前庭部土		(38.0)	1		0	残 9.7					0.9	橙色	2 期	
E-21	須	VI A8n9o	5 区	前庭部土			0	(22.2)	4	残 6.5						暗赤褐色		
E-22	須	VI A9n9o	5 区	前庭部		(55.0)	2		0	残 10.2		48.6	7.0	1.5	1.4	暗赤褐色	3 期	
E-23	須	VI A10o	6 区	前庭部石		(35.8)	2		0	残 10.9		31.0	5.6	0.8	0.6	暗赤褐色	1 期	
E-24	須	VI A10o	6 区	前庭部石		(49.4)	1		0	残 8.8		44.2	7.0	1.2	1.2	橙色	3 期	
E-25	須	VI A10o	6 区	前庭部石		(45.9)	3		0	残 4.9		40.6		1.1	1	暗赤褐色	3 期	
E-26	須	VI A10o	6 区	前庭部石			0	21.2	5	残 8.1						橙色		
E-27	須	VI A10m	9 区	SC02	下層	(44.6)	2		0	残 15.3		41.6	5.1	0.9	0.8	暗赤褐色	1 期	
E-28	須	VI A11m	10 区	SC02	下層	(44.2)	5		0	残 10.7		38.0		1.0	0.9	暗赤褐色	1 期	
E-29	須	VI A11m	10 区	SC02	下層	(49.8)	3		0	残 20.3		45.2	5.4	1.4	1.1	暗赤褐色	2 期	押印文 [Ba2]
E-30	須	VI A11m	10 区	SC02	下層	52.8	9		0	残 13.9		48.2	5.0	1.3	1.2	暗赤褐色	3 期	押印文 [Ba2]
E-31	須	VI A10m	9 区	SC02	下層		0	16.5	10	残 6.4						暗赤褐色		押印文 [Aa1]
E-32	須	VI A10m	9 区	SC02	上層	(50.0)	3		0	残 9.0		44.8	5.7	1.1	1	灰色	2 期	
E-33	須	VI A10m	9 区	SC02	上層	(56.8)	2		0	残 11.1		53.4	5.0	1.0	1.2	暗赤色	3 期	押印文 [Aa1]
E-34	須	VI A10m	9 区	SC02		(39.6)	2		0	残 17.6		34.8	4.6	0.8	0.5	黒褐色	1 期	押印文 [Aa2]
E-35	須	VI A11l	14 区	SC02		(39.6)	2		0	残 10.1		36.6		1.0	0.7	暗赤褐色	1 期	
E-36	須	VI A9m	9 区	SC02		(39.5)	3		0	残 8.7		34.0	5.1	1.0	0.8	暗赤褐色	1 期	
E-37	須	VI A9m	9 区	SC02		(34.4)	5		0	残 28.0	50.0	30.8	6.5	1.0	0.8	暗赤褐色	1 期	押印文 [Bb4]
E-38	須	VI A10m	10 区	SC02		(51.2)	2		0	残 26.4		46.4	6.4	1.2	0.9	暗赤褐色	1 期	押印文 [Bb1]
E-39	須	VI A11l	14 区	SC02		(47.0)	2		0	残 20.1		43.0	5.0	1.3	1	橙色	1 期	押印文 [Bb2]
E-40	須	VI A10m	9 区	SC02		(44.3)	3		0	残 12.1		39.6	3.4	0.9	0.8	暗赤褐色	1 期	押印文 [Bb1]
E-41	須	VI A10m	9 区	SC02		(42.3)	3		0	残 12.5		38.2	7.0	0.9	1	暗赤褐色	1 期	押印文 [Bb1]
E-42	須	VI A11m	11 区	SC02		(36.4)	2		0	残 12.0		31.8	5.0	1.1	0.8	暗褐色	1 期	
E-43	須	VI A10m	10 区	SC02		(37.6)	2		0	残 18.6		30.2	4.4	0.7	1	暗褐色	2 期	押印文 [D]
E-44	須	VI A11m	10 区	SC02		(62.0)	2		0	残 14.6		57.6	7.0	1.3	1.3	暗赤褐色	2 期	押印文 [Ba2]
E-45	須	VI A9m	9 区	SC02		(35.1)	3		0	残 10.7		29.2	4.5	0.9	0.8	暗赤褐色	2 期	
E-46	須	VI A10m	10 区	SC02		(31.6)	4		0	残 10.7		27.6	4.8	0.9	0.7	暗赤褐色	2 期	
E-47	須	VI A9m	9 区	SC02		(52.1)	5		0	残 9.3		48.0		1.0	1	灰色	2 期	
E-48	須	VI A9m	9 区	SC02		(52.1)	2		0	残 18.4		44.6	4.0	0.8	1.1	灰色	2 期	押印文 [Bb1]
E-49	須	VI A11m	10 区	SC02		(48.0)	2		0	残 14.8		42.2	6.0	1.2	1	暗赤褐色	2 期	押印文 [Aa2]
E-50	須	VI A10m	11 区	SC02		(49.0)	4		0	残 15.9		44.6	5.3	1.0	1.2	灰色	2 期	押印文 [Aa2]
E-51	須	VI A10m	12 区	SC02		(40.0)	2		0	残 13.5		36.6	5.3	1.1	0.8	暗褐色	2 期	
E-52	須	VI A10m	11 区	SC02		(61.8)	1		0	残 12.0		58.0	4.7	1.2	0.9	暗赤褐色	2 期	押印文 [？]
E-53	須	VI A11m	10 区	SC02		51.2	12		0	残 28.9		47.2	5.8	1.2	1	橙色	3 期	押印文 [Aa1]
E-54	須	VI A11l11m	14 区	SC02			0		0	残 23.4				1.3		暗赤褐色		押印文 [Aa1]
E-55	須	VI A11m	10 区	SC02		(38.8)	1		0	残 21.4		35.2	5.0	1.4	1	暗赤褐色	3 期	押印文 [Ba2]
E-56	須	VI A10m	9 区	SC02		(50.4)	3		0	残 8.7		46.0	5.2	1.0	1.1	暗褐色	3 期	
E-57	須	VI A11l	14 区	SC02		(49.1)	2		0	残 10.2		45.2	5.6	1.3	1.1	暗赤褐色	3 期	
E-58	須	VI A9m	9 区	SC02		(49.6)	2		0	残 14.3		45.8	6.0	1.1	1.1	暗赤褐色	3 期	
E-59	須	VI A10n	10 区	SC02		(52.4)	3		0	残 12.4		48.0	7.0	1.1	1.2	暗赤褐色	3 期	押印文 [Bb1]
E-60	須	VI A10n	10 区	SC02		(55.4)	2		0	残 11.8		49.0	5.9	1.2	1.4	暗赤褐色	3 期	押印文 [Ba1]
E-61	須	VI A10m	9 区	SC02			0	18.8	9	残 14.6						灰色		押印文 [Aa1]
E-62	須	VI A11m	10 区	SC02			0	19.0	12	残 7.4						赤褐色		押印文 [Aa1]
E-63	須	VI A9m	9 区	SC02			0	16.0	11	残 11.4						橙色		押印文 [D]
E-64	須	VI A10m	9 区	SC02	下層		0	17.4	8	残 11.8						暗赤褐色		押印文 [Bb2]
E-65	須	VI A9m	9 区	SC02			0	18.0	9	残 10.3						暗褐色		押印文 [Bb1]
E-66	須	VI A10m	9 区	SC02			0	15.0	12	残 7.6						暗赤褐色		押印文 [C2]
E-67	須	VI A10m	9 区	SC02			0	17.4	12	残 6.7						暗赤褐色		押印文 [?]
E-68	須	VI A10m	9 区	SC02	上層		0	(15.0)	4	残 6.7						暗赤褐色		押印文 [?]
E-69	須	VI A9m	9 区	SC02			0	15.8	12	残 4.2						暗赤褐色		押印文 [?]
E-70	須	VI A10m	7 区	SC02			0	16.4	12	残 6.6						暗赤褐色		
E-71	須	VI A11m	11 区	SC02			0	14.8	12	残 5.4						暗赤褐色		
E-72	須	VI A10m	10 区	SC02	下層		0	18.2	7	残 6.8						暗赤褐色		
E-73	須	VI A11m	10 区	SC02	下層		0	17.8	9	残 7.4						灰色		
E-74	須	VI A11m	10 区	SC02			0	16.5	7	残 5.6						暗赤褐色		
E-75	須	VI A10n	10 区	SC02			0	17.6	5	残 3.1						暗赤褐色		
E-76	須	VI A12m		横出		(42.1)	2		0	残 12.8		38.0	4.4	1.0	0.6	暗赤褐色	1 期	押印文 [Bb1]
E-77	須	VI A11m		横出		(33.8)	1		0	残 9.2		29.0	3.3	0.9	0.7	暗赤褐色	1 期	
E-78	須	VI A12l		横出		(47.2)	2		0	残 12.0		42.2	5.5	1.2	0.9	赤褐色	2 期	押印文 [Bb1]
E-79	須	VI A9m		横出		(39.2)	1		0	残 9.8		36.0	5.5	1.0	0.7	暗赤褐色	2 期	
E-80	須	VI A11m		横出		(41.2)	2		0	残 9.1		36.2		0.9	0.7	暗赤褐色	2 期	
E-81	須	VI A11l		横出		(46.6)	3		0	残 12.7		42.8	5.6	1.1	0.9	暗赤褐色	2 期	
E-82	須	VI A10m		横出		(36.6)	2		0	残 18.3		32.6	5.1	1.0	0.9	暗赤褐色	2 期	押印文 [Bb1]
E-83	須	VI A12n		横出		(52.3)	2		0	残 11.4		46.6	5.0	1.0	0.9	暗赤褐色	2 期	押印文 [Bb1]
E-84	須	VI A12m		横出		(46.0)	1		0	残 1.8					0.5	灰色	2 期	
E-85	須	VI A11m		横出		(33.4)	3		0	残 6.7		29.2		0.9	0.8	暗赤褐色	2 期	
E-86	須	VI A12n		横出		(44.7)	3		0	残 13.0		39.8	4.2	1.3	0.7	暗赤褐色	2 期	押印文 [D]

登録番号	器種	グリッド		遺構	層位	口径(cm)	残/口2	底径(cm)	残/口2	器高(cm)	最大径(cm)	胴部径(cm)	口縁部長(cm)	胴部厚(cm)	最帯幅(cm)	色調	分類	備考
E-87	壺	VI A11		検出		(41.8)	2		0	残7.0		36.6		1.2	0.9	灰色	2 群	
E-88	壺	VI A11		検出		(42.0)	2		0	残9.2		37.2		1.0	0.9	灰色	2 群	
E-89	壺	VI A10m		検出		(47.8)	3		0	残8.3		44.4	4.2	1.0	0.9	灰色	2 群	
E-90	壺	VI A12m		検出		(46.7)	1		0	残13.9		40.8	5.8	1.1	1	灰色	2 群	押印文 [Bb-1]
E-91	壺	VI A11m		検出		(41.8)	3		0	残12.5		37.8	6.3	1.0	0.9	暗褐色	2 群	押印文 [Bb-1]
E-92	壺	VI A12l		検出		(36.2)	1		0	残1.6					0.9	明赤褐色	2 群	
E-93	壺	VI A11l		検出		(43.8)	2		0	残11.7		38.0	6.7	0.8	0.9	明赤褐色	2 群	押印文 [Bb-8]
E-94	壺	VI A11m		検出		(46.2)	2		0	残7.3		41.2		1.1	1	明赤褐色	2 群	
E-95	壺	VI A12m		検出		(50.6)	2		0	残13.6		46.4	6.3	1.0	0.9	赤褐色	2 群	押印文 [Bb-1]
E-96	壺	VI A11l		検出		(40.8)	4		0	残13.2		36.0		0.9	1	明赤褐色	3 群	
E-97	壺	VI A8o		検出		(51.4)	2		0	残14.3		45.2	7.4	1.3	1.2	灰色	3 群	
E-98	壺	VI A10m		検出		(52.8)	2		0	残7.6		48.4		1.1	1.2	灰色	3 群	
E-99	壺	VI A11l		検出		(47.0)	1		0	残10.8		42.8	5.8	0.9	1.3	明赤褐色	3 群	
E-100	壺	VI A10n		検出		(52.0)	2		0	残8.4		47.0		1.1	0.9	灰色	3 群	
E-101	壺	VI A11l		検出		(34.8)	2		0	残8.7		32.4	6.0	1.2	1	明赤褐色	3 群	
E-102	壺	VI A11m		検出		(46.4)	1		0	残27.1	63.6	40.6	6.3	1.1	1	橙色	3 群	押印文 [Bb-2]
E-103	壺	VI A9m		検出		(40.4)	2		0	残12.6		35.0		0.9	1	明赤褐色	3 群	
E-104	壺	VI A11m		検出		(50.2)	1		0	残13.9		46.0	4.8	1.2	1.1	灰色	3 群	押印文 [Bb-8]
E-105	壺	VI A11m		検出		(52.4)	2		0	残13.7		47.6	6.4	1.0	1.1	黄橙色	3 群	押印文 [Bb-8]
E-106	壺	VI A10m		検出		(53.0)	3		0	残28.9	81.6	47.6	6.9	1.0	1	橙色	3 群	押印文 [Bb-8]
E-107	壺	VI A11l		検出			0	(18.6)	5	残19.7						橙色		押印文 [Bb-8]
E-108	壺	VI A10m		検出		(60.2)	1		0	残22.1		55.0		1.1	1.1	灰色	3 群	押印文 [Ab-1]
E-109	壺	VI A11l		検出		(53.6)	2		0	残8.6		47.2		1.1	1.2	橙色	3 群	
E-110	壺	VI A11m		検出		(56.6)	1		0	残10.2		53.0	5.2	1.0	1.2	灰色	3 群	
E-111	壺	VI A11l		検出		(51.3)	1		0	残17.6		46.8	7.5	1.0	1.3	黄橙色	3 群	押印文 [?]
E-112	壺	VI A12m		検出			0	18.3	12	残12.3						明赤褐色		押印文 [Bb-3]
E-113	壺	VI A11l		検出			0	16.5	6	残17.4						明赤褐色		押印文 [Ab-1]
E-114	壺	VI A10m		検出			0	(20.2)	3	残12.2						橙色		押印文 [Bb-8]
E-115	壺	VI A11m		検出			0	(19.8)	9	残8.2						明赤褐色		
E-116	壺	VI A10n		検出			0	16.2	12	残2.5						明赤褐色		
E-117	壺	VI A11l		検出			0	(24.0)	5	残7.5						橙色		
E-118	壺	VI A8k		検出			0	19.2	9	残5.4						橙色		
E-119	壺	VI A9m		表土		(34.0)	3		0	残5.9		29.4		0.9	0.6	明赤褐色	1 群	
E-120	壺	VI A9m		表土		(38.2)	2		0	残8.2		33.8		0.9	0.8	明赤褐色	1 群	
E-121	壺	VI A10m		表土		(47.8)	3		0	残11.8		43.2	6.0	0.9	0.8	明赤褐色	1 群	
E-122	壺	VI A9m		表土		(36.0)	2		0	残5.2		30.0		1.1	0.7	灰色	1 群	
E-123	壺	VI A9o		表土		(40.0)	2		0	残8.9		34.4	5.3	1.1	0.8	明赤褐色	2 群	
E-124	壺	VI A9m		表土		(38.4)	2		0	残9.6		32.8		1.0	0.8	明赤褐色	2 群	
E-125	壺	VI A11l		表土		(35.0)	2		0	残11.6		29.2	5.0	0.9	1	赤褐色	3 群	
E-126	壺	VI A10m		表土		(56.9)	2		0	残9.7		52.0		0.8	1	灰色	3 群	
E-127	壺	VI A9m		表土		(58.4)	1		0	残7.2		54.8	4.6	1.3	1	黒褐色	3 群	
E-128	壺	VI A11m		表土		(57.7)	2		0	残8.9		52.4		1.1	1.2	明赤褐色	3 群	
E-129	壺	VI A9m		表土		(38.0)	1		0	残13.3		33.2		0.9	1.2	明赤褐色	3 群	
E-130	壺	VI A11o		表土		(51.2)	1		0	残7.6		44.0		1.1	1.4	灰色	3 群	
E-131	壺	VI A9m		表土			0	17.0	7	残4.5						明赤褐色		
E-132	壺	VI A9m		表土			0	(15.4)	6	残6.3						灰色		
E-133	壺	VI A10m		表土			0	16.8	7	残7.2						明赤褐色		
E-134	壺			表採		(46.0)	1		0	残13.5		40.6	5.5	1.1	0.7	明赤褐色	2 群	
E-135	壺			表採			0	15.3	7	残6.4						灰色		押印文 [Aa2]
E-136	壺	VI A10m	9 区	灰層	下層					残7.1						暗褐色		押印文 [Aa2]
E-137	壺	VI A11n		表土						残24.7						灰色		押印文 [Aa2]
E-138	壺	VI A8k		検出						残9.3					0.9	暗褐色		
E-139	壺	VI A11l	13 区	検出		縦9.5		横11.5		脚 1.1						暗褐色		
E-140	壺	VI A11m		表土						残4.1						明赤褐色		
E-141	壺	VI A11m		検出						残5.7						褐色		
E-142	壺	VI A11m		検出						残7.0						黄灰色		
E-143	壺	VI A11m		検出												明赤褐色		押印文 [Aa1]
E-144	壺	VI A9m		表土												灰色		押印文 [Aa2]
E-145	壺	VI A10m	9 区	灰層	下層											暗褐色		押印文 [Aa3]
E-146	壺	VI A10m	7 区	灰層												灰色		押印文 [Ab1]
E-147	壺	VI A10m		表土												灰色		押印文 [Ab2]
E-148	壺	VI A10n	10 区	灰層												明赤褐色		押印文 [Ba1]
E-149	壺	VI A10m	9 区	灰層	下層											明赤褐色		押印文 [Ba2]
E-150	壺	VI A10n	9 区	灰層												明赤褐色		押印文 [Ba2]
E-151	壺	VI A11n	10 区	灰層												明赤褐色		押印文 [Ba2]
E-152	壺	VI A11m		検出												明赤褐色		押印文 [Ba3]
E-153	壺	VI A10m	9 区	灰層												明赤褐色		押印文 [Bb1]
E-154	壺	VI A9m		表土												暗褐色		押印文 [Bb1]
E-155	壺	VI A11m		検出											0.8	赤褐色		押印文 [Bb2]
E-156	壺	VI A11m		検出												明赤褐色		押印文 [Bb3]
E-157	壺	VI A10m	9 区	灰層	上層											灰色		押印文 [Bb-4]
E-158	壺	VI A11m		検出												明赤褐色		押印文 [Bc-1]
E-159	壺	VI A11m	14 区	灰層												明赤褐色		押印文 [Bc-2]
E-160	壺	VI A9m	9 区	灰層												橙色		押印文 [Bc-3]
E-161	壺	VI A10m	10 区	灰層	上層											明赤褐色		押印文 [C 1]
E-162	壺	VI A11n	10 区	灰層	下層											灰色		押印文 [C 2]
E-163	壺	VI A10m	10 区	灰層	下層											灰色		押印文 [C 2]
E-164	壺	VI A10m	12 区	灰層												橙色		押印文 [C 3]
E-165	壺	VI A10m		検出												黄褐色		押印文 [C 3]
E-166	壺	VI A9m	9 区	灰層												暗褐色		押印文 [D]
E-167	壺	VI A11l	13 区	検出												暗褐色		押印文 [D]
E-168	壺	VI A11m	11 区	灰層												灰白色		
E-169	壺	VI A10m	9 区	灰層	下層											暗褐色		

登録番号	部輯	グリッド	遺構	層位	口径(cm)	残(口2)	底径(cm)	残(口2)	器高(cm)	最大径(cm)	胴部径(cm)	口縁部高(cm)	底部厚(cm)	最大厚(cm)	色調	分類	備考
E-170	広口壺	VI A8o	SY01			0	14.0	4	残 4.7						灰色		
E-171	広口壺	VI A8o	5 区 SK01		(30.0)	3		0	残 22.6	38.8	25.6	5.0	1.0	1.1	暗褐色	1 期	
E-172	広口壺	VI A8o	5 区 SK01		(28.7)	2		0	残 8.3		25.0	4.0	1.0	1.0	灰色	2 期	
E-173	広口壺	VI A8o	5 区 SK01		(29.7)	3		0	残 3.8		25.6		1.0	0.9	暗赤褐色	2 期	
E-174	広口壺	VI A8o0o	5 区 SK01			0	15.2	6	残 8.6						暗赤褐色		
E-175	広口壺	VI A10o	6 区 SK02		(27.8)	1		0	残 6.2		24.2		0.9	0.9	暗褐色	1 期	
E-176	広口壺	VI A8o0o	5 区 前庭部左		(29.6)	3		0	残 4.4		24.8		1.0	1.0	暗赤褐色	2 期	
E-177	広口壺	VI A8o0o	5 区 前庭部左			0	14.6	12	残 10.7						赤褐色		
E-178	広口壺	VI A10m	9 区 SC 取	下層	(20.6)	4	(15.3)	3	30.2	32.2	16.3	3.6	0.9	0.7	暗赤褐色	2 期	
E-179	広口壺	VI A10m	9 区 SC 取	下層	(24.4)	7		0	残 10.4		21.4	4.6	1.2	0.8	暗褐色	2 期	
E-180	広口壺	VI A8m	9 区 SC 取		(26.9)	2		0	残 6.9		22.6	5.7	1.0	1.1	暗褐色	1 期	
E-181	広口壺	VI A10m	11 区 SC 取		(22.0)	3		0	残 13.5		18.2	4.0	1.0	0.8	褐色	1 期	
E-182	広口壺	VI A10m	11 区 SC 取		(20.8)	3		0	残 13.7	29.5	17.7	2.9	1.0	0.6	灰色	1 期	
E-183	広口壺	VI A8m	9 区 SC 取		(19.0)	4		0	残 16.6	33.4	16.4	4.1	1.1	0.8	黒褐色	1 期	
E-184	広口壺	VI A10m	9 区 SC 取		(23.3)	1		0	残 28.9	30.2	18.3	3.9	0.9	0.8	暗赤褐色	1 期	
E-185	広口壺	VI A10m	10 区 SC 取		(19.6)	1		0	残 5.8		15.3	4.0	1.0	0.7	赤褐色	1 期	
E-186	広口壺	VI A10n	12 区 SC 取		(22.8)	3		0	残 11.8	29.4	19.6	3.0	0.8	0.8	暗褐色	1 期	
E-187	広口壺	VI A10m	9 区 SC 取		(20.5)	2		0	残 9.6		16.4	3.9	0.9	0.8	灰色	2 期	
E-188	広口壺	VI A10m	7 区 SC 取		(20.8)	1		0	残 5.1		17.8		1.0	0.8	灰色	三筋亜系	
E-189	広口壺	VI A10m	9 区 SC 取		(18.9)	2		0	残 5.4		15.3		0.9	0.8	灰色	三筋亜系	
E-190	広口壺	VI A11m	12 区 SC 取		(18.6)	2		0	残 5.7		14.9	4.5	0.7	1.0	灰色	三筋亜系	
E-191	広口壺	VI A11m	10 区 SC 取		(21.7)	4		0	残 10.4		17.3	3.9	0.9	0.9	灰色	三筋亜系	
E-192	広口壺	VI A11m	14 区 SC 取		(22.0)	1		0	残 13.3		18.8	4.2	0.7	0.9	黒褐色	三筋亜系	
E-193	広口壺	VI A8m0m	7 区 SC 取		20.2	7		0	残 11.0		16.6	3.4	0.7	0.9	暗赤褐色	三筋亜系	
E-194	広口壺	VI A8o	9 区 SC 取		19.1	9		0	残 11.9		17.1	3.8	0.9	0.8	黒褐色	3 期	
E-195	広口壺	VI A8m	9 区 SC 取		(22.0)	5		0	残 11.4		19.9	4.8	1.0	0.8	暗赤褐色	3 期	
E-196	広口壺	VI A10m	11 区 SC 取		(22.6)	1		0	残 11.1		18.8		0.8	1.0	暗赤褐色	3 期	
E-197	広口壺	VI A10m	9 区 SC 取		(20.7)	4		0	残 15.4	34.6	17.4	4.4	0.8	1.0	暗赤褐色	3 期	
E-198	広口壺	VI A8m	9 区 SC 取		27.4	9		0	残 21.6	42.6	25.0	6.0	0.9	1.0	暗褐色	3 期	
E-199	広口壺	VI A9m	9 区 SC 取			0	12.6	9	残 16.1						赤褐色		
E-200	広口壺	VI A10m	12 区 SC 取			0	(14.4)	6	残 8.5						暗褐色		
E-201	広口壺	VI A11m	14 区 SC 取			0	14.8	12	残 6.3						黒褐色		
E-202	広口壺	VI A10m	12 区 SC 取			0	(12.7)	6	残 11.8						暗赤褐色		
E-203	広口壺	VI A11m	12 区 SC 取			0	14.9	12	残 10.5						暗赤褐色		
E-204	広口壺	VI A11m	10 区 SC 取			0	14.3	11	残 4.2						暗赤褐色		
E-205	広口壺	VI A10m	12 区 SC 取			0	16.0	8	残 8.3						暗赤褐色		
E-206	広口壺	VI A10m	検出		(22.3)	4		0	残 20.1	34.4	18.8	2.7	0.9	0.7	黒褐色	1 期	
E-207	広口壺	VI A10n	検出		(24.4)	3		0	残 15.4	35.4	20.4	2.5	1.0	0.5	暗赤褐色	2 期	
E-208	広口壺	VI A11l	検出		(16.4)	1		0	残 15.8	28.0	13.0	4.2	1.0	0.8	暗赤褐色	2 期	
E-209	広口壺	VI A8k	検出		(29.8)	1		0	残 6.8		25.2	5.0	1.1	0.8	暗赤褐色	2 期	
E-210	広口壺	VI A10m	検出		(25.1)	1		0	残 5.4		21.2	3.5	0.9	0.8	暗赤褐色	2 期	粘土積付者
E-211	広口壺	VI A11m	検出		(19.6)	1		0	残 4.2		16.0		1.1	0.7	黒褐色	三筋亜系	
E-212	広口壺	VI A11m	検出		(19.0)	1		0	残 4.4		14.9		1.0	0.8	灰色	三筋亜系	
E-213	広口壺	VI A10n	検出		(18.8)	3		0	残 5.3		14.9	2.9	1.0	0.8	暗赤褐色	3 期	
E-214	広口壺	VI A11l	検出		(25.0)	2		0	残 2.6					1.1	灰白色	3 期	
E-215	広口壺	VI A11m	検出		(18.9)	2		0	残 8.2		16.2	4.2	1.0	0.9	暗赤褐色	3 期	
E-216	広口壺	VI A10m	検出		(18.7)	1		0	残 8.3		15.5	3.5	1.1	0.8	暗赤褐色	3 期	
E-217	広口壺	VI A11l	検出		(21.2)	2		0	残 9.5		18.0	3.8	1.3	0.8	暗赤褐色	3 期	
E-218	広口壺	VI A11m	検出		(21.8)	3		0	残 7.7		18.9	4.6	1.0	0.8	暗赤褐色	3 期	
E-219	広口壺	VI A11m	検出			0	13.9	12	残 7.8						暗赤褐色		
E-220	広口壺	VI A10m	検出			0	13.0	12	残 7.4						暗赤褐色		
E-221	広口壺	VI A10m	検出			0	15.0	12	残 4.8						暗赤褐色		
E-222	広口壺	VI A11m	検出			0	(14.5)	5	残 6.2						灰色		
E-223	広口壺	VI A10m	検出			0	13.0	7	残 5.8						暗赤褐色		
E-224	広口壺	VI A11l	検出			0	(13.8)	6	残 5.7						黒褐色		
E-225	広口壺	VI A11m	検出			0	(10.8)	6	残 4.3						黒褐色		
E-226	広口壺	VI A10m	表土		(24.4)	1		0	残 11.7		20.4		0.9	0.6	褐色	1 期	
E-227	広口壺	VI A10m	表土			0	12.0	7	残 5.2						暗赤褐色		
E-228	広口壺		表採			0	11.6	7	残 3.2						暗赤褐色		
E-229	広口壺		試掘			0	14.4	7	残 6.7						暗赤褐色		
E-230	小型壺	VI A9o0o	5 区 SK01		(18.8)	2		0	残 5.8		14.6	3.0	0.8	0.9	暗赤褐色		
E-231	小型壺	VI A8o0o	5 区 前庭部左			0	(9.9)	4	残 5.3						暗赤褐色		
E-232	小型壺	VI A10m	9 区 SC 取	下層	(15.2)	4		0	残 10.2		11.2	4.1	0.8	0.6	暗赤褐色		
E-233	小型壺	VI A10n	10 区 SC 取		(17.4)	2		0	残 10.5						暗赤褐色		
E-234	小型壺	VI A10m	9 区 SC 取		(14.8)	3		0	残 5.3		11.6	2.7	0.8	0.6	暗赤褐色		
E-235	小型壺	VI A10m	9 区 SC 取		(15.2)	4		0	残 6.1		11.6		0.7	0.6	暗赤褐色		
E-236	小型壺	VI A9m	9 区 SC 取		(19.5)	2		0	残 10.8		14.9	5.3	0.9	1.0	黒褐色		
E-237	小型壺	VI A11m	10 区 SC 取		(14.6)	5		0	残 13.8		10.4	5.0	1.0	0.8	赤褐色		
E-238	小型壺	VI A8k	検出		(14.7)	2		0	残 7.0		11.0	4.5	1.2	0.5	赤褐色		
E-239	小型壺	VI A11m	検出		(14.4)	2		0	残 4.0		10.4		1.4	0.9	赤褐色		
E-240	小型壺	VI A11m	検出		(16.2)	2		0	残 5.8		12.6	4.0	1.0	0.7	暗赤褐色		
E-241	小型壺	VI A10m	検出			0	(10.2)	6	残 5.2						暗赤褐色		
E-242	小型壺	VI A9m	表土		(17.2)	3		0	残 5.9		13.1		0.8	0.7	灰色		
E-243	小型壺	VI A8m	表土		(17.6)	2		0	残 5.9		13.4		0.9	0.9	暗赤褐色		

登録番号	窯種	グリッド	遺構	層位	口径 (cm)	残/口	底径 (cm)	残/口	器高 (cm)	最大径 (cm)	胴部径 口縁部高 (cm)	胴部厚 2 (cm)	最帯幅 (cm)	色調	分期		備考
E-244	二筋窯	VI A9o	5 区	SY01	焼口		0	(9.0)	10	残 20.8	17.5	8.9		0.7		明赤褐色	2 期		
E-245	二筋窯	VI A10o	6 区	前庭部(石		(10.2)	1		0	残 4.0		9.2	2.9	0.8	0.6	明赤褐色		C 種 c 種	
E-246	二筋窯	VI A10m	10 区	灰原	下層	(14.6)	1		0	残 12.4	18.9	11.9	2.6	0.8	0.5	明赤褐色	2 期	B 種 b 種	
E-247	二筋窯	VI A10m	9 区	灰原	下層		0		0	残 18.2	17.4					暗褐色	2 期		補修痕
E-248	二筋窯	VI A10m	10 区	灰原	上層	(12.0)	3		0	残 3.4		10.6	2.8	1.1	0.6	明赤褐色		B 種 a 種	
E-249	二筋窯	VI A10m	9 区	灰原	上層	(12.0)	4		0	残 3.6		10.2		1.0		黒褐色		B 種 c 種	
E-250	二筋窯	VI A11f	12 区	灰原		10.3	7	7.9	12	23.6	16.1	8.2	3.5	0.8	0.8	黒褐色	1 期	A 種 a 種	
E-251	二筋窯	VI A11m	12 区	灰原		(12.5)	1		0	残 22.3	19.9	10.4	3.5	0.8	0.9	黒褐色	3 期	B 種 a 種	
E-252	二筋窯	VI A11m	10 区	灰原		(10.9)	3	(9.1)	5	24.8	18.8	8.9	3.1	0.8	0.6	灰色	3 期	C 種 c 種	
E-253	二筋窯	VI A11l	14 区	灰原		(12.1)	3		0	残 8.2		10.0	3.6	0.6	0.6	暗褐色	1 期	A 種 a 種	焼み
E-254	二筋窯	VI A10m	9 区	灰原		(10.8)	2		0	残 3.4		8.7		0.8	0.8	明赤褐色		A 種 a 種	
E-255	二筋窯	VI A11l	14 区	灰原		(11.2)	2		0	残 3.3		9.1		0.7	0.8	暗褐色		A 種 a 種	
E-256	二筋窯	VI A10m	9 区	灰原		(10.4)	6		0	残 2.6		8.8		0.8	0.6	黒褐色		B 種 a 種	
E-257	二筋窯	VI A9m	9 区	灰原		(11.2)	2		0	残 3.0		9.5		0.9	0.6	黒褐色		B 種 a 種	
E-258	二筋窯	VI A11m	14 区	灰原		(11.4)	4		0	残 3.4		9.8		0.8	0.7	灰白色		C 種 c 種	
E-259	二筋窯	VI A11m	12 区	灰原		(13.4)	2		0	残 3.1		11.7		0.8	0.9	黒褐色		B 種 a 種	
E-260	二筋窯	VI A10m	12 区	灰原			0	(6.6)	1	残 23.0	17.8					黒褐色	1 期	a 種	
E-261	二筋窯	VI A11m	14 区	灰原			0	8.1	12	残 18.9	16.7					灰白色	1 期		
E-262	二筋窯	VI A11m	10 区	灰原			0	(8.4)	1	残 21.5	18.1					黒褐色	1 期		
E-263	二筋窯	VI A10m	10 区	灰原			0	8.4	12	残 16.4	17.4					赤褐色	1 期		
E-264	二筋窯	VI A11o		検出		(10.7)	2		0	残 16.7	16.7	8.4	3.4	0.8	0.7	黒褐色	1 期	A 種 a 種	
E-265	二筋窯	VI A11m		検出		(11.6)	1		0	残 16.2	19.8	10.0	3.0	0.9	0.6	黒褐色	2 期	A 種 a 種	
E-266	二筋窯	VI A11m		検出		(12.0)	2		0	残 3.4		10.0	3.0	0.7	0.5	灰白色		A 種 a 種	
E-267	二筋窯	VI A8k		検出		(10.4)	2		0	残 6.8		9.0	3.1	0.8	0.6	灰色		A 種 a 種	
E-268	二筋窯	VI A12n		検出		(12.2)	2		0	残 4.8		9.7		0.7	1.0	灰白色		A 種 a 種	
E-269	二筋窯	VI A11m		検出		(11.2)	5		0	残 4.9		9.2	2.7	0.8	0.7	灰白色		A 種 a 種	
E-270	二筋窯	VI A12m		検出		(9.8)	2		0	残 3.0		7.8		0.6	0.6	灰色		A 種 a 種	
E-271	二筋窯	VI A10m		検出		(11.6)	6		0	残 3.2		9.1		0.7	0.7	黒褐色		A 種 b 種	
E-272	二筋窯	VI A9m		検出		(13.4)	2		0	残 4.0		9.8	3.0	0.8	0.6	灰色		B 種 b 種	
E-273	二筋窯	VI A11m		検出		(11.0)	6		0	残 6.4		9.2	3.2	0.8	0.7	黒褐色		C 種 b 種	
E-274	二筋窯	VI A11m		検出		(10.2)	1		0	残 8.0		8.4	2.4	0.8	0.5	赤褐色	1 期	C 種 b 種	
E-275	二筋窯	VI A11l		検出		(10.8)	1		0	残 6.2		8.8	2.9	0.7	0.4	明赤褐色	1 期	C 種 c 種	
E-276	二筋窯	VI A11m		検出		(12.2)	3		0	残 3.2		11.4	2.8	1.0	0.5	灰白色		B 種 a 種	
E-277	二筋窯	VI A10o		検出		(9.6)	2		0	残 3.5		8.6	3.1	1.0	0.5	灰白色		B 種 c 種	
E-278	二筋窯	VI A11m		検出		(10.0)	3		0	残 7.1		8.0	3.3	1.1	0.6	黒褐色		C 種 c 種	
E-279	二筋窯	VI A11m		検出		(10.7)	1		0	残 3.4		10.0	2.7	0.8	0.4	黒褐色		B 種 c 種	
E-280	二筋窯	VI A8k		検出			0	7.7	7	残 20.4	16.6					暗褐色	1 期		
E-281	二筋窯	VI A12n		検出			0	(7.8)	0	残 13.4						灰色	1 期		
E-282	二筋窯	VI A10m		検出			0		0	残 16.4	16.6					灰色	1 期		
E-283	二筋窯	VI A12l		検出			0	7.6	12	残 9.2						灰白色	1 期		
E-284	二筋窯	VI A11m		検出			0	10.2	2	残 17.3	19.8					黒褐色	2 期		
E-285	二筋窯	VI A10m		検出			0	8.2	6	残 13.8	18.0					赤褐色	2 期		
E-286	二筋窯	VI A11l		検出			0	8.2	6	残 6.4						灰白色			
E-287	二筋窯	VI A10m		検出			0	(8.0)	2	残 7.7						灰白色			
E-288	二筋窯	VI A12l		検出			0	(10.0)	3	残 9.0						灰色			
E-289	二筋窯	VI A9m		検出			0	9.8	7	残 10.7						赤褐色			
E-290	二筋窯	VI A11m		検出			0	7.4	6	残 12.5	15.3					黒褐色	2 期		
E-291	二筋窯	VI A9m		表土		(11.7)	4		0	残 8.4	14.7	9.0	2.5	0.8	0.5	黒褐色		B 種 b 種	
E-292	二筋窯	VI A11n		表土		(11.3)	1		0	残 6.0		10.4	3.5	1.0	0.7	黒褐色		C 種 c 種	
E-293	二筋窯	VI A9m		表土		(13.3)	5		0	残 3.5		12.0		0.9	0.6	黒褐色			
E-294	二筋窯	VI A9m		表土		(11.8)	3		0	残 3.8		10.1	2.8	0.9		灰白色			
E-295	二筋窯	VI A10m		表土			0	(10.6)	3	残 5.0						灰色			
E-296	二筋窯			試掘			0	9.2	11	残 11.7						黒褐色			下駄痕
E-297	二筋窯			表採			0	(10.0)	1	残 9.1						黒褐色			
E-298	二筋窯			表採			0	(8.1)	2	残 8.8						暗褐色			
E-299	二筋窯			表採			0	9.2	10	残 8.1						灰白色			

—夏敷古窯跡遺物一覧表５—

登録番号	器種	グリッド		遺構	層位	口径(cm)	残/12	底径(cm)	残/12	器高(cm)	径高指数	高台基部幅(cm)	体部厚さ/上(cm)	体部厚さ/下(cm)	ヘラケズリ高(cm)	色調	分類			備考
E-300	片口鉢	VI A8p9p	1区	SY01	床面	(37.2)	5		0	残11.3			0.7		9.9	暗赤褐色	1期	A種		
E-301	片口鉢	VI A9p	2区	SY01	床面	(33.2)	1		0	残11.5		2.3	0.8	1.4	7.5	灰白色	1期	A種	b種	
E-302	片口鉢	VI A9p	2区	SY01		(35.0)	5	(15.6)	9	14.0	40.00	1.6	0.8		8.8	灰色	1期	B種	a種	
E-303	片口鉢	VI A9o	3区	SY01		(34.5)	4	(16.6)	4	15.5	44.93	1.9	0.8	1.6	10.7	灰白色	1期	B種	b種	内面摩耗
E-304	片口鉢	VI A9o	3区	SY01		(33.8)	3	(16.0)	0	14.1	41.72		0.6	1.7	11.6	灰色	1期	B種		内面摩耗
E-305	片口鉢	VI A9o	5区	SK01		39.2	10	18.6	12	11.3	28.83	2.5	0.8	1.5	6.5	灰白色	1期	A種	a種	
E-306	片口鉢	VI A9o	5区	SK01		35.6	12	17.8	11	12.3	34.55	1.2	0.8	1.8	8.5	灰白色	1期	A種	c種	内面摩耗
E-307	片口鉢	VI A9o	5区	SK01		36.9	12	18.0	7	11.5	31.17	1.8	0.8	1.5	5.7	灰白色	1期	A種	a種	
E-308	片口鉢	VI A9n	5区	SK01		(34.3)	4	(17.9)	4	12.5	36.44	1.7	0.7	1.1	8.5	灰色	1期	B種	a種	内面摩耗
E-309	片口鉢	VI A9o	5区	SK01		(36.0)	1	16.7	5	12.1	33.61	2.1	0.7	1.5	9.0	灰色	1期	A種	a種	
E-310	片口鉢	VI A10o	6区	前庭部右		(30.8)	2	16.0	12	14.2	46.10	1.2	0.8	1.9	8.8	黄橙色	1期	B種	a種	
E-311	片口鉢	VI A10o	6区	前庭部右		23.6	10	14.0	2	10.2	43.22	1.6	0.7	1.2	6.2	灰白色	3期	A種	b種	
E-312	片口鉢	VI A10o	6区	前庭部右		(33.2)	3	(16.4)	1	12.2	36.75	1.3	0.7	1.4	6.9	灰色	1期	A種	c種	
E-313	片口鉢	VI A10o	6区	前庭部右		32.7	12	16.2	5	14.6	44.65	1.3	0.8	1.6	10.8	赤褐色	1期	B種	c種	
E-314	片口鉢	VI A10m	9区	灰原	下層	37.8	9	17.0	1	13.0	34.39	2.0	0.8	1.6	7.4	灰白色	1期	A種	a種	
E-315	片口鉢	VI A11m	10区	灰原	下層	(34.9)	6	17.8	6	12.6	36.10	1.9	0.8	1.8	6.2	灰白色	1期	A種	a種	
E-316	片口鉢	VI A10m	9区	灰原	下層	(42.0)	3	(22.8)	3	10.1	24.05	1.6	0.8	1.5	4.4	灰色	1期	B種	a種	
E-317	片口鉢	VI A11m	10区	灰原	下層	34.1	6	16.2	10	13.1	38.42	2.2	0.8	1.5	9.3	灰色	1期	B種	b種	
E-318	片口鉢	VI A11m	10区	灰原	下層	(38.6)	1	17.3	8	12.2	31.61	1.5	0.9	1.5	6.6	灰色	1期	B種	b種	
E-319	片口鉢	VI A11m	10区	灰原	下層	(36.6)	2	(20.8)	3	残11.6		1.5	0.6	1.3	6.8	灰白色	1期	A種	b種	
E-320	片口鉢	VI A10m	9区	灰原	下層	(39.6)	3	(19.7)	3	残10.1		1.7	0.9	1.4	6.3	灰色	1期	A種	b種	
E-321	片口鉢	VI A10m	9区	灰原	下層	(39.0)	2	(20.2)	3	11.7	30.00	2.3	0.8	1.3	6.8	灰色	1期	A種	b種	
E-322	片口鉢	VI A10m	9区	灰原	下層	(41.2)	4	(18.7)	5	10.9	26.46	1.7	0.9	1.8	6.3	灰白色	1期	A種	b種	
E-323	片口鉢	VI A10m	9区	灰原	下層	(37.8)	1	17.0	7	11.1	29.37	1.5	0.8	1.8	6.0	灰色	1期	A種	b種	
E-324	片口鉢	VI A11m	10区	灰原	下層	(32.2)	4	15.6	2	13.8	42.86	1.4	0.7	1.6	9.0	灰色	1期	A種	c種	内面摩耗
E-325	片口鉢	VI A10m	9区	灰原	下層		0	(16.2)	4	残7.9		1.8		1.2		灰色	1期		c種	内面摩耗
E-326	片口鉢	VI A10m	10区	灰原	下層	(34.3)	1		0	残11.0			0.7			灰色	1期	A種		
E-327	片口鉢	VI A10m	10区	灰原	上層	(33.4)	2	(16.6)	5	12.6	37.72	1.3	0.7	1.3	8.4	灰色	1期	A種	c種	
E-328	片口鉢	VI A10m	10区	灰原	上層	(37.0)	2	(18.6)	3	12.6	34.05	1.7	0.8	1.5	8.2	灰色	1期	A種	c種	
E-329	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(36.4)	5	(16.7)	9	12.9	35.44	1.9	0.8	1.4	7.6	灰白色	1期	A種	a種	
E-330	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(29.6)	2	(12.4)	3	13.4	45.27	1.6	0.8	1.2	7.9	灰色	1期	A種	a種	
E-331	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(34.4)	2	(19.2)	5	13.8	40.12	1.6	0.8	1.7	8.6	灰色	1期	B種	b種	
E-332	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(32.6)	2	16.0	1	14.2	43.56		0.8	1.1	6.7	灰色	1期	A種	b種	
E-333	片口鉢	VI A10m	11区	灰原		36.0	6	16.5	12	12.8	35.56	2.1	0.8	1.5	8.6	灰白色	1期	A種	c種	
E-334	片口鉢	VI A11m	11区	灰原		(32.2)	4	15.8	10	13.9	43.17	1.6	0.8	1.4	9.1	灰色	1期	B種	c種	内面摩耗
E-335	片口鉢	VI A11m	12区	灰原		(35.6)	5	16.6	7	13.3	37.36	2.0	0.9	1.4	8.4	灰色	1期	B種	c種	
E-336	片口鉢	VI A11m	10区	灰原			0	17.2	11	残4.6		1.8		1.7		灰色	1期			内面摩耗
E-337	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(40.0)	4	(18.6)	4	残12.3		1.5	0.8	1.7	6.5	灰白色	1期	A種	c種	
E-338	片口鉢	VI A10m	12区	灰原		(31.8)	2	(14.4)	3	残11.2		1.2	0.8	1.6	5.6	灰白色	1期	B種	c種	
E-339	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		23.2	10	12.0	10	10.1	43.53	1.5	0.6	1.3	6.9	灰色	3期	A種	c種	
E-340	片口鉢	VI A9m	9区	灰原		(37.2)	3	(16.5)	3	11.6	31.18	1.1	0.6	1.8	6.4	灰色	1期	A種	c種	
E-341	片口鉢	VI A11m	11区	灰原		(31.4)	3	17.0	9	13.6	43.31	1.6	0.8	1.3	9.0	灰色	1期	A種	c種	
E-342	片口鉢	VI A9m	9区	灰原		36.2	7	17.0	12	12.4	34.25	1.6	0.9	2.1	6.6	灰色	1期	A種	c種	
E-343	片口鉢	VI A11m	14区	灰原		(29.0)	2	13.4	4	残12.3		1.2	0.9	1.5	7.2	灰白色	1期	B種	c種	
E-344	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(36.6)	3	(18.1)	3	11.2	30.60	1.1	0.8	1.5	6.0	灰白色	1期	A種	c種	
E-345	片口鉢	VI A10m	12区	灰原			0	(14.5)	6	残9.2		1.4		1.9		灰色	1期		c種	
E-346	片口鉢	VI A10m	11区	灰原		(37.6)	3	(18.2)	3	11.6	30.85	1.6	0.8	1.7	6.5	灰白色	1期	A種	c種	
E-347	片口鉢	VI A10m	10区	灰原		(36.3)	4	(19.0)	5	12.4	34.16	1.3	0.6	1.2	6.8	灰色	1期	A種	c種	
E-348	片口鉢	VI A10m	9区	灰原		(32.0)	3	17.9	7	14.0	43.75	1.2	0.9	1.9	8.8	灰白色	1期	A種	c種	
E-349	片口鉢	VI A10m	9区	灰原		(36.9)	4	18.0	12	12.1	32.79	1.1	0.8	1.8	7.6	灰色	1期	A種	c種	
E-350	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(32.5)	2	16.2	9	14.5	44.62	1.3	0.8	1.6	8.9	灰色	1期	A種	c種	内面摩耗
E-351	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(36.6)	2	18.0	4	12.7	34.70	1.6	0.8	1.5	6.7	灰色	1期	A種	c種	
E-352	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(33.4)	3	15.3	8	13.2	39.52	1.5	0.9	1.1	8.4	灰色	1期	A種	c種	
E-353	片口鉢	VI A11m	10区	灰原		(34.2)	5	18.1	9	12.0	35.09	1.3	0.7	1.4	6.1	灰白色	1期	A種	c種	
E-354	片口鉢	VI A10m	12区	灰原		(28.8)	2		0	残5.7			0.9			灰白色	1期			
E-355	片口鉢	VI A11l		検出		(36.4)	5	18.3	34	13.3	36.54	2.4	0.8		6.4	灰白色	1期	A種	b種	
E-356	片口鉢	VI A11l11m		検出		(17.4)	5	(9.8)	6	6.4	36.78	1.5	0.4	1.3	4.7	灰白色	4期	A種	b種	
E-357	片口鉢	VI A11m		検出			0	15.5	5	残10.8		2.2		1.4		灰白色	1期		a種	
E-358	片口鉢	VI A11m		検出		(41.2)	2	(21.8)	3	11.5	27.91	1.7	0.7	2.0	7.3	灰白色	1期	A種	b種	
E-359	片口鉢	VI A12n		検出		(32.6)	2	(15.7)	3	12.8	39.26	1.7	0.8	1.5	8.1	灰色	1期	A種	b種	内面摩耗
E-360	片口鉢	VI A10n		検出		(39.2)	3	(19.3)	4	11.0	28.06	1.7	0.7	2.2	6.8	灰白色	1期	A種	b種	
E-361	片口鉢	VI A11l		検出		(29.0)	1	(14.8)	4	13.3	45.86	1.5	0.6	1.6	7.4	灰色	1期	A種	b種	
E-362	片口鉢	VI A11l		検出		(33.6)	2	(17.4)	3	残13.0		1.4	0.6	1.4	8.2	灰白色	1期	A種	b種	
E-363	片口鉢	VI A8k		検出		(32.2)	5	(16.2)	5	12.3	38.20	1.6	0.7	2.0	7.4	灰白色	1期	A種	c種	
E-364	片口鉢	VI A11o		検出		(23.2)	3	(11.5)	4	12.1	52.16	1.4	0.8	1.9	7.2	灰色	3期	A種	b種	
E-365	片口鉢	VI A10l		検出		(26.0)	3	(13.5)	4	残8.9		0.9	0.6	1.6	6.0	灰白色	2期	A種	c種	
E-366	片口鉢	VI A10l		検出		(35.6)	5	(17.4)	6	12.1	33.99	1.3	0.8	1.5	7.4	灰白色	1期	A種	c種	
E-367	片口鉢	VI A12n		検出			0	(12.6)	5	残8.1		1.2		1.5		灰白色	3期		c種	
E-368	片口鉢	VI A9m		表土		(39.2)	2	19.0	8	12.2	31.12	2.1	0.9	1.7	7.0	灰白色	1期	A種	b種	
E-369	片口鉢	VI A11l		表土		(36.3)	3	(18.6)	3	13.1	36.09	1.6	0.9	1.3	7.0	灰色	1期	A種	b種	
E-370	片口鉢	VI A9m		表土		(36.0)	2	(16.2)	5	10.6	29.44	1.2	0.8	1.4	6.0	灰色	1期	A種	c種	
E-371	片口鉢	VI A9n		表土		(32.6)	3	(16.0)	5	12.5	38.34	1.7	0.9	1.6	7.6	灰色	2期	A種	c種	
E-372	片口鉢	VI A9m		表土		(37.8)	2	(18.2)	4	10.6	28.04	1.5	0.9	1.5	6.5	灰白色	1期	A種	c種	
E-373	片口鉢	VI A9m		表土		(27.2)	2	(15.1)	3	9.8	36.03	1.2	0.7	1.2	6.3	灰白色	2期	A種	c種	
E-374	片口鉢	VI A9m		表土		(40.2)	2	(18.2)	1	12.2	30.35	1.3	0.8	1.6	7.1	灰色	1期	A種	c種	
E-375	片口鉢	VI A9m		表土		(27.6)	3	(14.2)	4	9.0	32.61	1.3	0.7	1.3	5.6	灰白色	2期	A種	c種	
E-376	片口鉢	VI A9m		表土		(35.8)	5	(17.6)	5	12.9	36.03	1.0	0.7	1.5	6.7	灰色	1期	A種	c種	
E-377	片口鉢			試掘		(25.2)	3	(13.4)	3	9.5	37.70	1.7	0.7	1.2	6.4	灰白色	2期	A種	b種	
E-378	片口鉢			試掘		(34.3)	1	15.6	2	14.6	42.57	1.5	0.8	1.7	8.3	灰色	1期	B種	c種	

登録番号	器種	グリッド		遺構	層位	口径 (cm)	残/12	底径 (cm)	残/12	器高 (cm)	最高径数	色調	備考
E-379	碗	VI A9o	5区	SY01		(17.2)	2		0	残3.8		灰白色	内面摩耗
E-380	碗	VI A9n	5区	SD01		(17.0)	1		0	残3.0		黄橙色	内面摩耗
E-381	碗	VI A10o	6区	SK02			0	46.5t	6	残3.1		灰白色	
E-382	碗	VI A9o	5区	SK01		15.4	5	7.3	7	5.3	34.42	灰白色	内面摩耗
E-383	碗	VI A9n	5区	SK08		15.9	7	7.6	10	5.7	35.85	灰色	内面摩耗
E-384	碗	VI A9n	5区	前庭部左		(15.0)	1		0	残2.7		灰白色	
E-385	皿	VI A9n9o	5区	前庭部左		8.4	12	4.6	12	2.6	30.95	灰白色	内面摩耗
E-386	碗	VI A9n	5区	前庭部	上層		0	(7.1)	3	残2.8		灰色	内面摩耗
E-387	碗	VI A10m	9区	SX02	下層	(14.2)	1	46.2t	6	5.6	39.44	灰白色	
E-388	碗	VI A10m	9区	SX02	上層		0	(8.0)	1	残2.7		灰白色	
E-389	碗	VI A11m	12区	SX02		15.5	10	7.1	12	5.5	35.48	灰白色	内面摩耗
E-390	碗	VI A11n	10区	SX02		(14.3)	6	(6.4)	2	5.1	35.66	灰白色	内面摩耗
E-391	碗	VI A9n	9区	SX02		(15.0)	6	7.1	12	5.1	34.00	灰色	
E-392	碗	VI A11n	10区	SX02		14.9	10	7.1	12	5.3	35.57	赤褐色	内面摩耗
E-393	碗	VI A10m10n	7区	SX02			0	7.4	10	残4.1		灰白色	内面摩耗
E-394	碗	VI A10n	12区	SX02			0	7.2	8	残3.8		灰白色	内面摩耗
E-395	碗	VI A11m	10区	SX02			0	7.0	6	残2.8		灰白色	内面摩耗
E-396	碗	VI A10m10n	7区	SX02			0	(9.6t	2	残1.9		灰色	内面摩耗
E-397	碗	VI A9n	10区	SX02			0	(7.2t	2	残2.0		灰色	
E-398	碗	VI A10n	12区	SX02		(15.4)	3		0	残3.8		灰色	内面摩耗
E-399	碗	VI A11m	10区	SX02		(16.2)	2		0	残3.7		灰色	内面摩耗
E-400	碗	VI A10n	12区	SX02		(16.4)	3		0	残3.4		灰色	内面摩耗
E-401	碗	VI A10m	9区	SX02		(14.4)	5		0	残4.0		灰白色	
E-402	碗	VI A10m		検出		(15.8)	3	8.0	12	5.9	37.34	灰色	内面摩耗
E-403	碗	VI A10m		検出		(15.3)	1	7.1	10	5.5	35.95	灰白色	内面摩耗
E-404	碗	VI A11m		検出		14.0	6	7.2	12	5.2	37.14	灰白色	内面摩耗
E-405	碗	VI A11m		検出		(14.0)	3	6.5	6	5.1	36.43	灰白色	内面摩耗
E-406	碗	VI A9n		検出		(15.2)	3	7.1	12	5.8	38.16	灰白色	
E-407	碗	VI A10m		検出		(14.6)	1	7.0	11	6.3	43.15	灰色	
E-408	碗	VI A11m		検出		(14.4)	3	7.5	12	4.3	29.86	灰白色	
E-409	碗	VI A11m		検出			0	6.9	11	残3.6		灰色	内面摩耗
E-410	碗	VI A10o		検出			0	(7.3t	1	残3.7		灰白色	内面摩耗
E-411	碗	VI A11n		検出			0	7.6	10	残3.4		灰白色	内面摩耗
E-412	碗	VI A11m		検出			0	6.2	10	残2.6		灰白色	内面摩耗
E-413	碗	VI A9n		検出		17.4	1		0	残4.5		灰色	内面摩耗
E-414	碗	VI A10m		検出		(14.0)	2		0	残3.3		灰白色	
E-415	碗	VI A11m		検出		(15.7)	4		0	残3.7		灰白色	
E-416	皿	VI A11m		検出		9.0	6	5.0	12	3.5	38.89	灰色	
E-417	皿	VI A10m		検出		49.0t	6	5.4	6	2.2	24.44	灰色	内面摩耗
E-418	碗	VI A9n		表土		(16.6)	2	7.2	12	5.2	31.33	灰色	
E-419	碗	VI A9n		表土		(15.7)	4	8.2	12	5.1	32.48	灰色	
E-420	碗	VI A11m		表土		(15.6)	1	(7.5t	3	4.9	31.41	灰白色	
E-421	碗	VI A9m		表土			0	7.1	11	残4.0		赤褐色	
E-422	碗	VI A9n		表土			0	(7.2t	6	残2.0		灰色	内面摩耗
E-423	碗	VI A9n		表土			0	7.3	12	残1.9		灰白色	内面摩耗
E-424	碗			表採			0	7.0	12	残2.8		灰色	

登録番号	器種	グリッド		遺構	層位	口径 (cm)	残/12	底径 (cm)	残/12	器高 (cm)	最大径 (cm)	色調	備考
E-425	長頸壺	VI A11m	10区	SX02	下層		0		0	残23.2	15.4	灰色	
E-426	短頸壺	VI A10m10n	7区	SX02		(11.8)	1		0	残3.1		灰色	
E-427	鉢	VI A10m	10区	SX02		(21.0)	2		0	残2.8		明赤褐色	
E-428	鉢	VI A10m		検出		(26.3)	1		0	残3.0		褐色	
E-429	鉢	VI A9n		表土		(26.2)	2		0	残3.5		灰色	
E-430	鏡フ	VI A10o	12区	SX02		(27.4)	1		0	残2.1		灰色	
E-431	片口鉢	VI A10m		検出		(25.2)	2	13.8	7	9.9		灰色	
E-432	羽釜	VI A8k		検出			12		12	残4.7		黒褐色	
E-433	陶丸	VI A10m	9区	SX02	下層	長2.3		幅2.3	0	厚2.5		明赤褐色	
E-434	不明	VI A10o	10区	SX02		残長 8.8		残幅 3.0	0	残厚 1.2		灰色	
E-435	不明	VI A11m	10区	SX02		残長 4.3		幅3.0	0	厚 1.2		橙色	
E-436	伊勢型鍋	VI A9o	5区	前庭部	上層	(27.0)	6		0	残7.2		黄橙色	

登録番号	器種	グリッド		遺構	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調	備考
E-437	焼台A	VI A10m	9区	灰原	上層	13.6	17.4	9.4	1,150	暗褐色	
E-438	焼台A			表採		15.1	16.5	7.9	1,200	暗赤褐色	
E-439	焼台A	VI A11m	10区	灰原		10.6	6.4	6.5	470	暗赤褐色	
E-440	焼台A	VI A11o		検出		10.5	10.4	5.6	520	暗赤褐色	
E-441	焼台A	VI A11o		表土		9.7	12.5	5.5	480	暗赤褐色	
E-442	焼台A	VI A11l		検出		15.0	12.2	9.7	1,180	暗赤褐色	
E-443	焼台A	VI A11m	10区	灰原		10.5	14.6	5.6	430	暗赤褐色	
E-444	焼台A	VI A10m		表土		10.1	13.5	7.0	520	暗赤褐色	
E-445	焼台A	VI A11m	10区	灰原		13.8	11.7	8.0	690	暗赤褐色	
E-446	焼台A	VI A8k		検出		8.6	9.0	6.7	残 290	暗赤褐色	
E-447	焼台A	VI A11l		検出		8.9	8.3	5.3	310	暗赤褐色	
E-448	焼台A	VI A10m	11区	灰原		10.0	80.0	5.9	350	暗赤褐色	
E-449	焼台A			試掘		11.2	9.9	6.7	残 460	暗赤褐色	
E-450	焼台A	VI A11m		検出		9.3	11.1	7.9	600	暗赤褐色	
E-451	焼台A	VI A10m		灰原		11.2	6.3	7.7	残 330	黒褐色	
E-452	焼台A	VI A9m		表土		10.5	11.4	5.4	480	灰白色	
E-453	焼台A	VI A12n		検出		14.1	12.7	6.0	930	暗褐色	
E-454	焼台A	VI A11m		表土		16.5	18.8	8.0	残 1,400	暗赤褐色	
E-455	焼台A			表採		13.3	14.4	7.6	900	暗赤褐色	
E-456	焼台B	VI A9m		表土		15.2	14.1	10.0	1,420	黒褐色	
E-457	焼台B	VI A9m		表土		11.1	14.1	7.0	800	灰色	
E-458	焼台B	VI A11n		表土		15.1	15.7	11.0	1,190	灰色	
E-459	焼台B			表採		14.0	16.2	9.1	1,460	灰色	
E-460	焼台B			表採		14.6	15.6	8.6	1,340	灰白色	
E-461	焼台B	VI A9m		表土		13.0	11.8	8.7	1,010	灰色	
E-462	焼台B	VI A12n		検出		12.3	16.6	7.7	1,070	暗褐色	
E-463	焼台B			表採		13.7	14.7	8.9	1,350	灰色	
E-464	焼台B	VI A9m		表土		14.6	17.4	8.4	1,330	灰色	
E-465	焼台B			表採		14.6	10.3	13.0	1,300	灰色	
E-466	焼台B	VI A10n		検出		12.5	15.0	11.4	990	灰色	
E-467	焼台B	VI A11l		表土		13.9	12.8	9.7	1,250	灰色	
E-468	焼台B			表採		11.6	12.7	9.6	1,140	灰色	
E-469	焼台B	VI A9m		表土		14.7	12.6	11.0	1,200	灰色	
E-470	焼台B	VI A9m		表土		14.3	10.4	12.0	1,180	灰色	
E-471	焼台B	VI A11n		表土		12.6	9.2	10.6	910	灰色	
E-472	焼台B	VI A11l		検出		10.1	8.6	10.5	760	暗赤褐色	
E-473	焼台B	VI A9m		表土		9.8	10.0	10.3	650	灰白色	
E-474	焼台B	VI A11m		灰原		8.3	7.5	7.3	260	黒褐色	
E-475	転用具	VI A9m	9区	灰原	上層	5.2	7.3	1.2	47.5	黒褐色	片口鉢口縁部
E-476	転用具	VI A10m	9区	灰原	上層	9.5	10.7	2.4	175	暗赤褐色	甕体部
E-477	転用具	VI A11m	10区	灰原		11.5	11.3	1.4	202.5	暗赤褐色	甕体部
E-478	転用具	VI A10m		灰原		12.5	10	1.4	130	灰色	甕体部
E-479	転用具	VI A10m	10区	灰原	下層	16	7.9	3.7	195	暗赤褐色	甕体部
E-480	床	VI A9p	1区	SY01						灰白色	片口鉢高台接地痕跡

登録番号	器種	グリッド		遺構	層位	口径(cm)	残/12	底径(cm)	残/12	器高(cm)	重量(g)	色調	備考
E-481	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	(13.5)	4	11.7	12	54.4	3,400	橙色	溜池から１本目
E-482	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	12.8	12	11.1	12	51.8	3,700	橙色	溜池から２本目
E-483	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	12.1	12	10.3	12	52.2	3,500	橙色	溜池から３本目
E-484	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	11.8	12	10.7	12	53.4	3,500	橙色	溜池から４本目
E-485	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	12.3	11		12	55.3	3,700	橙色	溜池から５本目
E-486	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	11.6	12	10.8	12	51.5	3,400	橙色	溜池から６本目
E-487	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	11.1	12	10.1	12	51.8	3,300	橙色	溜池から７本目
E-488	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	13.4	12	11.1	12	50.8	3,600	橙色	溜池から８本目
E-489	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	13.5	12	10.9	12	50.3	3,400	橙色	溜池から９本目
E-490	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	12.3	12	11.1	12	50.6	3,300	橙色	溜池から 10 本目
E-491	赤物土管	VI A11m		SD03	下層	13.8	7	9.9	12	53.1	残3,300	橙色	溜池から 11 本目
E-492	赤物炭櫃	VI A11n		SK07		(34.8)				残22.7		橙色	
E-493	丸碗	VI A10n		検出		(10.8)	1		0	残4.3		橙色	
E-494	赤物火鉢	VI A9p		表土		(22.4)	2		0	残2.7		橙色	
E-495	赤物火鉢	VI A10m		表土		(18.0)	2	(13.4)	1	4.7		橙色	
E-496	赤物火鉢	VI A10n		表土		(19.4)	2	(14.6)	1	4.8		橙色	
E-497	赤物甕	VI A10m		表土		(69.6)	1		0	残18.4		橙色	
E-498	赤物甕	VI A11m	11区	灰原		(55.0)	1		0	残5.1		橙色	
E-499	赤物甕	VI A12n		検出			1			残3.7		橙色	
E-500	赤物甕	VI A11m	11区	灰原			1			残2.8		橙色	
E-501	赤物竈	VI A10m		表土			0	(23.2)	1	残4.1		橙色	
E-502	赤物竈	VI A9m		表土			1			残7.0		橙色	
E-503	赤物竈	VI A10m		表土			1			残6.0		橙色	
E-504	真焼土管	VI A11m	11区	灰原		(15.1)	2		0	残8.6		暗赤褐色	
E-505	真焼焼台	VI A9n		表土		12.6		12.6		1.8		暗赤褐色	
E-506	真焼焼台	VI A11n		表土								暗赤褐色	
E-507	真焼焼台	VI A9o		表土								暗赤褐色	

登録番号	器種	グリッド		遺構	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	備考
E-508	スクラッチタイル	VI A9m		表土					橙色	
E-509	転用砥具	VI A10m		表土	9.5	7.5	3.7	132.5	灰色	片口鉢底部
E-510	転用砥具	VI A11n		表土	9.5	9.5	1.5	105	灰色	片口鉢口縁部
E-511	転用砥具	VI A10m		検出	12.8	9.8	1.8	165	暗赤褐色	甕体部
E-512	転用砥具	VI A8k		検出	5.6	5.8	3.6	60	灰色	壷底部
E-513	転用砥具	VI A11o		表土	3.8	5.9	2.1	35	褐色	壷底部
E-514	転用砥具	VI A11l		検出	9.1	6.1	1.8	102	橙色	片口鉢口縁部
E-515	転用砥具	VI A8k		検出	8.5	9.2	4.3	172.5	灰色	赤物甕口縁部
E-516	転用砥具	VI A8p		表土	5.0	10.5	3.5	80	橙色	甕口縁部
E-517	転用砥具	VI A11n		表土	7.0	14.4	5.0	242	橙色	赤物甕口縁部
E-518	転用砥具	VI A8p		表土	3.3	5.8	1.4	22.5	灰色	器種不明口縁部
E-519	転用砥具			表採	4.3	7.5	3.5	92	褐色	赤物甕口縁部
E-520	転用砥具	VI A10n		検出	6.6	5.5	5.2	136	褐色	赤物甕口縁部
E-521	転用砥具	VI A9o		表土	3.8	4.3	1.1	22.5	灰色	甕体部
E-522	転用砥具	VI A8p9p	2区	SY01	4.9	5.8	1.6	37.5	橙色	赤物甕体部
E-523	転用砥具	VI A11m	11区	灰原	4.8	5.0	1.1	30	橙色	赤物甕体部
E-524	転用砥具	VI A10k		検出	3.6	5.0	1.0	22.5	褐色	赤物甕体部
E-525	転用砥具	VI A12m		検出	6.8	4.8	1.5	35	灰色	甕体部
E-526	転用砥具	VI A11m		表土	9.7	6.2	1.3	62.5	橙色	赤物甕体部
E-527	転用砥具	VI A10o		表土	4.3	5.5	1.1	25	灰色	甕体部
E-528	転用砥具	VI A11m	11区	灰原	4.6	6.1	1.0	35	橙色	赤物甕体部
E-529	転用砥具	VI A12n		検出	5.3	6.8	2.0	57.5	灰色	甕体部
E-530	転用砥具	VI A10k		検出	5.6	6.1	1.2	42.5	褐色	赤物甕体部
E-531	転用砥具	VI A8p9p	2区	SY01	6.1	3.6	1.0	25	灰色	壷底部
E-532	転用砥具	VI A11m	11区	灰原	3.9	6.0	1.2	27.5	橙色	赤物甕体部
E-533	転用砥具	VI A10k		検出	5.5	8.2	1.4	62.5	褐色	赤物甕体部
E-534	転用砥具	VI A11m		表土	5.2	6.4	0.9	27.5	淡黄橙色	甕体部？
E-535	転用砥具	VI A11m	11区	灰原	7.1	9.0	1.3	95	褐色	赤物甕体部
E-536	転用砥具	VI A10m		表土	4.7	6.6	1.3	42.5	橙色	赤物甕体部

登録番号	器種	グリッド	遺構	口径 (cm)	残/口	底径 (cm)	残/底	器高 (cm)	色調	備考
E-1	須	Ⅲ H9j	SX03	(37.2)	2		0	残 6.4	黒褐色	
E-2	須	Ⅲ H10k	検出	(38.8)	1		0	残 11.4	灰黒色・黄灰色	
E-3	須	Ⅲ H9k	表採	(28.6)	1		0	残 10.8	灰黒色・灰色	
E-4	須	Ⅲ H7i	SX01	(34.9)	2		0	残 10.3	褐灰色・暗赤褐色	
E-5	須	Ⅲ H7i	SX02	(44.2)	1		0	残 6.5	黄灰色	
E-6	須	Ⅲ H8i	SX01	(45.2)	2		0	残 6.3	赤褐色	
E-7	須	Ⅲ H8i	SX01	(53.6)	1		0	残 5.6	赤褐色	
E-8	須	Ⅲ H8i	SX04（床面）	(45.0)	4		0	残 6.5	赤褐色・暗灰色	
E-9	須	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(51.2)	4		0	残 10.2	暗赤褐色	
E-10	須	Ⅲ H8i	SX01	(39.4)	1		0	残 5.9	赤褐色	
E-11	須	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(37.2)	2		0	残 6.4	暗赤褐色・灰色	
E-12	須	Ⅲ H8i	SX01	(40.0)	2		0	残 7.2	赤褐色	
E-13	須	Ⅲ H9i	SX04	(43.0)	1		0	残 4.8	茶褐色・灰黄色	
E-14	須	Ⅲ H8i	表土	(44.0)	2		0	残 6.8	赤褐色・浅灰色	
E-15	須	Ⅲ H11k	SX03	(49.0)	1		0	残 5.2	赤褐色・黄灰色	
E-16	須	Ⅲ H7i	SX04	(49.2)	2		0	残 5.0	暗赤褐色	
E-17	須	Ⅲ H9i	SX04（床面）	(45.0)	4		0	残 6.5	赤褐色・暗灰色	
E-18	須	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(46.0)	2		0	残 13.5	赤褐色	
E-19	須	Ⅲ H8i	SX01	(46.2)	2		0	残 14.7	灰黒色	
E-20	須	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(46.0)	2		0	残 6.5	赤褐色	
E-21	須	Ⅲ H7k	SX02	(50.4)	1		0	残 5.1	黄灰色	
E-22	須	Ⅲ H8i	SX01	(46.6)	1		0	残 8.3	赤褐色	
E-23	須	Ⅲ H6i	SX02	(42.0)	2		0	残 14.9	灰色	
E-24	須	Ⅲ H9k7k	SX02	(46.8)	2		0	残 14.7	橙色	
E-25	須	Ⅲ H10i	SX04（床面）		0	(14.1)	1	残 11.4	赤褐色・灰黄色	
E-26	須	Ⅲ H7i	SX01		0	(13.2)	5	残 10.7	灰色・茶褐色	
E-27	須	Ⅲ H8i	SX01		0	13.6	12	残 5.0	暗茶褐色・黄灰色	
E-28	須	Ⅲ H8i	SX01		0	14.6	12	残 7.0	暗茶褐色・黄灰色	
E-29	須	Ⅲ H8i	SX01		0	12.6	6	残 8.0	黄灰色	
E-30	須	Ⅲ H9i	表土		0	(15.2)	12	残 4.1	茶褐色・灰色	
E-31	広口壺	Ⅲ H8i	SX01	(25.6)	2		0	残 6.5	茶褐色	
E-32	広口壺	Ⅲ H8i	SX01	(21.8)	3		0	残 11.3	茶褐色	
E-33	広口壺	Ⅲ H8i	SX01	(24.2)	2		0	残 6.4	赤褐色	
E-34	広口壺	Ⅲ H7k	SX02	(26.9)	1		0	残 8.1	橙色	
E-35	広口壺	Ⅲ H8i	試掘	(26.6)	1		0	残 12.2	浅橙色	
E-36	広口壺	Ⅲ H9i	表土	(25.2)	1		0	残 11.3	茶褐色・暗灰色	
E-37	広口壺	Ⅲ H9j	SX03	(24.2)	1		0	残 4.5	赤褐色	
E-38	広口壺	Ⅲ H8i	表土	(22.0)	4		0	残 6.2	浅灰黒色・灰色	
E-39	広口壺	Ⅲ H8k8k	表土	(20.0)	2		0	残 8.4	茶褐色・灰白色	
E-40	広口壺	Ⅲ H10j	検出	(24.2)	1		0	残 12.8	浅黄色	
E-41	広口壺	Ⅲ H10i	SX04（床面）		0		0	残 22.1	浅赤褐色・灰色	
E-42	広口壺	Ⅲ H9j10k	SX03		0		0	残 19.5	赤褐色	
E-43	広口壺	Ⅲ H10i	SX04（床面）		0		0	残 17.6	赤褐色	
E-44	二筋壺	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(9.5)	3		0	残 3.5	灰黄色	
E-45	二筋壺	Ⅲ H8k	SX02	(10.2)	2		0	残 3.4	浅灰色・黄灰色	
E-46	二筋壺		表土撹乱	(11.4)	1		0	残 6.4	暗赤褐色・浅灰黄色	
E-47	二筋壺	Ⅲ H8k	表土	(10.8)	3		0	残 6.4	黄灰色	
E-48	二筋壺	Ⅲ H10k	検出	(11.0)	1		0	残 5.2	暗褐色・暗灰色	
E-49	二筋壺	Ⅲ H7k	SX02	(11.1)	5		0	残 5.0	黄灰色	
E-50	二筋壺	Ⅲ H9k10l	SX04（床面）	(9.9)	5		0	残 23.6	浅褐色・灰白色	
E-51	二筋壺	Ⅲ H10i	SX04（床面）		0		0	残 18.6	灰黄色	
E-52	二筋壺	Ⅲ H10i	検出	(10.8)	5		0	残 11.9	暗褐色・灰色	
E-53	二筋壺	Ⅲ H7i	SX02		0		0	残 21.6	赤褐色・黄灰色	
E-54	二筋壺	Ⅲ H7i	SX02	12.0	6		0	残 17.8	暗赤褐色	
E-55	二筋壺		試掘	(10.6)	5		0	残 14.6	暗赤褐色・灰黄色	
E-56	二筋壺	Ⅲ H7i	SX02		0	(9.1)	5	残 7.8	黄灰色	
E-57	二筋壺	Ⅲ H9k	SX02		0	8.5	12	残 19.0	灰白色	
E-58	二筋壺	Ⅲ H7i81	SX01		0		0	残 18.5	赤褐色・黄灰色	
E-59	片口鉢	Ⅲ H10k	SX03	(23.0)	1	(10.2)	1	9.8	浅灰色	
E-60	片口鉢	Ⅲ H7j8j	検出	(28.3) (27.8)	3	(16.0) (13.0)	1	14.4 12.6	茶褐色・灰色	
E-61	片口鉢	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(30.6)	4		0	残 8.7	灰色	
E-62	片口鉢	Ⅲ H7j8j	検出	(30.4)	1	12.2	8	12.6	黄灰色	
E-63	片口鉢	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(31.4)	1	(13.4)	5	13.7	灰黄色	
E-64	片口鉢	Ⅲ H9k	表土	(31.2)	1	(12.2)	2	12.0	暗灰色	
E-65	片口鉢	Ⅲ H7k	SX02	(30.5)	1	13.5	11	12.1	暗褐色	
E-66	片口鉢	Ⅲ H7j8j	検出	(32.2)	2	(14.0)	5	11.6	灰褐色・灰色	
E-67	片口鉢	Ⅲ H10i	SX04（床面）	30.9	10	13.3	11	残 12.7	赤褐色	
E-68	片口鉢	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(29.5)	3		0	残 10.2	赤褐色	
E-69	片口鉢	Ⅲ H7j	検出	(31.4)	1	(15.2)	3	12.4	茶褐色・灰色	
E-70	片口鉢	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(28.4)	4	16.4	6	12.0	灰色	
E-71	片口鉢	Ⅲ H10i	SX04（床面）	(33.6)	1	(14.8)	4	10.3	灰黄色	
E-72	片口鉢	Ⅲ H7j8j	検出	(32.7)	3	(13.3)	1	11.3	灰色	
E-73	片口鉢	Ⅲ H9m	検出	(34.2)	3	13.9	10	11.7	茶褐色・黄灰色	
E-74	片口鉢	Ⅲ H9i	SX04（床面）	(34.0)	2	(14.0)	3	10.3	茶褐色・灰黄色	
E-75	片口鉢	Ⅲ H10k	SX03	(35.3)	2		0	残 10.4	灰白色	
E-76	片口鉢	Ⅲ H7k	SX02	(30.7)	2		0	残 8.3	灰色	
E-77	片口鉢	Ⅲ H9j	SX03	(26.4)	1		0	残 5.1	灰色	
E-78	片口鉢	Ⅲ H8k7k	SX02	(33.0)	2	(14.9)	2	14.7	灰色	
E-79	片口鉢	Ⅲ H8i	SX01	(28.6)	1	(10.0)	1	12.3	黄灰色	
E-80	片口鉢	Ⅲ H9j	表土	(35.4)	1		0	残 5.4	灰色	

登録番号	器種	グリッド	遺構	口径 (cm)	残/12	底径 (cm)	残/12	器高 (cm)	色調	備考
E-81	片口鉢	昭 H10f	検出	(32.4)	5	(12.3)	1	11.0	赤褐色・淡灰褐色	
E-82	片口鉢	昭 H8k	表土	(31.4)	1	(13.8)	2	12.8	灰色	
E-83	片口鉢	昭 H9f	SX04（灰原）	(31.0)	3	13.2	6	12.6	淡黄褐色	
E-84	片口鉢	昭 H8l	SX01	(31.6)	3	(13.1)	5	11.7	黄灰色	
E-85	片口鉢	昭 H8l	表土	(34.0)	2	(12.8)	2	10.5	黄灰色	
E-86	片口鉢	昭 H8l	SX01	(34.4)	1	(13.8)	3	9.5	黄灰色	
E-87	片口鉢	昭 H9f	SX04（灰原）	(33.2)	3	(13.2)	3	10.1	淡青灰色	
E-88	片口鉢	昭 H8j	表採	(35.2)	2	(13.2)	3	11.5	灰色	
E-89	片口鉢	昭 H8l	SX01	(35.0)	1	(14.8)	1	10.5	茶褐色	
E-90	片口鉢	昭 H10f	検出	(20.2)	1		0	残 6.5	淡灰黒色	
E-91	片口鉢	昭 H9f	SX04（灰原）	(21.0)	2	(9.4)	1	10.0	灰色	
E-92	片口鉢	昭 H8l	表土	(23.4)	1	(11.6)	5	9.3	黄灰色	
E-93	片口鉢	昭 H7l	SX02	(30.3)	1	(12.2)	1	12.8	黄灰色	
E-94	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）	(26.5)	3		0	残 9.1	灰色	
E-95	片口鉢	昭 H8j	表土	(29.8)	1	(12.2)	2	12.4	灰色	
E-96	片口鉢		試掘	(31.4)	3	(13.4)	4	12.1	淡黄灰色	
E-97	片口鉢	昭 H9m	検出（SX04 上）	(31.6)	2	(11.2)	5	12.8	黄灰色	
E-98	片口鉢		試掘	(32.4)	1	(15.8)	2	12.7	灰色	
E-99	片口鉢	昭 H7l	SX02	(29.4)	2	13.4	6	12.8	茶褐色・黄灰色	
E-100	片口鉢	昭 H7j	検出	(31.4)	1	(13.2)	2	13.0	淡灰褐色	
E-101	片口鉢	昭 H8l	表土	(30.4)	1	(13.6)	4	12.8	淡赤褐色・黄灰色	
E-102	片口鉢	昭 H10m	梯 1	(31.8)	1	(14.2)	2	11.4	茶褐色・黄灰色	
E-103	片口鉢	昭 H8l	表土	(29.8)	1	(13.2)	5	12.4	淡灰褐色	
E-104	片口鉢	昭 H10k	SX03	(31.8)	2	(16.2)	4	12.6	灰色	
E-105	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）	(30.4)	2	(15.4)	4	14.0	灰色	
E-106	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）	(30.0)	2	(15.0)	4	11.9	灰色	
E-107	片口鉢	昭 H10k	梯 1	(29.2)	1	(14.4)	2	12.6	暗黄灰色	
E-108	片口鉢	昭 H7l	SX01	(32.1)	1	(16.4)	1	12.1	灰色	
E-109	片口鉢	昭 H8l	SX01	(33.6)	3	(13.0)	4	11.8	黄灰色	
E-110	片口鉢	昭 H7k	SX02	(14.0)	3	(14.5)	1	11.3	灰色	
E-111	片口鉢	昭 H9f10f	SX04（灰原 上層）	(37.6)	1	(19.0)	1	10.6	淡赤褐色	
E-112	片口鉢	昭 H8l	SX01	(34.0)	2	(12.6)	3	11.0	黄灰色	
E-113	片口鉢	昭 H7l	SX02	(36.3)	2	(18.9)	1	11.8	灰色	
E-114	片口鉢	昭 H7j	梯 1	(33.2)	2	(15.4)	6	12.2	黄灰色	
E-115	片口鉢		表採	(32.0)	2	(11.2)	3	9.7	淡茶色・黄灰色	
E-116	片口鉢	昭 H10j	SX03	(34.7)	4	(14.6)	4	11.5	明灰色	
E-117	片口鉢	昭 H7l	SX02	(34.9)	1	(12.8)	6	11.4	明灰色	
E-118	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）		0	13.1	10	残 7.6	淡青白色	
E-119	片口鉢	昭 H7k	SX02		0	(12.0)	5	残 9.6	淡灰褐色	
E-120	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）		0	13.3	10	残 7.0	灰色	
E-121	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）		0	(14.0)	5	残 9.3	灰色	
E-122	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）		0	13.4	6	残 4.8	灰色	
E-123	片口鉢	昭 H10f	SX04（灰原）		0	(14.6)	5	残 6.0	灰色	
E-124	片口鉢	昭 H10j	SX03		0	(14.2)	4	残 9.4	灰色	
E-125	片口鉢	昭 H7k	SX02		0	11.7	12	残 8.8	黄灰色	
E-126	片口鉢	昭 H8k	表採		0	(12.4)	1	残 5.2	茶褐色・灰色	
E-127	鉢	昭 H10f	SX04（灰原）	(16.5)	1	18.3	8	4.8	灰白色	
E-128	鉢	昭 H7l	SX01	(15.8)	1	(8.2)	4	5.4	茶褐色	
E-129	鉢	昭 H7j8f	SX01	(15.9)	3	7.4	11	5.0	黄灰色	
E-130	鉢	昭 H7l	SX02	(15.0)	1		0	残 3.4	黄灰色	
E-131	鉢	昭 H7j	検出	(15.2)	4		0	残 4.2	淡灰色	
E-132	鉢	昭 H9k	検出	(17.4)	1		0	残 3.7	黄灰色	
E-133	鉢	昭 H7k	SX02		0	(7.4)	4	残 2.5	灰色	
E-134	鉢	昭 H10k	検出		0	(7.4)	12	残 2.3	黄灰色	
E-135	鉢	昭 H7l	SX01		0	(7.9)	4	残 3.8	黄灰色	
E-136	鉢	昭 H9k	検出		0	(6.6)	3	残 2.9	黄灰色	
E-137	鉢	昭 H10f	検出		0	7.5	6	残 3.4	灰色	
E-138	鉢	昭 H8j	検出		0	7.4	12	残 3.6	黄灰色	
E-139	鉢	昭 H8j	表土		0	(9.5)	2	残 2.9	明灰色	
E-140	鉢	昭 H10f	検出		0	7.7	6	残 1.8	黄灰色	
E-141	鉢	昭 H8k	表土		0	(8.0)	4	残 2.6	淡灰褐色	
E-142	鉢	昭 H7l	SX02		0	(8.2)	3	残 1.6	灰色	
E-143	鉢	昭 H8j	表土		0	6.6	12	残 2.5	暗黄灰色	
E-144	鉢	昭 H9l	表土		0	6.9	12	残 2.4	灰色	
E-145	鉢	昭 H9k	検出		0	(7.8)	2	残 3.4	茶褐色	
E-146	鉢	昭 H8l	表土		0	7.8	12	残 2.1	黄灰色	
E-147	鉢	昭 H8l	表土		0	(8.4)	4	残 3.9	淡黄色	
E-148	鉢	昭 H10j	検出		0	7.0	11	残 2.5	淡灰黒色	
E-149	鉢	昭 H8k	表土		0	(6.8)	3	残 1.2	灰色	
E-150	鉢		試掘		0	7.6	7	残 3.1	淡灰色	
E-151	皿	昭 H7k	表土	(8.0)	2	(4.6)	2	2.7	暗黄灰色	
E-152	羽釜	昭 H10f	SX04（灰原）	(31.0)	1		0	残 8.7	淡灰黒色	
E-153	羽釜	昭 H9k	検出	(26.2)	1		0	残 4.2	灰褐色	
E-154	羽釜	昭 H7l	SX02	(32.8)	1		0	残 8.4	灰色	
E-155	羽釜	昭 H10f	SX04（灰原）	(24.4)	1		0	残 6.7	淡灰褐色	
E-156	羽釜	昭 H9f	SX04（灰原）	(28.6)	1		0	残 8.6	灰黒色	
E-157	羽釜	昭 H9j	SX03	(30.5)	1		0	残 7.3	灰色	
E-158	羽釜	昭 H7k	SX02	(31.4)	2		0	残 9.4	暗灰色	
E-159	羽釜	昭 H8l	SX01	(26.2)	1		0	残 13.0	灰黒色	
E-160	羽釜	昭 H7k	SX02		0		0	残 10.5	暗褐色・黄灰色	
E-161	羽釜	昭 H7j8j	検出		0		0	残 10.1	暗灰黒色	

登録番号	器種	グリッド	遺構	口径 (cm)	残/12	底径 (cm)	残/12	器高 (cm)	重量 (g)	色調	備考
E-162	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 9.6		幅 10.7		厚 9.6	残 558	灰色	片口鉢用焼台
E-163	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 10.9		幅 10.5		厚 10.5	794	灰色	片口鉢用焼台
E-164	焼台	Ⅲ H9k	SX02	長 11.8		幅 13.0		厚 9.2	734	灰色	片口鉢用焼台
E-165	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 13.8		幅 11.0		厚 10.4	814	灰色	片口鉢用焼台
E-166	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 111.0		幅 11.1		厚 11.6	残 754	灰色	片口鉢用焼台
E-167	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 11.0		幅 10.6		厚 9.3	640	灰色	片口鉢用焼台
E-168	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 12.3		幅 13.6		厚 7.9	652	灰色	片口鉢用焼台
E-169	焼台	Ⅲ H9I	表土	長 10.7		幅 11.0		厚 9.7	750	灰色	片口鉢用焼台
E-170	焼台	Ⅲ H9I	SX04（8区）	長 14.3		幅 13.3		厚 9.4	902	灰色	片口鉢用焼台
E-171	焼台	Ⅲ H7k	SX02	長 20.5		幅 14.6		厚 9.9	残 1,350	暗赤褐色	壺・広口壺用焼台
E-172	焼台	Ⅲ H9k	表土	長 16.5		幅 13.4		厚 15.4	1,370	暗赤褐色	壺用？焼台
E-173	焼台	Ⅲ H9j	攪Ⅰ	長 8.0		幅 7.5		厚 4.6	116	灰色	片口鉢用焼台
E-174	焼台	Ⅲ H9j	SX03	長 9.4		幅 7.0		厚 4.1	134	暗赤褐色	
E-175	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 11.4		幅 10.2		厚 10.3	620	灰色	片口鉢用？焼台
E-176	焼台	Ⅲ H10J	SX04（8区）	長 10.9		幅 11.3		厚 6.4	490	灰色	片口鉢用？焼台
E-177	焼台	Ⅲ H9k	攪Ⅰ	長 11.5		幅 12.1		厚 5.4	516	灰色	片口鉢用？焼台
E-178	焼台	Ⅲ H9k	攪Ⅰ	長 13.0		幅 14.0		厚 6.4	818	暗赤褐色	
E-179	焼台	Ⅲ H10I	SX04（8区）	長 16.0		幅 8.4		厚 10.1	774	灰色	片口鉢用？焼台
E-180	不明	Ⅲ H9i	SX03	(24.3)	1		0	残 3.0		橙色	
E-181	平瓶	Ⅲ H9k/8k	表土	(11.0)	5		0	残 5.6		白色	
E-182	平瓶	Ⅲ H9I	表土	(11.7)	1	4.8	12	5.4		白色	
E-183	端反瓶	Ⅲ H8k/9I	表土	11.3	5	(3.9)	5	6.0		白色	
E-184			表土			幅 13.2		厚 1.5		暗茶褐色	
E-185	加工土器片	Ⅲ H9I	表土	長 5.1		幅 7.0		厚 1.0	56	灰色	片口鉢口縁部
E-186	加工土器片	Ⅲ H9I	SX04（8区）	長 10.1		幅 5.4		厚 0.9	104	灰色	片口鉢底部
E-187	加工土器片	Ⅲ H8k	表採	長 10.2		幅 9.0		厚 0.9	202	茶褐色	片口鉢底部
E-188	加工土器片	Ⅲ H9k	表土	長 9.9		幅 9.1		厚 0.9	122	灰黒色	壺・広口壺体部
E-189	加工土器片	Ⅲ H8k	表土	長 12.8		幅 13.8		厚 1.1	250	灰褐色	壺体部
E-190	加工土器片	Ⅲ H10k	攪Ⅰ	長 8.8		幅 9.9		厚 0.8	74	赤褐色	片口鉢口縁部？

報告書抄録

ふりがな	なちきこようあと　じゃばさまこようあと
書名	夏敷古窯跡　蛇魁間古窯跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	早野浩二・宮腰健司・小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・植田弥生
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
なちきこよう 夏敷古窯	あいちけんとこなめし 愛知県常滑市 なちきちょう 夏敷地内	232165	42194	34度 53分 41秒	136度 50分 50秒	2004.04.22 ～2004.07.17	915	常滑西特定 土地区画 整理事業
じゃばさまこよう 蛇魁間古窯	あいちけんとこなめし 愛知県常滑市 じゃばさまちょう 蛇魁間地内	232165	42195	34度 53分 51秒	136度 51分 30秒	2004.07.01 ～2004.07.17	700	常滑東特定 土地区画 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
夏敷古窯跡	古窯跡	平安	窯体・灰原 溝・土坑	常滑陶器甕・広口壺・ 三筋壺・片口鉢・山茶碗 土師器伊勢型鍋	保存状態が良好な 窯体を検出
		近世	溜池・溝	常滑陶器土管	
蛇魁間古窯跡	古窯跡	平安		常滑陶器甕・広口壺・ 三筋壺・片口鉢・山茶碗 羽釜	三筋壺・羽釜の出土

文書番号 (夏敷古窯跡)	発掘届出(15埋セ第124号・15.3.16)　通知(15教生第72-13号・16.3.23) 終了届・保管証・発見届(16埋セ第37号・16.7.12)　鑑査結果通知(16教生第826号・16.8.4)
文書番号 (蛇魁間古窯跡)	発掘届出(16埋セ第26号・16.5.31)　通知(16教生第476号・16.6.9) 終了届・保管証・発見届(16埋セ第39号・16.7.21)　鑑査結果通知(16教生第828号・16.8.4)

要約	夏敷古窯跡は、平安時代末、1175～1190年に操業したと推定される甕主体窯である。発掘調査によって、保存状態が良好な窯体1基とそれに付随する前庭部と灰原が検出された。窯体の規模は残存長約11.5m、焼成室長約9.0m、焼成室最大幅約3.5mである。出土した器種は、甕・広口壺、三筋壺、長頸壺(水瓶)、片口鉢、山茶碗、羽釜、陶丸などである。 蛇魁間古窯跡は、平安時代末、1150～1175年に操業したと推定される甕主体窯である。発掘調査によって、窯体やそれに付随する施設はすでに滅失し、灰原の一部が地表下深くに埋没するのみであることを確認した。出土した器種は、甕・広口壺、三筋壺、片口鉢、山茶碗、羽釜である。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第152集
夏敷古窯跡
蛇廻間古窯跡
2007年3月31日

発行　　財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
印刷　有限会社　アルケーリサーチ